競艶八犬伝

忍法小説全集 ——⑦

島田一男

競艶八犬伝

忍法小説全集 ——⑦

島田一男

競艶八犬伝

島田一男

●忍法小説全集——⑦

——四方の荒神　八方の魔神　十方般若の
神通力をもって　わが願いをかなえさせ給え————
浅草鳥越明神に
丑の刻参りの若い女があった
御神木には三個の藁人形が釘づけにされている
——怨敵　きのとうし年
本年五十四歳の男——女は力をこめて
藁人形の胸へ新しい釘を打ちこむ
——怨敵　つちのとう年　本年四十一歳の女——
——怨敵　みずのえさる年
本年四十九歳の男　——　女は次々と釘を打ちこむ
すると丑の刻参りの女に唱和する幾人かの
女の声が闇の中でする
——怨敵　本多佐渡守正純　怨敵　伊豆屋お石
怨敵　本多家家老熊取内膳
願はくば彼等の命をちぢめ給え——
幕府の権門本多家転覆を企む凄艶な女忍者とは何者か？
宿命の鏡をめぐる八人の美女が
関八州を舞台に大活躍する痛快無類の忍法帖！

東都書房・¥290

忍法小説全集——⑦

競艶八犬伝

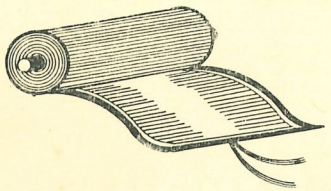
競艶八犬伝

島田一男

●忍法小説全集——⑦

忍法小説全集———

競艶八犬伝

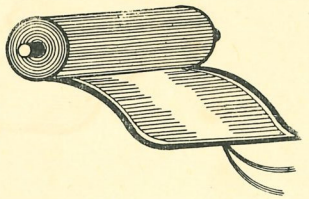


東都書房

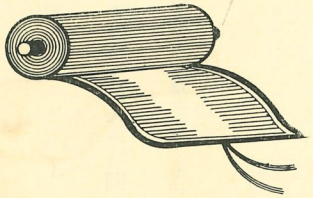
目次

競艶八犬伝

鳥越の闇 七
神卜仙女 一四
妖女奇女 三
菊屋敷の女 三〇
隠密合戦 三七
絵文字 四五
お万の湯 五三
金山の女 六一
蛇取りの姫 六八
風流無残剣 七六
女四ツ巴 八三
焔の女 九一
金山明神 九九
天城越え 一〇六
血風峠ケ原 一二四
風雲下田港 一三三



船路の鬼 一三〇
剣鬼誕生 一三八
母娘悲願 一四五
神鏡の契り 一五三
佐渡の金山 一六一
吹雪街道 一六八
編笠三人旅 一七六
江戸の山犬 一八四
黒木御門 一九二
地獄梯子 一九九
佐渡の火祭り 二〇七
日光社参 二一四
狂恋夜叉 二二三
マリヤ観音 二三〇
からす長屋 二三八
疾風街道 二四七



網中の魚 …… 二五四
男体女体 …… 二六二
非情の鬼 …… 二六九
からくり絵図 …… 二七七
根来同心 …… 二八五
火の函 …… 二九〇
鬼火の女 …… 二九八
お小姓変化 …… 三〇五
恋情駕籠 …… 三一二
決闘いろは坂 …… 三一八
風雲日光嵐 …… 三二八
血笑記 …… 三三六

装幀——森下年昭
挿画——浜野政雄

鳥越の闇

「——四方の荒神、八方の魔神、十方般若の神通力をもって、わが願いをかなえさせたまえ……」

ひとりの女が、浅草鳥越明神の拝殿の右側、一段と高くそびえる御神木の下に立っていた。

白衣の素足である。振り乱した髪の上には三本脚の鉄環をいただき、その一本一本にロウソクが燃えていた。

右手に木槌、左手には五寸釘、胸に一面の鏡を吊り下げている。——言うまでもない丑の刻参りだった。

御神木には、藁人形が釘づけにされている。しかも、三個……。

「怨敵、永宝八年きのとうし年生れ、本年五十四歳の男……」

女は、力をこめて、まん中の藁人形の胸へ、あたらしい釘を打ちこんだ。

二十二、三であろう。きっぱりとした眼鼻立ちだが、額から頬へかけ、眉も唇も、赤い土で塗りつぶしている。——これが、丑の刻参りの作法だった。

「——怨敵、つちのとう年生れ、本年四十一歳の女……」

女は、右端の藁人形へ釘を打ちこむ。更に——

「怨敵、みずのえさる年生れ。本年四十九歳の男……」

こんどは、左端の藁人形である。

すると、丑の刻参りの女に唱和する幾人かの声が闇の中から聞えてきた——

「——怨敵、本多佐渡守正純……」

「怨敵、伊豆屋お石……」

「——怨敵、本多家家老熊取内膳……。ねがわくは彼等の命をちぢめたまえ……」

いつのまにか、丑の刻参りの女のうしろに、黒い影が四つうずくまっていた。

御殿女中、小唄の師匠風、鳥追い、由緒ありげな御後室風……、姿はかわれど、四人共女である。しかも、御殿女中と御後室はお高祖頭巾に、鳥追いは編笠に、師匠風の女は吹流しにかぶった手拭に、それぞれ顔をかくしていた。

この奇妙な女達五人の様子を、拝殿の中からジッと眺めている男があった。——これまた覆面に顔を包んでいるが、みずのえさる年生れの男、本多家の家老熊取内膳であった。

暗い拝殿の隅から、黒い影が、ムクムクと立ち上った。

腰折れ頭巾に、たっつけ袴、首から人形を納めた箱をかけている。

——くぐつまわし、或はでくまわしとも呼ばれる傀儡師である。

年は、六十余り……。

傀儡師は、扉の格子にはりついて、女達の様子をうかがっている熊取内膳に近づくと、ソッと、ささやいた。

「いかが……。まことでござりましょうがな」

「ウム……。呪の藁人形のひとつは、わしのようじゃ。あとの二つは、御主君佐渡守さまと、廻船問屋伊豆屋の女あるじお石……」

「されば……、あの女どもの素性も、おのずと明らかになりまする。いまの世に、権勢限りなき佐渡守さま、並びに御家老の熊取さま、こびへつらうものも多いが、敵も多い」

「これ、言葉が過ぎようぞ、黒太夫」

「いや……。まず聞かせられませい……」

黒太夫と呼ばれた傀儡師は、曲った腰を伸ばすと、歯の抜けた口を開いて、声を出さずに笑った。

「佐渡守さま主従を恨むもの多しといえども、伊豆屋お石と合わせて憎むものは、ただのひと組……」

「十年前にお取りつぶしとなった金山奉行、大久保石見守の身寄りのもの共……」

「左様……。石見守お取りつぶしは佐渡守さまのお指図。石見守に、黄金埋蔵の不正ありと訴え出でしは、石見守奥方付きのお女中お石……。さて、石見守は切腹。一族二十三人は小田原城外の酒匂川ではりつけ……。その采配とりはあなたさま……」

「わしは、御主君の命によって処刑を行ったまでじゃッ……」

「でも……。むごたらしゅうございましたぞ。四ツ五ツの幼児まで、赤錆びた槍で、ブスリ、ブスリ……」

「もうよい……。言うな……」

内膳は、黒太夫の口を押えて、闇をすかした。

ちょうど、丑の刻参りの女が、ゆっくり体を廻して、女達へ顔を向けたところである。

ゴクリッと、生唾を呑む女があった。——丑の刻参りの女の顔が、あまりにも凄まじかったからであろう……。

「かたがた、よくぞみえられました。十年前のおとりきめは今月今宵の丑の刻……。亡きかたがたも、さぞやお喜びでありましょう」

「もし……。まだお三方、みえませぬ」

そういったのは、御殿女中風の女である。

「でも、十年の年月が流れています。八人の血盟が、五人……。まず、よい方でございましょう」

と、そのとき、またひとり、ツツッと、駈け寄って来た女があった。紫縮緬で顔を包んだ、町家のお内儀風である。

「遅うなりました。わたくしはもと——」

「あ、もし……」

丑の刻参りの女が、内儀の言葉を押えた。

丑の刻参りの女は、暗闇の中にひざまずく五人の女を、スーッと見廻した。——赤土を塗った顔は能面のように無表情である。

「今宵のことは、十年前の八月二十三日、血をすすって誓いをたてた八人だけの秘密。たとえ、娘が母の、妹が姉のこころざしを受け継ごうとも、八人の外には知るひとはない筈。さりながら……」

女は、ふところをさぐって、小さな袱紗包みをとり出して一同に示した。

「かたがた、名乗りをあげる前に、まず証拠の品を、お出し願いましょう」

「あい、心得ました」

そう応えたのは、鳥追い姿の女だった。若々しい声である。十七か八であろう。

女達は、一様にふところから、同じような袱紗包みをとり出す……。

が……。ひとりだけ、ジッとうずくまったまま、動かない女があった。——御後室風の女である。

「——あなたは？」

丑の刻参りの女がたずねた。

「う、失いました」

「いつ？」

「は、半年ほど、まえに……」

「袱紗の中身は？」

御後室風の女は、グッと、答えに詰まった。

「もしッ、袱紗の中の品は？」

「そ、それはッ……」

「痴れ者ッ！」
丑の刻参りの女の体が、パッと飛んだ。——どこに隠していたのか、小太刀がキラリとその女の手に光っている。
「とーッ！」
御後室風の女もさるもの、立つと同時に一間ばかりうしろへ飛退いていた。
「ホホホ……」
御後室風の女が、狂ったような笑い声をあげた。
「可哀いや、大久保石見守の残党！　今宵限りの命と知れッ」
「おのれッ！」
丑の刻参りの女が、きりきりきりッと、奥歯を噛み鳴らした。
御殿女中、鳥追い、師匠、お内儀、いずれも、丑の刻参りの女を中心に、キッと身構えている。
「えーいッ！　女共をからめとれッ！」
出し抜けに喚き立てる男の声が響いた。——拝殿の扉を押し開いて、熊取内膳が我鳴り立てたのである。
「ヘヘヘヘッ……、ウヘヘヘヘッ……」
内膳の横で、傀儡師の黒太夫が、気味の悪い笑い声をあげている。
「手に余らば斬ってよいぞッ」
再び、内膳が叫んだ。
サッと、鳥越明神の境内に殺気がみなぎる！
伏せてあった本多家の家来が、四方から、ジリジリッと、迫って来たのである。
御後室は、冷然とそんな有様を眺めている。
「おのれ、かなわぬまでもッ」
「あ、お待ちなさいッ」
「でも……」
「離れてはなりませぬ」
丑の刻参りの女は、はやり立つ女達を、かばうように、背後に集めた。
「気を揃えて、一ッ気に一の鳥居へ」
「おう！」
女達は、ひとかたまりになって、闇の中を走った。
「ヤーッ！」
女達が走る正面にいた男達が、大刀を振りかぶって、女達をくい止めようとした。——が、二人、三人、丑の刻参りの女は、冴えた太刀さばきでなぎ倒していた。
「——追えッ！　逃がすなッ」

熊取内膳が喚き立てた。
が、……その時には、女達は一の鳥居に達していた。
「——散れッ！」
丑の刻参りの女が叫んだ。
「いずれ、いつの日かッ……。御堅固でッ」
「あなたさまはッ？」
「お心づかい御無用ッ……」
丑の刻参りの女は、鳥居を背に小太刀をピタリと構えると、もう一度叫んだ——。
「早くッ！」
「では、おさらばッ——」
「おさらばッ……」
四人の女が、左右に散った。——右へ走れば蔵前大川端……、左へ行けば、下谷練塀町へ出る。
「——しゃッ、待てッ……」
男がひとり、丑の刻参りの女の横をすり抜けて、女達を追おうとした。
だが……、ムッ……、含み声の気合と共に、丑の刻参りの女は、この男の脇腹を切り払っていた。
「——囲めッ！」
「——とりかこんで斬り伏せろッ」
十人余りの若侍が、口々に喚きながら、グルリッと、一の鳥居をとりまいた。
女は、鳥居の足を楯にとって、ジッと、小太刀を右下段につけている。
「——待て待て……。待てッ……」
浪人いちょうの大たぶさの武士が、若侍を押しわけて、ズイッと前へ出た。
「女……、味な手なみだな……」
男は、スラリッと、大刀の鞘を払った。
「吉岡京流の小太刀と見た。わしは六角十字兵衛。殺到流の奔馬剣じゃ。みごと、受けてみいッ」
「おうッ！」
丑の刻参りの女は、サッと、小太刀を下段から右無双に変えた。十字兵衛は、大胆不敵な大上段である。
「行くぞ！」
十字兵衛は間合を詰めた。すざまじい殺気がふたりのあいだに流れた。いまや、大上段の十字兵衛の剣尖は、丑の刻参りの女の頭上に打ち下されるはずだった。
その一瞬、女の白衣が闇のなかの花のようにかすかに揺れたようだった。たしかにそう見えたのではなく、十字兵衛の眼にはその時、己れの面前に何か白いものが迫って来たように見えたのだ。

「とオッ」
十字兵衛は刀を打ちおろして、僅かに前のめりになった。彼は女を斬ったのではなく、いたずらに闇の空間を斬り払っていたのである。
「ホホ……」
闇のいろに沁みてゆくような低い声が、十字兵衛の頭上から洩れてきた。女は一瞬のうちに鳥居の上にその華奢な姿を立てているのだ。
「――忍者……」
思わず十字兵衛が呟いた時、鳥居の右前方から人を馬鹿にしたとてつもない高笑が聞えてきた。
「――何やつ！」
六角十字兵衛が。パッと、うしろへ飛びさがった。――攻めを急がず、守りを忘れず……、これが勝負の道である。十字兵衛、なかなかの剣法者と見ねばなるまい。
「――出ろッ！　笑ったのは、誰だッ」
「わしだ……」
スーッと、闇の中から近づいて来た男があった。――身の丈、五尺七、八寸もあろう。それが、足駄ばきだから、いよいよ大男に見える。
稽古袴をツンツルテンにはいて、腰に手拭をぶら下げている。
丸顔だった。――闇に、はっきりとは見えないが、太い眉を丸くして、ニヤニヤと笑っているらしい。
「無礼者ッ！　なぜ笑ったッ！」
「女ひとりを、大の男が大勢で取り囲んでいるから、おかしくって笑ったのだ」
「黙れッ！　見ろ、既に三、四人、斬られている。女とて、許してはおけん」
「それは、女より弱いから斬られたのだ」
「ぬかせッ！」
十字兵衛の刀が、男の右脇腹から左肩口へすくい上げるように剣尖を曳いた。が――
「どっこいっ！」
男は、パッと左へ飛ぶと、タッタッタッタッ……、近くにいた若侍を四、五人、もののみごとに、手刀で打ち倒していた。
「よッ！　拳法だなッ。引けっ。てごわいぞッ」
十字兵衛の声に、残った若侍達は、サッとあとへ退った。
と……、出し抜けに、また別の声が聞えて来た。
「喜平太……、乱暴は、やめにせい」
「はあ……」

喜平太と呼ばれた男は、叱られた犬のように、ペコリと、声の方へ頭を下げた。
「これはこれは、おのおの……」
声の主は鳥居の方へ近づいてきた。
「――あ、これは！」
十字兵衛は、眼を見張った。――ひと眼でそれとわかる公卿姿である。
「ふと、そぞろ歩きの折ふし、思いもかけぬ刃の音……。何ごとぞと駈け寄ってみれば、それ、か弱い女を大勢で――」
「しばらくッ……。われ等は、本多佐渡守家中のもの。おみさまは？」
「おう、これは申し遅れた。わしは、大奥作法指南に下向せし墨染の少将高平……」
「――えッ！　墨染の少将さまとなッ……」
そう叫んだのは、いままで一同のうしろにいた熊取内膳だった。
「――始めて御意得ます……」
熊取内膳は、墨染の少将を見詰めたまま、軽く腰をかがめた。
「――拙者は……」
「待て待て……」
少将は、白い手で内膳の言葉を押えた。
「わしは、名乗ったことを後悔している。身が墨染の少将であることは、忘れてほしい。わしも、佐渡守家中のものと出会うたことは忘れる。……このまま、右と左へ別れることにしようではないか」
「は……」
「承知か？　では、どちらへ行く？　右か？　左か？」
「御前……」
「これこれ御前などと呼んではならぬ。ただ、通りがかりのものじゃ」
「しかし……」
熊取内膳は一歩前へ出ると、ジロリッと、いつのまにか喜平太の横に立っている丑の刻参りの女を睨んだ。
「あの女――」
「これ、なにもかも忘れろと申したではないか」
「しかし、あの女、不敵にも主人本多佐渡守を調伏いたしておりました。ひっ捕えて、吟味いたさねばなりませぬ」
「それは、佐渡守の申しつけか？」
「いや……主人は、なにも存じませぬ」

「さもあろう……」
墨染の少将は、ニッコリ笑ってうなずいた。
「佐渡守は柳営の柱石じゃ。天下のまつりごとを推し進めるためには、十人二十人より私怨を受けることなど眼中においていまい。また、女一人の丑の刻参りなどを怖れる佐渡守でもあるまい。なまじ――」
そこで、突然、少将の語調が激しくなった。――
「本多佐渡守家中のもの、主人の権勢に奢り、深夜徒党を組んで徘徊し、抜刀して婦女子をおびやかす……と、世間に聞えなばなんとするッ」
「し、しかしッ……」
「わからぬ男じゃ……」
少将は、あわれむように内膳を見た。
「わしは……、この墨染の少将高平は、深夜本多家家中のものに包囲された」
「と、飛んでもござりませぬッ」
「わしの従者近江の喜平太は、やむなく佐渡守家来両三名を叩きたおした。よいか、襲われたわしは、御所につかえる従三位の少将。襲ったは、帝の臣たる将軍家のまた家来本多佐渡守の、そのまた家来……。このこと表沙汰となれば、腹一つでは済むまい。わしは、ことを好まぬが、そちらの出ようでは、佐渡守を相手に――」
「しばらくッ……」
内膳は、慌てて少将の言葉を押えた。
「――お別れいたします……。その女、おあずけいたしまする……」

神卜仙女

広々とあけ放した縁側で、墨染の少将は、小鳥のすり餌をこしらえていた。
隅田川に近い蔵前大松院の客殿――江戸入り以来、ここが少将の宿舎だった。
少将は、千代田城大奥の女達に、御所風の行儀作法指南役として、都から迎えられたのである。――御台所は鷹司関白家の姫、また御愛妾のお万の方は六条宰相家、お玉の方は二条左大臣家と、いずれも京都の生れ……。されば、大奥でも京風の作法が重んじられたのであった。
「ただいま、立ち戻りました……」
近江の喜平太が、庭先に、両手をついた。――大男の喜平太がうずくまった姿は、いかにもぎごちなく、窮屈そうである。

「わかったか？」
少将は、すり餌の道具から、静かに手を離した。
「すまいは、音羽鉄砲坂でござります……」
「ほう……。それは遠くまで、御苦労であったな」
「いえ……、遠近はいといませぬが、あの女の足取りの早さには、いささか驚きました。多分、忍者の走法を心得ているものと存じまする」
「うム……、わしも、そう思うた。この寺を抜け出す身軽さは、なみの者とは思われぬ」
昨夜連れて戻った丑の刻参りの女が、今朝夜明け前に、ヒラリと大松院の築地を飛び越えて、逃げて行ったのである。
女が逃げだすことを予期していた少将は、すぐ喜平太にあとを追わさせたのだが、蔵前から二里余り離れた音羽に家を持っているという……。
「女は、巫女でござりました。神卜仙女真弓と名乗っております」
「神卜仙女……。易をたてるのか？」
「はい、附近の噂によりますると、真弓は神変不可思議の霊力を持ち、人の運勢禍福を、ピタリピタリと当てるそうでござります……。実は、今宵は、鉄砲坂にほど近い目白八幡境内に於て、湯花の荒行をいたしますとか……」
「湯花？」
「はい……、煮えたぎる熱湯の中へ、真弓みずから身をおどらせ、神霊昇天の奇特を示すとのことでござります。いやもう、音羽一帯は、この噂にて――」
「――待て……」
少将は、スッと立って、座敷の中ほどに置かれている手あぶりへ近づいて行った。
とたんに、少将の体が、燕のように反転した。――手あぶりの火箸を摑む、それを格子天井へ投げつける。一瞬の早わざである。
「――うッ……」
かすかな呻き声が、天井裏から聞えた。プスリッと天井板につきささった火箸を伝わって、ポタリッ……と、血潮が一滴落ちた。
「御前ッ！」
駈け寄る喜平太を、少将は押えた――。
「追うな、登城の時刻じゃ……」
「――墨染の少将さま、御指南日につき、大奥へ通られます。……」
二ノ丸門の番所に、近江の喜平太がことわった。少

将――を乗せた駕籠は、そのまま、長い土塀に沿って進んで行く。

作法指南は、毎月三日、十三日、二十三日の三日である。今日は中の十三日に当っている。

少将は、駕籠の中で、眼を閉じていた。

――大松院の屋根裏へ忍びこんだのは、多分、隠密であろう……。なぜ、自分に隠密が近づいたのであろうか？　まさかこの身の秘密が……。

「――墨染の少将さま、通られます……」

また、喜平太が番所へ挨拶をしている。――汐見坂の番所である。少将は、まだ考えていた。

――この広い江戸に、自分を、悲運に倒れた大久保石見守の遺児と知っているのは、腹心の喜平太だけである。仇敵本多佐渡守とその一党を倒すために、用心に用心を重ねてきた積りであるが、なぜ隠密が忍び寄って来たのであろう。

――いやいや、これは思い過ごしかもしれぬ。隠密は本多家の家臣熊取内膳が放ったもの、もしかすると、神卜仙女と名乗る、あの真弓という女の様子をさぐりに来たのかもしれぬ……。それにしても、あの女――

トンと、駕籠が降された。大奥の入口、御広座敷玄関に着いたのである。少将の瞑想は断ち切られた。

大奥は、少将の他男禁制といわれているが、全然男ッ気が無いわけではない。五百石どりの用人を始め、二百人近い奥向き役人が勤めていたし、奥医者などは、昼夜、大奥のまン中に当るお広座敷へ詰めていた。

ただ、将軍の寝所や、御台所お部屋、女中達の長局は、文字通り男子禁制である。

墨染の少将は、大奥の西はずれ、御上段の間へ通された。――喜平太は、お広座敷までしか行けない……。御上段の間には、御年寄、御中臈など、上席の女中が、二十人余り並んで、少将を待っていた。

作法指南を始めて既に三月余り……。殆んど、顔見知りの女ばかりである。

が……、今日は、新しい顔が一ツ混っていた。髪は切り下げで、地味な茄子紺の被布を着ている。一見してわかる後家姿、大奥の女ではない。

「――少将さまへ申上げます」

当番の中臈が手をついた。

「――あれに控えておいでになりまするは、もと大目付千々輪隼人どのの御後室お浅さま……。作法御指南の模様を、是非拝見させていただきたいと申されてお

りまする……」

「左様か……。身が墨染の少将高平じゃ」

すると、切り髪の女が、ニッコリ笑った――

「はい……、よく存じておりまする。昨夜、鳥越明神でも、お見かけいたしました……」

墨染の少将の作法指南は、一刻ほどで終った。

指南が終ると、御女中達は、当番の中臈だけを残してそれぞれの部屋へ引きとり、次いで、表使いの若い女中が二人、御台所からの茶菓をはこんでくる。――いつものきまりだった。

が……、今日は、当番の中臈のほかに、もうひとり残っていた。大目付千々輪の後室お浅である。

少将は、静かに茶をのんでいた。

「――御前……、昨夜の鳥越のおなご、いかがなさいました？」

世間話のように、お浅がたずねた。

少将が、ふッと、顔をあげた。――が、お浅を見たのではない。下座に控えている表使いの女中の一人？に視線が向けられていたのである。

お浅が、鳥越のおなご……といったとき、その女中が、ハッと、顔色を変えたのを、少将は見逃がさなかったのである。

「なんの話であったかな？」

少将は、ゆっくり、お浅の方へ顔を向けた。

「昨夜、御前が丑の刻参りのおなごをお助けになるところを――」

「ほう、見ていられたか？　では、そなた、本多家の侍達といっしょにいたのか？」

「いいえ、ちょっと心願がございまして、鳥越明神へ夜参りをいたしておりましたところ、突然、あの騒ぎでござりましょ。本当に、こおうございました」

「あの女は、逃げたよ」

「まア……」

「今朝、夜明け前に、築地塀を飛び越えてな……。よほど、武芸の心得があるものと見ゆる。みごとな身のこなしであった」

「それで、御前は、お見逃しあそばしたのでございますか？」

「わしには、築地を飛び越える芸当は出来ぬのでなア……」

「もし、本多家から、あのおなごを受けとりに参りましたら、どうあそばします？」

「わしは、あの女を本多家へ渡さねばならぬとは考え

ておらぬ。また、本多佐渡守ともあろうものが、たかが女一人に、いつまでもこだわりを持つとも思われぬ……。それとも」

少将は言葉を切ると、涼しげな瞳で、お浅を見詰めた。

「そなた、本多家が女を受けとりに参ると考える理由があるのか？」

「い、いいえ……。ただ、ふッと思いついたことを申上げたまででございます……」

少将は、それ以上深くはたずねず表使いの女中達に話しかけた——

「そちたちの名は？」

「五月と申しまする」

「深雪と申しまする」

少将はお上段の間を出しなに、深雪と名乗った女中に、素早くささやいた——

「——丑の刻参りの女は、神卜仙女真弓——。今宵目白八幡へたずねてみよ……」

その日の夕方……。

「——御前……。大した人出でござりますなア……」

近江の喜平太が、墨染の少将にささやいた。——少将は黒羽二重の着流しに深編笠。喜平太も編笠に面をかくしているが、袴をはいている……。大身の若殿が、供ひとりをつれての忍び歩きといった恰好である。

ところは、目白八幡の境内……。喜平太がいうように、社殿の前は、身動きも出来ぬ人だかりである。何れも、世にも珍しい湯花の神事を見ようと詰めかけてきたのだった。

「——ほう……、来ているな……」

少将が、深編笠の中で呟いた。

「はい、来ているようでござりまする」

「これ、喜平太、そちは誰のことをゆうているのじゃ？」

「は……。本多家の六角十字兵衛……。若侍数人を連れて、群衆にまぎれこんでおりまする」

「わしが来ているというのは、あの女のことじゃ」

少将は、手にした扇子で、社殿の方を指し示した。

「あのきざはしの右側に、お高祖頭巾で顔を包んだ女が立っていよう。あれが、お浅という後家じゃ」

「あ、あれが……」

喜平太は、少将からお浅のことを聞いていたのである。

社殿の前の広場には、青竹を四方に立てて注連縄をはり、その中央に、満々と水をはった大釜が据えてあった。

——とっぷり、日が暮れると同時に、釜の下の松丸太に、火がつけられることになっている。そして、熱湯が沸きあがるのを待って、神卜仙女真弓が、釜の中へ身をおどらせる筈なのである。

——ゴーン……と、どこからか鐘の音が響いて来た。暮れ六ツだった。

と……、ワーッと、群衆が大きくゆれた。——社殿の奥で、祈願をこらしていたらしい真弓が、数人の巫女を従えて、静々と現われたのである。

真弓は紅梅色の肌着に白衣を重ね、白絹の帯を、キッと、前で締めていた。黒髪は、サッと肩から背中へ振り乱し、一枝の榊を手にしている。

年のころは、二十五六であろう。色あくまで白く、眉と鼻筋が秀でていた。

ひと足毎に、裾が翻って、肌着の紅色が白い素足にからむ……。これから凄まじい湯花の神事を行う巫女というよりは、絵草紙に描かれた海女を思わす濃艶さである。

これが、昨夜鳥越明神の境内に現われた、赤土に顔を塗りつぶした丑の刻参りの素顔だ！　と……、武家風の若い女が、人垣を掻きわけて、真弓のそばへ駈け寄っていった。

「——あ……、深雪じゃ……」

墨染の少将が、小さな声で叫んだ……。

「——真弓さまッ……」

きざはしに掴まるようにして、大奥勤めの深雪が叫んだが、神卜仙女真弓には聞えなかったらしい。

わーッ……と、凄まじい喚声が、目白八幡の境内に渦を巻いていたのである。

既に、大釜の下の薪には火がつけられていた。宵闇の中に、火の粉が、金粉のように舞い上っている。

「お静かにッ……」

「——お静まりなさりませッ……」

真弓の周囲をとりまいた巫女達が声をからしていた。

「——九天の諸神、十方鎮座の神々に祈り奉る……」

真弓の声が、リンと響き渡った。

「ねがわくは、ここに集まるところの善男善女の災厄を、神卜仙女真弓が一身に移しとりたまえ……。われ衆生の身代りとなって、湯花の神事をつかまつる……」

八方から、白紙に包んだ賽銭が、真弓のまわりに雨と降り注ぐ。

うしろのものは、一尺でも真弓に近づこうとする。前のものは、押されまいとする。

人々は、鳴戸の潮騒のように揉みあい、喚き続けていた。

「――これはまずい……」

うしろの方にいた墨染の少将がつぶやいた。――深雪も、千々輪のお浅も、六角十字兵衛も、どこにいるのかわからなくなっていた。

いや、供をしていた近江の喜平太との間さえ群衆に隔てられているのである。

やがて、巫女が二人、それぞれま新しい青竹の梯子を抱えて大釜に近づいて行くと、それを、釜のすぐ近くで、ガッキと、組み合せた。

辺りは真の闇。釜の下の火だけが赤々と燃えあがって行く。

梯子をのぼる真弓は裾が翻り、白い素足が焔に照らされ、異様なまでなまめかしさである。

真弓は、組み合せた竹梯子の上に立ち上ると、口の榊をとって、気合と共に振り回した。

とたんに、――ゴーッ……と、大釜が凄まじい響きをあげて鳴り始めた。

同時に、釜の湯は沸々とわき上り、湯煙は浅間の噴煙を思わせる物凄さで闇の夜空へ立ちのぼって行く。

真弓は、再び榊を口に咥えると、ピタリッと合掌して、眼を閉じた。

一瞬、群衆は声を呑んだ。――たとえようもなく、神々しく、ゾッとするほどの美しさである。

「――さらばッ……、われに邪心あらば、白骨となしたまえッ……」

と声高らかに叫んだ真弓は――

「――えーいッ！」

竹梯子の上から、煮えたぎる熱湯の中へザンブと身を躍らせた。

サッと、湯玉が飛び散り、周囲の人々の襟もとへ、熱い霧となって降り注いだ。

慌てて、ドッとあとへさがる騒ぎに、群衆が大浪のように揺れた。

が……、次ぎの瞬間、人々は、真弓の姿に愕然と眼を見張った。

――たぎり立つ湯の中に、真弓が、スックと立っていたのである。

「――有難や……」

「――南無……」

期せずして、人々は手を合せ、祈りをあげ、そして賽銭を投げ続けた。

真弓は、榊の小枝を打ち振り打ち振り、祈り続けている。――その間に、巫女達が手わけして、素早く賽銭を掻き集めていたのだが、これに気付いたものは、殆んどなかったであろう。

頃あいを見はからって、二人の巫女が、サッと、燃えている薪に水をかけた。火は消され、いまは、大釜のあたりも闇に呑みこまれた。

夜空にきらめくわずかな星あかりに、人々は、釜を出て竹梯子を降りて行く真弓の白い姿を見た。

真弓の五体はもとのままである。――あの湯花の荒行に、肉もただれず、骨も崩れず、白い素足に、白衣と下着の紅布が濡れそぼれて、まつわりついている。

――わーッ……

再び喚声がわきあがった。――先きほどまでの、なかば弥次馬めいた声ではなく、ホッとした安堵の溜め息である。

と……、そのとき、人々を突き飛ばすようにして、竹梯子に駈け寄った数人の男があった。

「――待てッ！　諸人をたぶらかす奇ッ怪な所行……。熱湯か熱湯でないか、確かめてくれるぞッ……」

叫んだのは、六角十字兵衛である。

「おさがりなされッ！　神罰をこうむりましょうぞッ」

「黙れッ！　老中本多家家中のものだぞッ」

「よッ！」

真弓が、サッと、うしろへさがった。付き添っていた巫女も、竹梯子を捨てて、真弓の両脇により添った。

ドッサと、二つの竹梯子が倒れる。

「――誰か、釜の湯を調べてみいッ」

十字兵衛が、若い武士達を振返った。

「――はッ……」

ひとりが、倒れている竹梯子をおこして、大釜へ立てかけた。

「なりませぬッ！　おやめなさいッ」

真弓が、激しい声で叫んだが、若い男は、ちらっと十字兵衛を振返ると、トントントンと、二三段竹梯子を駈け上った。

と、……グラリッと、大釜がかしいだ。――竹梯子をのぼる男の重みで、いままでとれていたつりあいが破れたのである。

「――わーッ……」

釜に押しつぶされた男の絶叫が響いた！

妖女奇女

目白八幡から雑司ヶ谷へ出る道には、人通りが絶えていた。

——湯花の騒ぎから、四半とき（三十分）ほどたっている……。

と……、駕籠が二ちょう、提灯もつけず、目白の方から走って来た。——駕籠をかいているのは、若い侍達である。

「——あ……ちょっと……」

うしろの駕籠から、女の声が聞えた。——道ばたの辻堂の前である。

「ここまで来れば、もうようございましょう。わたしは、この辻堂で六角どのを待ちまする」

女のことばに、駕籠が降された。

——うしろの駕籠から出たのは、千々輪の後家お浅であった。

「——駕籠は、どうします？」

若侍のひとりがたずねた。

「人眼につくと困るゆえ、辻堂のうしろにかくしてもらいましょうか」

「中の女は？」

「あれへ……」

お浅は、辻堂を見た。

駕籠から引きずり出されたのは、深雪だった。——高手小手に縛りあげられ、口には手拭いを噛まされている。

若侍達は、深雪を辻堂へ押し込むと、駕籠をかくして、目白の方へ戻って行った。

「——そなた、深雪……とゆうたなア」

お高祖頭巾のお浅は、深雪の横にしゃがんで、低い声でたずねた。

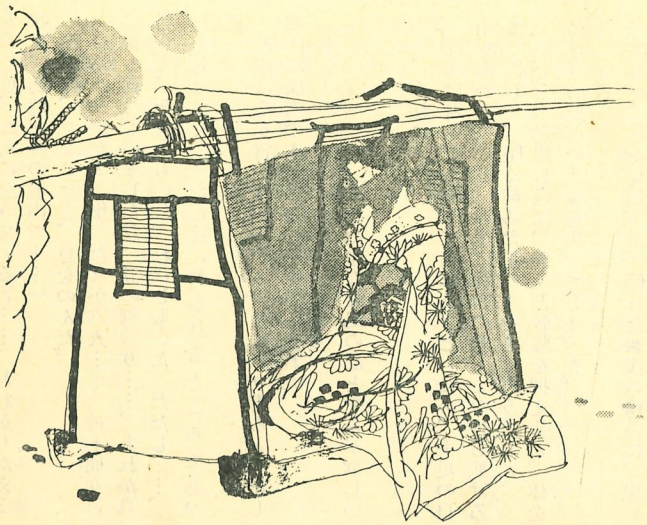
——狐格子から、かすかに、外のあかりが流れこんでくるだけである。

深雪は、顔をそむけた。

「そなた、大奥勤めの身でありながら、どうして、真弓という女を知っているのじゃ？　いや、お城の御門限まで無視して目白八幡に出かけたのは、どんなわけがあるのじゃ？」

深雪は、答えなかった。——いや、答えられなかった。口をふさがれているのである。

「ホホホ……わたしとしたことが……」



お浅は、深雪のさるぐつわを解いてやった。

「さ……はなしてごらん。目白八幡に行ったわけを……。神卜仙女と名乗る真弓を知っているわけを……」

「——知りませぬ」

深雪が、つぶやくように答えた。

「いいや、そなた階段の下で、真弓さま……と呼んだではないか」

「今宵、あすこで集るほどの者なら、真弓さまの名を知らぬはずはございますまい」

「なる程……。では、なぜ目白八幡へ行ったのじゃ？」

「心願の筋があって……」

「ほう、どのような願いじゃ？」

「いえませぬ」

お浅が、クスリッと笑ったようである。

「そうじゃ、いえぬじゃろうなア……」

お浅は、グイッと、深雪の髷をつかんだ。

「その心願、ゆうてみよう。——本多佐渡守さまのお命を狙うことであろうッ」

深雪は、黙ってお浅の顔を睨みつけた。

「オホホ……、こわい顔じゃ……」

お浅が、あざけるように見返した。

「そなたとは、今日、大奥で会いましたなア。でも、

もう一度、まえに会うている筈……。おわかりかえ？昨夜、鳥越明神の境内で……」

深雪は、ゴクリッと、息をのんだ。

「おわかりかえ？　集った女が六人……。神卜仙女と名乗る真弓もいましたな。丑の刻参り……、あれが真弓じゃ。そなたもいた。わたしもいた。ただし……、わたしは危く、そなた達に斬られるところであった」

お浅はそう言いながら、スッとにじり寄ると、出し抜けに深雪のふところへ手をさし入れた。

「あれ！　な、なにをなされますッ」

深雪は身もだえをして逃れようとしたが、手足の自由を奪われている。お浅は深雪の胸もとを押し拡げるようにして、堅く締めた帯の下をさぐろうとした。

「ほしいのじゃ。そなた達の証拠の品とやらが欲しいのじゃ」

「そ、それはッ」

が……、突然お浅は、うッと脾腹を押えると、体を弓なりに反らせて気を失ってしまった。

「――あ――！」

深雪が、目を見張った。倒れたお浅の傍らに、黒い女の影が立っていたのである。

女はしゃがんで、カチカチと火打石を鳴らしていたが、やがて、小田原提灯に火を入れて立ち上がった。提灯には大弓と書いてある。

「――まア……」

深雪は、もう一度驚きの声をあげた。――真弓が立っていたのである。だが、白衣に包まれた神卜仙女の姿ではなかった。天神髷に粋な帯をゆったりと締め、褄をとって、素足に吾妻下駄……。どこから見ても水商売の女将と言った姿である。

「――深雪さん……とおいいでしたね？」

真弓は、茫然としている深雪のいましめを解きながらたずねた。

「はい……。もと大久保石見守さま奥方付き中老浅路の妹でございます」

「……ほう。わたしは、汐留の船宿杉乃屋の女房お弓……」

「え!?　真弓さまでございましょう？」

「ホホホ……、御用心御用心……。まず、証拠の品を見せ合うて、名乗りはそれからのこと」

「あ……済みませぬ」

深雪は急いでふところから小さな紫の包みをとり出すと、押しいただくようにして、布を拡げた。

中に、奇妙な形の鏡が入っていた。――銅を磨きあげたもので、蓮の花びらの一つに似ている。

「これは、水のお鏡でございます」

深雪の言葉に、真弓はうなずいて、自分も紫の包みをとり出した。

真弓の包みからも、同じ形の小さな鏡があらわれた。

「これは、地のお鏡……。白衣を着ては神卜仙女と名乗り、このような恰好をしては船宿の女房お弓になり澄ましてはいますが、まことは、大久保家奥家老田沢頼母の娘真弓……」

「まア、御家老さまの……」

深雪は、すがりつくように真弓の手を握りしめた。

「本多佐渡守の陰謀のため、大久保家がお取りつぶしになって十年……。ようやくめぐり合えましたなア。して、姉上浅路どのは？」

「一昨年、患いまして……」

「あー、亡くなられましたか」

「はい……、いまわの際に、このお鏡をわたしに握らせ、初めてお鏡に結ばれた八人の同志のことを物語りました」

「それで、深雪さんが、浅路どののこころざしを、お継ぎになったのですね？」

「はい、及ばずながら、お家の仇敵本多佐渡守を討ちとうございます」

「仇は、佐渡守だけではありませぬ。本多家の家老熊取内膳、廻船問屋伊豆屋の後家お石……。八人が力を合さねば討てませぬ。それにしても、鳥越明神でちりぢりとなった同志の方々、どうしておいでのことやら……」

真弓にしては珍しく、ホッと溜め息をついた。

「木火土金水天地人……。八片のお鏡のうち、水のお鏡と地のお鏡がここで出会いました。お鏡の不思議な霊力によって、あとの六人の方々とも、いずれは会うことが出来ましょう。深雪さん、なにはともあれ、行きましょう」

「どこへ？」

「あなたも、この千々輪の後家どのに正体を知られた以上、いまさら大奥へ帰ることもできぬでしょう。わたしの家においでなさいまし。女ばかりで、にぎやかですよ」

「女ばかり？」

「ホホホ……、わたしが神卜仙女となって、軍資金集めをするときには巫女になり、わたしが船宿のおかみになると、赤い前掛けをかけて女中をつとめる腹心の

家来達ですよ」
真弓は深雪を立たせると、ソッと、肩を抱いた。
「深雪さん、これからは義姉妹……。わたしを姉と思うて下さいよ」
ふたりは、手をとりあって、辻堂を出ようとしたが、深雪は、倒れているお浅を振返った——
「このひとを、どうしましょう……」
「放っておいてよいでしょう。そのうちに、六角十字兵衛達がやって来ます……。さ、急ぎましょう……」
やがて、真弓のさげた提灯が遠ざかった。
と……、辻堂の裏から、ゆっくり出て来た深編笠の影がある——墨染の少将だった。
少将は、しばらく、真弓と深雪のうしろを見送っていたが、静かに辻堂へ入ると、倒れているお浅を抱き起して、活を入れた。
「——あれ！」
息を吹き返したお浅は、ハッと、墨染の少将から飛び離れた。
「これこれ……なにを怖れる。助けてとらせたのに、こわがられては引きあわぬな」
「え!?　では、あなたが……？」
「バラバラと時雨れたので、ふと眼についたこの辻堂に逃げこんだ。ところが、そなたが倒れていたのじゃ」
「もし……そういうお声は……」
「わしの声を知っているのか？　わしは、墨染の少将高平じゃが——」
「あ——、やっぱり！　御前、浅でござります。今日、お奥でお目通りいたしました」
「おう！　大目付千々輪の後家どのか……」
少将は、初めて気がついたように、編笠をとった。
——が、辻堂の中は暗い。たがいの顔も、はっきりとはわからない。
「それにしてもそなた、なぜまた、このようなところに倒れていたのじゃ？」
「あ？」
お浅は、あわてて、手さぐりで辺りをなで廻した。
——深雪をさがしたのである。
「どうかしたか？」
「はい……。い、いいえ……」
「なにか、なくなったのか？」
「はい……。盗まれました。わたくしに、当て身をくわせ、倒れているうちに、盗んで行ったのでござりましょう」
「それはいかん！　大事なものなら、お役向きに届けねばなるまい」
「いいえ……」
お浅は、ようやく落着きをとり戻した。
「大したものではござりませぬ。それよりも、御前さまこそ、おひとりでこのようなところへ。どうなさいました？」
『供にはぐれたのじゃ。えらい人出であったからのう」
「では、御前さまも、目白八幡へ？」
『神卜仙女の湯花の神事を見に行ったのじゃ」
「まア……。少将さまともあろう御身分のお方が、巫女のまじない等を……。ちと、お軽々しゅうはござりませぬか」
お浅は、抜け目なく、さぐりを入れた。が、少将は、お浅の考えには気付かぬように、あけっぱなしで答えた。
「実はな、わしは神卜仙女の正体を知っていたのじゃよ。あれは、昨夜鳥越明神で捕えた丑の刻参りの女なのじゃ」
「おや、そうでござりましたか……」
そう答えるお浅の方がドギマギしている。
「それで、どんなことをするか見に行ったのじゃが、子供だましの神事じゃった」
「あの熱湯の荒行が!?」
「あれは熱湯ではない。ぬるま湯じゃ。その釜の上で、榊を振った……。実は、真弓の両袖に石灰が入れてあり、榊を振るたびに湯の中へ落ちた。石灰が湯に落ちると、グラグラと沸き返っているように泡立つ。中へ入っても、熱うもなんともないのじゃよ……」
「まア、……」
「ハハハ……、あれは甲賀流煙遁の術の応用と見たが、どうかな」
お浅は、驚いて、暗がりの中で少将を見詰めた。
実は、今朝神卜仙女が少将の宿を脱け出したのは、少将がわざと逃がしたのではないか……と考えていたお浅は、少将があからさまに、神卜仙女の詐術をときあかしたのが、意外だったのである。
「御前、これから、どうなさいます？」
「うム……、蔵前の大松院へ戻る」
「まア……。ここは、目白と雑司ケ谷のあいだ。蔵前までお歩きになりましたら、一番鶏が鳴きましょうぞえ」
「それも風流、ブラブラ、行くとしよう」
「まず、お待ちなさりませ……」
お浅は、ちょっと考えたが、すぐ、ポンと膝を叩い

た。
「御前、よいところを思い出しました。わたくしが御案内いたします。今宵は、そこにお泊りなさいませ」
「そうもなるまい。大松院の和尚や、家来の喜平太が心配しよう」
「それは、浅が心得ております。足の早い使いを、お宿へ走らせましょう。御前、今宵は、浅のいうとおりになさりませ。悪うははからいませぬ。御前は、風流がお好きなそうな。わたしが御案内いたしますところは、風流も風流、雑司ヶ谷の菊屋敷でございます」
「ほう、菊屋敷……」
「はい、庭一面の菊畑、その中に、シットリとした数寄屋がございます」
「心憎い風流じゃのう。何人の好みじゃ？」
「廻船問屋、伊豆屋の寮でございます」
「――伊豆屋……」
少将が、思わずたずね返した。
「はい。伊豆屋お石と申しまして、女あるじ。決して、お気にされるようなものではございませぬ。もとは、片はずしの椎茸髷で、おかいどりの裾をさばいた御殿女中でございますよ」
「それが、いまは廻船問屋か？」
「と申しますのも、お石どのがおつかえしたお大名がお取りつぶしになりましてねェ」
「ほう……。近年取りつぶしの大名といえば、駿河大納言忠長卿を始めとして、豊後の竹中家、肥後の加藤家、出羽山形の鳥居家に、伊予松山の蒲生家……」
「いえいえ、そのような大大名ではございませぬ。さきの金山奉行大久保石見守さま」
「石見守……。あ――、一万石の小大名じゃな」
墨染の少将が、さりげなくそういったとき、バタバタと大勢の足音が近づき、すぐ、提灯を持った武士が、辻堂の中へ入って来た。
「――やッ！　これは御前……」
入って来たのは、六角十字兵衛であった。
「――ほう、貴公とは、いつも変ったところで会うの」
墨染の少将は、十字兵衛を見て微笑んだ。
「昨夜は、鳥越明神境内の暗闇で……、今宵は、このような辻堂の暗がりで……。おかしな廻りあわせじゃ」
「全く……」
十字兵衛は、うさん臭さそうに答えたが、少将は、それには気付かぬように言葉を続けた――

「それに、いつもおなご衆がからんでいる、昨夜は、丑の刻参りの女。今宵は、この後家どの……」
「されば……」
十字兵衛は、ピシリ、ピシリと、少将から先手を打たれるような気がして、不思議な圧迫を感じた。
「――そう申せば御前……、昨夜の女は、まだ御前のお手もとに、おりまするか？」
こうたずねるのが、せめてもの反撃だった。
「いや、逃げた……。いまも、後家どのに話したことじゃが、あの女の正体は、神卜仙女真弓じゃよ。貴公もそれを知っていて、今宵、この辺りへ来たのであろう？」
――いかん……、十字兵衛は、胸の中で舌打ちをしていた。また、先手を打たれたような気がしたのである。
「いや……、わたくしは、一向に存じませなんだ。ところで……」
十字兵衛は、提灯を高くかかげて、辻堂の中を、あちこちと見廻し、お浅へ顔を向けた。
「御後室さま、お供は？」
十字兵衛は、深雪の姿が見えないので、それをたずねたのである。
「はい……、先きに、帰りました。そのあとで、無法者に襲われ、気を失っていたところを、墨染の御前に助けて頂いたのですよ」
これだけの言葉で、十字兵衛は、なにごとかがあったことを悟った。
――ふン、お浅のやつ、何者かに、深雪を奪われたな……。
そう考えたが、少将の前で、事情をたずねることは出来ない。
「――後家どの、では、ぼちぼち参ろうか」
少将が、お浅を促した。
「どちらへ？」
十字兵衛がたずねた。
「菊屋敷とやらへ行くのじゃよ。廻船問屋伊豆屋の寮じゃそうな。今宵は、世話になるつもりじゃ」
「では、お送り申しましょう」
「これこれ……野暮なことを申すな。目白田んぼの道行きじゃ、二人連れに限る、のう千々輪の後家どの……」
少将は、笑いながら、辻堂を出ると、表にいる若侍達の間を通り抜けて、雑司ヶ谷への道へ出た。
そのあとで、十字兵衛がお浅にささやいた。

「――臭い！　どうも臭い。お浅さま、少将に、気をつけねばなりませぬぞ……」

菊屋敷の女

墨染の少将は、朝のしめった土を踏んで、菊畑の中に立っていた。

昨夜は、夜中だったので気がつかなかったが、これは考えていたよりは遙かに大きな菊畑であった。まだ八月の末ではあるが、既に黄菊白菊、艶紅鮮紫、早咲きが奇を極めた花を開いている。

「――お早いお眼ざめでございます……」

丁寧に挨拶をして、うしろの小路を通り過ぎようとした女があった。

「あ、これ……」

「はい……」

少将の声に立ち止まったのは、小間使い風の娘であった。としの頃は十七、八であろう。

「そなた、この寮のものか？」

「はい、木野と申します」

「キノ……、珍しい名じゃ」

「草木の木に、野原の野と書きまして、木野と呼ばれております」

「ここは、伊豆屋の寮なそうだが、そなたは、寮勤めか？」

「いえ……、今朝ほど、主人の供をして参りました」

「ほう……、確か、女あるじであったな。お石……とか？」

「左様でございます。昨夜、千々輪の御後室さまよりお使いをいただきましたので、主人は今朝、七ツ（四時）前に稲荷橋の本宅を出まして、駕籠で参りました」

「稲荷橋……。鉄砲洲の先きじゃな？　それは大ごと。くたびれたであろう」

「はい……。つろうございました」

木野という娘は、そう言って、ニッコリ笑った。悪びれぬ、どこかあどけない笑顔である。

「そなた、この菊畑へ、なにしに来た？」

「御前さまのお部屋へ飾る萩を折りに参りました」

木野は軽く一礼すると、菊畑の奥へ姿を消した。そこに、萩の幾株かがあるのであろう。

と、……しばらくすると、けたたましい犬の声が聞えた。――木野が入って行った方角からである。

少将は、思わず、そちらへ急いだ。

「――あ……！」

意外なものを見たのである。木野が、ひと枝の萩を、片手青眼に構え、たくましい赤犬を睨みつけている！

犬は、キリッと尻ッ尾を巻き、鋭い牙をむき出していた。――野犬であろう。

と、木野が手にした萩の先きが、ピリッ……と動いた。途端に、パッと犬が飛びかかる。

ギャッ……。

犬は、キリリッと宙で一回転して、ドサッと地面へ落ち、そのまま動かなかった。

パラパラと、萩の花が二つ三つ、木野の足もとに落ちている。――萩のひと打ち……。

「――見事じゃ！」

少将は、われを忘れて叫んでいた。

「――木野……。お木野……」

女の声が聞えて来た。

「はい……。ただいま……」

木野は、少将へ一礼すると、呼ばれた方へ急いで行った。

少将は、倒れている赤犬へ近づいて見た。――犬は、生きていた。あばら骨が、激しく波打っている。

ちょっと、気を失っただけだったのである。

――討って、殺さず……。

まだあどけない小娘の木野に、この手練があったことに、少将は舌を捲いた。

「――御前……、なにを遊ばしておいでです……」

四五間離れた菊畑の中に、お浅が立っていた。

「おう……、後家どのか」

「まア！　もう、その後家どのはやめていただけませぬか……。あちらに、朝餉の仕度が出来ております」

「それは、困った……」

少将は、ゆっくり、お浅に近づいて行った。

「わしは、朝は食さぬことにしている」

「おや、折角仕度しましたのに……。お石どのがガッカリしますよ」

「なにはともあれ、お内儀に挨拶をせずばなるまい……」

少将は、お浅の案内で、数寄を凝らした座敷へ通された。

「――お石どのでございます……」

平伏して迎えた女を、お浅がひきあわせた。

鳥越明神の御神木へ打ちこまれた藁人形の一ツはお

石であった。

——つちのとう年生れ……、今年、四十一の筈である。

が、お石は色白だった。柔らかくて、ふくよかな肉附き。上背があって、眼鼻立ちも大きく、三十四五と見える若づくりである。

お浅が、少将は朝食をとらぬと告げると、お石は、青い眉のあとを寄せた。

「ハハハ、京の貧乏公卿は、一日二食に馴らされている。気にしてくれるな」

「御冗談ばっかり。ではお茶など……」

少将は、すすめられた茶碗を見詰めた。

「唐津の石はぜ茶碗じゃな？」

「まア、お眼の高い。寮のこととて、ろくなものはございませぬ」

「この茶碗を、ろくなものではないと言うのか？　なる程、伊豆屋は大金持ちじゃ」

「また、そのような御冗談を……」

少将は、作法どおり、茶を呑み、菓子をつまんだ。が、……しばらくして、さりげなく座を立った少将は、菊畑の片隅に湧いている清水に近づくと、お浅とお石にかくれ、口をすすぎ、うがいをした。

「——けがらわしいあの茶、あの菓子……」

少将は、幾度も唾をはいたが、突然、ひとの気配に、ハッと振返った。

花筒を持った木野が、すぐうしろへ近づいていたのである……。

「——あ——、木野か……。この水はうまいな。水は、深き水に限るようじゃ……」

少将は、われながら、まずいと思った。

が……、木野は、ニッコリ笑った。

「はい……。菊屋敷の清水は、雑司ヶ谷一番の名水と噂されております」

「そうであろう……。いや、うまい！　うまい水じゃ……」

木野は、ほほ笑みながら、花器を清水へ近づけた。

「木野……、わしが汲んでとらそう」

「いいえ……、もったいのうございます。わたくしが汲みまする」

「なに、よいではないか。さ、器をわしにかすがよい」

少将は、極く自然に、木野の手を握ると、ジッと、顔を見詰めた。——木野の頬に、パッと、紅がひろがる……。

「木野……、幾つになる？」

「十……、十八でございます」

「親兄弟は？」

「ご、ござりませぬ」

「ほう、みなし子か？　それは、淋しかろう。実はな、わしもひとりじゃ。親もなし、兄弟もない……。木野、どうじゃ、いまからわしと木野と、兄妹になろうではないか」

「え!?」

「いや……。兄弟でのうて、もっと、親しいものになってもよい。わしは、木野が好きじゃ」

「御前さま……」

木野は、握られた手を、ソッと、はずした。

「お断り申します」

「なに……、断る!?　木野はわしがきらいか？　それとも、いい交した男でもあるのか？」

「いいえ、そのようなもの、ございませぬ。御前さまを、きろうているのでもございませぬ。ただ……」

木野は、キッと、少将を見上げた——

「わたくしは、おもちゃにはなりとうございませぬ」

「わしは、そなたが好きじゃとゆうた筈……」

「嘘でござります。御前さまは、わたくしの口をふさぐため、心にもないことを——」

「木野ッ……」

その折、近づく足音が聞えた。木野は、サッと、菊畑の蔭へ駈けこんで行った。

「——ホホホ……、まア、御前……」

お石は、少将に近づくと、ニタリッと、仇っぽい視線を向けた。

「ここにいたのは、木野でございましょう？」

「ウム、花器へ、水を汲みに来たのじゃそうな」

「ホホホ……、その花器が、どうして御前のお手に？」

「あ！　こ、これは……」

少将は、木野から花器をとりあげていたことを忘れていたのである。

お石が、少将の耳へささやいた——

「御前、木野がお気に召しましたか……」

お石は言葉を続けた。

「御前、奥方さまは？」

「いまだ無妻じゃ」

「でも、京都には、おいとしいおひとが、おいでござりましょうなア」

年増女のあつかましさをむきだしにしたお石の言葉であった。

「わしは、下世話に申す野暮な男でなア。女性とのつきあいはない」
「でも、御前ほどのお方を、女衆がほっておく筈がございませんよ」
「わしなど、相手にしても面白うないことも知っているのか、とんと寄りつかぬわ」
「まア……。都の女衆は、情なしでございますなア……」
お石はそういって、色っぽい眼つきで少将を眺めた。
「木野は、みなし子じゃとゆうたが、まことか？」
「はい……。あれは変った娘でございましてねェ。一昨年まで、四谷津之守坂の香取紋之助先生の道場にいたのですよ」
「ほう、剣術の内弟子か？」
「いいえ……。捨て児ですよ」
「捨て児!?　木野が？」
「はい……。七ツか八ツだったそうでございますよ、道場の門前にボンヤリ立っていたのが……。それから七、八年、養い子とも、女中ともつかず、香取先生が男手ひとつでお育てになりました」
「ほほう……。香月紋之助と申される御仁も、わしと同じ野暮な男と見えるな」
「オホホ……、おひとり身でございますよ。それで年頃になった木野にお困りになって、わたくしが預かったというわけでございます」
「では、木野が気にいっても、貰うて行くわけにはゆかぬな」
少将が、わざとガッカリしたような顔をすると、お石はあわてて手を振った——
「いいえ、すぐというわけには参りませぬが、わたくしが、きっとお世話いたします。そのかわり……」
「そのかわり？」
「ま……、よろしいではござりませぬか。いずれ、ゆっくりお話いたしましょうな。おうそうそう、お供の方がおいでになっております。それをお報らせに参りましたのに、コロッと忘れておりました」
座敷に帰った少将は、近江の喜平太の姿を見ると、さすがに嬉しそうであった。
「来ていたのか？」
「は……、さきほど伊豆屋より報らせがございましたので、取急いで参りました」
「はてな……。昨日のうちに報らせておくということであったが……」

「いいえ……。昨夜はお戻りがないので、まんじりともいたしませなんだ」
少将は、ふっと笑いを浮かべた——
「さては千々輪の後家どの、なにか企てておるとみゆるわ……」
縁先きの菊畑の中を、スッと、通り過ぎて行った影があった。——木野である。
「——香月紋之助と申す剣道家を知っているか？」
「噂は聞いております」
喜平太が、少将の言葉に答えた。
「強いか？」
「さ……。応変夢幻剣なる奇手を編みだしたことは聞いておりますが、木刀の剣法か、真剣のわざか、そこのところは存じませぬ」
「なる程……、応変夢幻剣か……」
「変に応じ、夢、幻のごとくひらめく剣……ということでございましょう。恐らくは、忍びの術を織りまぜたものではないでしょうか」
少将は、静かにうなずき返した。——萩のひと枝をもって、飛びかかる野犬を打ち倒した木野の手練はまさしく忍者の刀法であった。
——木野は、香月道場にいるうちに応変夢幻の剣法を仕こまれたのであろう……。
お石が、お浅といっしょに入って来た。
「——木野は？」
少将がたずねると二人の女は全く違った感情をむき出しにした。
——お石は、ニッと、みだらな笑いを浮かべたし、お浅は、ツンと却って澄ました顔をしたのである。
「木野は、四谷へやりました」
「ほう、香月とやらの道場へか？」
「はい……。しばらくの間、御前さまのお宿へ行き、お身のまわりのお世話をさせて頂く気はないか……と申しますと、行ってもよいが、香月先生のお許しを得たいと申しますので、早速四谷へ行かせました」
すると、お浅が、ジロリとお石を横眼でみて、皮肉たっぷりな口調で言った——
「やっぱり、お石どのは商人、取引がおじょうずですこと」
「ホホホ、手金を打っておかねば、よそにとられます。たとえば、お浅さまのようなお手の早いおかたに……。御前、お浅さまは、御自分が御前のお世話をなさりたかったのでございますよ。それを、わたしが木

野をおとり持ちしたので、御機嫌が悪うございます」
「ま、そのようなことを……」
女二人の言葉に、わけを知らぬ喜平太は眼をクルクルさせているが……少将は、ホッとした。
――木野は、わき水でうがいをしたことを、まだお石に告げていない。とにかく、木野の口をふさいでおかねばならぬ……。
「お内儀、木野がわしのところへ来るか来ぬかは、香月の一存で決まるわけじゃな」
「はい、わたくしは、もう承知でございます」
「では、わしはこれから、四谷へ行く」
スッと立上る少将の姿を、お浅は、いまいましげに見上げた。
「――わたくしは、御前をここへお連れするのではございませんだ。まるで、御前をお石どのに、横どりされるためにお連れしたようなものでござりますなア……」
いっ刻の後、少将を乗せた駕籠は市ケ谷のくぼ地を走り抜け、津之守坂を四谷伝馬町へのぼって行った。
近江の喜平太が、ピタリと駕籠脇につき添っている。
坂の右側には、松平摂津守の下屋敷の築地塀が続いている。津之守坂と呼ばれるのは、この下屋敷があるためであった。
左側は、町家が続いている。――香月紋之助の道場は、その町家のはずれ、坂を登り切ったところにあった。
「――頼もう……」
喜平太の声に応じて出て来たのは、木野であった。
木野は、少将の姿に驚いたが、型どおりに手をついた。
「――墨染高平ともうすものじゃ。香月先生に、ひと手ご指南頂きたい……」
少将は澄した顔でそういった。
「――ほう、試合がしたいというのか……」
木野がとり次ぐと、香月紋之助は、呆れたように笑った。
「木野を貰いに来たのなら、座敷へ通すが、試合といわれては、そうはならぬ。道場へ通しなさい」
道場へ案内された少将は、正面に坐っている紋之助を見て驚いた。
――木野の育ての親であり、道場のあるじである。かなりの年配の男を予想していたが、実は、痩身白面、一見三十前後の若い男であった。

少将は、辺りを見廻した。――二十人余りの門人が、坐っている。木野の姿は見えない。
「香月先生、お手合せ願えますかな？　それとも、まず門弟衆とでも試合を致す道場の掟かな？」
少将は、道場の中央に立ってたずねた。――他流試合を望むものとして、かなり不作法な態度である。
が……、紋之助は、微笑を浮かべ、木刀を持って出て来た。
「お相手致そう……」
しばらくして、少将は、ピタリと青眼に構えた。が……、紋之助は、自然に両手を下げたままである。
――ふーム、恐るべき剣法……。少将は、内心舌をまいていた。
――わざと無礼な態度をとり、紋之助を怒らせ、いらだたせようという考えは効果がなかったようである。
――勝てぬ……。
少将は、己れの劣勢をさとらずにはいられなかった。動けば、打たれる。木野に打ち倒された野良犬……。それと同じ結果になる。
ダラリと下げた木刀。それが瞬間に変化する。応変夢幻の太刀さばき、肩の骨を折られるか、腕を打ちくだかれるか……。
これは必ずしも香月紋之助の編み出した刀法ではなかった。もともと、紋之助の師香月流雲斎の甲賀流忍法の一手であった。瞬間に変化する小太刀の妙法である。それに工夫を加えたのが、いわゆる応変夢幻の太刀さばきである。
「――それまでッ……」
突然、紋之助が、スッとあとへさがった。
ホッとした少将は、紋之助の声を聞いた。
「――木野……、お供をして行くがよい……」

隠密合戦

「本多佐渡守さま、おさがり……」
お坊主の声に送られて、佐渡守は老中溜りの間を出た。
お廊下左右の部屋々々からの挨拶に、一々笑顔で会釈をして行く。
――佐渡さまは肌ざわりのやわらかなおひと……といわれる笑顔である。
と同時に、――腹のうちのわからぬおひと……ともいわれている笑顔であった。

事実、佐渡守は、お昇降口から駕籠に乗ったとたん、いままでの笑顔は、苦虫を噛みつぶしたような渋面にかわっていた。

全く、なにもかも面白くない毎日だったのである。

佐渡守は、三代将軍は、長男の家光よりも次男の忠長がよいと考えていた。それが、徳川家百年の大計であると信じていたのである。

が……、将軍の位置には、家光が坐ってしまった。忠長は、駿河大納言として、名古屋の一城主である。

――わしは眼の黒いうちに、忠長卿を必ず将軍家にしてみせる……。

佐渡守は、心中深く期して、毎日、老中として政務をとっていたのである。

城中での笑顔も、その計画をさとられぬための心にもない笑いだった。

「――日々のお勤め、御苦労さまにござります……」

家老の熊取内膳は、佐渡守が着換えを済ますのを待って、挨拶をした。

「内膳か……。毎日、きまりきったことを申すな。わしは、政務にそれほど気を入れてはおらぬ。従って、格別苦労でもないわ」

「殿……。さようなことを、軽々しくお口にされてはなりませぬぞ」

「ふン……。わしが屋敷に戻っても、おかしくもないのに、笑い顔をしておれというのか」

「されば……、お屋敷内といえども、油断はなりませぬ。隠密、忍者などと申すものが、邸内も、大道も、同じようにうろつきまわっておりますからなア」

「まさか！　酒井、榊原、井伊、本多……。徳川家の四本柱ともいわれるわしの屋敷に、隠密がもぐりこむことはあるまい」

「いえいえ、それが御油断と申すもの……。敵は、当将軍家だけではござりませぬ。現に、大久保石見守の遺児らしきものが、殿のお命を狙っております」

「鳥越明神の藁人形のことか……」

佐渡守は、カラカラと笑った。

「藁人形に五寸釘を打って、まことの人の命が奪えるものなら、わしは家光公の藁人形をこしらえて、釘をうつわい」

「もしッ……。また、そのようなことを大きな声で……。殿、石見守の残党だけなら、大して心配は致しませぬ。見つけ次第斬って捨てます。ところが、斬るわけにはゆかぬ相手がひとり……。墨染の少将が――」

「なにッ、墨染の少将がッ！」

さすがの佐渡守も、顔色を変えた。

「――いえ、まだ、はっきりしたわけではございませんん……」

熊取内膳が、ひと膝前へ出た。

「実は、鳥越明神で怪しい女を捕えようといたしました折りに、少将に邪魔されました。また、昨夜、十字兵衛が目白八幡で捕えた深雪なる女も、どうやら少将に横どりされたようでございます」

「まずいッ……」

佐渡守は、吐き出すように言った。

「墨染の少将が、石見守の残党共に力を貸すだけなら、少しも恐れはせぬ。が……、わしは、家光公をたおし忠長卿を将軍家にしようとの悲願を持っている。そのためには、朝廷側に、ひとりたりとも敵をつくりとうない。忠長卿を将軍職に据えるためには、どうしても、朝廷の許しを得ねばならぬからな」

「では……、墨染の少将を、どうなさいます」

「まず、エサを以て、こちらの味方にひきいれるべきじゃ。エサは、黄金でもよい。女でもよい」

「そのエサにくいつきませぬときは？」

「斬れッ」

内膳は、首を傾けた――

「従三位の少将を斬っては、あとがうるそうございましょう。まして殿は、朝廷を敵に廻しとうないといわれましたぞ」

「馬鹿めッ……」

佐渡守は、歯がゆそうに舌打ちをした。

「少将を斬って、佐渡守が殺したと名ふだを置いて来る積りかッ。うム、よいことがある……」

ポンと膝を叩いた佐渡守は、内膳をそばへまねいて声をひそめた。

それからしばらくしてお長屋へさがった内膳は、六角十字兵衛を呼ばせた。

すぐやって来た十字兵衛は、ひとりではなかった。傀儡師の黒太夫がいっしょだったのである。しかも、黒太夫は、苦しそうに、片足をひきずっていた……。

「黒太夫、足をどうしたのじゃ……」

「やられました。手裏剣を打たれたのでございますよ、火箸の手裏剣をな」

「誰に？」

「へへへ……、墨染の少将……」

「少将に、そんな手練があるのか？」

「昨日の朝、少将の宿舎、蔵前大松院の屋根裏へもぐりこみ、様子をさぐっていたとおぼしめせ。少将は、

あの喜平太とやらと、神卜仙女のことを話しておりましたよ。ところが、突然火箸をとると、むいッと……」

黒太夫は、足を撫でて苦笑いをした。

「殿は、少将を抱きこむか、それが出来ねば斬れといわれる。が、すばしこい黒太夫に傷をおわせる手並みとあっては、斬るのもなまやさしいことではなさそうじゃな……」

と、そのとき——

「——もし、熊取さま。あたしはもう、少将に女を押しつけましたよ……」

そういいながら、お石が入って来た。

「——なにッ、木野を!? 少将にくれてやったのかッ？」

六角十字兵衛が、キッと、お石の顔を睨みつけた。

「はい……木野の体で、少将を仲間にひきずりこめば、ただみたいなものではございませんか」

「しかし、木野をやったから、少将が佐渡守さまにお味方するとは限るまい」

「でも、木野を少将に付けておけば、少くとも、少将の動きだけはたやすく探れましょう。それだけでも、よいではございませんか」

「それなら、なにも、木野を使わなくてもよかろう……」

十字兵衛は、いまいましげに舌打ちをした。

「六角さまア……」

お石はクスリッと笑った。

「あなたが、木野に眼をつけておいでしたとは、いまのいままで気が付きませんでしたよ」

「これこれ、伊豆屋ッ」

「ホホホ……、まアよいではございませんか。そのうちに、木野よりよい娘をさがしてあげます」

「いや……わしはなにも、木野をどうこうしようというのではない。あの女は、香月紋之助直伝の応変夢幻剣を使う。使いようによっては、ものの役に立つべき女だ」

そういって、十字兵衛は、ソッと、額の汗を拭いた。

「へへへ……、照れていなさるな、六角さん」

黒太夫が、黄色い歯をむき出して、いやらしい笑い声をあげた。

「男が女に惚れたとて、格別不思議はございませぬぞ。好きなら好きと申される方が男らしいと申すもの」

「黒太夫、その方までからかうのか」

「いや、いや、わたしはとって六十二ですわい。が、これでもまだ心ひそかに慕うている女がございまするじゃ。じゃによって、お前さまの気持もよくわかるというもの……」

「黒太夫も十字兵衛も、もうよせ……」

熊取内膳が、二人を押えた。

「それについて、殿にお考えがある。実はな、御中臈お玉の方が、伊豆へ旅立たれる」

そういって、内膳はクスリと笑った。

「御手附中臈の中で、お玉の方だけ懐妊されぬ。それで伊豆の吉奈、子宝の湯とやらへ湯治に行かれる。そのお話相手として、墨染の少将へ、同行をすすめる」

「読めました！」

黒太夫が、ポンと膝を叩いた。

「お玉の方へは、佐渡守さま腹心の美女をつけておき、色を以て少将を……」

「うム……。もし、どうしても味方に出来ぬときには、伊豆の山中にて少将を斬る」

すると、お石がニッコリ笑った。

「熊取さま、少将には、是非木野をつけてやりましょう。あのこには、わたくしがよく言いふくめておきます」

次ぎの日の昼過ぎ……。

蔵前大松院へ、お玉の方附きの表使い染村が少将を訪ねて来た。——表使いは、大奥と外部との連絡を全てとりしきる、重要な役目で、才智優れた女中が選ばれることになっている。

「ほう——、お玉さまが伊豆へ行かれるか」

「つきましては、是非とも、御前さまをおさそい致すようにと申されております」

「しかし……、作法指南のため下向したわしが、山の出で湯などへ遊びに行くわけにもゆくまい」

「いえいえ、御台さまも、是非おすすめ申せ、この夏中御指南を続けていただき、少将さまもさぞかしお疲れであろう。紅葉の伊豆でお気晴らしをなされるがよい、と申されております。それとも、御前さまは、出で湯などおきらいでございますか？」

「いや、好きじゃ。ことに、伊豆には一度行って見たいと思っていた」

「ま、御前さまは、伊豆に、お心をひかれておいでござりますか？」

そうたずねた染村の眼が、心なしか、異様な閃めきを見せた。

が……、少将は、それに気付かぬのか、おだやかな

笑顔を染村へ向けた。
「うム、伊豆は、是非訪れてみたい土地じゃ。その昔、伊豆は遠流の地であった。都より七百七十里、数多くの大宮人が流されている。伊豆に、鴨川、桂川などという川があろう。また、一条、二条、加茂、嵯峨野という土地もある。いずれも、配流の大宮人が、遙かに都を恋うて、名付けたものじゃ」
「まア、左様でございましたか……」
染村は、感じ入ったようにうなずいたが、いささか、あてがはずれたという顔色であった。
「では、御前、よいおりでございます。お玉の方さまもお喜びでございますゆえ是非御同行を……」
「出立は、いつじゃ」
「明後日、明け六ツ立ちでござります」
「ほう、それはまた、せわしいことじゃな」
「吉奈まで、本多佐渡守さまの御家来が、警護をいたしまする」
そういって、染村はまた、少将の顔色をうかがった。——が、少将は、素知らぬ顔をしていた。
「では、こうしよう。わしは、行列には加わらず、勝手に行く。わしは、気ままな旅が好きじゃ……」
「はい……、お玉の方さまへは、左様申し伝えまする」
大松院の玄関では、腰元風の着物を着た木野が、染村を見送った。
「そなた木野じゃな。少将さまのお供をして、必ず伊豆へ行かねばなりませぬぞ……」
染村が、素早く木野の耳へささやいた。
その頃、少将も喜平太へささやいていた。
「——汐留に杉乃屋という船宿がある。神ト仙女真弓と深雪の隠れ家じゃ。使いに行ってほしい……」
「御前、どうして神ト仙女の隠れ家を御存知で？」
喜平太は、驚きの眼を、少将の端麗な顔へ向けた。
「ものごとには、妙な廻り合せというものがある。わしも、その廻り合せで、神ト仙女が深雪を隠れ家へ連れて行くことを知ったのじゃよ」
少将は、雑司ヶ谷街道の辻堂での出来事を喜平太に語って聞かせた。
「では、真弓の方では、御前のことを知ってはおりませぬな」
「うム、知らぬ筈じゃが、わしに、一抹の疑いは懸けてはいるじゃろう。深雪に、目白八幡へ行けと教えたのは、わしじゃからな」
「行って参ります。で、なんと申しまするか？」
「いや、手紙を投げ込んでくれればよいのじゃ。必ず、真弓に顔を見られるな」
それからしばらくして、喜平太は、深編笠に顔を隠して大松院を出た。
秋晴れの、クッキリと澄み切った空が、果てしなく続いている。
喜平太は、大川沿いに、神田川まで下った。
汐留へは、そのまま、河岸沿いに行くのが一番近道である。が、しばらくそこで立ち止っていた喜平太は、編笠の中でニヤリと笑うと、柳原の土堤を辿って、神田豊島町へ入った。
更に、ゆっくり歩いて、伝馬町へ……。牢屋敷の前を通ると、本石町である。その突当りが日本橋……。
そこで、左へ折れた。——日本橋の下を流れる新堀川づたいに、再び大川筋へ出る。大変な廻り道であった。
それからは、大川端をまっすぐ下って、汐留へ……。
この辺り一帯に、大小の船宿が軒をつらねている。
杉乃屋は、すぐわかった。小粋な二階造り……。閉め切った二階の障子越しに、稽古三味線の音が聞えて来る。
喜平太は、杉乃屋の裏へさしかかると、ふッと足を止めて、クルリとうしろへ体を向けた。
「——おい……、どこまでついてくるのだ？」
四五軒離れた軒下で、ゴクリと生唾を呑んだのは、傀儡師の黒太夫であった。
「こちらへ来い。話があるなら聞こう」
「へへへ……、わたしのことですかな？」
人形函を首から吊した黒太夫が、ビッコを引きながら、軒下から道へ出た。
「わたしは、御覧の通りの人形つかい。大道を流して歩くのが商売ですわい」
「だから、俺のあとをつけたのではないというのか！」
「ま、そういうことになりますかな」
「蔵前から神田、日本橋から汐留、なんとなく同じ道を辿ったというのか。馬鹿めッ！」
叫ぶのと同時に、喜平太の手から、ピュッ、と黒い鉄片が飛んだ。
「——とおッ！」
ヒラリッと、右へ飛んだ黒太夫は、カチッと、飛んで来た鉄片を、人形函で払い落していた。
「見事だッ」
投げた鉄片を叩き落された喜平太が褒めていた。
——この男の無邪気さが、むき出しになっている。

鉄片は、十字形をしていた。その四本の脚が、いずれも鋭く尖っている。キリキリキリッと廻りながら、敵の体に突き刺さらずにはおかぬという変形の手裏剣である。

「よッ！　隠密手裏剣！」

黒太夫が叫んだ。

「ハハハ……、それを知っている貴様も、忍者と決ったッ。逃さぬぞッ」

そう言うのと同時に、喜平太はサッと両脚を開いて腰を落し、パッパッパッ……、水車のように両手を廻して、続けざまに隠密手裏剣を投げ続けた。

が、黒太夫も、鮮やかにこれをかわした。ピョンピョンピョンと、片足で跳ねながら、左へ飛び、右へ避け、或はクルリと体を廻してかすり傷さえうけない。

突然、喜平太が、体を伸ばした。

「もうやめた……。勝手にせい……」

そう言い残すと、黒太夫に背中を見せ、悠々と歩き始めたのである。

さすがの黒太夫が、茫然と遠ざかる喜平太のうしろ姿を見送った。——なんのことはない、喜平太に遊ばれているようなものである……。

「——わからぬ！　あいつ、どんな気持ちなのじゃろう……」

が……、喜平太は、既に使命をはたしていたのである。

船宿杉乃屋の二階の障子を突き破って、隠密手裏剣が一ツ、ブスリッと、天井板へ突き刺さっていた。

それまで聞えていた三味の音が、ピタリッとやんだことで、喜平太は目的を達したことを覚っていたのだ。

「——真弓さま……、投げ文のようでございますよ」

真弓の三味線を聞いていた深雪が、天井を見てつぶやいた。——突き刺さった手裏剣に、きりッと紙きれがまきつけられていたからである。

真弓は、静かに立って、三味線の棹をのばし、手裏剣を払い落した。

紙を拡げると、墨くろぐろと——

——お玉の方、本多家警護にて伊豆吉奈へ。墨染の少将も同行……。

「はて……？」

真弓は美しい眉の根を、キュッと寄せた。

「——誰が、この家のことを知っているのでしょう……？」

絵文字

江戸を出て四日目、御中臈お玉の方の美しい行列は、三島の宿に入った。

「——少将さまからは、まだおしらせがありませぬか？」

三島の本陣の奥座敷に通ると、お玉の方が表使いの染村にたずねた。

「はい。いまだにございませぬ」

「確かに、伊豆へ行くといわれたのじゃな？」

「申されました。ただ、御行列には加わらぬ。気ままな旅をしたいとのことでございました」

「いまだにおしらせがないのは、何か御都合が悪く、旅立ちをお取りやめになったのかもしれぬな」

「まさか……。もし、そのようなわけがございますのなら、それはそれなりのお便りがある筈と存じます……。本当に、どう遊ばしたのでございましょう」

染村も首を傾げた。

ところが墨染の少将は、一日前に三島に到着し、昨日から、宿はずれの金具屋という奇妙な名前の安旅籠に泊っていたのである。

江戸から三島まで十一宿二十八里三丁。お玉の方の行列は、神奈川、藤沢、小田原と泊りを重ねて、この夕方三島入りをしたのである。

が、喜平太と木野を供につれた少将は、これを三日で来ていた。

そして、お玉の方が染村と話をしている頃、少将は木野ひとりをつれて、伊豆三島神社の仁王門を通り、広々とした境内を、本殿の方へ歩いていた。

仁王門と本殿のちょうど中間に、白木造りの舞台があり、その傍らに、高さ七尺近い唐金の燈籠がポツンと立ててあった。

少将は、燈籠に近づいて、見上げ見おろしていたが、木野を振返ると台座を指さした。

「木野、わかるか？」

「は？」

木野は、台座を見た。——唐金の台座には、凡そ燈籠にはふさわしくない、奇妙な絵が浮き彫りにされていた。

「なんでございましょう。蓑のようなものがございますね。それから、虫が……」

「蚊じゃよ」

「まア、蚊でございますか。それから、箕と、井戸

と、蛇の目……」
「いやいや、それは、環じゃ」
「順番に並べてみますと、蓑と蚊と箕と井戸と環でございますか？」
「いや、順番が違う。それは、井戸から始めねばならぬ。絵文字じゃよ」
「絵文字？」
「うム……。井戸、環、蓑、蚊、箕……」
「イ……、ワ……、ミノ……、カ……、ミ……」
木野がギクッと顔を上げた。
「そうじゃ。石見守……。ここは伊豆の入口。とすれば、これは十年前の伊豆、佐渡の両金山の奉行、大久保石見守ということになるが、ハハハ、絵文字などを用いるとは、なるほど石見守は小人物じゃな……」
「――御前……」
木野は、思わず息をはずませていた。
「石見守さまは、小人物でございましょうか」
「あれは、もと能役者だそうな。それが一万五千石の金山奉行。小禄ながら大名になった。つまり、成りあがり者じゃな」
「でも、お能役者から、国内の金山をひと手に握る金山奉行への御出世は、非凡のお方であった故ではございませんでしょうか。聞くところによりますと、石見守さまは、佐渡、伊豆の金山はもとより、あまたの銀山、銅山をお掘り当てになり、また、全国の一里塚のもとを築かれましたとやら。わたくしには、小人物とは思われませぬ」
「詳しいの、木野」
「え!?」
木野は、ハッと、あわてて笑顔をつくった。
「う、噂の聞きかじりでございます」
「わしは、こんな噂を聞いている。石見守は、金山より掘り出した黄金を秘かに貯えて私腹をこやし、異国の船乗りと抜荷買をなし、更に、切支丹を信奉しておったとな」
「そういう噂もございますなア」
こんどは、木野は警戒して、当らずさわらずの答えをした。
「じゃによって、このことあらわれるや、老中本多佐渡守は厳命を下し、石見守は切腹、一族は酒匂河原ではりつけ。公金をごまかし、国禁の異教を信仰したものには、当然の罰であろうよ」
「でも……、でも……」
木野はまた、少将の言葉にあおり立てられたように、息をはずませていた。
「――そ、それが事実でございましょうか？　証拠が、あったのでございましょうか？」
「証拠か……」
少将は、ニッコリ笑うと、燈籠に手を近づけて、ソッと、爪ではじいた。
――キーン……、澄んだ音が、震えるように、かすかに響いた。
「聞いたか？　まこと唐金の燈籠なら、あのような音はせぬ。これは、黄金の燈籠じゃ」
「えッ！　金でございますかッ？」
「伊豆から掘り出した金をもって、この燈籠をこしらえ、唐金とみせかけたものじゃよ。が、木野、このことは内密じゃぞ。わしは都へ戻るとき、この燈籠をゆずりうけて行く。ハハハ……、貧乏公卿が、一夜にして大尽公卿になるわけじゃ……」
少将はカラカラと笑うと、呆ッ気にとられている木野を尻目に、本殿の前へ進んでポンポンと柏手をうっていた。
ところが……、翌朝、三島の宿は大騒ぎになった。
――絵文字の燈籠が、一夜のうちに、忽然として姿を消していたのである。
「あの重いものを、どうやって盗んだか……」
木野から、燈籠紛失の騒ぎを聞くと、少将も思わず小首を傾げた。
と、そのとき、近江の喜平太が、あわただしく少将の座敷へ駆け込んで来た……。
「――御前、このようなものを、投げこんで行ったものがございます」
喜平太は、一通の封書を、少将の前においた。
――大松院執事さま……とうわ書がしてある。
少将はこの道中、ずっと、江戸蔵前大松院執事でとおして来ていた。身分をかくすというより、少将を名乗れば自ら泊る旅籠の格式も選ばねばならず、なにかと面倒だったからである。
が……それは、喜平太と木野が知っているだけで、他には誰も知らせてはなかった。
「はてな……。わし達のことを、承知しているものがあるようじゃな」
「何者でございましょう？　この手紙は、いつのまにやら、帳場に置いてあったと番頭が申しております」
「とにかく、中を見てみよう……」
少将は、封を切って、紙をひろげた。
「――あ……、絵文字！」

見るともなしに、少将の手もとを見詰めていた木野が、驚いて眼を見張った。——紙には文字は書いてなく、絵が六ツ並べてあったのである。

一番上が、足袋の絵であった。次ぎは丸い環が一ツ。それから、にわとりが一羽、弓の矢、目玉、柄のついた桶……という順番である。

しばらく、その絵文字を見詰めていた少将が、ニッコリ笑って、それを喜平太と木野の前においた。

「——わかるか？」

「一向に……」

喜平太は首をかしげている。

「木野は？」

「はい……。タビ、ワ、トリ、ヤ、メ……。一番下が、読めませぬ」

「おう、この桶の絵か、これは手桶じゃよ」

「では……、旅はとり……やめておけ。あ！」

木野は、驚いて少将を見上げた。

「うむ。何者かが、わしに、旅はとりやめよと伝えて来たのじゃ。しかも、絵文字でな」

「でも、もしかすると……」

少将は、ニッコリ、木野へ微笑みかけた。

「木野、三島神社の燈籠のことか？」

「はい……、もしかすると、燈籠を盗んだものと、この絵文字のぬしは……」

「同一人物じゃ。間違いはない。だが、旅立ちすると眼にもの見せるぞとおどして来たのか、旅立ちは危険じゃと報せてくれたのか、そこがわからぬ」

少将は、ふッと、喜平太へ顔を向けた。

「お玉の方の出立の様子を見てきてくれぬか。その間に、仕度をしておく」

「御前、お立ちになりまするか？」

少将は、クスリッと笑って——

「行ってみねば、この絵文字のぬしが、敵か味方かわからぬ……」

今日は、お玉の方の行列が先きだった。

三島の宿から、狩野川の上流吉奈（よしな）の湯までおよそ八里の山路である。

行列は、五ツ（八時）には本陣を出立したが、少将の一行三人が金具屋を出たのは、四ツ（十時）近くであった。

「——御前、急がねば、陽のあるうちに吉奈へは着けませぬぞ……」

喜平太はせかせかと、道を急ごうとしたが、

「不風流な男のう……。陽が沈めば、それもまたよし。月の天城路を辿るも楽しいではないか……」

少将は、一歩一歩を楽しむように歩いていた。

まことに、天城の山は紫に煙って、南の空にかすんでいる。北に聳えるは富士の山……。伊豆は既に、錦繍の紅葉に彩られていた。

その頃、三島から二里ばかり下田街道を下った狩野川べりの御園の里はずれに、六角十字兵衛とその門弟十余人がたむろしていた。中に、傀儡師の黒太夫も混っている。

「——来ないな……」

十字兵衛が、苛立たしげにつぶやいた。——朝から、幾度となく口にした言葉である。

「黒太夫、少将は、お玉の方の行列に加わっていたのではないか？」

「表使い染村どのからのことづけは、お前さまもお聞きでしょうがな。——わしは勝手な旅をしたい……、と少将は申されたそうな、行列に加わる筈はありますまいて」

「しかし……。行列は、とうに行き過ぎたが、少将は来ぬではないか」

「それがそれ、気まま旅と申すものですわい。ま、落付きなされ、お前さまの気持ちはわかるが——」

「なにッ！　わしの気持ちがどうだというのだッ？」

十字兵衛は眉を吊りあげて睨んだが、黒太夫は黄色い歯を出してニヤリと笑った。

「お前さまは、少将よりは、木野どのが目あてでござろうがな？」

「ば、馬鹿なッ。佐渡守さまの大望に邪魔となる少将を斬るために待っているのだ」

「へへへ……、そりゃおかしい。佐渡守さまはもとより、御家老の熊取さんも、まず、少将を仲間に引き入れるようにすると言うておいでじゃ。斬るのは、相手の返答が否と出たときのこと……。そうではなかったですかな？」

「わしは、廻りくどいことは嫌いな性分なのだ。邪魔なものは斬る。黒太夫、貴様、わしの考えを止めようとしても駄目だぞッ」

「止めるものですか……。止める気があるなら、お前さまといっしょに、こんなところに来はしませんわい。実は、少将は、この黒太夫にとっても恋がたき……」

「えッ！」

十字兵衛は、驚きの眼を見張った。

「黒太夫、その女、誰だ？　何者だ？」
そのとき、若侍が叫びながら走って来た。
「――六角さまッ……。少将ですぞッ」
「――散れッ！」
十字兵衛が、門弟に下知をした。
御園の里のはずれ、狩野川と三分市の山々に挟まれ、下田街道は白ッちゃけている。
右は石ころの川原、左は竹藪が薄暗く続いていた。
少将は、黄ばんだ笹っ葉が一つ残った篠竹を鞭のように振りながら、相変らず楽しそうな表情である。
「――待てッ！」
突然、黒頭巾に顔を包んだ武士が十余人、竹藪から飛び出して三人を取り囲んだ。
「――狙うは少将一人ぞッ！」
覆面のひとりが叫んだ。――知るひとぞ知る六角十字兵衛の声である。
「おうッ……」
一斉に、刃が抜き放たれた。
「待てッ。このお方さまを、どなたと心得る。従三位の少将――」
「喜平太、無駄なことを喋るな……」
少将は、手にした篠竹を振って喜平太の言葉を押えた。
「人違いではない。この方々は、わしを待っていられたのじゃ。ところで、なぜわしを――」
「いよーッ！」
左側の男が、すくいあげるような逆さ袈裟で、少将に一刀を浴びせようとした。
「下郎ッ！」
ビシッと、篠竹の鞭が、男の眼を横に振った。
「わッ！」
ダダダッと、前へのめった男は、石ころの川原へ突ッ伏して、顔を押えた。
「喜平太ッ。相手は、問答無益と仰言る」
「心得ましたッ」
喜平太は、忽ち、二人の侍を手刀で打ち倒していた。――ジャガタラ拳法をまともにくらった男は、黒頭巾を血へどで濡らし、苦しそうにせきこんでいた。
が……、次ぎの瞬間、その喜平太が、あッと、のけぞっていた。
――額が破れ、はち割れた傷口からしたたる血汐が左の眼へ流れている。
「喜平太ッ！」
「御前ッ……。御用心！　礫でござりますぞッ」

喜平太が、凄まじい顔で叫んだ。
「よしッ。木野ッ。介抱せいッ」
「はいッ……」
駈けよろうとした木野に、サッと、ひとりの男が飛びかかった。
「やーッ！」
男の刀が、ビューッと飛んだ。――その刀に、男の右手首がくっついている。
――応変夢幻剣……。鮮やかな木野の小太刀さばきであった。
その時、少将は、飛び来った第二の礫を巧みにかわして、藪の中を指さした。
「――よ！　見たぞッ。傀儡師ッ……」
少将は、篠竹を捨てると、ダッと、竹藪の方へ走っていた。
「――わッ！　糞ッたれめッ……」
口汚なくののしりながら、傀儡師の黒太夫が、はすかいに、竹藪の奥へ逃げこんで行った。
少将は、藪のとば口で立ち止まると、クルリと体を廻して武士達の方を向き、静かに刀の鞘を払った。
うしろは藪……。重なり茂る青竹は、礫を防いでくれるであろう。いまは、安心して刃を交えることができるのである。
覆面の十字兵衛は、少し離れて、ジッと、少将の構えを見た。
――これは、出来るな！
思わず、胸の中でつぶやいた。
と同時に、
――いかん！　門弟達では勝てぬ……。
そう考えるといっしょに、大声で叫んでいた――
「半分は、女にかかれッ！」
残っている門弟は十人足らずだ。その半分が少将に斬られているうちに、あと半分で木野をさらって逃げよう……、それが十字兵衛の考えだった。
「――卑怯者ッ！」
バラバラッと、木野の方へ走って行く数人の男を見て、少将が叫んだ。
木野は、小太刀を構えていた。が……、血汐に視力を失った喜平太を護らねばならない。
「――来いッ。来いッ。来ぬかッ」
少将は、眼の前の男三人に挑んだ。――早く、この男達を片づけて、木野と喜平太を助けに行かねばならない。
だが、男達も、腕の違いを知っているのか、一間以

上離れて、なかなか斬りこんで行かない。
——グズグズしていては、木野が危い！
さすがの少将も、苛立って来た。
と……、このおり——
「——御助勢ッ！」
パッと、黒い影が、木野をとり巻く剣陣の中へ飛びこんで行った。
影は、虚無僧であった。——袈裟、法衣をし、二尺一寸の長尺八をふるって、またたくうちに、二、三人の刀を打ち落している。
顔は……、天蓋に隠れて、年の頃さえもわからない。
「——退けッ！」
十字兵衛は、こと成らずと見るや、大声で叫んでいた。
男達は、汐の如く退いて、あとには、喜平太に倒された二つの死体が残されていた。
「——絵文字の文をお送り申したのに……。御身分がら、ちと、軽々しいように存じまするなア……」
虚無僧は少将に向ってそういうと、少将の呼びとめる声も聞えぬかのように、飄々と、立ち去ってしまった。

そのあとで、少将がつぶやいた——
「——ほう、絵文字のぬしは味方であったか……」

お万の湯

伊豆の吉奈は、下田街道門の原から西へ八丁の山峡にある。天城の山麓といってもよいであろう。
深い谷底のため、陽は一日の半分しか当らない。イノシシが、昼間から親子づれで部落近くまで遊びに出るという山里である。
ここに、こんこんと子宝の湯が湧きだして、四軒の湯宿があった。
——人皇第四十五代の昔、名僧行基によってみいだされたと伝えられるこのいで湯は、古来子宝の霊湯といわれている。
南島屋は、吉奈の湯元であった。——藁屋根造りながら、棟数も多く、庭も広い。
狩野川の分流吉奈川が、南島屋の座敷を抱きこむようにして、西から東へ流れていた。
その離れ座敷で、墨染の少将は、表使いの染村と会っていた。
「——ほう、あれは、カワセミかな……」

少将は、窓下の川原を眺めて、ひとりごとのようにいった。清らかな流れに洗われる小岩から小岩へ、胸毛の黄色い小鳥が、ピョイ、ピョイと飛びまわっていた。

「わたくしも、昨日ここへ着いて、はじめて見ました。セキレイ、カワセミと名は聞いておりましたが、思いのほかかわいらしい鳥でございますなア」

「あの長い尾羽根の動きが、古来、切ッ先の動きにたとえられている」

「と、申せば、お供の衆が、お怪我をなさりましたとやら？」

「うム、御園の里はずれで、飛んだ剽軽者どもに囲まれてなア」

「少将さまと知っての狼藉ではございますまい。なにぶん山路のこと、旅人を狙う盗賊のたぐいでございましょう」

「いやいや、山賊盗賊ではあるまい。もちろん、わしと知っての狼藉じゃよ」

「まア、何者でございましょう？」

「さア、何者かな……」

少将は、おおらかに微笑んで見せた。

「お心当りは？」

「ないな」

「相手の人相は？」

「わからぬ……。ただひとり、奇妙な傀儡師が混っていたようじゃ……」

少将は、ふッと話題を変えた。

「にぎやかな大奥と異り、そなた達、この山里は淋しかろう？」

「いいえ、湯治の間は気儘にせよと、お玉の方さまからお許しが出ております。いっそ気楽でございまするよ」

「お玉さまは？」

「いま、御入湯中でございます。お万さまのお湯へ……。御存知でございますか？　お万さまは、神君家康公の御愛妾。ここで湯治ののち、紀州さまと水戸さまとをお産みでした」

そのお万さまの湯にひたっていたお玉の方は、ふッと、すき見をするひとの気配を感じ、湯煙の中で、きっと振返っていた。

「――何者じゃッ？」

お玉の方が、お万さまの湯の中で叫んだ。

「染村ッ……、染村ッ。誰かおらぬかッ。怪しいものじゃッ」

叫びつづけるお玉の方の声は、離れ座敷の少将と染村にも聞えた。

ハッと、腰を浮かせる染村よりも先きに、刀を摑んだ少将が座敷を飛び出していた。

と、出会い頭に、転がるように駈け寄って、ギョッと、立ちすくんだ男があった。――傀儡師の黒太夫である。

「――そちであったか……」

少将は、ジッと、黒太夫の醜悪な顔を見つめていたが、やがて、吐き出すように言った――

「――その年齢で、女の入湯をすき見するとは、たわけめッ！」

「いや――ッ！」

奇妙な叫び声と共に、黒太夫が足をかがめ、仰向けになって飛び上った。

五尺近く跳ね上った瞬間、グンと、両足をのばす。――ダッと、少将の顎あたりを蹴飛ばす積りなのである。

「しれ者ッ！」

サッと、少将が左へ飛んだ。

とたんに黒太夫は、クルリと一回転して、スックリと立つと、そのまま、跳ねるような恰好で走り出していた。――黒太夫は、先日蔵前大松院の天井裏に忍びこんだとき、少将から打ちこまれた火箸の傷が、まだなおり切っていなかったのである。

が……、それにしても、なかなかの素ばしこさである。

「待てッ！」

ようやく、少将が黒太夫の一間うしろへ迫ったのは、南島屋から半丁余り離れた崖の上であった。

土地のものは、ここを、明善寺の滑り丘と呼んでいる。――崖の端に立つと、グズッと、足もとの土が崩れ、そのままズルズルッと、三十尺余り下の吉奈川の岸まで滑り落ちて行くからである。

すぐ近くに、古寺がある。これが、医王山明善寺……。吉奈の湯を発掘した名僧行基の創建と言われている。だから、明善寺の滑り丘の名が生れたわけである。

だが、昨夜遅く着いたばかりの墨染の少将は、そんなことは知らない。

「――出会えッ！　出会えッ。少将だぞッ」

黒太夫が、しわがれ声を振りしぼって叫んだ。

と……、明善寺のうしろから、五六人の武士が、おっとり刀で飛び出して来た。

少将が、サッと、崖をうしろにして、刀を構えた。
「――お命、頂戴！」
ひとりが叫んだ。
「馬鹿ッ。その腕で、わしが斬れるか？」
少将は、スッと、一歩さがった。――と、グズグズッと、崖の土が崩れた。
「――落ちたぞッ！」
「――追えッ！　下へ廻れッ……」
武士たちは、右と左に別れて走った。――転落した少将を挟み撃ちにする積りである。
黒太夫だけが、あとに残った。
滑り丘から少し離れたところに、竜のような形の老松が枝を張っている。――黒太夫は、それにのぼって崖の下を眺めると、ニヤーッと笑った。
ズルズル……ズルズルと、赤土の断崖を滑り落ちて行く少将の姿が眺められたのであった。
やがて、少将は川岸まで転げ落ちて行った。
そして、立ち上ろうとしたが、バッタリ、右へ倒れた。
「――しめた！　足をくじきやがったなッ」
黒太夫は、松の枝に馬乗りになって、子供のように手を叩いた。

が……、その黒太夫の眉間に、キュッと、深いたて皺が走った。
――女が二人、川原づたいに、少将へ駈け寄って行ったのである。
女は、二人共、紺の手甲脚絆に、着物をスネ切りに着て、鮮やかな紅色のタスキをしていた。腰に、小さな籠を吊り下げ、手には、六尺棒に、灰掻きのような小さな三本爪の手鉤をつけたものを持っている。
髪は、うしろにたばね、頭から頬を、白い布で包んでいた。
伊豆の山地を、川から滝壺へ、滝壺から沢へと渡り歩く川ノリ取りの女であった。
長い手鉤は、深い滝壺のノリをとるため、頭巾は、飛沫をよけるためのものである。
「――どけッ、女ッ！」
ようやく、川岸へ駈けつけた武士達が、少将を抱え起しているノリ取り女を怒鳴りつけた。
「でも、怪我をされております」
「なんのッ……。もっと大きな怪我をさせてくれるのだッ。首が飛んで、プッと血の噴き出すという怪我をなッ。どけッ」
ひとりの武士が、ダッと、ひとりの女を突き飛ばそ

うとした。
と……、ヒラリと身をかわした女は、武士の小手をとるなり、鋭い気合と同時に、男を吉奈川の早瀬へ放りこんでいた。
「やッ！　やるかッ……」
残った武士達が、刃で少将と女二人を囲んだ。
「しかたがねエ、お相手しましょうか？」
「はい、お姉さま……」
「先きさまは六人。三人ずつ片づけようよ」
「はい、姉さま……」
男達が、同時に歯をむき出した。
「小癪なッ！」
ひとりが、薪を叩き割るように、刀を振りおろした。が……
――あッ！　男が、ぱッと飛びさがった。女のひとりが、六尺棒の手鉤に刀身をからみ、ピューッと、刀を大空へはねあげていた。
刀は、キリキリッと舞いながら、ポシャッと、岸から遠い川のまん中へ沈んでしまった。
武士達は二タ手に別れ、女達を斬り伏せようと、ひとりずつを取り囲んだ。
少将は、刀を杖に、くじいた足をかばって、ようやく立ち上がったが、かすかな笑いを浮かべた。
六尺の手鉤を構えた女二人は、同じような身のこなしで、スイッ……、スイッ……と、少将から遠ざかって行く。
が……、少将の眼にはそれが、武士達を、少将から引き離すための方策であることがわかった。
それだけの余裕を持っている女達に比べて、武士達の動きはなっていなかった。互いの連絡もなく、自分自身の呼吸さえ整っていない。
「――いよーッ！　――」
若い武士がひとり、前後の考えもなく、勝算もなく、闇くもに斬りこんでいった。
「たーッ！」
ひとりの女の手鉤の柄が、ピシッと、その武士の横面を打ちすえていた。
武士達は、か弱い二人の女と見くびっていたのはたしかである。
一気に斬り伏せるつもりであった。が、斬りつけた時は、つねに空間であり、相手の姿は忽然として背後に現われ、右に左に飛び、か弱いはずの女体は、まさに変幻きわまりない動きをみせた。
――忍者？

武士達が術を心得た相手だと察知した時は、かれらは、二人の女の前にまことに他愛のない姿となって倒されて行ったのである。

二人の女は、同時に少将の前に戻って来た。

「お怪我は？」

年かさらしい女がたずねた。

「大したことはない。幸い、いで湯の里じゃ。一日二日でもと通りになろう……。思わぬ世話になった。礼を申すぞ」

「お宿まで、お送りいたします」

女達は、左右から、少将の手を肩にして抱えるようにした。

「そなた達、どこを宿にしている？」

「どこといって、きまってはおりませぬ。運がよければ、お百姓の家か炭焼き小屋に泊めて貰います」

「運が悪ければ？」

「小さな山の祠か、それがなければ野宿いたします」

「もはや紅葉いたしている。山の夜更けは寒かろう」

「馴れております」

「馴れていると？　ハハハ……」

そのとき、頭の傷を白い布でまいた喜平太と木野が、おッとり刀で近づいて来るのが見えた。

「あ……、お供の方がみえたようでございますから、わたくしたちは、お別れいたします」

「そうか……、造作をかけた。体をいとえよ」

女二人が遠ざかるのと同時に、喜平太と木野が駈け寄って来た。

「御前、どうなさいました？」

「大したことはない。崖から落ちただけじゃ。染村に聞いたのか？」

「はい……、いまの女達は？」

「あ、これはしもうた。名を聞かなんだ」

が……、少将には、わかっていた。川ノリ取りの女は、真弓と深雪である……。

少将が、喜平太と木野に支えられて南島屋へ帰ると、長い渡り廊下で、染村を従えたお玉の方が待っていた。

「湯の中で大声をあげるなど、わたくしの不覚故に、少将さまに御迷惑をおかけして相済みませぬ」

「いやいや……。わたしこそ不覚でした。足もとの土が崩れるのに気付かなかったのです」

「湯壺に忍び寄ったのは、土地のものでありましたか？」

「いや、それが……」

少将は、にが笑いをした。

「怪しげな、老いさらばえた傀儡師でした。こやつには、昨日、喜平太が礫で額を割られ、今日はわたしがこのざまにさせられました」

すると、染村が、ふっと顔をあげた。

「では、曲者は、お方さまのお湯へ近づいたのではのうて、御前さまのお部屋へ忍びよったのでございましたか」

「いや……、傀儡師ひとりで、わしの部屋へ近づく筈はない。あの男は、女人入湯の図をのぞきみしようとしたに違いない」

少将の言葉に、お玉の方が、美しい眉根を寄せたとき、腰元が、本多家の家老熊取内膳が、お別れの御挨拶に目通りを願っていると伝えて来た。

内膳は、お玉の方の行列警護に当った本多家家臣の宰領として吉奈へ来ていたのである。

しばらくして、内膳は、庭先きから廊下へ近づくと、敷石に手をついた。——本多家家老とは言え陪臣である。同席は許されなかった。

「——江戸へ戻るのか？」

「は……、道中、御つつがなく御到着の上は、御警護の役目も相済みました故、一応江戸へ立ち帰り、また御帰還の折には、お迎えに参上いたします」

「大儀であった……」

内膳は一礼してから、顔を少将へ向けた。

「お久しぶりでございました」

「役目、御苦労であったな。ところで、この後、お方さま御身辺の警護はどうなるのじゃ」

「伊豆の山深きこの湯の里のこと格別の御警護は無用と存じます」

「では、本多家の家中のものは、ことごとく引揚げるのか？」

「は……、そのように命ぜられて参りました」

「では……、万一、お方さまの御身辺をさわがす不届者が現われた場合、容赦なく斬り捨てるが、文句はないな？」

「は？」

「貴公達出立の後は、何者を斬り捨てようとも、本多家とは無縁の者であろうな？」

「は……、勿論のことでござります」

少将は、お玉の方の傍らにひかえている染村へ視線を向けた。

「——そなた、内膳のいまの言葉、よくおぼえておき、証人になって貰いたい」

それから少将は、再び内膳を見た——
「——六角十字兵衛へ、わしが、よろしくゆうていたと伝えてくれい……」
部屋に戻った少将は、喜平太を呼んだ。
「頭の傷はどうじゃ？」
「わたくしのことなど、どうなろうと構いませぬ。御前のお身足はいかがでございますか？」
「わしは、ちょっと考えていることがあるから、そちの傷のことをたずねているのじゃ。まだ痛むか？」
「いいえ、もう痛みませぬ。頭の布など無くてもよいのですが、傷口をむき出しにしては却って失礼と考え、包んでおりまする」
「では……、医王山明善寺へ行ってみてくれぬか」
「は？」
「そちの眉間を割った傀儡師一味が、明善寺に巣くうているようじゃ」
「ふーム……、行って参ります」
喜平太は、刀を鷲摑みにして立ち上った。——礫で額を割られたことが、よっぽど口惜しかったのであろう。
「待て待て……。木野を連れて行くがよい。木野は、香月紋之助直伝の応変夢幻剣をよう使うようじゃ」
「御前、わたくしひとりで充分でございます」
「ハハハ……、一々さからう男じゃ。わしは、助太刀に木野を連れて行けとゆうているのではない。木野の腕前がどれほどのものか、確かめてほしいのじゃ」
「木野を連れて行きまする。最悪の場合、相手を斬り捨ててよいでしょうか？」
「かまわぬ……。わしは熊取内膳から言質をとり、表使いの染村を証人にしてある。その前に、わしをお万の湯へ連れて行ってくれぬか……」
少将は喜平太の肩につかまってお万の湯へ行った。
「——では、行って参りまする」
喜平太は、木野を連れて出て行った。
少将は、湯壺のふちの岩に腰を降し、足袋を脱いで、くじいた足を湯に入れた。——底まですけて見える無色の湯である。赤もみじ葉が、二ツ三ツ浮かんでいる……。
「——御前、おはいりにならぬのですか？」
うっとりとしていた少将が、うしろを振返った。染村が立っていたのである。
「片足が不自由でな。ひとりでは、湯にも入れぬのじゃ」
「喜平太どのは？」

「ハハハ、あれは人を斬りに行った」
「えッ!?」
そのとき、バタバタと、喜平太と木野が駈け戻って来た。
「とり逃がしました。和尚の話では、一味十人余り、ひと足違いで吉奈の里を出て行ったとのことでござりまする。追いかけましょうか？」
「いやいや……」
少将は、笑いながらかぶりを振った——
「捨てておいても、必ずむこうから仕掛けてくるであろうよ……」

金山の女

昼過ぎに吉奈の里を出た熊取内膳の一行は、八ツ下りに、月ケ瀬の野へ近づいた。
吉奈からは、月ケ瀬、矢熊、大平、立野と下田街道沿いに南下すると、次ぎが修善寺の里である。
このうち、月ケ瀬と矢熊は、吉奈同様いで湯の里、大平と立野は、十年前に大久保石見守がひらいた金山である。
内膳一行は、今宵修善寺泊りの予定であった。——行きは、形式的にもせよお玉の方の警護役である。気骨も折れたし肩も凝った。が、帰りは気楽だ。一夜を、修善寺の旅籠でくつろごうというのである。
内膳は、馬に跨がり、のんびりと、出発間ぎわに聞いた染村の耳打ちを思い出していた。
「——少将は、足の傷のため、当分は自由に動くことは出来ますまい。これがもっけの幸い。木野を始め、選り抜きの美女を幾人も近づけて、少将を誘ってみましょう……」
染村はそう言って、ニンマリ笑ったものである。
——御殿女中は鯛の味……その鯛女達からせめ立てられては、少将もまんざら悪い心持ちはいたすまいと……。
内膳がそんなことを考えながら、馬の背に揺られていると、月ケ瀬の湯宿から、バラバラと駆け出して来た男達があった。
先頭に立っているのが六角十字兵衛。一番うしろから、ビッコを引き引き走って来るのが傀儡師の黒太夫である。
「十字兵衛……。わしは、修善寺にて待てと使いを出した筈だぞ」
「確かに、そう聞きました。しかし、少将を討たずに

は引くわけには行きませんな」
「はてさて困った男じゃ……。それほどまでに少将を斬りたいか？」
「宿命とでも申しますかな……。日一日と、憎しみが強くなって来ます」
「ハハハ……、少将も、皮肉な言葉で、六角十字兵衛によろしくと申されたぞ」
「そうでしょう……。少将も拙者を斬る気でしょうからな」
「しかし、御主君は必ずしも、少将を亡きものにしようとは考えておいでにならぬ。また、染村どのも、まず女色を以てとりこにしようと考えている」
「それは、まだ少将をよく知らぬからですよ。あの内裏雛のような白い冷たい顔の下で、何を考えているか……。女では駄目だ。解決は剣あるのみ……」
「止むを得ぬ。退きたくなければ勝手にするがよい。ただし、本多家の庇護は受けられぬものと思えよ」
「承知……。一介の浪人六角十字兵衛としてやりましょう」
内膳は、黒太夫へ眼を移した。
「よい年をして、色好みもほどほどにせい」
内膳は手綱をさばいた。
その内膳の一行を、川ノリ取りの女二人が、大平金山近くの狩野川原で待ち受けていた。
「――真弓さま、二人だけで、熊取内膳を討つのですか？」
ノリ取姿の深雪が、同じ姿の真弓にたずねた。
「二人だけでは、心配なのですか？」
「いいえ、不安はございませぬ。ただ、石見守さまはじめ御一家の恨みは、鏡の誓いに結ばれる者八人が揃って晴すのではありませぬか？」
「そうしたいと思います……。でも、わたし達が集る約束の日は、あの鳥越明神のときのただ一日だけ。……次ぎの約束をするまもなく散り散りに別れたからには、二度と八人が集まることは出来ますまい、とすれば、わたし達だけでも討たねば……」
「わかりました」
「それに、ここで熊取内膳を討てば、必ずこのことは江戸にも噂がひろまりましょう。六人の同志には、――やったな……と、わかることでしょう」
「ほんに……、そうすれば、また同志とめぐり合う手掛りが摑めるかもしれませぬな……、でも、どのようにして、内膳を討つのです？　斬りこむのですか？」

「いいえ……、相手は大勢。わたしに考えがあります。ついておいでなさいまし……」
真弓は、深雪を促して立ち上った。
小半町で、大平金山である。
伊豆の金山のどこもがそうであるように、大平金山も、坑道の出入口近くに、金掘り人夫たちの遊び場が並んでいる。酒と女と賭博が大っぴらに許されているのだ。
金をどっさり掘り出して、ひと竈起そうなどと考えている金掘り人夫はひとりもいない。金脈を掘り当てて褒美の銭を貰っても、掘りためた金石を銭に替えても、パッとひと晩でつかいはたす一夜大尽……。これが金掘り人夫の気質であった。
その点は、罪人を人夫に当てている佐渡金山とは大変な違いだった。佐渡の金山は陰にこもっているが、伊豆の金山は陽気だった。
「――ごめんなさいよ……」
真弓は、一軒の居酒屋へ裏口から入って行った。
「おや、ノリ取さんかい……」
でっぷりと太った、人の好さそうな亭主が、二人の姿を見て気安く迎えた。
「親方さん。景気がよさそうですねエ」
「うン……。ここんとこ、この金山はだいぶ出がいいようなんでね、金掘りさん達も使いっぷりがいいよ」
「じゃ、川ノリも高く買っておくんなさい」
「あいの……。お前さん達が山の中へ踏みこみ、命がけで滝壺からとってくるノリだ。なアに、こちらさえ景気がよけりゃ、決して買い叩くようなことはしないよ。いくらだね？」
「親方さん……」
真弓は亭主に近づくと、ニッと微笑んだ。
「おかねはいりません。そのかわり、鉄砲をいッ時貸して下さいな……」
「――鉄砲!?　女の癖に、鉄砲をどうしようと言うのじゃ」
この辺りの家は、大てい猪射ちの鉄砲を持っている。真弓が貸せと言ったのは、その鉄砲であった。
「フフフ……、内証々々……」
「おいッ……」
亭主が、ギロッと、眼を光らせた。
「さては、見つけたな？」
「あれ、何を？」
「白っぱくれなさんな。猪の巣を見つけたのであろう？」

「嘘じゃ……」
「いや、めったに騙くらかされはせぬぞ。一頭か？　親子猪か？　な、ちょっとおしえてくれ……」
まことに、人の気持ちとは不思議なものである。隠せば、ひとりカンぐり、そう思いこんでしまう。真弓は、この人情の機微を巧みに利用したのである。
「あーあ、親方さんにはかないませぬ」
「へへへ、とうとうかぶとを脱いだな。親猪なれば一頭三両は下るまい。この大儲け、独り占めにはさせぬ。ノリぐらいではごまかされるわしではないわい」
「では親方……、こうしましょう。わたしが猪を射ちとって、親方に一頭一両で渡しましょう。そのかわり、鉄砲を貸して下され」
「ふーム……、悪い取引きではないな……。が、わしも行こう」
「それなら、この取引きはやめじゃ。わたしは、猪の通い路をみつけた。そこを親方に知られては、わたしの取るのは一頭だけ、あとはみんな親方に射たれてしまいますわいな」
「いや、そんなことはせぬ。もしそなたが射ち損じて手負いすると、危いからついて行こうというのじゃ」
「やめじゃ。他の親方さんと相談します」
「えーい、疑ぐり深い女じゃ。よし……鉄砲は貸そう」
しばらくして、真弓と深雪は、ノリ取道具を居酒屋へ残し、鉄砲を抱えて、金山続きの山へ入った。
「――深雪さん……、ここがよい……」
真弓は、下田街道を眼下に見おろす位置で足を止めた。
「真弓さまは、砲術の心得もおありなのですか？」
「ほんのちょっぴり……。でも、抱え撃ちで相手を毙す自信はありませぬ。それで、こうするのです……」
真弓は、スルスルと、傍らの松の大木に登ると、深雪から鉄砲を受けとり、からみついている葛を引き離して、幹の間に、鉄砲を縛りつけた。
それから、下田街道に狙いを定めて、シッカリと締めなおす。
「――あ、近づいてくる！」
しばらくして、木の上の真弓が叫んだ――
「深雪さん、火縄を……」
真弓は、深雪から受けとった火縄をクルクルと振りまわした。
パッと、火縄の端が赤くなる。
「真弓さま、大丈夫ですか？」

「用意は十分です。あとは、狙いさだめたところへ、熊取内膳が入るのを待つだけです」
「討ちとったあとは、どうするのです？　本多家の家来が、駈け登ってくることでしょう」
「それも、考えてあります。それ……」
真弓は、松が枝の上から、うしろを指さした。
「あすこに、掘り止めになった金山の穴が見えましょう。あの中へ逃げこむのです。入口は一ツでも、中は四方八方へ穴が掘り進められており、隠れる場所に困りはしませぬ」
深雪は、眼を細めて坑道の入口を見た。
「中はまッ暗ではないのですか？」
「暗ければこそ、逃げるものには都合がよいわけではありませぬか……、でも、ところどころに、息抜きの穴があけてあり、そこから陽の光もさしこんでいます」
「真弓さまは、なんでも、よう知っておいでですなア」
「わたしは、毎年、一度か二度は伊豆へ来ました。怨敵を討ち果すためには、出来るだけの用意をして来た積りです」
こんな伏勢があるとも知らず、内膳の一行は大平の里へ近づいて来た。
内膳は馬上で胸を張っている。金山の番所役人共に、本多家の威勢を示す積りなのだ。
陪臣ながらも天下の御老中、本多家の家老であると、そっくり返っている……。
「――深雪さん……撃ちますよッ」
そう言って、真弓は火縄を鉄砲の火口へ近づけると、眼を銃身によせて、ムッと息を止めた。
と……そのときだった――。
「あッ！　危いッ……」
うしろの方で女の叫び声が聞えた。続いて――
「よーッ！」
ピューッと、風を切って飛んで来た小石が、カチーンと、鉄砲に跳ね返った。
瞬間、真弓は、火縄を火口に差しこんでいた。
ダダーン……、銃声が、こだました。が――
「無念ッ！」
真弓は、パッと、松の枝から飛び降りていた。――いまの小石で狙いが狂ったのだ。
「――なにやつッ……」
真弓と深雪が振返ったとき、ひとりの女が、金山の斜面を駈け降りて、二人の眼前に突っ立った。
「――お前達、なにするんだいッ」

奇妙な女だった。着ているものは、金山人夫の短い絆天一枚。両脚をむきだして、わらじばきだ。たばねて垂らした髪は、赤ッちゃけて乱れている。

年は十六、七であろう。

「――おいッ、なんとかいえよウ……」

奇妙な女は、男のような言葉を使った。

「のけッ！」

真弓が叫んだ。グズグズしてはいられない。――ワーッ……と、喚声をあげて、本多家の家来達が駈け上って来る。

「逃がすなッ！　からめとれッ」

熊取内膳が、馬上につッ立って喚いている。

「女三人じゃぞッ！　ひとりも逃がすなッ、手にあまらば斬り捨ていッ」

真弓と深雪は、奇妙な女を突き除けるようにして走った。

「深雪どのッ……」

真弓が、坑道の入口で振返った。

「離れてはなりませぬぞッ。中は迷路、はぐれると出られませぬぞッ」

「はいッ。心得ましたッ」

真弓と深雪は、手をとり合うようにして、暗い穴へ飛びこんで行った。

が……、そのとき聞えたカン高い声に、思わず足をとめて松の木の方を眺めた。

「――あッ！　なにするんだいッ……」

さっきの女が叫んだのである。

「あ……」

真弓と深雪は、思わず顔を見合せた。

一番駈けに駈けのぼった侍が、女に斬りつけていたのである。

「バカもん！」

女は、サッと左へ飛ぶと、トントントンと泳いで来る侍の横ッ面を、思い切りひっぱたいていた。

「わッ！　手ごいわいぞッ……」

己れの未熟を棚にあげて、侍は大声で怒鳴った。

「それッ！　ひっくるんで斬り伏せいッ」

あとに続いた侍達が、バラバラッと、女をめがけて寄って行った。

「阿呆ッ！　わからずやッ」

女は叫ぶと、ダッと、うしろへ走った。

わーッと、侍達が追いかけてくる。

女は、兎のように身軽に石ころの多い山肌を駈け上ると、これまた、真弓と深雪が身をひそめている坑道へ飛びこんで来た。

「おい……。ここではみつかるぞッ。奥へ行こう……」

女が、先きに立ってドンドン走って行く。先きほどまでの敵が、一瞬にして仲間となったのである。

「こちらだこちらだ……、そちらへ行くと行きどまりだぞ……」

暗い坑道の中を、女が、まるで自分の家を案内するかのように誘導して行く。

ワーン……と、大勢の男の声が穴の奥までこだまして聞えてくる。

「――暗いぞッ、用心しろッ……」

「松明はないか、松明は……」

「案内人をさがしてこーいッ」

すると、女がクスリと笑った――

「ふン……みつかるものか……」

それから一ッ刻ほどたった。

ガヤガヤと騒々しくひしめいていた男達の声も聞えなくなった。――遂にあきらめて引揚げて行ったのであろう。

「――ハハハ……、もう大丈夫だ……」

おかしそうに笑った女が、カチッ、カチッと火打ち石を鳴らした。

ポーッと、辺りが明るくなる。――岩のくぼみに、サザエの殻をおしこみ、それに油をためて燈心がさしてあったのである。

「――おい、はらがへっただろ？　喰わないか……」

女は、灯りの横のくぼみから、何かを取り出して、真弓と深雪の膝へ一ッずつ置いた。――笹の葉でくるんだ焼き餅だった。

「水は、すぐそこに湧いてるぜ……」

そう言うと、女は、モグモグと餅を喰いはじめた。

「おかしな女じゃ……」

真弓が初めて口を開いた。

「あたし達の邪魔をしたり、あたし達を助けたり……」

「邪魔だの、助けるだの、そんな積りはないぜ。みんな、なりゆきだ」

「お前、女の癖に、そのなりは……」

「うん……。おれ、金掘りなんだ。それゃおれだって、赤い着物を着て、髪を結いたい。だけど、駄目なんだ。親ひとり子ひとり。そのお袋さんが病気で、俺が働かなければ喰って行けない」

「もっと、女らしい仕事があるではないか」

「うン……。お前達のような川ノリ取りだって俺は出

来る。だけど、病気のお袋さんを置いて、川や滝へ出掛けることは出来ないんだ。この里で女の仕事といえば、居酒屋の酌女……。いやだよ、俺、金掘りの方がいいや」

「でも、金山の金掘り場は女禁制……。女が近づくと、金が逃げるというのではないかえ」

「だから俺は、生きている穴へは入れて貰えないんだ。こんな、掘り捨ての穴でしか金掘りが出来ないのさ。でも……、女が近づくと金が逃げるなんて嘘だ。俺は毎日、親子が喰うくらいの金は掘っているぜ」

それから女は、ジロジロと、真弓と深雪を眺めた。

「お前達、なんだって、あの馬に乗った侍を撃とうとしたのだ？」

「そのわけはいえぬ」

「では聞くまい、だけど、人殺しはやめた方がいいなア。——俺は、お袋から剣術を習った。だけど、お袋さんはこういったんだ。——剣は人を斬るに非ず、己を守るなり……」

「お前の家は、もと武家かえ？」

「うん……。そうらしい。でも、物心ついた頃は、お袋と二人で、もうこの里にいた」

「お前の名は？」

「津矢……。田沢津矢というのだ」

真弓が、ハッと女を見詰めた。

「まことかッ!?　まことなら、お前はわたしの従妹じゃ。わたしの名は田沢真弓……。甲賀流の術を心得ているはず」

蛇取りの姥

「——表使い染村さま、おいでございます……」

襖の外から聞えた木野の声に、ひとり茶をたてていた墨染の少将が、ゆっくり顔をあげた。

「夜中、なにごとじゃな？」

「上下お療治のおかたを連れておいでございます」

「ほう、按摩か……」

少将は気軽に立上ると、襖をあけた。

「これはこれは、おそれいりまする……」

染村が手をついた。

うしろには、木野と、もうひとり、若い女が控えている。

「按摩は、女か？」

「はい、お玉の方さまお抱えのものなれば……」

「なる程、大奥の……男では困るわけか」

「芳仙と申すもの。女ながら、療治の妙手でございます。おみ足のくじきなど、殊の外よいのではないかと存じまして」

「では、ひと揉み頼むとしよう……」

少将は、片足をひきずりながら、もとの座へ戻った。

染村は、控えている女を促して、部屋の中へ入ると、静かに襖を閉めた。

「木野……」

「はい？」

染村は、木野の耳へ口を近づける。

「少将さまは、お優しいかえ？」

「はい……」

「どのように？」

「は？」

「えーい、じれったい！　役に立たぬ女じゃなア……」

染村は、溜め息をついて戻って行った。

一方、少将は、女按摩芳仙の前へ、茶碗を置いた。

「相手ほしい折からであった。療治の前に、一服どうじゃ」

芳仙は、ニッコリ笑って、少将を見上げた。——眼もとのなまめかしい女である。按摩が役目のためか、大奥の女中というより、町方女の色気があふれている。

——染村が、少将を味方に引き入れる手段として、最初に送りこんだのが、この女だったのである。

芳仙は、作法通りに茶を呑むと、また少将を見上げて、ニッコリ笑った。

「——お揉みいたしましょう」

「そうせくな……。それより退屈の折じゃ、面白い世間ばなしでも聞かせてくれぬか？」

「では、歌をお聞かせいたしまする」

「一段と面白い……是非聞かせてくれ」

芳仙は、よい声で歌い出した。

その声は、少し離れた植込みの蔭にひそんで様子をうかがっている染村にも聞えた。

やがて、ふっと、芳仙の歌がとぎれ、続いて、少将の部屋の灯りが消えた。

染村は、ニヤリと笑って立ち上った。

少将は、暗がりの中に、ジッと坐っていた。

炭火だけの灯りではあるが、眼が馴れると、おぼろげに、あたりを見ることができた。

女按摩の芳仙が、グッタリと倒れていた。——いま呑んだ茶に、睡り薬がしこんである。

少将は、ソッと立ち上ると、手早く着物を脱いで、着替えを始めた。

しばらくして、ソッと、座敷から脱け出したときは、女姿で、お高祖頭巾に顔を包んでいた。

「――お火のもと……、お火のもと……、相廻りまアす……」

当番女中の声が聞えて来る。――裾をからげ、鉢巻、襷がけの女中が二人、おのおの薙刀を抱え、片手にぼんぼりを持って、お玉の方の寝所を始め、女中達の部屋々々を廻って歩くのである。

大奥では、お局をめぐる長廊下を廻るのだが、この湯元の宿南島屋では、庭から庭へと廻って行く。

――気儘な湯治とはいえ、こういうことは、大奥と同じように行われていたのである。

女姿の少将は、赤い実をつけて、紅葉もせず、繁りに繁っている青木の蔭に身を潜めて、見廻りの女中をやりすごした。

が……、ふっと首を傾げると、一度立ちかけた腰をまた落して、ジッと暗がりをすかして見た。

見廻りの女中のあとを追うように、忍び寄ってくる二ツの影があったのである。

「――部屋の見当はついているのか？」

低い声でひとりの男がささやいた。

「南はずれは、お玉の方の寝所ということ……。少将の部屋は、その反対側……。北はずれということだ」

「うまく行くかな？」

「風が吹いてくれればよいのだが……。この水気を帯びた硫黄が風に吹かれると、熱をもち、やがて、チロチロと、小さく燃える。それが、混ぜてあるこな炭に移る。そうなればしめたもの、あとは火が大きくなるのを待てばよいわけだ」

「谷底のことゆえ、未明には必ず風が吹くと里びとはいっているが……。硫黄が燃えるほど強いかな」

「ま……、やって見ねばわからぬ。まずく行ってもともと、うまく行けば、少将は焼け死に……、火事で死んだとなれば、京都の方も騒ぎ立てはせぬ」

「こちらも、刀も振り廻さずに済むというわけか。少将もなかなかの腕。喜平太とやらいうやつもてごわい……。斬り合いはやりたくないからな」

男達のひそひそ話は、筒抜けに少将の耳へ入って来る。

やがて、男二人が、忍び足で近づいて来た。

サッと、青木の蔭から少将が飛び出し、長い袖を二度翻した。と……、男二人は声も立てずに倒れてい

た。

女装の少将は、南島屋を抜け出すと、暗い表街道を小走りに急いだ。

――少将は、足首をくじいていた筈である。が、いまの少将には、そんな気ぶりは少しも見えなかった。

街道を二十間ばかり進むと、北側に、苔のついた古い鳥居が、ボンヤリ白く見えている。

その下を潜った少将は、急な石段を登って行った。

石段は、かなり古びて、ところどころ崩れかかっていた。両側が雑木林で、一段一段に、朽ち葉がたまっている。

なんの鳥か、けたたましく一ト声鳴いて羽ばたいた。――少将の足音に、驚いたものであろう。

少将は、凡そ五十段ほど登って立ち止まり、夜空を仰いだ。

ここまで登ると、月を仰ぐことが出来る。遅い二十三夜の月も、ようやく、吉奈の里を囲む山の端を離れようとしていた。

「――月……。月……。月姫……」

うっとりと、ひとりごとをつぶやいた少将が、ハッとわれに返り辺りを見廻した。

が……、深更、この山中、人影はなかった。

少将は、再び石段を登り始めた。――いままでのような、一気に登ろうとする足取りではなく、一段、また一段と、踏みしめるようにして登って行く。

――思いに、ふけっている姿である……。

やがて、石段はつきた。

そこに、二ノ鳥居があり、その向うに、臥竜型に枝をのばした松の一本植を隔てて、神殿が南面して建てられていた。

――伊豆吉奈の湯泉神社である……。

神殿は、月光を浴びて、静まり返っていた。

里人もなりわいに追われて、奉仕をおこたりがちなのか、風雨にさらされた神殿は、きざはしが崩れ、蔀戸が一枚、はずれていた。

少将は、静かに社前に近づくと、しばらく合掌していたが、やがて、臥竜の松を振り返った。

松の傍らに、燈籠が三つならんでいる。

少将は、燈籠を、一つ一つ眺めた。――三つとも、みかげ石の燈籠だった。

「――ない……。ここにもない……」

小声でつぶやいた少将は、また、社前へ引き返した。

そして、ジッと、社を眺めていたが、ふと、軒下に

吊り下げてある鰐口に気づくと、太い麻綱を握って、軽く振った。

——コーン……、と澄んだ美しい音色が夜気を震わせ、長く尾をひいて、谷底の里へ吸われて行く。

少将は、お高祖頭巾の中でニッコリ微笑むと、裾をかき合わせて、賽銭函の上へのり、鰐口へ手をのばした。と——

「——おのれ、なにをしくさるッ！」

突然、しわがれた、薄気味悪い女の声が、うしろから聞えた。

ハッと振返った女装の少将が、ウッ……と、息をとめて、臥竜の松の傍らを見た。

怪しい老婆が、月光を浴びて立っていたのである。おそらく、着ているのは、白衣なのであろう……。それが、薄汚れて、鼠色に見える。裾のあたりは、海草のように、幾条にも裂けていた。

髪は、枯れすすきの穂を思わせた。鋭い眼光、尖った鼻……。そして、首から蓮華型の鏡と、奇妙な数珠をかけている。

なにでつくった数珠か、老婆が上体をそよがせると、カラカラと鳴った。

右手には枯木の杖……、左手に、黒い袋を下げていた。

「——おのれは、誰じゃッ……」

老婆は、一歩前へ出た。——素足に、わら草履をはいているらしい。

「——わたしは、お玉の方さまの……」

少将は、女の声で、賽銭函の上から答えた。

「大奥の女中かえ？」

「はい……」

「いつわり者めッ！」

老婆は、キッと、首を振りあげた。——また、カラカラと、数珠が、気味の悪い音を響かせた。

「大奥の女中が、真夜中に、このようなところで何をしているッ」

「そ……、それは……」

「いえまいッ。答えられまいッ……。深夜、湯泉神社へ忍び寄り、もったいなくも賽銭函を土足にかけ、鰐口を狙う！　おのれは、女中ではないッ」

老婆は、更に一歩、二歩と前に出た。

「名乗れッ。正体を見せッ。わしのいうことを聞かねば、この杖をぶちくらわすぞ。この数珠で打ちのめすぞッ。狼の爪じゃ、鳥の頭蓋骨じゃ。いのししの牙じゃ。この念珠は、山のけものの骨の数珠じゃ。これで叩けば、一生不治の傷がつこうぞッ。名乗れッ」

「まこと、お玉の方さまのお供をして——」

「黙れッ。おのれ、おのれ、まだこのばばの眼をたぶらす気かッ」

老婆は、持っていた杖を投げ捨てると、サッと、右手を黒い袋へ入れた。

と……、次ぎの瞬間、ピューッ、細長い紐が、風を切って飛んで来た。

ハッと、身をかわす少将の頭上を越えて、コーン……、紐が、鰐口に当って音をたてた。

「あ！」

少将は、思わず賽銭函から飛び降りていた。

地上へ落ちた紐が、ウネウネとうごめいている。

——蛇だ！　まッ黒な烏蛇だった。

「さ、いえッ！　まことのことを白状せいッ。せねば、蛇を投げるぞッ、まむし……、烏蛇……、山かがし……。毒蛇を投げるぞッ」

——カーッ！　少将の口から鋭い気合がほとばしり、同時に、手裏剣が飛んだ。

が、老婆はヒラリと左へ飛ぶと——

「おのれッ！　こしゃくなッ……」

右手に、蛇を摑んで振りあげた。まさに人遁の術を心得たすさまじい恰好である。

「——理不尽なッ。わけも聞かずにッ……」

少将は、女の声で、老婆をなじった。

「聞けば、わけをいえるのかッ」

そう叫ぶ老婆は、蛇を握った手を、振り上げたままである。——

枯れ木のような手に頭を摑まれた蛇は、腕に巻きつこうと、細長い体をくねらせていた。

少将も、第二の手裏剣を手の内に握りしめていた。

——相手を倒す気持ちはない。が……、毒蛇のつぶては防がねばならぬ……。

「どうじゃッ。聞けば、はなせるのかッ？」

「そなた、なぜ、わけが知りたいのじゃ？」

「わしは、蛇取りの姥じゃッ」

「その姥どのと、湯泉神社の鰐口と、なんのかかわりがおありかッ」

「たわけ！　たずねているのはわしじゃ。そなたは、返答すればよいのじゃッ」

「そなたに、問いただす道理があれば、答えましょう」

「おのれッ！」

ピューッと、蛇が飛んだ。

少将が、それをかわしたときには、老婆は既に、三ツ目の蛇を振りあげている。

この対立は、石段を駈け上って来た女によって破られた。

「――おばば、どうしたんだッ？」

男のような言葉を使う女は、大平金山の金掘り娘だった。

「おう、津矢か……。この真夜中に、なにしに来やった」

老婆は、少将に眼を向けたままたずねた。

「俺は、姉さまに会った。いや、従姉だ。いまうちに来ている。お袋が、おばばに報らせろというんだ」

「よしよし……。いまこの女を片づけてから、ゆっくり話を聞こうわいの」

「おばばの敵は、俺にも敵だ。おばばのかわりに、片づけてやる」

津矢は猪除けに差して来た山刀を抜き、無造作に前へ出ると、ピターッと構えた。

少将は、思わぬところで、予期せぬ強敵二人に挟まれたわけである。

すると、出し抜けに、湯泉神社の蔀戸が、ガタリッと開いた。

「――えーい、ガヤガヤとやかましい。あたら夢を破られたわ……」

そういってタッと現われたのは、先日、御園の里で少将一行の危難を救った虚無僧であった。――この前と同様、袈裟と法衣、尺八を握り、天蓋をかぶっている。

「よッ！　何者じゃッ？」

蛇取りの姥が叫んだ。

「よく、ひとのことを知りたがるばばどのだなア。ひとのことなど気にせず、とっとと退散せいッ」

そういうのと同時に、虚無僧は、黒い玉をとり出すと、力一ぱい大地に叩きつけた。

チカッ……と火花が飛び散り、雲の如く白い煙が拡がった。

「――さ、いまのうちに……」

虚無僧が少将に叫んでいた。

少将は、石段を駈け降り、コッソリ、南島屋へ戻って来た。

老婆や津矢と呼ばれた娘を怖れたのではない。こう、邪魔者が大勢現われては、鰐口の調べは思い切らねばならぬ。それで、虚無僧からいわれるままに、湯泉神社の境内を逃れたのである。

少将は、ふッと、足を止めて、とっさに、生垣の蔭へしゃがんだ。

雪洞が五ツ六ツ、かたまっている。――薙刀を持った女中達が、倒れている侍二人を起してうしろ手に縛りあげているのである。

少将は、おかしさをこらえ、女中達が男二人を引ッ立てて行くのを待って、自分の部屋へ、影のように滑りこんだ。

女按摩の芳仙は、まだ、炉端で眠り続けていた……。

少将は、素早く、もとの衣服に着替えると、灯りを点けて、芳仙の前に坐った。

「――これ、芳仙……、芳仙……」

少将に、肩を揺ぶられて、芳仙が朦朧と眼を開いた。

――自分が、いまどこにいるのか……前に坐っているのが誰か……。思い迷っているようである。

が、ハッと、体を起そうとしたが、グッタリ手をついてしまった。

「――心持ちが悪いようじゃなア」

「あたくし、どうしたのでございましょう」

「どうもせぬ。茶を呑むと、スーッと顔色が悪うなって倒れたのでいまそなたの名を呼んだのじゃが……、その様子では、療治は無理であろう、下って休むがよい」

「はい……」

芳仙は、こめかみを押えて、しきりに頭を振っている。――何かを思い出そうとしているのだが、まだ、頭の中がはっきりしない様子である。

「ひとりでは戻れまい。部屋まで送らせよう」

「いいえ……、わたくし、御無礼を、働きはいたしませなんだか？」

「何をいう、いま坐って、茶を飲んだだけ。疲れているようだな。ゆっくり休むがよい」

少将は、ポンポンと手をたたいた。

「――御用でございますか？」

しばらくして、喜平太が襖をあけた。

「芳仙を部屋へ連れて行ってくれ、心持が悪く、取乱している。他の女中共に、見られぬようにな……」

少将も、喜平太に抱えられるようにして帰って行く芳仙のうしろを見送って、ニヤリと口許を崩した。

芳仙はあした、――千秋のため、療治をさせずに、すぐ引き取った……と染村に告げることであろう。

少将は、次ぎの間に仕度されている夜具に入ると、すぐ、すやすやと眠りにおちた。

そして、翌朝……。少将は、意外な噂を耳にした。
——湯泉神社の鰐口が、昨夜のうちに、何者かに盗み去られたというのである。

風流無残剣

翌朝、吉奈の里は、重苦しい空気に包まれた。
「——御方さまの宿に、怪しい男が二人忍びこんだそうだ……」
「——湯泉神社の鰐口が盗まれたぞ……」
この二つの噂が、里人の口から口へ、伝えられた。
——お玉の方が滞在中であるため、さわぎ立てることもできず、里人は、額を寄せて、ささやきあっていたのである。
墨染の少将に、この噂を伝えたのは、喜平太であった。
「——鰐口が盗まれたのかッ！」
少将が、愕然として、尋ね返した。
「はい、今朝、里の女が落葉かきに湯泉神社の石段を登って行きますと、女が二人、倒れておりました。蛇取りの姥と呼ばれている老婆と、大平の津矢と申す娘だそうでございます」
もとより少将は、この女達を知っている。が……、初めて聞くような顔でうなずき返した。
「老婆は、昨夜、鰐口を狙う怪しい女を見かけたので、とり押えようとしたところ、突然、奇怪な虚無僧が現われ、不思議な火薬を投げつけられたため、気を失ったそうでございます」
「虚無僧か……」
少将は、喜平太を見た。
「喜平太、御園の里で助勢してくれた虚無僧ではないかな？」
「はい……、わたくしも、そう思いました」
「ところで、蛇取りの姥とやらが申した、鰐口を狙う怪しい女とは、何者であろう？」
「その女は、老婆に、お玉の方さまお供のものと名乗ったそうでございます。事実、女は、御殿女中風の姿であったと、老婆も津矢という女も申しています」
「両名は、その女が、鰐口を奪って行ったと申しているのか？」
「いいえ……。女が奪ったのか、虚無僧が奪ったのか、わからぬと申しております」
そのとき、静かに、木野が入って来た。
「お玉の方さまから、お迎えのお使いがございまし

た」
「御用のおもむきは？」
「昨夜捕えました二人のお取調べがございます。女性ばかり故、もし、およろしければ、お立会い下さいますようとの口上でございました」
「よし……行こう……。木野、肩をかしてくれぬか」
少将は、木野に助けられ、片足をひきずるようにして、部屋を出たが、長い廊下を歩きながら、木野にたずねた。
「三島明神の燈籠のことをおぼえているか？」
「はい……、あの重い燈籠をどうして盗んで行きましたものか、不思議でなりませぬ」
「わしには、誰が盗んだか？　どんな手立てで盗んだか、わかっている……」
そう言って、少将は、クスリッと笑った。
若い武士が二人、庭先きにひきすえられていた。
——二人共、大小をとりあげられて、うしろ手に縛られ、ひとりの前には、小さな紙包が、三つ四つ置いてあった。
お玉の方の姿はなく、縁側に坐って調べているのは、表使いの染村であった。
染村の左右には、十人余り、女中が坐っている。
——御次、御祐筆、御三の間、呉服の間、御広座敷詰など、格は表使いより低いが、いずれも、御目見得以上の高級女中である。
少将の姿を見ると、染村が、ちょっと、席をずらせた。
「——御苦労さまでございます……」
「いや……、退屈していたところじゃ……」
少将は、木野に助けられて、縁側に、あぐらを組んだ。
「調べは進んでいるのか？」
「はア……。この二人は、湯治のため、この吉奈にまいり、お方さま御滞在とは知らず、南島屋の裏口から入ったと申しております……。まア、間違いは、誰にもあること。まことなれば、こと荒立てることもあるまいと存じます」
「つまり、その両名を、放してやるお積りか」
「はい……。お方さまも、お気軽な湯治のことゆえ、なるべくなれば、許してやれと申されております」
「まてまて……」
少将は、顔を、庭の武士に向けた。——ふたりは、神妙にうなだれ、少将の顔を見ようともしない。
「その両名を捕えたのは、誰じゃ？」

「……はい。わたくし共でございます」
武士たちのうしろに控えていた女中二人が顔をあげた。
「そなた達二人で、この男二人を打ちすえたのか？」
「いいえ……、このもの達は、気を失うて、倒れておりました」
すると、染村が、いそいで口を挟んだ——
「御前は、湯泉神社の鰐口が盗まれたことを御存知でございまするか？」
「いま喜平太から聞いたところじゃ」
「鰐口を狙ったのは、怪しい女とのことでございます。その女が、この南島屋にも、入りこんでいたのでございまする」
「ほう……」
「この両名が、何気なく南島屋の裏口から入ります と、怪しい女がおりました。その女のために、脾腹を打たれ、気を失うたと申しております。詮議をせねばならぬのは、その女の方でございましょうなア……」
少将は、胸のうちで笑った。——染村が、男二人を調べるより、放してやるために苦心していることがよくわかったからである。
「はてな……。わしは、その方達の顔に見覚えがある」
少将の言葉に、男二人はハッと顔を背けた。
「おう、そうじゃ。そなた達、本多佐渡守の家来ではないか？」
染村が、いやアな顔をしたが、少将はわざと素知らぬ顔で言葉を続けた——
「先日、江戸鳥越明神の境内に於て、熊取内膳に会うたことがある。
その折り、たしかにそなた達の顔を見たような気がする。六角十字兵衛の門弟であろう？」
「いや、拙者達は、本多家の家中ではありません。また、六角どのとやらの門弟でもありませぬ」
「ほう……。では、何藩じゃ？　それとも、浪人か？」
「主持ちです。が、主人の名は申上げられませぬ」
「では、聞くまい……」
少将は、男二人の前に置いてある紙包みを指さして、女中のひとりに持って来させた。
「——これは、硫黄と粉炭とを混ぜたものじゃな。……それを、やわらかい紙に包んであるようじゃが、何に使用するのじゃ？」
「そ、それは……」

男達は、ちらッと顔を見合せたが、ひとりが、ボソボソと、つぶやくように答えた——
「い、伊豆の山中には、猪が多いと聞きましたので、ま、万一出会いました節には、その紙包みに火をつけて、煙をあげて、お、おどかすつもりで、用意いたしました」
「ほう……、これは、猪追いの道具か？」
「さ、左様で——」
「黙れッ！」
突然、少将の口から飛んだ激しい言葉に、染村まで、ギョッと顔色を変えた。
「知らんと思うかッ。これは、火付けの道具じゃ」
「め、めッそうな……」
「この紙包みを、軒端の隙間などに押しこんでおく。朝露夜露に、硫黄がしめる。その折り、風が吹きつけると、火を発する。火は、粉炭に移り、紙包から軒端に燃え移って、遂には大火となる。これぞ、忍者が用いる火付けの仕掛け。どうじゃ。それでも猪追い道具と申すかッ？」
たたみこんだ少将の言葉に、二人の男は、返答に窮して唇を震わせた。が、少将は、それ以上は問い詰めようとせず、却って、一同をはぐらかすように、ニッコリ微笑んで、染村へ視線を向けた。
「立会いを頼まれたわしが、ちと、出すぎたようじゃな」
「いいえ……。この紙包が、大それた火付け道具とは存じませなんだ。このもの共はどういたしましょう」
「それは、わしが口を出すべきことではない。裁きをつけるのは、そなたの役目じゃ」
そういって、少将は、自分の部屋へ戻ったが、しばらくすると、木野を呼んだ。
「——あの男共は、どうなったかな？」
「お玉の方さまのお迎えの衆がみえるまで、里長おあずけということでございます」
その頃、二人の武士は、里長が山腹へ急造した土牢へ、閉じこめられていた……。
土牢の前には、里の若者が二人ずつ見張りに立たされた。——吉奈の里にとっては、飛んだ迷惑である。
お玉の方の湯治は一ト月ほどの予定である。予定通りとすれば、迎えのものが来るのは、二十四、五日先きになる。
「——火付けの罪人じゃ。取り逃がすと大事じゃぞ。屈強のものが二人ずつ、一日三替りで見張れ。牢から里へ綱を張り、鳴子をつけて、怪しいものが近づけ

ば、それを鳴らして里へ報らせ。よいか、ぬかるでないぞ……」

里長は、厳命した。

「一ノ組は明け六ツから、暮れ六ツまでじゃ。夜は二た組に分ける。二ノ組は、暮れ六ツから真夜中まで。そのあとは三ノ組が明け六ツまで見張れ……」

秋とはいえ、伊豆の夜は冷える。夜は、土牢の前に、あかあかとかがり火が焚かれることになった。

その第一夜の四ツ（十時）過ぎ、お高祖頭巾に顔を包んだお女中がひとり、紫の風呂敷包みを下げて、山路をのぼり、土牢へ近づいて来た。

「――見張りの衆、お役目、御苦労に存じまする……」

お女中は、里の若者二人に、丁寧に頭を下げると、かがり火の下に、風呂敷包を開いた。――徳利と茶碗と重詰がとり出される。

「お玉の方さまよりの下されものでござります。有難く、頂きまするよう」

若者達は顔を見合せた。

「わし等は、牢番でござりますだ。それが、酒などよばれて、よいものでござりますかね」

「他のことと異り、お方さまのお見舞い。頂かねば、かえって失礼でありましょう」

「では、頂きますで……。なんしろ、山の夜はひゃっこくてね。一ぱい頂くと、助かりますだよ」

が……、しばらくすると、酒を呑んだ若者は、二人共、その場に倒れてしまった。

「――さ、この間に早く……」

お高祖頭巾の女は、牢番の腰から鍵をとると、土牢の潜り戸を開いた。

「かたじけない！」

とらわれていた武士二人は、大喜びで土牢から飛び出した。

「里に降りると、ひと眼につきまするぞ」

「承知々々、山裾伝いに逃げよう」

「落付き先きはござりまするか？」

「六角先生のところへ戻る」

「十字兵衛さまは、近くにおいでござりまするか？」

「下田街道、月ケ瀬にある無住の荒れ寺にいられる。二里足らずだ。真夜中過ぎには、戻りつくことが出来よう」

「では、お急ぎなさりませ……」

「世話になった。染村さまによろしく伝えてくれ」

二人は、お高祖頭巾の女中に礼をいうと、山腹を、

駈け降りて行った。

吉奈の里を迂廻して、やっと街道へ出た六角十字兵衛の門弟二人は、ホッ……と、溜息をついた。

「助かったぞ……。あのまま、ひと月ほど土牢暮しと覚悟していたが……」

「お玉の方さま警護役として、迎えに来るのは御家老の熊取内膳さまだ。その熊取さまに引き渡されるのだから、命の心配はなかったが、土牢暮しは楽ではないからのう」

「それにしても、いまいましいのは墨染の少将だ。せっかく染村どのが、うまくわれわれを放してくれようとしたのに、横から口を出して、土牢へ放りこみやがった」

「六角先生の見通しは、間違ってはおらぬな。少将は味方に抱きこめるような男ではない。斬るべし！　断乎斬るべしだ……」

二人は、吉奈川へ沿って道を急いだ。

と……、月ケ瀬の方から、数人の人影が近づいて来た。

「――おッ、先生……」

土牢から出た二人が、駈け寄って行った。

「どうした!?　土牢に入れられていると聞いて助け出しに行くところだったのだ」

そういったのは、六角十字兵衛だった。

「助けられました。染村さま付きの女中が、牢番を眠り酒で倒し、牢を開いてくれました」

「そうか……。わしも、染村どのが、捨ててはおくまいとは思っていたが……」

「先生ッ……。いまも話していたのですが、墨染の少将は、絶対に斬らねばなりませぬぞ」

「もちろんじゃッ……。わしは、御主君佐渡さまや、御家老熊取どののやり口は、手ぬるいと考えているのだ」

と……うしろで、クスリと笑うものがあった。

「ふン、黒太夫だな……」

十字兵衛は、うしろへ顔を向けて、舌打ちをした。

「聞いたか黒太夫、このもの達二人も、少将を斬らねばならぬと申している」

「左様々々……。六角十字兵衛どのが、墨染の少将を狙うのは決して、木野をわがものにしたいためではござらぬ」

黒太夫が、皮肉な調子でいった。

「当り前だッ……が、少将を倒したときには、ついでに、木野も取り戻すかもしれぬぞ」

「先生……」
土牢を出たひとりが、十字兵衛を見あげた。
「少将を討ちとるのは、いまが一番よいときですぞ。少将は、足をくじき、立ちい振るまいも、木野の肩をかりております」
「なる程……。寝こみを襲って、一挙にケリをつけるか……」
「御案内いたします。南島屋の様子は、よくわかっておりますから……」
「よしッ。ここまで来たついでだ、行こう」
と、そのとき、スッと、一同の前に立った女があった。——お高祖頭巾に頭を包んだお女中姿……。
「まず、わたしがお相手いたしましょう」
女が、静かにいった……。
「——そッ、そなたはッ……」
土牢から逃げて来た男が叫んだ。
「染村さま付きの女中ではないかッ」
「そんなことをいった覚えはありませぬ」
「しッ、しからば、なぜ、拙者達を、助けてくれたのだッ」
「ホホホ……」
お高祖頭巾の女は、さもおかしそうに笑った——
「助けたのではありませぬ。お前達の隠れ家を知るために、土牢から、ときはなしただけなのです」
「しゃッ！　おのれッ」
ひとりが、抜き打ちざまに、お高頭巾の女へ一刀を浴びせかけていた。
が……、一瞬、女の袖が翻ったかと思うと、男ののど笛から、ピューッと、血がしぶいていた。
「よッ！　油断すなッ」
叫んだのは、六角十字兵衛だった。
そのときはもう、女は、抜きはなった小太刀を振りかざして、男達の中へ、斬りこんでいた。
「——わッ！　な、なにをしやがるッ」
黒太夫が、大声で喚いていた。——女は、左手で、小柄な黒太夫の襟首をつかみ、それを楯にして、小太刀を上段に構えていたのである。
「——十字兵衛どの！　もはや、黒太夫の助勢は、望めませぬぞ……」
お高祖頭巾の女は、小面憎いほどの落付きで、そういうと、左手に力をいれて、黒太夫を吊りあげた。
黒太夫は、逃れようともがいたが、みっともなく手足をばたつかせただけだった。
「これでは、礫も投げられまい。手裏剣も打てまい。

オホホホ……」
「おのれッ！　何者だッ。名乗れッ」
「たわけたことをッ……。闇討ち、だまし討ちが得手の六角十字兵衛どの。いままでに、名乗りをあげて、勝負を挑んだことが、おありか？」
「ぬかせッ……」
十字兵衛は、左右の味方に呼びかけた。
「ひっくるんで、一ッ気に斬り倒せッ」
次の刹那——
右の敵が喚き、左の男が叫んだ。そして——
——わーッ……、悲鳴をあげたのは黒太夫だった。
女は、黒太夫を突き飛ばすのと同時に、左右の敵を切り倒し、三人目の男の胸もとを刺しつらぬいていたのである。
しかも、女は止まろうとはせず、長い袖が幾度か翻り、その都度、男の断末魔の絶叫がこだましました。
「——退けッ！」
遂に、十字兵衛が叫び、まッ先に走った。
「——七人か……、まアよかろう……」
地上に倒れている死骸をかぞえて、女がつぶやいた——。墨染の少将の声であった……。

女四ツ巴

お玉の方は、墨染の少将を部屋に招くと、人払いをした。
「——ここ一両日の出来事を、どうお考えになります。わたしには、とんとわけがわかりませぬ」
お玉の方は、美しい眉を寄せた。
「昨夜、牢番に眠り酒を飲ませ、捕えた男達の破牢を助けた女があります。ところが、逃げた男を混えた七人の武士が、この里のはずれで斬られていました。また、江戸へ向った熊取内膳が、大平の金山近くで鉄砲を射ちかけられたとも聞きました」
「ほう……、内膳が狙われたのですか」
「怪しい女三人が、金山の古い穴へ逃げこんだということです……。なぜ、このようなことが、つぎつぎに起こるのでしょう」
「おかしなことです。しかし、お方さまを狙うものとは思われませぬ」
「わたしも、狙われるわけがありませぬ」
「或は、わたくしが狙われているのかもしれませぬな」

「なぜ、少将さまを狙うのです？」
「わかりませぬ……。しかし、御園の里で一度、ここへ到着してから明善寺で一度、正体不明の一味に狙われております」
「でも、熊取内膳も狙われています。少将さまには、内膳と共に狙われる理由がおありですか？」
「いや……、内膳とは、行きずりに言葉を交したことが一、二度あるだけ……。共同の敵を持ったおぼえはありませぬな」
「わたしは、湯治を取り止めて、江戸へ戻ろうかと考えております」
「それは、なりませぬッ」
思いがけぬ厳しい声音で、少将はお玉の方の言葉を押えた。
「お方さまは、将軍家の御部屋さまでいらせられます。そのお方さまが、怪しいものどもに怖れをなして江戸へ戻られては、将軍家の御威光にかかわります」
「では、不安におびえながら、湯治を続けねばなりませぬか？」
「御安心なさいませ。いまから韮山へ馬を飛ばし、お方さま警護の人数を至急送るよう、代官所へ命じて参ります」

少将は部屋へ帰ると、喜平太に馬の用意をさせた。
「御前、わたくしは、お供して参るのでございましょうな？」
「いや、そちは、お玉の方警護役として残れ」
「では、おひとりで韮山までお行きになるのですか？」
「木野を連れて行く。――木野、用意せいッ」
しばらくして、吉奈の里を二頭の馬が飛び出して行った。――少将と木野である。木野は、男のように野袴をはき、鉢巻きをしていた……。
その頃、修善寺の湯の宿に泊っている熊取内膳を六角十字兵衛と傀儡師の黒太夫が訪ねていた。
「――なんのざまだ……」
熊取内膳は、十字兵衛と黒太夫を、苦が苦がしげに眺めた。
「だからわしらは、よせと言ったのだ。少将は、そうやすやすと討てる相手ではない」
「いや、少将ではない。奇妙な女にやられたのです」
「女!? また出たか？」
内膳は舌打ちをした。
「十字兵衛……。神卜仙女真弓と、深雪、あの二人を江戸で討ち漏らしたのは、貴公の手落ちだぞ。あの女

め等、わしにも、鉄砲を撃ちかけおった」
「いや……。昨夜門弟達を斬ったのは、真弓でも深雪でもありませぬぞ」
「ふーむ……。では、男の金掘り人夫のような恰好をした女か？」
「いやいや、奥女中風。お高祖頭巾で顔を隠しておりました。この女が、思いの外のつかい手でしてね」
十字兵衛は、黒太夫を見て、ふンと、鼻で笑った。
「おや、気にいりませんな、六角さん……。なるほどわたしは、あの女に、猫のように首ッ玉を吊りあげられましたよ。が……、大の男が十人近くもいて、たったひとりの女をもて余したとは、お前さまがたも、余り褒めた恰好ではありませぬよ」
「それはだな、あの女がお前を楯にとったから、手を焼いたのだ」
「へへへ、あの女は、この黒太夫を一番こわがっていたのですわい。よいことをいいましたぞ。――十字兵衛どの、もう、黒太夫の助勢は望めませぬぞ……とな。それから、こうもいいましたわい。――これでは、礫も投げられまい、手裏剣も打てまい……。あの女、六角さんの剣より、わしの礫の方を用心していたのですわい……」
「黒太夫……、もうやめい……」
内膳が、手を振って、ベラベラと喋りまくる黒太夫の言葉を押えた。が……、その内膳が、ふッと、顔をあげた。
「黒太夫、その女、――礫は投げられまい。手裏剣は打てまい……といったか？」
「はいはい、確かに、そう申しましたわい」
「そちが、礫、手裏剣を投げることを知っている女は？」
「あ……」
黒太夫が、愕然として、内膳を見詰めた。
「ひとり……。それを知っているのは、たったひとりですぞ」
「それは、何者だ？」
「木野ですわい」
とたんに、十字兵衛が喚くようにいった――
「たわけッ！　木野は、味方だッ」
と、そのとき、内膳の配下があわただしく駈けこんで来た――
「――熊取さまッ！　ただいま墨染の少将と女がひとり、早馬で修善寺を駈け抜けて行きましたぞッ」
「――糞ッ、こんどこそッ……」

六角十字兵衛が、スックと立ち上がった。
「よせッ。いまからでは間にあうまい」
「こちらも、馬をとばし、間道を抜けましょう。——女というのは、木野に違いない。これを見逃がすことはできませんぞ」
「十字兵衛……。公私を混同してはいかんな」
熊取内膳が、眉を寄せた。
「御主君佐渡さまの目的は天下のためだ。そなたは、たかが女ひとりの色香にあせっている」
「天下を狙うも、女を狙うも、所詮は欲の現われ。…権力欲といい、色欲といい、わたしには大して違うものには思われぬのですよ。では、後ほど……。馬を借りますぞッ」
十字兵衛は、廊下を踏み鳴らして飛び出して行った。
「まずいな……。あの男、大事をあやまるもとにならねばよいが……」
「へへへ……。御家老、わたくしが、お目付け役を引きうけましょうかな」
黒太夫が、黄色い歯をむき出して、ニヤリと笑った。
「そちが、十字兵衛を見張るというのか？」
「万一……。万が一ッにですぞ。六角さんがお味方にとって好ましくないことをなさると見た折りには、思い切って、やってもようございますかな？」
「そちに、十字兵衛が討てるか？」
「正面からは、討てませぬな……。が、闇夜というものがございますよ、闇夜というものが……」
その頃、少将と木野は馬を急がせ、狩野川沿いに、大仁の里へ近づいていた。
「——あ、もし……」
行くてに、賃馬の背にのび上がって、手をあげた女があった。——伊豆屋の後家お石である。
馬子に手綱をとらせたお石は、うしろに、供の男を三人連れている。——手代らしい若い男と、出入りの仕事師らしい男が二人……。
伊豆屋の絆纏を着た仕事師二人は、差担いに、白木の小箱をかついでいた。
「——おう……、伊豆屋のお内儀か……」
少将と木野は、馬をとめた。
「なにごとでございます？　見れば、木野はまた、若衆のような勇ましい姿ではありませぬか……。御前、江戸へ、お戻りでございますか？」
「いやいや、韮山まで行くのじゃ。お玉の方さまの警

護の人数を代官に頼みにな」
「まア……、それで安心いたしました。遙々と、江戸から御機嫌伺いに参りましたのに、ここで御前とすれ違いではつまりませぬ」
「わしは、すぐ引返すが、今宵は古奈か大仁泊り。吉奈へ戻るのは明日になろう」
「では、もうひと足のばして、修善寺泊りになさりませ。指月ケ丘の麓の仲屋はわたしの定宿。お部屋をとっておきまする……。木野、必ず御前をお連れして来るのですよ……」
少将と木野に別れた伊豆屋のお石は、それから十四、五丁のところで、門弟四、五人と共に馬を急がせる六角十字兵衛に会った。
「よッ！　伊豆屋かッ……。途中、少将を見かけなんだか？」
「はい……。少将さまと木野に会いました」
「やっぱり、木野かッ……。どこへ行くといっていた？」
「韮山へ……」
「——韮山!?」
「官官所へ、人数を借りに行くとのことでした」
「よしッ……。韮山なら、蛭ケ小島越しに、先き廻りが出来る」
「ま……、少将を追うのなれば、なにも、韮山まで行くことはありませぬ。今宵は、韮山から引返して、修善寺泊りですよ」
「なに、少将と木野が。修善寺に泊るのか？」
「はい……。指月ケ丘の下の仲屋へ……」
「ふーム……。なる程。それなれば、わざわざ汗をかいて、韮山までは行くことはないな」
十字兵衛は、馬を廻して、お石とくつわを並べた。
「伊豆屋……御家老も修善寺に泊っているぞ。独鈷の湯に近い伊豆の庄という湯宿じゃ」
「伊豆の庄は存じています。仲屋の近くでしたな…」
お石一行と十字兵衛一党は、ひとつになって修善寺へ向った。
と……、道ばたの道祖神の蔭から、ムックリ顔を持ちあげたのは、一昨夜、吉奈の湯泉神社に現われた蛇取りの姥であった。
「——はーい……」
老婆は、口をすぼめて、奇妙な声をあげた。
すると、どこからともなく、男のような姿の大平金山の娘津矢が駆け寄ってくる。

「――おばば……、何か用か？」
「真弓どのと深雪どのに急のしらせじゃ。本多家の家老熊取内膳は、修善寺の伊豆の庄に泊っている」
「心得た！」
「待て……。まだある。伊豆屋の女主人お石という女は、今宵、これも修善寺の仲屋へ泊るそうな。その宿には、おっつけ少将とやらも韮山から泊りに来る、わかったか。早よう行け」
「合点だ……」
津矢は、山猫のようなすばしこさで、忽ち姿をかくしてしまった。
それから、一ッ刻ほどして、少将と木野は、韮山代官所の前で馬を降りた。
――韮山代官は、代々、伊豆の名家江川家の世襲であり、太郎左衛門を名乗っている……。
丁重に、客間へ通された少将が、ふっと何気なく中庭へ視線を向けたとたん、思わずハッと眼を見張った。
飛び石伝いに近づいて来る女は大目付千々輪の後室お浅であった。
「――まア、御前……」
お浅の方でも驚いたようである。
「これは、思いがけぬところで会うたものじゃな」
「二三日中には、吉奈へ参ろうと思っておりましたが、ここで御前にお会いしようとは……」
「今日は、思いがけないひとによく会う日じゃ。先刻は、伊豆屋の内儀に会うたぞ」
「あれ、お石どのも!?」
「うム、今夜は、修善寺の仲屋とか申す湯宿に泊るとか。わしも誘われた」
そのとき、代官江川太郎左衛門が廊下に姿を現わしたので、お浅は、会釈をして、庭の方へ向って行った。
「あの女を、御存知でございましたか？」
挨拶のあとで、太郎左衛門がたずねた。
「江戸の大奥で知りおうたのじゃ。死んだ夫は、大目付であったとか……」
「はい。なかなか鋭い男でございました。死にました千々輪のためにお取潰しとなった大名、旗本も、かなりな数にのぼっております」
「お取潰しと言えば、この伊豆の金山を発掘いたした大久保石見守も断絶したのであったな」
「十年になります。石見守どのは、わたくしもよく存じておりますが、なかなかの人物でございました。が……、俗に申す、叩けばほこりの出るものでございまして。

「それも、お浅の夫千々輪が取調べたのか？」
「はい……。しかし、お取調べのもとになった数々の証拠は、本多佐渡守さまが早くより取揃えておいでになったとか……。いや、これはつまらぬことをお耳に入れました。して、本日の御用向きは？」
少将は、ひとごとのように、ここ二三日の吉奈での出来事をはなし、お玉の方警護の人数を出してほしいと頼んだ。
「承知致しました。早速手配をいたします」
太郎左衛門がそういったとき、旅仕度をととのえたお浅が、廊下へ手をついた。
「お話中失礼と存じましたが、御前さまにもお親しくして頂いておりますので、無礼をかえりみず御挨拶にあがりました……」
お浅は、そういってから太郎左衛門へ視線を向けた。
「色々とお世話になりましたが、ただいまより、立たせて頂きます」
「ほう、お調べものは、終りましたか？」
「はい、お蔭さまで……」
お浅は、少将にも挨拶をして立っていった。
「変った女でございますな。昨日突然訪ねて参りましたが、書庫に閉じこもり、伊豆の山神図絵を調べておりました」
「――山神図絵!?」
「はい……。伊豆各地の神社一ツ一ツを、詳しく絵図にしたものでございます」
それを聞くと、少将の眼が、キラッと光った。――が太郎左衛門は、気が付かなかったようである。
韮山の代官所を出た少将は、再び木野を従えて、帰途についた。
「――御前、さきほど、千々輪のお浅さまが……」
「木野は、お浅に会たうのか？」
「はい、馬に水をこうておりますと、お浅さまが出ておいでになり、大仁の鹿の湯にお部屋をとって、お待ちすると申されました」
「ハハハ……、これは困った。伊豆屋の後家は、修善寺へ来いといい、千々輪の後家は、大仁で待つという。木野、どちらへ行けばよいかのう」
すると、木野が、ためらいもせず、すぐ答えた――
「大仁になさればよろしゅうございましょう」
「ほう……。伊豆屋のお石には待ちぼうけを喰わせてもよいのか？　お石は、木野のもとの主人ではない

か」

「でも……、伊豆屋さんの御接待を受ければ、御前さまは、幾度もうがいをせねばなりませぬ」

少将の顔が、キッと、ひきしまった。——木野は、目白の菊屋敷でのことを言っているのである。

伊豆屋の寮菊屋敷へ泊ったとき、少将は、朝食に手をつけなかった。さすがに、お石がすすめるお茶まではことわり切れなかったが、すぐ菊畑に出てわき水で口をゆすいだ。

そのときのことを、木野は、まだ、おぼえていたのである。

少将は、色仕掛けで、木野の口をふさごうとした。が、木野は笑って受けつけなかった。

ところが、カン違いをしたお石は、逆に色仕掛けで少将をたらしこもうと、木野を少将の腰元に贈った。贈られれば贈られるで、木野は、黙々と少将のところに来ている。

——全く、奇妙な女だ……。

この女は、何を考えているのであろう……。

さすがの少将にも、木野の考えだけはわからない……。

——しかし、危険だ！　場合によっては、可哀そうだが、斬らねばならぬかもしれぬ……。

——いや、斬るには、この伊豆の山中が一番よい……。それも、いまだ！　辺りにひと影は見えない……。

少将は、馬上で、大きく息を吸いこんだ。

と……、そのとき、少将の考えを叩きつぶすように、奇妙な女が、ヒョッコリ、少将の馬前に飛び出した。

「——おい、お前、墨染の少将か？」

女は、大平金山の女人夫津矢である。——少将は、吉奈の湯泉神社の境内で、蛇取りの姥に話しかけた津矢を一度見ている。

「そうじゃ。わしが少将高平じゃ」

「おれのあねさまからのことづけじゃ。今夜、修善寺に泊るのはやめにせい。六角十字兵衛と言うやつが待ち伏せしているぞ……」

それだけ喋ると、津矢はパッと身をひるがえした。とんぼ返りで段々と少将の前から遠ざかって行く。

変化の術の一種である——と見ていると、果してしなやかな回転をみせていた女体は、一本の松の木のところでかき消えてしまった。

「木野、あの女の姿がわかるか」

少将はきいた。

「はい。回転変化の術とみました。甲賀の一派でございましょう」

「いったん、木の枝に飛び上り、枝づたいに、向うへ消えて行く……木野も甲賀だな」

「いいえ、わたしは香月先生の……」

「かくさずともよい。ただわしの身辺の女群は、殆どみな術を心得ておる。それもみな甲賀の一派だが……何のためにそれを体得したか……」

言いながら、少将はふと寂しそうな笑いを浮べた。

焔の女

秋の日は、つるべ落しに西へ傾いて、下田街道は早や雀色の暮色に包まれていた。

遙か北の方に聳える富士の嶺は夕日に染められて赤赤と輝き、南には天城、真城の群峰が紫色にかすんでいる。

もうすぐ、大仁の里であろう……。

「——今夜は、大仁泊りとしよう……」

少将が、馬上でつぶやいた。

「そうなさりませ……」

「いや、木野……。わしは、伊豆屋の内儀をきろうて修善寺を避けるのではない。大仁には、金山明神があるからじゃ」

「金山明神と申しますと？」

「大仁金山は、伊豆の金山中でも一番古い歴史を持っている。大久保石見守が、金山奉行となって、最初に手をつけたのも、大仁の金山じゃ。ここから掘り出した金が慶長小判の地金となった」

「そのことと、金山明神と、どんなかかわりがございますか？」

「三島神社では、金の燈籠が一夜にして消え去り、吉奈の湯泉神社では鰐口がなくなった。大仁の金山明神でも、なにかなくなるかもしれぬ……。わしは、それが知りたいのじゃ」

そこで、ちょっと口をつぐんだ少将は、ニッコリ笑うと、すぐ言葉を続けた——

「三島神社の燈籠は、絵文字によって、明らかに石見守の寄進とわかった。湯泉神社の鰐口も、恐らくは石見守の寄進であろう。なぜ、石見守の奉納のものが狙われるのであろう？」

「わたくしには、わかりませぬ？」

話しているうちに、大仁の里に入った。

と……、宿の下男らしい男に提灯を持たせたお浅が、馬の前へ現われた。
「御前、お待ちいたしておりました」
「ほう……、わざわざ、出迎えてくれたのか」
「はい、大仁を素通りされて、修善寺へ行っておしまいになるかもしれませぬもの」
「木野……」
少将は、木野を振返った。
「気の毒じゃが、ひと走り、修善寺まで行って来てはくれぬか」
「伊豆屋さまのお宿へでございますか？」
「うム……。わしが、千々輪の後室から、無理矢理大仁にひきとめられた……と伝えて来てほしい」
「心得ました……」
木野は、駒にひと鞭あてて、大仁の里を駈け抜けて行った。
「お浅どの……、ちょっと、肩を貸してくれぬか……」
少将は、お浅の肩につかまって、不自由そうに、馬から降りた。
「御前、どうなさりました？」
「うム……。足をくじいたのじゃ。二三日になるが、まだひとり歩きは出来ぬ」
「まア……。では、しっかりおつかまりなされませ……」
お浅は、嬉しそうに、少将に寄り添って歩いた。
大仁の湯宿、鹿の湯に入ると、お浅はすぐ少将を岩風呂へ案内して行った。
「――さ、御前さま、わたしがお背を流しましょう」
「いや……わしは湯には入らぬ。足首をあためるだけじゃ」
「あれ、なぜでございますか？」
「体があたたまると、血の動きが激しゅうなり、ズキズキと、足首が痛むからじゃよ」
「まア……折角、お世話をさせて頂こうと思っておりましたのに……」
「いやいや、たとえ湯に入れたとしても、大目付の御後室に、背中を流して貰うわけにも行くまい」
少将は、湯壺のふちの岩に腰をおろすと、裾をまくって、足を湯に入れた。
辺りはすっかり夜のとばりに包まれ、湯けむりが、霧のように白く棚引いている。
と…、うしろで、サヤサヤと衣ずれの音が聞えた。
次ぎの瞬間、湯けむりの中を、裸身のお浅が、静かに湯壺に身を沈めた。

-Hamano-

「――御前、おみ足をおもみいたしましょう」
お浅は湯の中を少将に近づくとやわらかに、少将の足を揉みはじめた。
ゆたかな胸が、夜眼にもふくよかに、湯の中でゆれている。――ツンと上を向いた乳房は、娘のように若若しい……。
その頃、木野は、暗い下田街道に、駒を急がせていた。
狩野川の支流桂川に沿って、凡そ二十町ほど行くと、修善寺の里である。
山峡に、チラホラと、湯の里の灯りが見えて来た。
――あとひと走り……。
木野は、鞭を入れようとして、ふっと手を止め、逆に、手綱を引きしめた。――前方十間ほどのところに、数人の男が並んで道をふさいでいたからである。
「――お通し下さりませッ……」
木野が、馬上から叫んだ。と――
「――木野だな……」
ひとりの男がつぶやいた。――六角十字兵衛である。
「少将はどうした？」
「あなた達は、御前さまを、待ち伏せておいでだった

のですね」
「無駄口をきくなッ。少将はどうした？」
「あなたは、六角十字兵衛どのでしょう」
「よッ！　知られたかッ」
「或るひとが、報らせてくれました。修善寺には六角十字兵衛というやつが待ち伏せている……と」
「糞ッ！　それで、少将は逃げたかッ」
「ホホホ……、逃げ隠れなさるような墨染の少将さまであるかないか、よく御存知ではありませぬか」
「おのれッ！　木野をとり押えろッ！」
六角十字兵衛が、喚き立てた。
「――わーッ！」
十字兵衛の門弟達が、大声をあげて、駈け寄って来た。
が、これは失敗だった。木野は、そんな甘い相手ではない。
「えーいッ！」
馬上で叫んだひと声と同時に、先頭の男は、わッと、両手で顔をおさえて、のけぞっていた。
応変夢幻剣……。香月紋之助直伝の腕の冴えを、木野は、握りしめた鞭に見せていたのである。
しかも、次ぎの瞬間……。
十字兵衛の門弟二人は、馬蹄にかけられて、呻めき声と共に、ひっくり返っていた。
一瞬にして、三人が倒されたのである。
「木野ッ！　なかなか味をやるなッ……」
十字兵衛が、歯をむきだして、刀を構えた。
と……、この時、木野の馬が、出し抜けに棒立ちになった。
「あ！」
木野は、悲鳴をあげて、振り落された。
「へへへ……、六角さん……」
黒太夫が、暗がりの中から、十字兵衛に呼びかけた。
「礼をいって貰おうかね。手裏剣をいっちょ、馬の脚へ打ちこんでやったのさ」
「いらぬ手出しをするなッ」
「そうでもあるまい。わしが助けなきゃ、いま頃お前さんは、馬に蹴られて、血ヘドを吐いている」
「けッ！　見損なうなッ」
「まアいいや……。それより、早く木野を押えちゃどうだね」
「よしッ！　話はいずれつけるッ」
十字兵衛は、倒れている木野へ近づくと、抱え起そうとした。とたんに――
「――えーいッ！」
木野は飛び起きざまに、地ずりの一刀を十字兵衛の足許へ浴びせていた。
「とーッ！」
さすがは十字兵衛、危く飛びさがると、ピタリと大刀を構えた。
「ウヘヘヘ……」
黒太夫が、さもおかしそうに笑った。
「斬っちゃいなさい、六角さん。その女、とてもお前さんのおもちゃにゃならない。なアに、木野ばかりが女じゃないよ」
「うるさい！　黙っていろッ……」
十字兵衛は、刀を左手だけで構えると、右手の指さきをペロリとなめた。
「木野……、俺は、お前に惚れているのだ。だから、命はとらぬ。が……、腕一本、脚一本、叩ッ切るかもしれぬぞ。つまりだ。片輪にしても、お前を俺のものにするのだッ。ふン、少将などに、やるものかッ……」
十字兵衛は、ジリリッと、小きざみに、木野へ迫って行った。
と、この時……。西の空が、パッと明るくなった。
――修善寺の里で、火の手があがったのである。
「――やッ、火事だぞッ……」
叫んだのは、黒太夫だった。
ツツツッと、黒太夫は、傍らの松の大木へよじのぼると、また叫んだ――
「おーい、六角さん！　火事は、伊豆の庄らしいぞッ」
「ほっとけッ！　ひとの火事より、こちらは斬るか斬られるかだッ」
「おい、六角さん！　伊豆の庄には、御家老さまがおとまりだぜッ」
「おッ！」
十字兵衛が、スッ……と、あとへ退った。
「黒太夫、火事はどこだ？」
刀を構えたまま、十字兵衛がたずねた。
「けッ！　聞えなかったのかい……。修善寺の庄、御家老熊取さまのお宿らしい」
「えーい、間の悪いときに……」
そのうちに、この辺りまで騒がしくなって来た。
――こんなところに人家があったのかと思うようなところから、ドヤドヤと人が駈け出してくる気配がして来たのである。

こうなっては、もはや斬り合いなどはしていられない。

「――木野ッ、残念ながら、今夜は諦めるぞッ」

十字兵衛は、サッと、刀を引くと、ダーッと、修善寺の方へ走り出していた。

「――おッと、勝手な男だ……」

ズルズルズルと、松の木から降りた黒太夫が、そのあとを追って行く……。

ところで、修善寺の火事は、黒太夫が考えたように、湯宿伊豆の庄であった。

それも、瞬時にして、建物のすべてが、凄まじい焔に包まれていたのである。

その焔の中を、黒頭巾、黒装束に身を包んだ小柄な影が四ツ、まるで蝙蝠のように飛び廻っていた。

この四人に追いまわされ、髪を逆立て、眼をはち切れんばかりに見開いて、刀を振りまわしているのは、熊取内膳だった。

幾人かの配下が、黒い影を防ごうとしたが、忽ち斬り倒され、焔の中に姿を消して行く。

やがて、熊取内膳は、伊豆の庄の庭のはずれ、桂川の岸へ追い詰められてしまった。

「――お覚悟ッ！」

一ッの影が前へ出た。

「もと金山奉行大久保石見守の遺臣、奥家老田沢頼母の娘真弓ッ」

「よッ！　うぬはッ、神卜仙女かッ」

すると、あとの影三ツが、次ぎ次ぎに名乗りをあげた――

「同じく大久保石見守さま奥方付き中老浅路が妹深雪ッ」

「おれは、真弓姉さまの従妹の田沢津矢だッ」

「わしは、蛇取りの姥……。もと大久保家老女初瀬……。御主君さま方の御無念、本多佐渡も斬るッ。伊豆屋のお石も斬るッ。が、まず、血祭りは、そなたじゃッ。それッ」

「心得ましたッ」

四ツの影がキッと、身構えた。

「――ま、待ってくれッ！」

熊取内膳は、刀を放り出し、両手を突き出して、泳ぐように振り廻した。

「わ、わしは、い、石見守どのに、恨みも、つらみもないのだッ。す、全て、主人佐渡さまの命により、は、働いたまでのことじゃッ。恨むなら、佐渡さまを恨めッ」

「媚びへつらうばかりが、臣下の道ではない筈ッ」

真弓が叫び返した。

「主人に過失あれば、一命を賭して諫めることこそ、人の臣たるものの務めではないかッ。それを、よくも、石見守さまに、抜け荷買い、切支丹信徒、黄金私蔵など、ありもせぬ罪をかぶせなされたなッ」

「わ、わしがかぶせたのではない。い、伊豆屋のお石ッ……。当時、大久保家奥向きに勤めていたお石が、そ、そのような証拠の品々を取揃えて差し出したのじゃッ」

「それが、まことの証拠でありましたかッ」

「そ……、それは……」

内膳は、言葉に窮した。

メリメリッと、凄じい響きと共に、伊豆の庄の棟木が焼け落ち、火の粉が、金粉のように、夜空へ舞いあがった。

「――おのれ、極悪人めッ！」

蛇取りの姥が、枯木のような腕を、グイッと、内膳の方へ差し出した。

「お石とグルになり、ありもせぬ証拠をつくりあげたのじゃッ。この上の問答無用ッ。斬れッ」

「おうッ！」

真弓、深雪、津矢の三人が、三方から、ジリジリッと、内膳に迫った。

途端に、――わッ……と、内膳が右手で左腕を押えた。指の向うから、タラリッと、血が流れている。

「うーッ……」

苦しげによろめいた内膳の姿がグラリッと傾いた。

そのまま、ドサーッと、庭はずれの高い崖から、桂川の流れの中へ転落して行く。

「やッ！　何者かが、内膳へ手裏剣を討ったぞッ」

真弓が叫んだ。

「追えッ！　追うて、内膳へ止めを刺すのじゃッ」

そう叫んだのは、蛇取りの姥である。

「よしッ！　姉さま達は、内膳を追えッ。俺は仲屋へ乗り込んで、お石と言う女を斬ってくる……」

津矢は、そう言い残すと、ダッと、火事場をくぐり抜け、指月ヶ丘をめざして、駈け登って行った。

仲屋は、伊豆の庄の大火に、大戸を開いて類焼を防ぐための用意をしていた。

そこへ、黒装束の津矢が飛びこんで行った。

「――お石ッ！　伊豆屋のお石はどこだッ」

と……津矢の前に、スッと立ったのは、男袴、鉢巻き姿も勇ましい木野であった。

「――なんだ、お前か……」
津矢が叫んだ。――津矢は木野を知っている。真弓のことづけを墨染の少将へ告げに行ったとき馬上の木野を見ているからだ。
が……、木野には、この黒装束が何者なのかわからない。
「――どけよ……」
津矢が、一歩前へ出た。
「俺は、伊豆屋のお石に用があるのだ」
「お石さまは、おいでではありませぬッ」
「嘘だッ。ここに泊っていることは、ちゃーんと知っているぞッ」
「先きほどまでは、おいでした。が……、いまは――」
「逃がしたなッ」
津矢は、ピタリと、刀を構えた。
「お前が、相手だッ」
木野は、静かに黒装束の津矢を見返した。手をダラリと下げ、足は、左右にいくらか踏み開いている。
忍法から編み出した応変夢幻剣の構えである。無念無想。ただ相手の変化に応じ、一瞬にして、必殺の剣を放つ……。香月紋之助直伝の極意である。

……が、伊豆の山中に育ち、蛇取りの姥や母から剣法を仕込まれた津矢は、野獣にも似たカンの鋭さを持っていた。
「よッ！　出来るなッ」
津矢は、前へ進まず、反対にサッと、うしろへ飛んだ。
一瞬、木野は一間余りを飛んで、津矢の頭上へ、一刀を浴びせかけていた。
カチーン……と、津矢は、木野の刀をはね返していた。
このときまで、呆ッ気にとられていた仲屋の者たちが、はッと我に返って騒ぎ始めた。
「やっつけろッ！」
「叩きのめせッ！」
手に手に、消火用のトビロや火叩きを振りあげて、津矢をとり囲もうとした。
「――けッ！　出直しだッ。お石に、必ず命を貰うといっておけッ」
津矢は、激しい言葉を木野へ叩きつけると、サッと身を翻し、刀を突き出して、ダーッと、走り出した。
わッ……と、宿の者たちが左右に飛びのく……。その中を走り抜けた津矢は、忽ち闇の中へ姿を消してしまった。

その頃、桂川下流の雑木の間に、熊取内膳と黒太夫が息を殺していた。
十四五間離れた河原に、黒装束三人が立って相談している。――
内膳の姿を求める真弓と深雪と蛇取りの姥だ。
が……、遂に諦めたのか、三人は河原から立ち去っていた。
「――へへへ、もう大丈夫ですよ」
黒太夫が、低い声で言った。
「うム……。が、黒太夫、わしの腕に手裏剣を打つとは、ひどいやつだ」
「それで、川へ落ちたればこそ、御家老は命拾いをなされた。よく覚えといて下さいよ」
そう言って、黒太夫がニヤリと笑った。

金山明神

ホンノリと頬を染めたお浅は、盃を手にしたまま、体をくの字に曲げて、少将を見上げた。
「――御前、吉奈の湯は、いかがでござります」
「うム……、静かな美しい里じゃ、が……、ちと、退屈じゃな」
「でも……美しいおなご達が大勢おります。お退屈など、させる筈がございませぬ」
「ところが、わしはおなご相手の遊びを知らぬ。こんな不粋な男は、誰も相手にしてくれぬわ」
「ま……。本当でございますか？」
「本当か嘘か、そなた自身の胸に問うてみい。わしのような退屈な男を無理に誘うて、そなたもいまは、後悔していよう」
「あれ、後悔などと……。わたくしは、今宵ほど楽しいことはありませぬ」
「ほう……。話しべた……。殊に、おなごが喜びそうなことを言えぬわしと向かいおうていては、さぞ気詰まりなことと思うていたが……」
「いいえ……、わたくしは、何もはなさずとも、こうしてジッとしているだけで、心から嬉しゅうございます……」
少将は、苦が笑いをして、銚子をとりあげた。
「そう喜ばれては、酌などせずばなるまい」
「あれ、もったいない……」
お浅は、ソッと、少将の手を握った。
「お銚子を頂きます。お酌は、わたくしの役目……。

さ、御前、お盃をあけて下さりませ」
そう言いながら、お浅は、握った少将の手を離そうとせず、熱にうかされたような眼もとで、ジッと少将を見詰めた。
「御前、今宵は、酔うても大事ござりませぬか？」
「酒は、酔うために飲むのじゃ」
「酔うたら、介抱して下さいますか？」
「うム……。女中なと呼んで、寝床へはこばせよう」
「まア……、憎いお口……」
お浅は、しんなりと、少将へしなだれかかろうとした。
と……、突然、表の方が騒がしくなった。
「――火事だ！　修善寺が大火事だぞッ」
「――あれあれ空が真ッ赤だ！」
「――火消しの手伝いに行けッ、山へ火が移ると大事だぞッ」
少将は、ハッと顔をあげると、お浅を押しのけ、片足をひきずりながら、縁側へ急いだ。
「――おう！　燃える燃える。お浅どの、馬の用意を申しつけて頂きたい」
「ま！　修善寺へ、おでかけでござりますか？　それほど、お石どのが、心配でござりまするか？」
「いや、伊豆屋の後家どのだけではない。修善寺には、熊取内膳もいる」
「え!?　熊取どのが？」
「それに、木野も行っている、さ、馬じゃ！　馬じゃッ……」
少将は、お浅をせき立てた……。
大仁の里から、狩野川沿いの街道を、大勢の里人が、修善寺の方へ走って行った。
そのひと波を追い越して、墨染の少将を乗せた駒が、矢のように走って行く。
南の空は、くすんだ橙色になっていた。――どうやら火事は、下火になって来たようである。
ひとわたり、ひとの群が過ぎ去ると、街道はまた静かになった。
と……、大仁の里の方から、女の影が一ッ出て来た。お浅である。
お浅は、修善寺の火をちらっと眺めると、街道を横切り、河原へ降りて行った。
狩野川の流れはかなり早い……。が、それほど深い川ではない。
お浅は裾をからげると、片手に草履を持って、流れへ入って行った。

ぶるッ……と、肩を震わせる……。秋も末である。水は、冷たかった。
対岸には、岩山が聳え立っている。――伊豆大仁の金山城址である。
南北朝の昔、畠山入道が鎌倉左馬守の軍勢三万余騎を迎え撃って遂に戦い破れたのが、この金山城である。
岩山の上の城址は、六十坪余りの平らな土地で、空濠をめぐらし、小さな神社が建立されている。金山明神だ。
お浅は、狩野川を渡ると、足を拭いてから岩山を登り始めた。
「――待たれい……」
うしろから聞えた声に、お浅は、ギョッと振返った。
暗い山道だが、ヌッと立っている天蓋姿の虚無僧の影が眺められた。
「――もと大目付、千々輪どのの御後室……。お浅どのでしたな」
虚無僧は、含み声で、静かに話しかけた。
「多分……、今夜のうちに、ここへおいでであろうと、夕刻からお待ちしておりました」
「わたしを御存知のあなたは？」
「ハハハ……、わしはあなたを知っている。が……、あなたは、わしを御存知ではない。名乗っても無駄でしょう」
「では……、御用は？」
ククッと、天蓋の中で含み笑いをする虚無僧の姿に、お浅は、思わず二、三歩、山道を駈け登った。
「お逃げになる必要はない。わしは、あなたに危害を加えるために待っていたのではない。実は、頂きたいものがあるのだ」
「わたしは、何も持っていませぬ」
「いやいや……。そのふところの中に持っておいでだ。伊豆の山神図絵」
「げッ！」
お浅は、キッと身構えた。
「さ、左様なものは――」
「駄目だ。わしは、知っておりますぞ。あなたは、韮山の代官屋敷の書庫から、山神図絵を盗まれた。それが、頂きたい」
虚無僧は、ゆっくり、一歩お浅に近づいた。
お浅は、夢中で、山道を走り続けた。
そのあとを、虚無僧が、身軽にピョイピョイと岩か

どを飛び越えて、追いかけて行く。
虚無僧は、決して急がなかった。——この岩山には、いま踏んでいる山道の外には、逃げ道のないことを、よく知っているのである。
「——あ——！」
金山明神の前へ出たお浅は、思わず絶望の声をあげた。
三方は、切りそいだ岩壁に囲まれている。とても登ることは出来そうにない。
残る一方は、狩野川を見降す断崖。そこに刻まれただ一本の道は、怪しい虚無僧が登って来る。
「——考えがきまりましたかな……」
虚無僧が、ゆっくり近づいて来た。
「な、なぜ、山神図絵がほしいのですッ？」
「多分、あほたと同じ理由で……」
「わ、わたしは、ただ、伊豆の神々のことを、調べたかっただけです」
「馬鹿なッ……。そのために、代官屋敷から図絵を盗み出されたのか？　ただ一冊の図絵帳とは言え、盗みは盗み……、代官所にてそのことに気付けば、たとえ大目付の御後室とはいえ、盗賊として追われますぞ」
「江戸への帰り道に、韮山へ寄って戻しておきますッ」
「そのときは、各神社の秘密があなたのものになっているわけですな？」
「えッ！」
突然、虚無僧がカラカラと笑った——
「知らんと思うかッ。そなた、女だてらに、大久保石見守が隠した秘密を狙っているのだッ」
そう言う虚無僧の言葉からは、いままでのおだやかさが消えていた。
「石見守は、秘蔵の黄金をさまざまの形として、伊豆の神社、明神に奉納した。三島神社の金燈籠がそうだ。吉奈の湯泉神社の鰐口がそうだ。……このようにした秘宝は、まだまだ山神、氏神のやしろに、ひとに知られずに眠っている。それを、狙っていたのだ。そなたは……」
「そ、それを知っているあなたこそ——」
「勿論だ。三島神社の金燈籠を奪ったのはわしだッ」
「えッ？」
「湯泉神社の鰐口も奪った。大久保石見守の秘宝全て、わしは手に入れる積りなのだ。出せッ！」
虚無僧は、パッと、お浅へおどりかかった。
「えーいッ！」

お浅の手に、キラリと懐剣が光った。
「馬鹿ものッ！　わしに勝てると思っているのかッ！」
虚無僧は手にした尺八で、ピシッとお浅の小手を打つと、次の瞬間、ダッと、女の脇腹をついていた。
「——済まん。手荒なことをする積りはなかったのだ。が、お前が悪いのだぞッ……」
虚無僧は、尺八を帯に挟むと、気を失っているお浅の横へ、静かに膝をついた。
ちょっと、天蓋を持ちあげてから、お浅のふところへ手をさし入れる。
が……、ハッと手を引くと、キッと、金山明神のやしろの方を見た。——プーンと、かすかな火縄の匂いが、鼻をかすめたのである。
「へへへ……、てエしたもんだ」
やしろのうしろから太いしわがれ声が聞えて来た。
「風に乗った火縄の匂いを嗅ぎわけるたア、ただのネズミじゃねエなア、おい……」
「何やつだ！」
虚無僧が立ち上がってたずねた。
と……、やしろの蔭から、ずんぐりとした黒い男の影が現われた。——たっつけ袴に袖なしの胴着に着ぶくれた、猟師姿の男である。
腰に山刀を一本ぶち込み、油断なく種子島を構えている。
火口に近づけた火縄の火が、闇の中に、チロッ、チロッと光っていた。
「——俺は、鼻打ちの源八って猟師さ……」
「かりゅうどか……」
「糞っ！　舐めるなよ。猪はもとより、飛ぶように走る鹿や狐だって、この源八さまにかかっては百年目だ。たった一発……。それも、決して皮にゃ傷をつけねエ。鼻を撃つんだ、鼻をな」
「わかった。鉄砲の名人らしいな。ところで、その鼻打ちの源八が、なぜわしを狙う。わしは、猪や鹿ではないぞ」
「さっさと、消えっちまえということさ。さもねエと、その天蓋の中の鼻を、ドーンと吹っ飛ばしてくれるぞ」
「この女を助けようというのか？」
「つまらねエことを聞くねエ。俺は男で、そこにぶっ倒れているのは女……。お前がいると邪魔なんだ」
源八は、種子島を構え直した。
「消えろッ。撃つぞッ」

虚無僧は、山道の降り口へ、あとずさりをして行った。源八が虚勢を張っているのでないことが、その構え、眼の配りからよくわかったのである。確かに、鉄砲にかけては、大した腕らしい……。

「――坂を降りて行けっ……」

三間ほど離れて、源八が喚いた。決して、近づかない。これも隙をつかれない用心である。

虚無僧は、止むなく山道を降りて行った。

源八は、依然として、三間の間隔を保ってついてくる。

とうとう、狩野川から下田街道まで、見通しのきく曲り角へ出た。

「――さ……。どんどん降りて行け。川を渡って、街道へ出ろッ。北へのぼろうが、南へ下ろうが、うぬの勝手だ。戻って来たら、一発くらわすぞ」

飛び道具には勝てない……。虚無僧は、黙々として、山道を降りて行った……。

猟師の源八は、虚無僧が、下田街道へ出るまで、山道の途中に立って見守っていた。

虚無僧は、街道に出ると、ジッと、金山城址の方へ視線を向けて動かさなかった。

「――けッ！　引っ返して来るならやって来い。お前エが辿り着く頃にゃ、俺は女をかっさらって消えてるぜ……。おっと、念のために、一ちょう見舞ってやるか……」

源八は、種子島をとりあげると、ろくろく狙いも定めず、火口へ火縄を入れた。

夜の川原に、轟然と銃声がこだました。

チカッ……と、虚無僧のすぐ近くで火花が散る。弾が、道ッぱたに転がっている丸石に命中したのである。

「――さすがは鼻撃ちの源八。みごとな手並みと褒めておく……」

虚無僧が、口の中でつぶやいたが、勿論この声は源八には聞えない。

源八は種子島をかついで山道を引返して行った。

金山明神の前には、さっきのままの姿で、お浅が倒れている。

「――さてと……、花嫁御寮と御対面と行くかな……」

お浅の横にしゃがんだ源八は、火縄をふッと吹いて、お浅の顔へ近づけた。ポーッと、お浅の顔がほの白く闇に浮きあがる。

「なーんでエ、年増じゃねエか……」

が……、源八はニンマリ笑った。

「とはいうものの、いい女だ。それに、どうやら武家

ものらしい。武家女と来ると、俺にとっちゃ初物だ。有難く頂きとゆくかな」

源八は、お浅を抱き起すと、どっこいしょと担ぎあげ、種子島を左手に下げた。

「――おっと、こいつは物騒だ……」

落ちている懐剣に気付いた源八は、懐剣の柄頭をポーン蹴飛ばした。

カン、カランカランと、懐剣は岩角を転がり落ちて行く。

その音をうしろに、お浅をかついだ源八は金山明神の背後へ入って行った。

金山明神は、拝殿は青空の下に建てられているが、神殿は、すぐうしろの洞窟の中にあった。洞窟は一つではなく、神殿のあるものを中心に、左右に四つずつ、黒い口を開いている。

が、神殿のある洞窟が一番大きく、立って歩くことの出来るのは、これだけだった。

これは、後に宗光山古墳群と呼ばれたもので、原住民族が穴居生活をした頃の遺跡である。

源八は、神殿の洞窟へ入って行くと、御神体の御鏡の前に、ソッと、お浅をおろして横たえた。

「さて、折角の御馳走も、こう暗くッちゃ味気ねエや……」

やがて、洞窟の中が、ポーッと、明るくなった。源八が、御燈明に火を入れたのである。

「――へへへ……、御床入りだ……」

源八は、舌なめずりをして、お浅の裾へ手をかけた……。

「――馬鹿者ッ！」

激しい怒りの声と同時に鼻撃ちの源八は、うしろから横ッ面を思い切りひっぱたかれ、目がくらんだ。

「わッ！　な、なにをしやがるッ」

源八は、狂気のように猛り立ったが、その時は二発目の手刀を首筋に打ちこまれ、ストーンと、ぶざまにひっくり返っていた。

頭がクラクラして、何も見えない。

やっと気がついた時には、うしろ手に縛りあげられていた。――両手をねじあげられ、おや指とおや指を合わせてキュッと縛り、更に手首が縛られている。

これでは、どんな縄抜けの名人でもほどくことが出来ない。

しかもその上、両足を縛って、エビなりに曲げられ、その縄のはしが、首に廻されている。――もがけば、われとわが咽喉を締めることになる。いわゆる、

地獄責めの縛り方であった。

「――くッ、くッ、糞ッ！」

源八は、歯をむき出して、初めて、相手を見た。

燈芯一本の明りで、よくは見えないが、侍にしてはきゃしゃな体と、白い顔なのに、思わず目を見張った。――墨染の少将である。が、源八は少将を知らない。

「なんだって、俺を縛りゃがるんだッ」

「悪いことをすれば縛られる。自分で、何をしようとしていたか、ま、ゆっくり考えてみることじゃ」

「やいッ！　俺をこんな目にあわすと、あとでどんなことになるか知ってるのか？」

「知らぬな」

「知らねエならいってやる。おれは、鉄砲を持ったら伊豆一番の――」

「鼻撃ちの源八という猟師であろう」

「よッ！　知っていて、俺を縛るたアいい度胸だ。てめエ、無事に伊豆を出て行けると思ってるのかッ」

「ハハハ……、わしを撃殺すというのか？　それまでお前が生きておれるかな」

「な、なんだとッ」

が、少将は、それに答えず、燈芯の火をふッと吹き消した。――あとは、黒白もわからぬ闇である。

少将は、手さぐりに、倒れているお浅に近づくと、ふところをさぐって、一冊の図絵帳をとり出した。――山神図絵である。

「――源八、さらばじゃッ」

「お、俺を、おいて行くのかッ」

「神の加護があれば、飢え死もすまい」

少将は、お浅を抱き起すと、グイッと、活を入れた。

――ふーッ……と、お浅が、息を吹き返した。それを見とどけると少将は、サッと、洞窟から飛び出して行く。

「あッ、まってくれッ。悪かったッ、助けてくれッ。狼に、くい殺されるッ……」

源八が喚いたが、少将は止まらなかった。

天城越え

吉奈の里に、静かな日が十日余り続いた。――韮山代官所から警護の侍たちが到着してからは、お玉の方の湯治をさまたげるような騒ぎもなく、里はすっかり落付きを取り戻していたのである。

「――お退屈でございましょう」

伊豆屋のお石が、少将の部屋へ入ってきた。

「たまには、お酒でもめしあがって、お楽しみになってはいかがでございます。お女中方も、御前さまのお相手なら、大喜びでございますよ」

「わしは、一向に退屈してはおらぬ。毎日のように、山歩きをしているからな」

「そう申せば、喜平太どのをお供に、毎日お出かけでございますが、どこへおいでございます？」

「湯ヶ島、船原、月ヶ瀬などの里や村を廻って来た。また、八丁池、浄蓮の滝、朝日の滝なども見て参った。再び来ることが出来るかどうかわからぬ伊豆じゃ。よく見ておきたい」

「山あいの里や村、また池や滝が、面白うございますか？」

「お内儀は、月を見るか？」

「はい……」

「花を眺めるか？」

「はい……」

「月や花を眺めるのは、面白いからか？」

「これは御前、手きびしいお言葉でございますなア」

「お内儀こそ、退屈であろう。第一、いつまでも江戸の店をあけておいてもよいのか？」

「それでございますよ、御前……」

お石は、ひと膝乗り出した。

「木野からお聞きでございましょう、修善寺での出来事を」

「うム……。奇妙な黒装束の女達が、熊取内膳を襲い、お内儀をも狙うたとか」

「熊取さまは、大怪我をなさいました。わたくしも、木野がいてくれねば、どうなりましたことやら。それを思うと、帰るのが怖ろしゅうございます」

「では、当分、ここにいる積りか？」

「はい、お玉の方さまのお供をして江戸へ戻ります。とてもひとりでは帰れませぬ」

「わしが、送ってとらせようか？」

「えッ!?」

驚くお石へ、少将がニッコリ笑いかけた。

「とゆうても、江戸までではない。わしは明日、天城を越えて下田へ出てみる積りじゃ。いっしょに行かぬか。下田から船で江戸へ戻ればよかろう」

「まア！　はいはい、お供をさせて頂きます。いえ、もう、それなれば、御前のお馬やお駕籠の費用は、みんなわたくしが――」

「いやいや、わしは、ひとの世話になるのが大嫌いじゃ。おう、あれを見い……」

少将は、のび上がるようにして、庭を指さした。

——どこへ行っていたのか、喜平太と木野が、むつまじそうに話しながら帰って来る。

「——そなたが呉れた木野も、わしのものにはせなんだぞ……」

次ぎの日の朝早く、少将一行は吉奈の里を出た。

少将は馬、お石は駕籠、喜平太と木野は徒歩で供をしている。

表使いの染村が里のはずれまで送って来た。——少将を送るのではなく、お玉の方の御機嫌うかがいに来たお石を送ったのだ。

「——では、三、四日すれば戻ってくる……」

少将は、馬上から染村に挨拶をして、下田街道を南へ向った。

「——もし……、染村さま……」

宿へ引返そうとした染村を、呼び止めたものがある。

ガサガサと、柏の林を踏みわけて現われたのは、六角十字兵衛だった。

「あ——……そなた達は、先きへお戻り……」

染村は、供の女中を返すと、あらためて十字兵衛へ顔を向けた。

「そなたにも似げない。どうしたというのじゃ？」

「染村さまの方こそ、いかがですかな？」

「駄目じゃ。……石か金か、墨染の少将に、色仕掛けは通じぬようじゃぞえ」

「それごらんなさい。わたしは、始めから斬らねばならぬと考えていたのだ」

「ホホホ、とはいうものの、幾度もしくじっているではないか」

「強敵ですぞ。少将は……」

十字兵衛は、いまさらのように言った。

「考えてみると、焼き討ちをかけようとした二人のしくじり、また、この里はずれで同志が多数斬られたこと、更には、修善寺で御家老が襲われたことまで、すべて少将のたくらみのように考えられますぞ」

「いやいや、そんな筈はない。すべては、怪しいおなご達のしわざというではないか」

「染村さま……。少将の華奢な体、ほっそりした白い顔、女の着物を着てお高祖頭巾をかぶれば女と見わけがつきますまい」

「でも、少将は足をくじいていられた」

「あ——、医王山明善寺の崖から落ちて……。あの時は惜しいことをした。いま一歩で討ちとるところだったが……」

「その後、しばらくは、ひとり歩きは出来なんだ。馬に乗るのも、人の肩を借りておいでしたぞ」

十字兵衛は、ムスッとした顔で腕を組んだ。

「なる程……。少将が女装したというのは、思い過ごしかもしれぬ。が……、怪しい女共のうしろで、糸を引いているのかもしれませんぞ」

「それも、どうであろう。修善寺でお石どのを救うたのは、木野ではないか」

「木野は、お石の召し使いだった女。旧主を助けたとて、不思議はござるまい。もともと、お石が少将のもとへ入りこませた、いわば女間者……」

すると、染村が、クスリッと笑った。

「それなれば、木野はわたし達の味方。その味方を、なぜ修善寺で襲われた？」

「——あれはしくじりました。覆面をしていたのだが……。どうして木野に六角十字兵衛とわかったのか、いまでもわからぬ」

十字兵衛は、照れたように、首筋を撫でた。

「ホホホ……、少将は女で落ちぬが、十字兵衛どのを色仕掛けで落とすのは、わけないことよそうな」

「いや……、わたしは木野が好きなのだ。あの女が少将のものになるのかと思うと、少将を斬りたくてムズムズしてくる」

「それなら、お門違いじゃ」

「え!?　お門違いとは？」

「木野は、近江の喜平太を好いている。喜平太も、木野を……」

「あ——あのデクの棒の喜平太ッ……」

十字兵衛は、歯をむきだした。

「染村さま、少将は、どこへ行ったのですかな？」

「見物がてら、お石どのを送って下田へ……」

「ふーム……、では、三、四日は帰りませぬな」

「今宵は湯ヶ野泊り。明日は下田で、明後日は西の浜へ出て松崎泊りと聞きました」

「では、昼過ぎには天城越えか。……よしッ」

十字兵衛は、残忍な笑いを浮かべ、染村に軽く頭を下げて、別れようとした。

「あ、十字兵衛どの。熊取どのは、どうしました？」

「黒太夫が手裏剣を打って崖から転げ落とさせて、からくも命を助けましたが、身に数ヵ所の深手……。い

ま、沼津で手当を受けておいでですよ」
「まア、三島へ出ずに、沼津へ？」
「山路をはこぶことは難かしく、三津浜から船で沼津へ送りました。おう……」
十字兵衛は、ふと思い出したように——
「千々輪の御後室もいっしょですぞ」
「まア、お浅どのが？」
「何かわけがあるらしい……。が、語らぬ。熊取さまを護って大仁へ向う途中、気抜けのようになったお浅どのと出会ったのです」
「どうしたのでしょう？」
「わからぬ。が……、あの後室どのも、なにやら臭い。どうも、ひとりで、コソコソとなにか企てているようだ。そのうち、判るでしょう……」
十字兵衛は、もう一度頭を下げると、下田街道を走った。
「——おーい……」
一里ばかり来たとき、街道脇に聳える一本杉の下から、ヒョッコリ、傀儡師の黒太夫が姿を現わした。
「——六角さん、小半刻まえに、少将とお石後家が、喜平太と木野をつれて、湯ヶ島の方へ行きましたぞ」
「湯ヶ島ではない。下田へ向っているのだ。今宵は、湯ヶ野泊り」
「やれやれ、いまから天城越えですかい」
すると、十字兵衛が、ニヤリと笑った。
「——天城が、越えられるかどうか……。お代は見てのお帰りだ……」
「——手伝いやしょう……」
黒太夫が、ペロリと、上唇を舐めた。
「馬鹿言え。俺ひとりで沢山だ」
「はてさて……、六角十字兵衛どのも落ちぶれた。半月前までは、十人余りの門人をひき連れて、肩で風を切っておいでだったが、いまではひとりぼっち……」
「黒太夫……」
十字兵衛は、ジロリッと、黒太夫を睨んだ。
「俺をおこらす積りか？」
「おこんなさいよ。腹を立てて貰いたいね。その勢いで、バッタバッタと、少将を斬り、喜平太を斬り、木野を斬る」
「木野をッ!?」
「六角さん……。お前さんね、木野を生け捕りにしようと思うから剣がにぶるんだ。斬っちゃいなさい。どうせ木野ッて女は、お前さんのものにゃならない。さっき様子を見たがね、喜平太と仲がいいぜ」

「よしッ！　斬ってやるッ……」
その頃、少将の一行四人は、湯ヶ島の里を廻り、天城の登り坂にかかっていた。登り二里半の峠道である。
正面に聳える天城の山々はもとより、下田街道の左右は、松、杉、さわら、もみ、楠、柏、とが、樫、けやきにおおわれている。
この九種類の樹木は、天城の九木と呼ばれ、公用の外は伐ることが出来ない。
木々は、伸びるだけ伸び、思い切り枝を張り、正しく深山天城の姿である。
既に、さかりは過ぎたとは言え、枝に残る葉は七色八色に色染めて錦を織り、火焔の歩く思いがする。
「——あ——美しい！」
駕籠の中のお石が、思わず感動の声をあげた。
「神のわざは、とても人力では及ばぬな……」
少将が、駕籠へ馬を寄せた。
「この色……この輝き……。これは、いかなる名工名匠の筆も写しとることは出来まい」
「本当でござりますねエ……。なんだか、胸のうちが、ジーンといたしまする」
「それが、神を思う人間の心じゃ……。見い……」
少将は、馬上から、鞭で、左手の林の中をさした。
——木の間がくれに、神さびた神社の小さな社殿が見える。
「誰が創建したものか、このような人気のないところにやしろがある」
すると、駕籠かきのひとりが口を出した。
「あれは、天城の麓明神……。大久保石見守さまがおまつりになったのでやすよ」
「え……い、石見守さまが……」
お石の顔が、サッと蒼ざめた。
「——ともあれ、参拝して行くとしよう。喜平太、木野、ついてまいれ……」
少将は、馬を降りて、林の中へ入って行った。
と……、誰もおらぬ筈の社の中から、ジッと、様子をうかがっている巡礼姿の娘があった。——深雪である。
粗末な鳥居の前で馬を降りた少将は、うしろを振返った。
「——そなた達は、ここで待つがよい……」
喜平太と木野へそういうと、散り敷いた紅葉を踏んで、やしろへ近づいて行った。
「——じゃ、あたしもここで……」

駕籠を出た伊豆屋のお石は、鳥居の下にしゃがむと、小さな金ばりの煙管をとり出して、ソッと木野の方を見た。

木野は、わらじの紐を結び直している喜平太に寄り添い、男の肩に散りかかった赤い落ち葉をとっている。

——ちぇッ、まるで夫婦気取りだよ……。

お石は胸の中で舌打ちをした。

が……、文句はいえない。危い命を木野に助けて貰ったのだし、これからも、下田から無事に船に乗るまでは、どんな世話にならないとも限らないのである。

少将は、神前に進むと、軽く頭を下げてから辺りを見廻した。

「——はてな……」

突然、少将の眼が、せわしく動いた。

大仁の金山明神の洞窟で、千々輪の後室お浅のふところから抜き取った伊豆の山神図絵によると、このやしろには、大久保石見守が唐金の賽銭箱を寄進しているはずである。

——縦一尺八寸、横二尺二寸、高さ二尺、檜を以て造り、内外共に唐金にて包む、大久保石州が寄進なり……。

少将は、昨夜ひそかに読んだ山神図絵の文句を思い出した。

唐金……。それが、実は金のみせかけであることを、少将は知っているのだ。三島神社の唐金の燈籠が、その実、金の燈籠であった。

吉奈の湯泉神社の鰐口も、唐金のように見えるが、これも金に特別の細工をしたものである。

全ては、大久保石見守が万一に備えて秘かにかくした黄金なのである。

ここの賽銭箱も、またその一つであるに違いない。

ところが、その賽銭箱が見当らない！

三島で燈籠、吉奈で鰐口が消え失せたように、ここでは賽銭箱がなくなっている。

「何者!?　何者のしわざであろう……」

そんなことを考えていた少将が、ハッと、耳をそばだてた。

「——御前……。墨染の御前……」

低い、女の声が、やしろの中から聞えたからである。

「御用心遊ばしませ……。さきほど、吉奈の里の入口近くで、六角十字兵衛と、傀儡師の黒太夫の姿を見かけました……」

「そなたは？」

少将は、鳥居の前にいるお石達に聞えぬよう、低い声でたずねた。

「神ト仙女の使いものでございます」

「深雪か？」

「——はい……」

「では、神ト仙女真弓に伝えてほしい。余り無理のことはするな……とな」

「——御前は、わたくし達の悲願を、御存知のようでございますなア」

深雪は、依然として姿を見せず、かすかな含み声でたずねた。

「知っている積りじゃ……。大久保石見守ゆかりのもの。本多佐渡守、本多家家老熊取内膳、伊豆屋お石を仇敵と狙うている。が……、あせってはならぬ、葉は切れても、根は切れぬぞ」

「根とは、佐渡守のことでござりますか？」

「枝葉は切り残しても、根を断てば、石見守も成仏出来よう……。それにしても、そなた達、なぜ、わしに力添えをしてくれるのじゃ？　韮山からの戻り道にも、おかしな娘が、十字兵衛の待ち伏せを報らせてくれたが……」

「いつぞや、真弓さまは、御前に助けて頂きましたから……」

「それだけか？」

「他のことはわかりませぬ。真弓さまのいいつけなのでございます」

深雪は、ちょっと言葉を切ったが、こんどは、深雪の方から少将にたずねた——

「御前は、なぜ、わたし達に、助言をして下さるのでございましょう」

「石見守を気の毒じゃと思うから……」

「それだけでございますか？」

「ハハハ……」

少将は、思わず笑い声をあげて、ハッと、うしろを見た。——お石、木野、喜平太がいぶかしそうに見ている。

「やれ、しもうた。そなたが、わしの言葉をまねたので笑うてしもうた。もう行くぞ。わしは、下田までお石を送ってやるのじゃ」

少将は、口早やにそういうと、鳥居の方へ引き返して行った。

「——御前、なにか面白いものがございましたか？」

お石が、さっそくたずねた。

血風峠ケ原

女連れの足ははかどらず、九十九折りの山路を辿った少将一行が、天城峠の頂上に登りついたのは、昼過ぎだった。

右手遙かに一望千里の海……。大島は手がとどきそう。そのうしろに、伊豆の七島が点々とつづいている。

うしろは、木の間がくれに富士が眺められ、箱根、愛鷹の山々も望まれる。

「――これからは、湯ヶ野まで下り道……。喜平太と木野は、伊豆屋の駕籠について、先きに行け」

少将の言葉に、他の三人が、一様に驚きの顔をあげた。

「御前は、どうなさるのです？」

喜平太がたずねた。

「この先きに、青鈴天神というのがある。わしは、そこへ参拝して、すぐあとから行く」

「わたくしも、お供いたします」

「供はいらぬ。吉奈で聞いたが、青鈴天神への道は、篠竹にうずもれた見晴ヶ原を通らねばならぬそうじゃ。わしは馬で行くからよいが、徒歩では歩き難くかろう」

「それくらい。平気です。是非ともお供いたします」

「わからぬ男じゃ。参拝を済ませば、馬を飛ばしてあとを追う。先きに行くがよい」

それから少将は、チラッと駕籠のお石を見て、ニッコリ笑った。

「それそれ、伊豆屋のお内儀が心配しているではないか……」

少将は、お石に近づいて行った。

「お内儀、木野と喜平太がおれば、怪しい女が四人や五人襲いかかっても大丈夫じゃ。安心して先きに行くがよい……」

「どうでも、青鈴天神とやらに、お詣りでございますか？」

「お内儀、伊豆は、都人配流の土地じゃ。三百年の昔、左中将大炊御門頼国という殿上人が、天城の麓へ流されて来た。この頼国朝臣が、わしの祖先で、また青鈴天神を創建した人なのじゃよ」

「まア、それでは、なにはおいてもお詣りにならねばなりませぬなア」

「しかも、頼国朝臣の罪というのが、御所の女房と恋にふけったためとやら……。やぼなわしは、青鈴天神に詣でて、すこし頼国朝臣の風流にあやかろうと思うてな、ハハハ……」

こうまでいわれては、嫌やとはいえない。

やがて、お石を乗せた駕籠は、喜平太と木野に護られて、峠路を降りて行った。

ニコニコと、それを見送っていた少将の顔が、しばらくすると、キッとひきしまった。

グイッと、馬の頭を立てなおすと、タッタッタッと、傍らの間道へ入って行く……。

と……、木立ちのあいだから、十字兵衛と黒太夫が顔を出した。

「――しめたね、六角さん……。少将はひとりですぜ……」

そんなことを知るや知らずや、少将は篠竹におおわれた荒涼たる見晴ヶ原へ駒を乗り入れて行った……。

篠竹は馬の膝を没し、見晴ヶ原は一町四方の広さをもっていた。

原のなかほどに、ただ一本、ヒョロヒョロと幹ののびた松の木が立っている。下から二間余りは枝も葉もなく、その上にだけ、細い枝が三、四本出ていた。

天城峠の山頂を吹き渡る風雪にたえて来た松であっ

「うン……、御神体じゃよ。ここの御神体は、猪の頭じゃよ。馬頭観世音、牛頭天王などは知っているが、猪の頭明神とははじめてじゃ。面白いのウ」

少将は、口先きでその場をごまかすと、ゆらりと、馬に跨った。

そのとき、爪先上りの街道筋を、飛ぶように駈け抜けて行く大小二ツの姿があった。――六角十字兵衛と黒太夫である。

「――六角さん、相手は四人ですぜ。他に駕籠かきが二人いる」

走りながら、黒太夫が叫んだ。

「お石は味方だ、駕籠かきは物の数ではない」

「残るところは三人……。これがみんな、かなり使いますぜ」

「喜平太は、お前にまかせた」

「けっ！　やっぱりこの黒太夫がいなきゃ、困るでしょう。恩に着せますぜ」

「どうとでも好きに考えろッ。俺は、墨染の少将のなまッ白いそっ首を叩き切りたいだけなんだッ」

二人は、天城の頂上めざして、走り続けていた。

た。

少将は、松のそばで馬を降りると、手綱を幹に縛りつけて、うしろを振り返った。

「――来い……。勝負しようぞ……」

爽やかな少将の声が、晩秋の風に乗って篠原に響いた。

と……、その声にひかれるように、篠竹の中から、黒頭巾に顔を包んだ六角十字兵衛が、ノッソリと立ち上った。

「お覚悟のほど見事だ……」

一間離れたところまで近づいた十字兵衛は、せせら笑うような調子で、ゆっくり口を開いた。

「狙うものありと知って、わざとひとりにならられたな」

「供のものに、怪我などさせとうないのじゃ」

「お気の毒だが、喜平太とやらも斬らねばならぬわ」

「ほう……、ちと合点が行かぬな」

「そのわけは、木野にある。あの女に近づくものは、全て死ぬるものと決っている」

「なる程……。よこしまな恋か……」

「なんとでも考えたがよかろう」

十字兵衛は、鼻の先きで笑うように言うと、ムズと腕を組んだ。

「しばらく待とう。祖先の流人が創建したとやらのやしろに詣ってこられい。冥土の旅に思いが残っては気の毒だ」

「ハハハ……、青鈴天神か？　左様なやしろが、この山頂にあると思うか？」

「よッ……、では、ありもせぬやしろに詣ると申したは？」

「この篠竹の中で、そちと雌雄を決するための口実じゃ」

「よしッ！」

十字兵衛が、サッと、刀を抜き放った。

「抜けいッ！」

「さらば、参ろうか……」

少将は、静かに鯉口を切ると、ピタリッと、青眼に構えた。

「おう！」

十字兵衛が、サッと右足を引いて、気負い込んだ大上段にふりかぶる。

途端に十字兵衛は、ギクッと、眼を見張った。――たかが公卿の生兵法とあなどっていたが、少将の体には、一髪の隙もなかった。

-Hamano-

――しまった！

十字兵衛は、いまさらのように慌てた。――殺到流の奔馬剣で、一ッ気に勝負をつける積りでいたのだが、そんな生やさしい相手でないことを知ったのだ。

――これなら、青眼でゆくべきだった……。

そう考えたが、もう遅い。頭上にかざした刀を、下げることすら出来なかった……。

「――くッ、糞ッ！」

十字兵衛の口から、呻めきに似た声が漏れた。

動けば斬られる。少将の出方を待って、刹那に構えを立てなおす以外に手段はないのである。

ところが、その少将が動かない。ピタリッと青眼に構えた姿は、静止した淵のように不気味だった。

こうなっては、黒太夫の手裏剣を頼むほかはない。

が……、その黒太夫は、十数間うしろの篠原にうずくまっている。

――こう間がひらいては、手裏剣の威力も考えられないのだ。

「――覆面をとってはどうだな？」

少将が、落ち付いた声でいった。

「ことこの場に及んで、面を包んでいても、仕方があるまい」

「無用ッ！」
十字兵衛は、叩きつけるように叫んだ。
すると、少将がチラッと微笑んだ。
「覆面は、相手に顔を知られぬがためであろう……。つまり、わしが、生きてこの場を立ち去るが故に、そなたは顔を隠していたのだ」
「ほざけッ！　断じて斬るぞッ」
「なれば、覆面をとれ。わしを山頂の露と消えさせる自信があるなれば、顔を見せても、名乗りをあげてもよいはずじゃ。覆面をとる間、待ってやってもよいぞ」
「無用、無用ッ！　黙れッ」
と……、少将の口から、初めて激しい声が飛んだ——
「六角十字兵衛ッ、わしの勝ちと決ったぞッ！」
一瞬、少将の剣先が、ピクッと動いた。
「とーッ！」
この機を待っていた十字兵衛が、ダッと、篠の葉を蹴散らして、左へ飛んだ。
ピカリッと、刃が、秋の陽にきらめいた。
ピューッと一と筋、血潮が一本の紐のように走った。
「——やったッ！」

思わず叫んで躍りあがったのは、篠原に隠れてかたずをのんでいた傀儡師の黒太夫である。
が……、どちらが斬られ、どちらが斬ったのか……。
黒太夫にもわからない……。
瞬間の巴となって、体の入れかわった少将と十字兵衛は、またもとのままの姿で動かなかった。
やがて、数呼吸……。
ヒョイッと、少将がうしろへさがると、十字兵衛の体が、グラリッと、前へ泳いだ。
「あッ！」
黒太夫が、眼を見張った。
少将は、刀を鞘に納めると、スタスタと松の木のそばへ戻り、ヒラリと馬に跨った。
「黒太夫とやら、手当てをしてやれ。いまのうちなら命は助かるじゃろう……」
少将は、サッと、ひと鞭あてていた。
馬を走らせる少将の姿が、篠原をつッ切り、下田街道の方へ消えると、黒太夫は、ハッとわれに返った。
「——六角さん！」
黒太夫は両手で篠をかきわけ、泳ぐような恰好で、倒れている十字兵衛に駈け寄って行った。
「やられたなッ。どこを斬られなすった？」

「う、腕だ……。右の腕だッ」
「あッ！」
黒太夫は、ゴクリッと生つばをのみこんだ。——抱え起した十字兵衛の右腕が、ブランと、垂れ下がり、片袖はグッショリ、血を吸っていたのである。
「こ、こいつアいけねェ。助からねェな」
「ば、馬鹿ッ！　し、死ぬものかッ」
「いやいや、腕でさア。気の毒だが、右手は思い切ンなさいよ」
黒太夫は、手拭をとり出すと、十字兵衛の二の腕をキューッと縛りあげて、血止めをした。
それから、馴れた手つきで、素早く傷の手当をする……。
「黒太夫……、なぜ、手裏剣をうたなかったのだッ」
十字兵衛が、苦しげに顔をしかめながらたずねた。
「打てなかったんですよ」
「なぜだ。俺は、お前の手裏剣を頼みにしていたのだ」
「あたしも、打ってあげたかった。六角さんの大上段はまずかったね。あのとき手裏剣を打てば、あんたは青眼に構えなおすことが出来た。いや、それどころか、一ッ気に少将を倒すことさえ出来たかもしれない。ところが、手裏剣を握って、ヒョイ、と腰をうかすと。……いけないんだ。誰か、横から凄じい含み気合をかけやがる」
「なにッ……他にも誰かいたのか？」
「いたらしいねェ……。姿は見えないんですがね、確かに誰か、篠原に隠れて、あッしの様子を見ていやがった。——おッ……」
黒太夫が、ハッと、顔をあげた。
松の木の向うから、鉄砲をかついだ男がノソノソと近づいて来る。
「あ、あれか？」
「いや……、違う。あの男は、あッし達に気がついていねェ」
男は、大仁の金山明神でひどいめにあわされた猟師、鼻撃ちの源八だった。
「——おやッ……、どうしたんだ」
「怪我人だ……。しばらくやすませたいが、近くに家はないか？」
「あるもんか、天城峠のてッぺんだ。……あるのは、俺の山小屋くれェなものよ」
「頼む。一日二日貸してくれ。礼はするぜ」
源八は、ジロリと、覆面姿の十字兵衛の顔と傷とを

見比べると、ニヤリッと笑った。
「宿賃は、ちょいと高けエぜ。こいつア、尋常の怪我ではねエようだからなア」
源八の山小屋は、見晴ケ原を出て、南の斜面へ、すこし下がった陽当りのよい場所にあった。
「湯をわかしてくれ。傷口を洗うのだ」
十字兵衛を横にしてから、黒太夫が源八に頼んだ。
「まかしとけ。怪我にゃ馴れてらア。幸い、焼酎もあるし、傷薬もある。蝮の脂でねりあげた、滅法よくきく薬だぜ。だがよ、安くはねエぜ」
「銭のことをいうな。一両やろう」
「よかろう……。まってな」
源八は、小屋の隅を掘り返して、小さな壺をとり出した。——中には、ドロリッとした黒い液体が入っている。
「傷口を焼酎で洗って、これを塗りつけておいてみな。三日もすりゃ、肉が巻いて、薄皮が出来らア」
それから、源八は、覆面をとった十字兵衛の蒼ざめた顔を見た。
「強そうだな、旦那は……。お前エさんを斬った相手は、よっぽどの使いてだろう」
「いや、わしは……」
「おッと、いまさら隠すたア水臭いぜ。この傷口を見りゃ、谷底へ転げ落ちた傷か、猪の牙にかけられた傷か、それとも刀でスッパリやられた傷か、ひと眼でわからアな。何者だい、相手は？」
十字兵衛は答えるかわりに、ウッ……と、顔をしかめて、苦痛を噛み殺した。——黒太夫が、焼酎で傷口を洗いはじめたのである。ジーンと、脳天へ焼け火箸を突き刺されるような痛さであった。
「——ひ弱そうな、京都の公卿に斬られたのさ……」
傷口の手当をしながら、十字兵衛に代って黒太夫が答えた。
「ひとは見かけによらぬものでな。強そうなこのひとが斬られたってわけだ」
「く、黒太夫……。おれを、からかうのかッ」
「六角さん……。そう憤んなんすな。しかし、おかしなことだよ。熊取さまは左腕を斬られ、お前さんは右を斬られた。しかも、熊取さまを斬ったのは女だし、六角さんを斬ったのはお雛さまのような墨染の少将だ。勝ち負けは見かけだけじゃわからねエ」
すると、鼻撃ちの源八が、ギロリと眼を光らせた。
「そいつア、公卿髷の、女のようにノッペリした野郎じゃねエのか？」

「お前、知っているのか？」
「おい、その野郎、どっちへ行った？」
「馬で、湯ケ野へ……。どうする積りだ？」
「もし、俺が考えエてる男なら、生かしちゃおかねエ」
源八は、鉄砲をとって立ち上った。
「待て、むこうは、馬だぞ」
「なんの……。九十九折りの峠道だ。谷を駆け降りて行きゃ、俺の方が先きに湯ケ野へ出ちまわア……」
峠一ツで、北と南はガラリと趣きがかわっている。北は晩秋だが、南は、春のような暖かさに包まれ、山つつじの葉さえまだ青々としていた。
見晴ケ原から谷一ツ越えたサワラ林を駈け上り、更に尾根を越えて岩場を下って行くと、眼下に地獄谷が見えてくる。
ここに、とうとうと飛沫をあげる初景の滝がかかっていた。
下田街道は、峠から迂回曲折幾十度、地獄谷沿いに、この滝の下を通っている。
鼻撃ちの源八は、一ッ気に走り続けて、滝の上へ出た。
「——ヘン……、ざまア見やがれ、俺の方が早えや……」
源八は、滝の上の大きな岩に腰を降して地獄谷を見渡した。
谷の北はずれに、ポツンと見える小さなひと影は、ゆっくり馬を走らせる墨染の少将に違いない。
「——野郎、金山明神では、ひでエめにあわせやがった。が……、今日は恨にもの見せてやるぞ、伊豆のかりゅうど、鼻撃ちの源八の冴えた腕であの胸板をぶち抜いてくれる……」
源八は鉄砲をとりあげて、念入りに調べてみた。——弾もこめてある。火縄の燃え具合も上々だ——。
と、そのとき、滝の上の木立ちの間に、巡礼姿の女が三人姿を現わした。——真弓と深雪と津矢である。
「——姉さま……、なぜ、あの侍を助けるのだね？」
相変らず男のような言葉で、津矢が真弓にたずねた。
「さア……、なぜといわれても困るけど、あたしと深雪さんは、不思議な縁で、あの少将さまとは、幾度も助けられたり、助けたりしているのですよ」
「でも、あいつの家来の女は、俺と斬り合いをしたのだぜ」
「木野さんでしょう。でも、木野さんの方では、あな

ただとは知らないのですよ」

そういっているうちに、少将は、初景の滝へ近づいてきた。

源八は、岩の根を踏ンまえて、種子島を抱えなおした。

まだ、狙いをつけていないのは、足場が悪いらしい。

頭上の岩蔭に、このような伏兵があるとは知らず、少将は滝の前を通り過ぎて行く。

源八が、ピタリッと狙いをつけた。——背後から、一発、浴びせかける積りなのだ。

火縄を、グイッと握り直した。

「——津矢さん！」

真弓の声と同時に、津矢の手から、ピュッと、小石が飛んだ。

——わッ……と叫んで、源八の体が、キリッと一回転、そのまま滝壺へ落ちて行った。

が……、この声は、滝の音に消されて少将の耳には聞えなかった……。

風雲下田港

「——御前……」

吉奈を出て二日目の真夜中……。伊豆下田の旅籠鵜ノ島屋の奥まった座敷である。

墨染の少将は、押し殺した喜平太の声に眼をさました。

「——御前……」

「起きている。入るがよい」

「——御免……」

喜平太は、ソッと襖をあけて、暗い部屋へ入って来た。行燈の灯は、消してあったのである。

「怪しいものが、庭へ忍びこんでおります」

「ひとりか？」

「三人のようでございます」

「男か？」

「わかりませぬ。いずれも、黒装束の上、面を包んでおります」

少将、ふッと、肩の力を抜いた。

——真弓、深雪、それに津矢というあの奇妙な山の娘の三人が、伊豆屋のお石を狙って忍びこんだに違いない。

少将は、とっさにそう考えたのである。

——あせるな……と、天城の麓明神で深雪にいって

おいたが、やはり、眼前に仇敵を見ては、黙って見逃がすことが出来ないのであろう……。

少将は、ひとり心の中でうなずいて立ち上ると、暗がりの中で刀を握った。

「——行ってみよう……。案内してくれ」

「はい……。木野どのが、見張っております」

「木野が!?　喜平太、いまなん時じゃ？」

「は……かれこれ四ツ半（十一時）でございましょう」

「そなたと木野は、このような時刻に、どうして、怪しい影を見つけたのじゃ？」

「え!?　は、はい……、それは……」

「よいよい……」

少将は、ニッコリ笑って部屋を出た。

浪の音が、すぐ近くに聞えてくる。——南伊豆の晩秋の夜は、春の夜のように暖かく、潮の香が、ほのかに流れていた。

——喜平太と木野は、このおだやかな夜気の中で、更けて行くのも忘れ、楽しく語らっていたのであろう。そして、たまたま忍び込んで来た三人の姿に気付いたのであろう……。

「——あ……、御前！」

喜平太が、ゴクリッと、のどを鳴らした。

少将も、同時に気付いた。

ピタリッと閉め切った雨戸を楯にとって、木野が、三人の黒い姿の前に立ちふさがっていたのである。

その雨戸の向うの部屋には、伊豆屋のお石が寝ているはずであった。

「——あなた方は、何をなさるお積りです？」

木野が、低いが、シッカリした声で言った。

が、黒い影は、それに答えず、静かに、間隔をとって左右に三人が別れた。——三方から、木野を狙う鶴翼の陣形である。

「——御前！　木野どのが危のうございます」

「待て……。騒ぐな……」

何を考えたのか、少将は、飛び出そうとする喜平太を押えた。

「——卑怯ッ……。名乗れッ……」

木野の口から、激しい声が飛んだ。

が、三人の黒装束は、依然として口を開かず、スラリッと刀を抜くと、三方から、ジリジリッと、木野へ迫って行った。

木野は、言葉の激しさとは反対に、ダラリと、両手を下げたままである。——だが、これこそ、応変夢幻

の構えであった。
「――たーッ！」
突然、右側の影がピューッとすくいあげるように斬り込んで行った。
「おうッ！」
サッと、木野は袖を上空にひるがえした。事実、両袖が木野の頭上に白い花弁のようにひるがえったように見えたのであった。
が、袖とは反対に、木野の女体は黒装束の女達の背後に滑り出していた。
「あッ、このやろう！」
津矢が叫んだ。津矢と木野は同時にはげしい跳躍をみせた。二羽の白鳥と黒鳥が空間にもつれ合ったように見えた次の瞬間、ふたりは屋根の突角で睨み合っていた。
「味なことやるナ！」
津矢が吐き出した時、真弓も影のように屋根に舞い上ってきた。
「津矢、この場はわたしが引き受けたッ。早く！」
「あねさま、津矢はどうしてもこいつを斬る！」
「ぐずぐずしていては駄目！　早ようお石をッ」
真弓は歯がゆく叫んだ。じっさい暇どっているばあいではなかった。と――、その時、
「――やめろ！　今宵は三人の敗けだ」
出し抜けに、庭先の木蔭から現われた虚無僧姿の男が言った。いつ、どうしてこの場に潜んでいたのか誰にも見当がつかなかった。
津矢は歯ぎしりするように、
「俺達が敗けたッ？　なぜだッ。まだ、勝負はついてないぞッ」
「ハハハ……。わからぬか？」
虚無僧は、静かに前へ出て来ると、天蓋越しに、三人を眺めた。
「そなた達の敵は、この女か、それとも伊豆屋の内儀か？」
「決ってらッ。お石を斬るんだッ」
「そのお石とやらは、この女がそなた達三人を喰いとめている間に、ソッと、墨染の少将の部屋へ逃げこんでしもうたわ」
「本当かッ!?」
「じゃによって、そなた達の敗けと申したのだ」
「糞ッ！」
津矢は、真弓の方を見た。
「あねさま、どうするッ？」

「残念ながら、今宵も、お石をあきらめねばなりますまい」
「少将の部屋では、都合が悪いのか？」
「あの方は、敵にしとうはありませぬ」
「深雪さんもか？」
三番目の影は、無言でうなずいた。
「よし……。引揚げよう……」
それから津矢は、ピシャッと、鍔を鳴らして刀を納めると、地上に降り立って虚無僧の前にすすんだ。
「お前、誰だ？」
「虚無僧にむかって、名をたずねるな、津矢――」
「けッ。俺の名を覚えたな。でも、平気だ、あねさま、帰ろうッ」
黒装束の女三人は、音もなく姿を消した。
「――さらばじゃ……」
虚無僧も遠ざかって行く。つねに、非常の事態に忽然として現われ、風のように去って行く男――この虚無僧が、味方とは断定しがたいが、敵の一味でないことはたしかである。
恐らく、真弓達の動静をどこかで、つねに見まもっているにちがいない。勿論、彼女達はこの男が何ものかはわからない。しかし、真弓達のことを向うではかなり詳しく知っているようであった。
ただ――なぜか、木野だけはこの虚無僧にひとことも口をきかずに家のなかにはいって行った。
「――木野……」
少将と喜平太が、植木の蔭から、木野へ近づいて行った。
「あ……。御前、怪しいもの達は立ち去りました」
「うン……知っている。喜平太と見ていたのじゃ」
「まア！」
木野は、チラッと、喜平太を見た。――助勢もせず、高見の見物をしていたことを、なじるような瞳である。
「木野どの、拙者は、飛び出そうと思うたのじゃが……、そのう御前が……」
「ハハハ……。木野、喜平太を責めるな。わしがとめた。わしはあの虚無僧がソッと近づいて来るのに気付いていたのじゃ」
「あの方は、どなたでございましょう」
「木野にも、わからぬか？」
少将は、ふッと口許に笑いを浮かべた。
が……木野は、それに気付かぬような素振りで、こだわりもなく答えた。

「はい、わかりませぬ」
「そうか……。いずれわかるであろう」
そう言うと、少将は、もう、きびすを返していた。
虚無僧が言ったように、伊豆屋のお石は、少将の部屋で震えていた。
「――あ――怖ろしゅうございました……」
木野があかりを入れると、お石は、ホーッと溜め息をついた。
「あのひと達、なにものでございましょう」
「わしは、あの三人を知っている。神卜仙女と名のった目白の巫女の真弓、大奥の女中深雪、もうひとりは、金山の女人夫津矢という女じゃ」
「まア……このわたしとは縁もゆかりもないおなご衆ばかりでございますな。なぜ、しつこくわたしを狙うのでございましょう」
「あながち、狂人共とも思われぬ。そなたを狙うには、それだけのわけがあるのじゃろう」
「あれ、御前！　それでは、わたくしが悪いことをしたと仰有るのでございますか？」
「そうは言わぬ。お内儀は正しい積りでも、向うではそうはとらぬ場合もあるわけじゃ。おう……そうじゃ」

少将は、突然思いついたように、お石の顔を見詰めた。
「そなたはもと、大久保家につかえていたのじゃな？」
「え!?　は……はい」
「奥勤めの女中などといえば、互になにかとうるさいものと聞いている。その頃、誰からか恨みをうけるようなことはなかったか？」
「さア……お、おぼえておりませぬ……」
お石は、急にそわそわと言葉を濁すと、挨拶もそこそこに、戻って行った。――勿論、護衛役に、木野を借りて行ったのである。
少将は、再び床に入ったが、突然、はッと飛び起きると、急いで枕の下をさぐってみた。
「――無い！　やりおったわい……」
少将は、スーッと、息を吸いこんだ。――伊豆山神図絵が盗まれていたのである。
少将は、ジッと眼をとじて、考え続けていた。
――伊豆山神図絵を奪ったものは……お石か？
いや、お石は、黒頭巾の真弓たちの襲撃に気もそぞろになった筈である。
とすると、図絵を奪ったものは、……正体不明のあ

の虚無僧の他にはない。
「――間違いもなく、あの男のしわざじゃ――」
少将は、ひとりごとをつぶやいた。
第一に、少将はあの虚無僧が、大仁の金山明神の境内で、お浅のふところから図絵をぬきとろうとしたのを知っている。
それを、猟師の鼻撃ち源八に種子島でおどかされ、絵図は少将の手に入ったのであった。
第二に、虚無僧は、伊豆屋のお石が、少将の部屋へ逃げこんだことを知っていた。
ということは、とりもなおさず、虚無僧自身も少将の部屋へ来たということになる。
――敵か？　味方か？
吉奈への道中で一度と、吉奈の湯泉神社で一度……。都合二度まで、少将はあの虚無僧の助勢を受けている。
その点では、味方とも考えられる。
が……、一方では、山神図絵を盗んで行った。――敵であろうか……。
「――とにかく、奇妙な男じゃ……」
再びつぶやいた少将が、キッと、襖の方へ視線を向けた。

「――そこにいるのは、誰じゃッ？」
と……、スーッと、音もなく、襖が開いた。――黒装束はもとのままだが、黒頭巾はとって、斜かいに背負うた真弓が手をついていたのであった。
「――はて……、どこかで見た顔じゃな」
そういってから少将は、ポンと、膝を叩いた。
「それそれ、わしが吉奈川の断崖から足を踏みすべらせたとき救うてくれた、あの川ノリ取りどのであったな」
「御前……、御冗談を……」
「なに、冗談!?　では、神卜仙女真弓と呼べというのか？」
「はい……。真弓でございます。が、もはや、神卜仙女などとは名乗りませぬ。もと公儀金山奉行、大久保石見守さまの遺臣、奥家老田沢頼母の娘真弓でございます」
「わしに、そのようなことを打ち明けてもよいのか？」
「御前を信じて申上げるのでございます」
「わしが、信じられるか？」
「はい……。そして、わたくし共の願いも、お聞きとどけ下さいますことを信じております」

「そなた達の願い？」
「御前、手をお引き願いとう存じます。伊豆屋のお石を斬らせて下さいませ」
「いやじゃ。手は引かぬぞッ」
少将は、ピシリッと、真弓の言葉をはね返した。
「それでは、不本意ながら、わたくし共は、御前を敵に廻さねばなりませぬ」
真弓は、キッと、少将を見詰めた。
「わしは、天城の麓明神で、あせってはならぬと、深雪にゆうた筈じゃ」
「聞きました。でも……」
「待て……。そなた達は、眼先きの小敵にまどわされて、大敵のあることを忘れている」
「いいえ……。怨敵本多佐渡守、必ず討ちまする」
「まず、討てまい……。家老熊取内膳を傷つけた。それだけでも、佐渡守は護りをかため、不審の者は近づけまい。その上お石を斬ってみい。護りはいよいよ堅く、断じて佐渡守へは近づけぬことになるぞ」
「御前……」
ジッと、少将を見詰める真弓の眼に、強い疑惑の色があふれた。
「なぜ、そのようなことを仰有るのでございます？
いまを時めく老中佐渡守を狙うわたくし共に、なぜ助言なさるのでございます？」
「真弓……」
少将はスッと立ち上ると、真弓に近づいてソッと手を握った。
「——あ！　御前……」
「何も言わずに、こちらへ来るがよい」
少将は、真弓を部屋へ引入れると、ピタリッと、襖を閉めた。
そればかりか、傍らの行燈を、ふッと吹き消したのである。
「まア、御前……」
「これ、静かにせよと申しているのじゃ」
——少将は、真っ暗闇の中で、真弓の手を、ソッと、胸へ引き寄せた。
「ご……御前ッ。あ、あなたさまは……」
「騒ぐな、真弓。わしはいま、そなたへ、全てを教えているのじゃ。このことを知っているのは、喜平太と、御台所のただ二人」
「えッ！　御台さまが御存知!?」
「なればこそ、わしは、悠々としていられる。わしが、行儀作法指南役として江戸へ下向することの出来

たのも、全ては御台所のおはからい……」
「あ、あなたさまは、ど、どなたでございます？」
「ハハハ……、いまの名は、墨染の少将高平。が、十年前の名は……」
少将は、真弓の耳へ口をよせてささやいた。
「げっ！　で、では……」
「その証拠は、これじゃ……」
少将は、ふところの奥深くから小さな包みを引き出すと、真弓に握らせた。
「こ、これは！」
「天の鏡……」
「はは ッ！」
真弓は、暗がりの中で二三尺飛びさがると、ピタリッと平伏した。
「が……、真弓。天地人木火土金水、御鏡の八片が揃うまで、誰にも言うな。地の鏡を持ったそなたの胸にだけたたんでおけ……」
少将と真弓の間にどんな話があったのか、それから四半刻の後、黒い影が三つ、風のように、下田の町から町を走り抜けていた。
先頭に立っているのは真弓である。
「——あねさまッ……」
真弓に続いて走っている津矢が叫んだ。
「どうしたんだ？　なにがあったんだ？」
「男を追いかけているのじゃ。さきほどの虚無僧をッ」
「あいつが、どうかしたのかッ」
「少将さまのところから、大事な図絵を盗んで行ったのじゃッ？」
「それを、なぜオレたちが追わねばならぬのじゃ？」
「その図絵には、石見守さまの秘宝のありかが書いてあるのじゃッ」
「畜生めッ！」
津矢は、その上たずねようとはしなかった。
しんがりの深雪は、黙って走っている。——全てを、真弓の指示にまかせているのだ。
下田の町の北はずれに、八幡神社がある。土地の氏神だった。——が、その暗い境内に、虚無僧の姿は見当らなかった。
「津矢ッ、そなたは伊豆にくわしい。下田のやしろは？」
「この八幡さまと、柿崎の鷲島神社だ」
「その柿崎というのは？」
「川を渡って来て十八丁だ」

「案内せいッ」
川というのは、下田の町の東側を流れる稲生沢川である。——その川口が下田港となっている……。
川は小舟で渡った。
あとは、武ヶ浜、間戸ヶ浜と、美しい白浜の汀づたい……。
「いたぞッ——」
先きに立って走っていた津矢が叫んだ。——間戸ヶ浜の波打ちぎわで、あの虚無僧に追いついたのである。
「——ほう……そなた達か……」
虚無僧が、静かに振返った。
「返せッ！　少将のところから盗んで行ったものがあるだろうッ」
すると、その声に、虚無僧は、
「フフ……」
と、天蓋の中で笑った。
「そなたとは、吉奈の湯泉神社でも会うたな。蛇取りの姥とやらといっしょに……。確か、津矢とゆうたな」
「やかましいッ。——あねさまッ」
その声に、真弓がズイッと前へ出た。
「山神図絵を、お返し願いましょう」
「なぜだな？　少将に頼まれたか？」
「石見守さまの秘宝は、わたくしども旧臣が護らねばなりませぬ」
「いやだ」
そう言うのと同時に、虚無僧の手から、黒い玉が飛んだ。チカッと、火花が散ると、すさまじい黒煙が立ちのぼる。
「あっ！　またやりゃがったッ……」
煙の中で、津矢が叫んだ。——が、もう、虚無僧の姿はなかった……。

船路の鬼

次ぎの日の昼近く、千々輪の後室お浅が、ヒョッコリ、鵜ノ島屋へ姿を現わした。
「ほう、大仁このかたじゃな。どうしていられた？」
「御前に捨てられ、熊取さまを拾いました」
「はて……、どういうことなのじゃ？」
「修善寺の大火の夜、行列は馬で行っておしまいになりました。わたくしは、おあとを追うて行こうと、街道へ出ましたところ、血まみれの熊取さまに出会うたのでございます」
少将は、腹の中で笑っていた。
大仁金山明神での出来事を、お浅は隠している。危うく鼻撃ち源八から汚されるところを、少将に救われたとは、夢にも知らないお浅なのである。
「ほほう……、それはそれは」
「それでわたくしは、取敢えず熊取さまを大仁の宿にお連れして手当の上、船で沼津へ」
「ではそなた、沼津から船で来たのか？」
「はい、幸い沼津の医師の手当で、熊取さまもお命だけはとり止めました。丁度伊豆屋どのの廻船が、鳥羽から沼津へ立ち寄り、昨夜下田廻りで江戸へ向うと聞きましたので……」
「なるほど……。それで今朝この港へ入り、わしのことを聞いたのじゃな。で……、熊取はどうした？」
「船に、寝かせてございます」
「ほう……、江戸へ移すのか。では、見舞うてやらずばなるまい」
そのとき、鵜ノ島屋の女房が、あわただしく駈け込んで来た。
「——御前さま、ただいま表へ、韮山代官所のお役人が、早馬でおつきでございます」
「わしに会いたいというのか？」
「はい、お玉の方さまのお使いとか……」
「通してくれ」
やがて、野駈け袴に、たすき鉢巻きの早打ち姿の男が、庭先きへ案内されて来た。
「韮山代官所手付同心、津山善八と申しまする。お玉の方さまより火急のお使……。江戸表よりのお召しにより、お玉の方さまには、早々、お江戸へお戻りでございます。つきましては、少将さまには、下田より、海路江戸へ向かわれますようとのおおせでございました」
「お玉の方さまは、いつ御出立じゃ？」
「今朝未明、吉奈をお立ちでございました」
「なに、もう立たれたか？」
「は……、途中、道を急ぎ、今日中に三島を過ぎて、箱根泊りの御予定でございます」
その頃、下田港に沖がかりした伊豆屋の廻船毘沙門丸の胴の間では、熊取内膳と傀儡師の黒太夫がヒソヒソと語らっていた。
「——十字兵衛は片輪になったか……」
内膳は荷物に寄りかかり、苦しげにいった。
「天城の小屋で口惜しがってますよ。片腕でも必ず少

将を斬るとね。が、女で陥せず、刀で勝てず、骨の折れる男ですな、少将は……」

が、内膳はやつれた顔で、ニヤリと笑った。

「あとは、計略で倒すほかはあるまい。黒太夫、わしは、もう手を打ってあるのだ……」

「へへへ……、見直しましたよ」

黒太夫は、黄色い歯をむき出して笑った。

「あの傷でしたからね、さすがの御家老さまも、弱気になっておいでだろうと思っていたんですがね」

「フフフ……、命ある限り、わしは目的を捨てぬ男だ」

内膳は、不敵な笑いを浮かべたが、全身の傷はまだ癒り切らず、荷物に依りかかった姿は、かなり苦しそうだった。

その頃鵜ノ島屋の奥座敷では、少将がお浅とお石から、やいのやいのと責められていた。

「ねェ、御前……、どうせ江戸へお戻りなら、お玉の方さまの仰有るとおり、伊豆屋どのの船で御一緒に参りとうございます。また天城越えは、大変でございますよ」

お浅がそういえば、お石は、すがらんばかりにして、手を合せた。

「そうして下さまいしよ、御前……。わたしは、御前と離れると、またいつ襲われるかと心配で――」

「それも、船に乗るまでのこと……。下田港を出てしまえば、あの黒装束の女達も、海の上まで追うて来ることは出来まい」

「いいえ御前……。大島沖には、ときどき海賊の船も現われるとやら。あのおなご達、どんなツテで、海賊に渡りをつけ、襲いかからぬとも限りませぬ」

「困ったのう……。わしはまだ、この伊豆に訪ねてみたい土地が、幾つかある。出来ればあとへ残りたいのじゃが……」

「御前……。こんな歌がございます。――江戸の品川、朝山まけば、晩にゃ下田の沖がかり……。船なら半日でございますよ。いつでも船を御用意いたします。またお出直しになればよいではございませんか」

「やれやれ、女衆には勝てぬのう……」

諦めたような少将の言葉に、お浅とお石は、ニッコリと顔を見合せた。

その日の夕方、少将は、喜平太と木野を連れ、お浅、お石と共に鵜ノ島屋を出た。

「――よッ！　来た来た……御家老ッ、少将を乗せた小舟がやって来ますぜ」

傀儡師の黒太夫が、胴の間へ駈けこんで、内膳へしらせた。

「来たか……。黒太夫、わしは軍師じゃろう。まさか、韮山代官所手付き同心と名乗り、お玉の方の使者といった男が、ニセ者であったとは、少将も気がつくまい」

「ところで、こいつアまずいね。あたしゃ、どっかへ隠れなくちゃ……」

「体へ莚を巻きつけ、荷物に化けて、帆綱の下へでも転がっておれ。幸い、そなたは体が小さいから都合がよい」

「やれ……、情ないことに相成り候……か」

黒太夫は、胴の間から飛び出すと、内膳にいわれたとおり、荒莚をひっかぶって、艫の頼み荷の間に転った。

それからしばらくして、少将達を乗せた毘沙門丸は錨をあげた。もりもりと巻きあげた白帆に、赤々と夕陽が映えている……。

「――飛んだ災難であった……」

毘沙門丸に乗りこんだ少将は、すぐ、胴の間に、内膳を見舞った。

「これは！　わざわざのお見舞い、おそれいります」

「傷は、どうじゃ？」

「はい……。全身に十七創を受けました。危く、修善寺の土になるところでございました」

「その折り、伊豆屋の内儀も襲われたそうじゃが、実はな、昨夜も下田で二度目の襲撃があってね」

「ほう……。執念深い女共……。下世話に申す。外道の逆恨みでございますよ」

「大久保石見守の旧臣と名乗っているそうじゃな」

「はい……。十年前、罪あって、石見守は切腹。その一族は、小田原城外酒匂河原に於てはりつけとなりました。石見守の罪をただしたは主人本多佐渡守……。わたくしは、主命によって、石見守の一族を捕え、処刑いたしました。それだけでございますよ」

「罪があれば、いたしかたないのう」

「はい……」

「罪あれば、止むを得ぬのう」

同じ言葉を繰り返す少将を、内膳は、ふッと見上げた。

「が……、内膳、石見守の罪は、まこと、死を賜わるべきものであったのかな？」

「え？　御前は、公儀の処置を間違いであったと申されますか？」

「いや、そうではない。ただ、人が人を裁くことじゃからのう」

「証拠は充分ございました。当時、大久保家の奥勤めをしていたお石どのが、数々取揃えたのでございますよ」

「そのお石は、いまは廻船問屋伊豆屋の内儀で、百万の富を持っているとか……。一奥女中にしてそれじゃ、佐渡どの、並びにそなたのふところへも何万両か何千両か――」

「と、飛んでもないことをおおせられます！」

「いや、わしがいうのではない。石見守の旧臣達が、そう考えるかもしれぬとゆうているのじゃ。ハハハ……、気にさわったら、ゆるしてくりゃれ」

毘沙門丸は、下田港須崎の鼻を廻って、外海へ乗り出していた。

暮色の中に黒ずんでいた伊豆の山々も、やがて夜のとばりに包まれ、それに代って、あかあかと夜空をこがす大島三原山の御神火が近づいてくる。

この辺りから、毘沙門丸は、大きくゆれはじめた。

――相模灘へ流れこむ黒潮と、九十九里沿いに下って来た親潮とが、ちょうどこの辺りでぶっつかるからである。

お石は、むかつく胸を押えて船底から出てくると、船べりにつかまって、ホーッと、大きく呼吸をした。

と……

「――石……。これ……、お石……」

どこからともなく、息絶え絶えな女の声が、潮風に乗って聞えて来た……。

お石は、ギョッと振返った。

「――誰？　いま、あたしを呼んだのは、誰だえ？」

毘沙門丸に乗っている女は、お石の他には、お浅と木野の二人だけである。――この二人が、お石を呼び捨てにする筈はない……。

お石は、それだけに、不安であった。

――あの女達が、ひそかに乗りこんでいたのか……？

嫌やでも、そう考えねばならなかったのである。

すると、また、吹きつける風に吹き千切られるような、おどろおどろとした声が聞えてきた――。

「石……、わらわじゃ……。そなた、わらわの声を忘れたかえ？　無理もない……。十年も昔のことじゃものなア……」

「えッ!?　十年……。誰ッ……。誰じゃッ？」

「石……。見えぬか。ここにいるわいのう」

そういう声と同時に、二十五反の巨大な帆を支える太い帆柱の蔭から、スーッと、白い影が浮きあがった。

長い髪を、おどろに振り乱し、ジーッとお石を見詰める瞳には、無限の恨みがこめられている。のどと、両脇に、ベットリ、どす黒い影がしみこんでいた。

――間違いもなく、白無垢を染める血潮である。

「――あ……、あッ！」

お石は、まばたきもせず、ただ口をパクパクと動かしているだけである。

「石……、わらわじゃわいなア」

「お、奥方さまッ」

「おう、思い出したかえ……。あ――せつないぞえ、石。そなたたちに計られ、わらわは、これ、このとおり、ここと、ここと、ここを、ブスリ……、ブスリと錆びた槍で突かれて……」

「お、お許し下されませッ」

お石は、ヘタヘタヘタッと、その場へ坐りこんでしまった。

「わ、わたくしは、な、内膳さまに頼まれてッ……」

「ありもせぬ証拠をこしらえたのじゃな？　そのため、殿は御切腹ッ、わらわははりつけ……。わらわだけではないぞえ……。いとしいこども達も、弟達も、伯父叔母達まで、二十一人が……。ブスリ……、ブスリ……と」

白い影は、ツツツッと、お石のそばへ近づいて行った。

「キャーッ！」

お石は、はじかれたように立ち上がると、胴の間へ逃げこもうとした。

が、それより早く、白い影はスーッと手を伸ばすと、ググッと、お石の髪を摑んでいた。

「あーッ、お許しッ……」

そう叫ぶのと同時に、うーッと、虚空を摑んだお石は、そのまま、気を失ってしまった。

と、そのとき、艫に積みあげられている荷物の間から、ムクムクと頭を持ち上げたのは、荒莚にくるまっていた黒太夫であった。

「――野郎ッ！」

黒太夫は片膝を立てると、ふところをさぐって手裏剣を摑み、サッと、頭上へ振りあげた。

とたんに、――チカッ……と、黒太夫は眼の中で稲妻が走るのをおぼえた。

「――グエッ……」

黒太夫は、何者からか思い切り横ッ面を殴り飛ばさ

れ、帆綱の上へぶッ倒れると、そのまま動かなくなった。

その傍らに、ヌーッとつッ立ったのは、喜平太である。

「――御前……」

喜平太は、気を失ったお石の横に立っている白い影へ近づいて行った。

「傀儡師の黒太夫めが、潜んでおりました」

「敵も、裏を裏をと考えるようじゃな」

そう答えた白い影は、墨染の少将だった。

「凄うございました……。ここと、ここを、ブスリ、ブスリと突かれた……と仰有りましたときには、御前と存じておりながら、ゾッといたしました」

「わしも、不思議な気持ちであった。これも、大久保一族の恨みが、わしに乗り移っていたためかもしれぬ」

「お石の眼には、亡き奥方さまとうつったようでございますな。いや、争えぬものでございます」

「これ！　声が高いぞ……」

が……、喜平太は、あけっ放しにニヤリと笑った。

「なに……、この風音でございます。船はギチギチときしんでおります。少しぐらいの声は、聞きとれるものではございません」

少将は、着ていた白無垢と、かぶっていた乱れ髪のかもじをとると、船の外へ投げ捨てた。

「――ところで御前、どうなさいます？」

喜平太が、お石を見下してたずねた。

「このままでよい。やがて気が付くであろう。或は、船頭共がみつけて介抱するかもしれぬ」

「このまま、お助けになるのですか？」

「助ける？　助けるものか。もっと、もっと苦しめてやるのじゃ」

「では、黒太夫はどういたしましょう」

「それも、そのままでよかろう」

「いっそのこと、あいつ、海へ放りこんでやりましょうか？　ちょうどいま大島沖、泳ぎさえ知っておれば、死ぬこともありますまい」

「いやいや。あのままにしておく方が面白い。内膳が、どう処置するか見ものというものじゃ。さ……、怪しまれてはならぬ。そなたは胴の間へ行っておれ。わしは、しばらく潮風に吹かれてから行く」

少将は、喜平太を船の中へ戻らせると、舳先に立って暗い海を眺めた。

右舷にチラチラと見える灯火は、大島の元村であろう。

と……、出し抜けに、サッと少将に飛びかかり、海へ突き落そうとしたものがあった！

とっさに、少将は、身をかわしていた。

「何者じゃッ！」

が……、相手は、少将の声に答えず、やにわに刀を抜き放つと、切りかかって来た。

「卑怯者ッ！」

少将は、ガッキと、男のきき腕を抱えこんだ。

「よッ！　そちはッ……」

そむける男の顔をのぞきこんだ少将は、夜眼にもはっきり、それが、今日の昼間、韮山代官所の手付きの同心と名乗って訪れた男であったことを知った。

「さては……、計ったな」

「えーいッ！」

男は、渾身の力で少将の手を振り放すと、丸太ン棒でも振り廻すように、少将の頭上へ一力を浴びせて来た。

「たわけッ！」

ヒラリと身をかわした少将が、ダッと、男の腰を蹴飛ばした。

「あッ！　あわわわッ……」

男の声を、折からの西風が吹き飛ばした。トントントンと、たたらを踏んだ男が、ザザザーンと、自ら大海へ姿を消して行ったのである。

少将は、暗い海面を見下した。

「雑魚よ、泳げ……。大島は近いぞ……」

それからしばらくして、毘沙門丸の中は、大騒ぎになった。――水夫達が、まだ意識をとり戻さぬ伊豆屋のお石と黒太夫を、胴の間へ担ぎ込んで来たのである。

手当てを受けて、先きに息を吹き返したのは、黒太夫であった。

「――あッ！」

黒太夫は、キョトキョトと辺りを見廻した。

熊取内膳は、にがりきった顔をしている。

少将は、ニッコリ、微笑した。

「――はて……、どこかで見たことのある男じゃが……、そちの名は？」

ひとの悪い少将の言葉に、黒太夫は、ゴクリッと一度生唾を呑みこんだ。が……、すぐ、ケロッとした顔で、ヌケヌケと言ったものである。

「へエ……、あっしゃ、黒太夫と申す、人形使いでござんすが……、こ、ここは、どこでござんしょう？」

「そなた、知らずにこの船に乗ったというのか？」
「と、飛んでもございません。あっしは、下田の町で、かせいでいたんでございますよ。すると、突然、えたいの知れねェ化物にとっ捕まりましてね、ボーンと、投げられたので……。気が付いたのがここってわけでございますよ」
「ハハハ、面白いのう」
「ハア？　……あれは天狗かな？　それとも、海坊主かな……」
内膳は、人を喰った黒太夫の話に、ホッとした顔をした。
一方、お浅は冷やかに黒太夫を見詰め、お石はまだ、眼を開かなかった……。

剣鬼誕生

熊取内膳と六角十字兵衛は、飛び石づたいに、奥庭の中ほどにある茶室に近づいて行った。
伊豆屋の廻船毘沙門丸で墨染の少将たちが江戸へ帰ってからひと月……。江戸にも冬が訪れ、この日は、夕刻からチラチラと初雪が舞い落ちていた。
「――殿……」
内膳は、茶室の外から声を掛けた。
「――内膳か……」
本多佐渡守の陰気な声が応えた。
「入れ……。雪は、積ったか？」
「うっすらと……。積るというほどではございませぬ。殿……、ただいま、十字兵衛が立ち戻りました」
「生きて戻ったか……。入れ……」
内膳と十字兵衛は、静かに茶室へ入って行った。
内膳は、ちょっと片脚をひきずり、十字兵衛は、左へ体を傾がせている。――内膳が全身に受けた傷は殆んどなおっているが、左脚の傷だけが、はかばかしくなかった。
十字兵衛は、遂に左腕一本になってしまった。そのため体の重心が左へ片より体がかしいでいるのである。
「――五字兵衛……」
「は!?」
十字兵衛は、ふッと、佐渡守の顔を見つめた。
「十字兵衛が片腕になった。半分じゃから五字兵衛でよかろう」
「殿ッ……。もはや六角十字兵衛、ものの役に立たぬと申されますか？」

「その体で、何が出来る」
「わたくしは、右手と同時に、一切の雑念を捨てました。残る命は墨染の少将を斬ることに捧げます」
「斬れるか？　五体満足でも負けた相手じゃぞ」
「伊豆山中の療養中、片手無双の一ッ手を編み出しました。必ず少将を斬ります」
そう言う十字兵衛の顔には、不気味な殺気がみなぎっていた――剣鬼というべき、凄まじい殺気である。
「木野という女のことを、聞いているぞ」
「忘れました。いや、忘れませぬ。これも、必ず斬ります」
「わしは、少し甘かったようじゃ」
佐渡守は、突然話題を変えて、内膳へ話しかけた。
「墨染の少将を、甘く見過ぎていた」
「殿だけではありませぬ。わたくしも、十字兵衛も、伊豆屋のお石も千々輪のお浅どのも、更に大奥の染村どのまで、それぞれ見方は異なっておりますが、等しく、少将を甘く見過ぎていたようでございます」
「うム、女や金で抱き込める相手ではなかった。もはや残る手段は……」
佐渡守は、眼顔で、内膳と十字兵衛を、近くに寄れと招いた。
「――わしは、青山の下屋敷へ、少将を招こうと思うが、どうじゃ？　新しい茶室が出来上ったについては、炉開きにおいで願いたい……と思うのじゃ」
そう言う佐渡守を、内膳と十字兵衛が、じっと見詰めた。
「それで、殿じきじき、もう一度少将に抱きこみの手を伸ばすお積りでございますか？」
内膳がたずねると、佐渡守は、大きく首を横に振った。
「いや、もう味方にしようとは考えぬ。と同時に、味方でないものは敵と考える。当将軍家を倒し、駿河の忠長卿を千代田城の主にお迎えするためには、凡ゆる敵を除かねばならぬ」
「わかりました！」
十字兵衛が、ひと膝乗り出した。
「青山のお下屋敷なれば、恰好の場所……。十字兵衛の隻手剣を、少将の細首に見舞うてやります」
「いやいや……。下屋敷の茶室には、ちと細工が施してある。これがうまく行けば、同じ細工を宇都宮の城内にも施そうと思うているのじゃ」
「その細工とは？」
「茶室は、釣り天井じゃ」

「釣り天井!?」
内膳と十字兵衛が、ゴクリと、生唾をのみこんだ。
「よいか……。茶室に少将を入れて、仕掛けの綱を切って落す。一瞬にして、五十貫の石を載せた天井が、少将を押しつぶす」
「殿……、少将は、なかなか用心深い男、ひとりで、茶室へ入って行きまするかな?」
「ひとりではない。わしもいっしょに入る」
「それでは、仕掛けの綱が切れませぬ」
「抜かりはない、釣り天井には、切り込みがしてある。炉前の主人の席は安泰じゃ。つぶされるのは、客席のものだけ」
「なる程……。左様な茶室、いつおこしらえになりました?」
「そち達が、伊豆で少将を追い廻しているあいだにこしらえた。ハハハ、不憫ながら、茶室の建造に当った大工五人は首をはねたわ」
内膳と十字兵衛とは、顔を見合せて、うなずきあった。
「のう十字兵衛。拙者は、そのお茶室に、大久保石見守の家来と名乗る女共も追い込んで、みな殺しにしてやりたいわい」
「おう、殿……。石見守の家来共と申せば、わたくしとお石を狙った不敵の女四人、どうやら、少将とつながりがあるようでござりまするぞ」
「ふン……。石見守か……。いまさら、その残党共になにが出来よう。見ておれ、少将を始め、その女共も、次ぎ次ぎに冥土へ旅立たせてやるわ。わしは――」
突然、十字兵衛が立ち上って、ダッと茶室から駈け出して行くとビシリッと、七、八間離れた暗がりへ、手裏剣を打ちこんだ……。
「――誰かいたか……」
佐渡守も茶室から出て来た。
「いや……」
十字兵衛は、しばらく耳を澄ましていたが、ふっと、息を抜いて佐渡守に一礼した。
「手応えがございません。お話中を失礼いたしました」
「左手一本では、手裏剣も思うようには投げられまい」
「殿はまだ、わたくしを疑うておいでございますな」
「疑いとうはないが、まだ腕前を見ておらぬのでのう」

「では……」
十字兵衛は、ポイッと、庭へ飛び降りると、一間半ほど離れたところで、スラリと刀を抜き、ビッタリッと体に密着させて、片手無双に構えた。
「殿……、そのお扇子を拝借……」
「これか?」
佐渡守が、手にしていた白扇を眺めたとき、熊取内膳も出て来た。
「御家老……。殿のお扇子を手裏剣のかわりとして、わたくしに投げつけていただきたい」
「どうするのだ?」
「切り落すのですよ。それも、ただ切り落すだけでは誰にでも出来るでしょう。わたくしは、かなめのところを切り落します」
「よし……。殿、お扇子をいただきまする」
内膳は、佐渡守から扇子を受けとると、キッと、身構えた。
「よいかッ」
「いつなりと……」
「扇子ではない。手裏剣の積りで投げる。貴公の体にさわれば、命がなくなったことになるぞ」
「承知……」
十字兵衛は、片手無双のまま、ヌッと立っている。
「――!」
内膳の手から、ピュッと扇子が飛んだ。――わざと意地悪く、右手の不自由な十字兵衛の弱点をついて、右の脇腹が狙われていた。が……、
「とうッ!」
ヒラリッと、十字兵衛が左へ飛んだ。同時に、ピューンと頭上へ跳ねあげられた扇子はパラリと開いて、ヒラヒラと飛び石の上へ舞い落ちた。
「――御家老、御検分を……」
十字兵衛の声に、内膳は白扇をとりあげて、ふっと驚きの色を浮かべると、佐渡守へ示した。――かなめのところから、スパリッと切り落されていたのである。
「美事じゃ、十字兵衛。茶室の釣り天井の綱を切り落す役目は、そちにまかせるぞ」
「殿……、左様なことを口外なされては……」
「大事ない。誰も聞いてはおらぬわ」
が……、実は、さきほどから暗がりの中で、ジッと息を殺している腰元風の女があった……。
女は、矢がすりに十の字の帯……。身分の低い腰元姿であった。

年齢は二十余りであろう……。

ジッと、松の木に寄り添って、息を止め、身動きもしない。

やがて、佐渡守が内膳と十字兵衛を連れて、再び茶室へ戻って行くと、女は、ホッと溜め息をついた。

それからソッと右手で、左の袂の袖をさぐると、グイッと、手裏剣を引き抜いた。

十字兵衛のカンは狂っていなかったのである。投げられた手裏剣は、女の左袖を、グサリッと松の幹へ縫いつけていたのだ。

あのとき、もしも十字兵衛がこの暗がりに入って来ていたならば、女は、逃げることも出来ず、片手斬りに倒されていたかもしれない。

が……袖を松の幹に縫いつけられた瞬間、女は慌てず、逃げようともせず、呼吸をとめていたのである。

これは賢明であった。耳を澄ました十字兵衛も、女の気配を感じ取ることは出来なかったのである。

「――一枝どの……。一枝どの……」

遠くで、別の女の呼び声が聞えると、松の下の女は、ふッと顔色を動かした。――一枝とは、この女の名であった……。

「――一枝どの……。いられませぬか、一枝どの……」

呼び声が、段々近づいて来る。

一枝は、握っていた手裏剣をもとのように、松の幹へ、力いっぱい押しこむと、呼び声とは反対の方へ、足音を忍ばせて走った。

しばらくすると、一枝を呼ぶ女が、茶室へ近づいて来た。――同じような腰元姿である。

手に、雪洞を持ち、辺りを照らしながら一枝をさがしている。

「――どうしたのだ!?」

茶室から出て来た十字兵衛が、荒々しくたずねた。

「は、はい……、お耳ざわりでございましたか？」

「誰をさがしているのだ？」

「一枝どのと申す、お端下でございます」

「その女、こちらへ来たのか？」

「いいえ……、そういうわけではございませぬが。お部屋に姿が見えませぬので……」

「しばらく、そこにおれッ」

十字兵衛は、茶室へ入って行った。

「殿……、一枝と申すお端下、御存知でございますか？」

「知らぬな。端下腰元まで、一々おぼえておられぬわい」

「或は、一枝なる女、話を立ち聞きいたしたかもしれませぬぞ。探して参ります」

十字兵衛は、茶室を飛び出すと、待っていた腰元の手から、雪洞をもぎとるようにして、手裏剣を投げた暗がりへ入って行った。

「――おう……」

十字兵衛は、見当をつけた松の幹に、手裏剣がつきささっているのを見て、首を傾げた。

「――まだまだ心もとないぞ、十字兵衛……」

いつか、佐渡守が、十字兵衛のうしろに近づいていた。

「片腕で少将を倒すのは、いささか心細いようでございますなア」

内膳までそういって松の木に近づくと、グイッと、手裏剣を引き抜いて、十字兵衛に差し出した。

「今宵は、何も申しますまい……」

十字兵衛は苦が笑いをして雪洞を内膳に渡すと、その手裏剣を受けとった。

「それにしても、殿……。一枝とやら申す腰元が見当らぬのは、不思議ではございませぬか」

「うム……、こちらへ来たのではないかもしれぬ」

「と同時に、こちらへ来て、どこかへ隠れたのかもしれませぬ」

「内膳……」

佐渡守は、内膳へ顔を向けた。

「大事の前の小事……などとはゆうておれぬかもしれぬな」

「左様……、蟻の一穴は恐ろしゅうございますからな」

「手分けをして、一枝を探してみい」

佐渡守はそういい残して、飛び石伝いに、寝所のある奥座敷の方へ戻って行った。

が……、茶室から三十間余りも来ると、ピタリと足を止めた。

――ザブリ……。キリキリキリ……、ザブリ……と、異様な水音が聞えて来たのである。

佐渡守は、ひかれるように、水音へ近づいて行ったが――

「――うッ……」

と、息を呑むと、また足を止めた。

井戸端であった。――そこで、若い腰元がひとり、腰布一枚になって水垢離をとっていたのである。

既に寒に入っていた。井戸の水は温いとはいえ、夜の風は冷たく、女の肌は、夜目にも蒼白んでいた。

キリキリキリッ……と、頭から水をかぶる。島田の髷が、ガックリ傾いている。

「――これ……」

佐渡守が、静かに声をかけると、女は、ギョッと顔をあげた。

が……、うしろに立っているのが主人佐渡守と知ると、抱えていた桶を投げ出すようにして、井戸端にうずくまり、両手をついた。

「――お、お許し下さいませ……」

「そちの名は？」

「は、はい……。お端下、一枝と申しまする」

「そちが一枝か？」

「え？」

「いや……。なんのための水垢離じゃ？」

「は、母が、大病の床に伏っておりまする」

「病気平癒祈願の水垢離か……」

そういって、じっと一枝を見詰める佐渡守の眼が、異様に光っていた。

佐渡守は、一枝に近づくと、無造作に女の肩を押えた。

「あれ、殿さま！」

「冷たい……。冷え切っているな。体に悪かろう。早う着物を着るがよい」

「は、はい……」

「着物を着たら、わしの部屋へ来い」

「え!?」

佐渡守は、既に、寝所へ歩き出していた。

「よいか、わしの部屋へ来い。話すことがあるのじゃ」

「はい……」

それからしばらくして、一枝は、おずおずと、佐渡守の寝所へ入って行った。

冷えていた体が、ぬくもったためか、一枝の顔がポッと紅潮している。その桜色の頬に、まだかわききらぬ髪が二タ筋三筋、ハラリと乱れかかっているのが、この上もなくなまめしかった。

佐渡守は、しとねに横たわり、大きな枕を脇の下にして寄りかかっていたが、期待以上の一枝の美しさに満足した。

「そちは、いつから屋敷にいる？」

「もはや、三年になりまする」

「ほう……、これはしもうた。三年もの間、わしは損をしたようじゃ。そちほどのものが、どうして眼につかなんだのであろう？」

「お端下のわたくしなど、殿のお目にとまる筈がございませぬ」

「そちは、今宵から腰元ではない」

「え!?」

「わしの側室じゃ」

「と、殿ッ……」

一枝は、慌ててあとへさがった。

――茶室での密談を盗み聞きした一枝は、佐渡守を始め内膳、十字兵衛の疑いをさけるために、寒中の水垢離という奇計をとったのである。

幸い、佐渡守は、少しも疑いを挟まなかったようである。が……、一枝の身には、予期せぬ難事が降りかかって来たわけだった。

「――と、殿ッ……。おそれながら、お……、お恨みに存じまする」

突然、一枝は両手をつくと、ポロポロと涙を落した。

「どうした。わしの側女になるのが嫌やか？」

「いいえ、そうではございませぬ。ただ……」

「ただ？」

「今宵は水垢離の満願……。一日お宿下りを願い、母を見舞うてやりたいと存じておりましたのに、いま殿の御寵愛を受け、身を汚しましては、折角の水垢離も役に立たず、却って、神罰を受けまする。殿の御意に従うて、母の命を神に召されるか、母を助けるために、殿のお怒りをこうむるか、一枝は、どうしたらよいのでございましょうか？」

「わかった……」

佐渡守は、照れたように苦が笑いをした。

「明日の夜まで待とう。宿下りも許そう。その代り、早う戻ってこい。明日は、嫌やとはいわさぬぞ」

母娘悲願

「遅いッ……」

六角十字兵衛が、吐き出すようにいった。

牛込大久保新田……、ここから先きは江戸の外である。

富士を、すぐ眼の前に眺める松林の中に、十字兵衛と黒太夫が半刻近く立っていた。

小半丁離れたところに、望岳山西光院の表門が見えている。――青山の善光寺とこの西光院は、江戸の二大尼寺……。格式高く、戒律厳しく、男の立ち入りは禁ぜられている。

「――やれやれ、朝っぱらから江戸のどんづまりまで引っぱり出されましたが、こいつア飛んだ骨折り損かもしれねエでな、ねエ六角さん」
「まだわからぬッ」
十字兵衛は、ひどく不機嫌である。
「昨夜、茶室での密談を、もし立ち聞きされたとすれば、一大事だぞ」
「それがはっきりしねえんでしょう。御家老の話じゃ、一枝って腰元はお袋が病気なんで水垢離をとっていたっていうことだ。それが佐渡守さまのお眼にとまった。今日の宿下りは、佐渡さまじきじきのお許しなんですぜ」
「殿はまんまと一枝に騙くらかされておいでかもしれぬわッ」
「六角さん、お前さん、損な生れつきだね。なんでも疑わなきゃ気が済まない。つきあい難いお人だよ」
「俺は、お前について来いといった覚えはないぞッ」
「あたしだって、ついて来たかアありませんぜ。ただ、御家老の熊取内膳さまから、――黒太夫、十字兵衛ひとりでは心もとない。付添って行ってやれ……、と頼まれた。ヘッヘッヘ、六角さん、片腕一本じゃ、佐渡さまも御家老も、心配なんですわい」
「糞ッ！　いまに見ておれ。俺の隻手無双剣がどれほど冴えているか、眼にもの見せてくれるぞ」
「楽しみにしてますぜ」
「いったなッ。黒太夫。今宵だ。今宵こそ、墨染の少将の命を奪って見せるぞッ」
その頃、西光院の奥まった一室で、一枝はひとりの老尼に昨夜の出来事を物語っていた。――老尼と一枝は、面影が生きうつしである。母娘だった。
「――墨染の少将というお方が、作法指南のため京からおいでになっていることは、わたしも聞いておりまする。が……、本多佐渡守が、なぜ少将さまのお命を狙うのでしょう？」
「お味方に、出来ぬためと申しておりました。また、大久保石見守さまの遺臣とつながりがあるとも申しておりました」
「そなた、今宵、佐渡守の寝所に召されていると言いましたな？」
「はい……。でも、御安心下さいませ。わたくしには覚悟がございます」
老尼は、ジッと一枝の顔を見つめていたが、やがて、コックリうなずいた――
「――お帰り……。少将さまへはわたくしがお報らせ

しましょう……」
「――ちぇッ！　六角さん……」
黒太夫が、歩きながら、十字兵衛を見上げた。――その十七八間前を、一枝が歩いて行く……。
「あの女、まっすぐ、お屋敷へ戻るようですぜ」
「まだわからぬ……。お茶ノ水を渡らずに、まっすぐに湯島の方へ行くようなら斬らねばならぬ」
「湯島から蔵前へ出て、少将の宿舎の大松院を訪ねる……。そう言うわけですかい？　おっと！」
黒太夫がニヤリと笑った。――一枝が、水道橋を渡ったのである。
十字兵衛は、フーッと、溜め息をついた。
「糞ッ！　女め……」
「おこるこたアないですぜ、六角さん。あの女は、やっぱり立ち聞きなんかしていなかったんだ。それがはっきりしただけでもいいッてわけ……。さアさア、お長屋へ帰って、ゆっくりお休みなさい。今度は、フフフ、少将を斬るんでしょ」
「えーい、うるさいッ」
「へへへ、おやかましかったら、ここいらでお別れしやしょう。わたしはこれから、可愛いい女の顔を、ちょいと眺めて来ますよ」
「貴様、その年でッ……」
「年のことは言いっこなし……。雀百までなんとやら、はい、ごめんなさいよ……」
黒太夫は、クスリッと笑って十字兵衛と別れると、クルリと踵を返して、いま来た道を引返した。
水道橋から安藤坂までは水戸家の上屋敷前である。その安藤坂を登ろうとした黒太夫が、ふっと足を止めた。――上から、年老いた尼僧がつつましく下りて来たのだ。
「――はーて……」
黒太夫が首を傾げた。が……すぐ、ピョンピョンと跳ねるような足取りで、坂をのぼって行った。
「――ふン、やけに比丘尼に縁のある日だ……」
黒太夫と老尼がすれ違った。――老尼の頬に、チラリと笑いが浮かんだが、黒太夫は気がつかなかった。
それから小半刻後、老尼は、蔵前大松院の奥庭に両手をつき、縁側に立った墨染の少将を見上げていた。
「――わたくしは、西光院の尼妙雲と申しまする……」
老尼はそう名乗ると、本多家下屋敷の茶室のカラクリ天井について物語った。
「娘一枝が、本多家奥向に奉公いたしておりまして、盗み聞いたのでございます」

「なぜ、わしに報らせてくれたのじゃ？」
「わたくし、佐渡守に恨みのあるものでございます。娘も、本多家の秘密をさぐるための奉公……。でも……」
老尼は、ゴクリッと、一度生唾をのんだ。
「娘は今宵、自害するかもしれませぬ……」
「――わしのためにか？」
少将は、老尼妙雲にたずねた。
「そなたの娘は、わしのために、命を捨てることになるのか？」
「いいえ……、身を守るためでございます。一枝が、少将さまを陥れる計りごとを聞いたのは、廻り合せでございます。その盗み聞きをさとられぬため、水垢離のまねごとをいたし、佐渡守の眼にとまりました。これも廻り合せでございます。そのため、今宵寝所へ行かねばなりませぬ。が……、佐渡守ごときの男の意に従うことは出来ませぬ」
「それで死ぬのか？　なぜ、佐渡の屋敷から姿を隠さぬ？」
「姿を隠せば、盗み聞いたことを覚られ、佐渡守を一層用心深くさせるだけでございましょう。少将さまのお命を狙うにしても、釣り天井の計略は漏れたものと考えて、別の手立てを考え出すに違いございません。あの男の悪智恵は、当代随一でございます」
「わしが、茶室を訪れることを断れば、やはり、別の手立てを考えるであろう。同じことではないか」
「いいえ……。釣り天井の計略が漏れておらぬと考えている間は、佐渡守が、別の手立てをめぐらすようなことはございますまい。ジックリ腰を据え、しつこく、少将さまを茶室へ誘いこもうとすることでございましょう。蛇のように執念深い男でございます。佐渡守は」
「結局、一枝が命を捨てるのは、わしのためのようだな」
「少将さま……」
老尼は、思い詰めた眼差しで少将を見上げた――
「わたくし達は、佐渡守に用心されては困るのでございます。一枝は、そのために、自害せねばならぬのでございます」
「それは、なぜじゃ？」
「そのわけを申し上げる前に、ひと言おたずねいたしまする。一枝が盗み聞きした言葉の中に、――少将さまは大久保石見守さま遺臣の方々とのつながりをお持ち……ということがございました。まことでございま

すか？」
「知らぬな」
はっきり首を振った少将の様子に、老尼は、はーッと、溜め息をついた。
「では、さき程のわけというのを、申し上げることは出来ませぬ」
「そなた達母娘は、大久保石見守にゆかりのあるものか？」
「はばかりながら、お答え出来ませぬ」
そのとき、静かに襖を開いて、木野が入って来た。
「ただいま、本多佐渡守さまよりお使いにて、今宵六ツ……、青山下屋敷に新築の茶室へお招きしたいとのおもむきでございますが、どうご返事いたしましょう」
その言葉に、老尼は、ハッと顔をこわばらせた。が、少将は、ニッコリ笑った――
「お招きかたじけない。必ず参上すると申しておけ……」
その頃、安藤坂上を左へ……。切支丹坂寄りに入った静かな屋敷を、傀儡師の黒太夫が訪れていた。
大目付千々輪の後室お浅の住いである。
「――これはこれはお浅さま、なかなかよいお屋敷でございますなア」
「ホホホ……、なにを申されることやら、後家のわたしが、小女相手のわび住い。よいお屋敷である筈がないではありませぬか」
「いやいや……、さすがは大目付……。御在世中は、なにかと実入りがあったことでしょうな。御富裕さが、この座敷の隅々にまで現われておりますよ。あの襖紙も、この畳表も、まず、十万石のお大名並みと見えました」
「まア、大げさな……。黒太夫どの、そなた、わたしをからかいに見えられましたか？」
「飛んでもない！　御機嫌伺いでございますよ……」
そういうと、黒太夫は、お浅の顔を見詰めて、ニタニタといやらしく笑った。
「江戸へ帰ってから早やひと月……。お浅さまはどうしておいでかと、それが気がかりでございましてねエ」
「まア！　黒太夫どの、そのような冗談ばかり申されるなら、もうお帰り願いましょうか」
「やれやれ……、お浅さまには、この黒太夫の気持が通じませぬかな……。尤も、いまのお浅さまのお胸の

うちは、墨染の御前のことでいっぱいでしょうからなア」
「黒太夫どのッ！」
キッと坐り直したお浅に、黒太夫は、意味あり気な薄笑いの顔を向けた。
「お浅さまは、何も御存知ない……」
「え？」
「少将のことは、おあきらめなさい」
「何を申されるのですッ」
「少将は今宵、佐渡さまの下屋敷で血ヘドを吐いて――」
「げッ！」
「釣り天井ですよ。茶室の天井が、ズシーンと落ちるのですよ。おッと、お浅さま……」
スッと立ち上ったお浅の裾を、黒太夫の手がムズと摑んだ。
「佐渡さまの陰謀には、お浅さまも一枚加わっておいでだ。まさか、その首領の佐渡さまを裏切るようなことは、なさらないでしょうなア」
「佐渡さまにお願いして少将をわたしの手に貰います」
「ハハハ……、あなたの手におえる少将じゃありませんぜ。およしなさい。他に男がいないわけじゃなし……」
そういう黒太夫の手を振り切って、お浅は佐渡守の屋敷へ急いだ。
が……、佐渡守は、登城中だった。家老の熊取内膳や六角十字兵衛の姿も見えない。
佐渡守が、上屋敷へ戻らず、まっすぐ青山の下屋敷へ行くとわかったのは夕刻だった。
「――しまった！　この上は……」
裏切りを決意してお浅は蔵前大松院へ向った。が、既に少将は青山へ出かけていた。

その日の夕刻……。
近江の喜平太が付き添った墨染の少将の乗りものが、青山長者ヶ丸の本多家下屋敷へ入った。
「――これはこれは……」
佐渡守は、玄関の式台まで出迎えたが、茶ラシャの袖なし羽織というくだけた恰好である。
「――本日は、このほどしつらえました茶室の炉開きを、みやこびとの御前にして頂きたいと存じましてな。御前にも少将の格式をお忘れ願い、わたくしも宇都宮城主の肩書を捨て、一介の茶人としておつき合い

願いたいと考えまするが、いかなものでございますかな？」
「それは結構なこと……。茶の道は本来無に通じるもの……。佐渡どの、わしも気楽に、一夕を楽しませていただきましょう」
「では……、かた苦しい書院などへ入りまするよりは、早速、茶室へ御案内いたしまするかな……」
佐渡守は先きに立った。――家来もつれず、刀も差さず、手をうしろで組んで、ちょっと前かがみになり、トコトコ飛び石を伝って行く佐渡守の姿は、好好爺然としていた。とても、当将軍家光公を倒し、駿府の忠長卿をもり立てようとする大陰謀家とは思われない。
「――喜平太……、そちはここで待っておれ……」
「しかし……御前……」
喜平太は、不安だった。――ここは、敵地とも言うべきところである。佐渡守が丸腰で、ひとりだからと言って、安心はできない。
現に、茶室が釣り天井であることは、少将から耳打ちされているのだ。
が、少将は――
「よいよい……。待っておれ……」

そう言い残すと、佐渡守について行った。
茶室は、下屋敷の建物から遥かに離れた奥庭の中ほどにあった。
下屋敷と茶室の間には心字形の大きな池があり、武蔵野の野趣を生かした小山があり、寒風に葉を吹き落された雑木林が続いている。
これでは、いくら喚こうが叫ぼうが、屋敷の築地塀の外へ声がとどこう筈はない。
「――ほう……」
茶室から、四、五間離れたところまで来ると、少将が、ピタリと足を止めた。
「佐渡どの……。この茶室、けなすのではないが、ちと出来が悪いようじゃな」
「はて……」
佐渡守は、いぶかしそうに、少将を見た。
「屋根が高い」
「えッ!?」
「これでは、天井との間に、スキ間が多過ぎよう」
「それは……。いや、御前、これは、わざと飛騨の山屋の構えをまねたのでござる。雪国の屋根は、高うござるでな」
さすがに老獪な佐渡守。言葉巧みにその場をごまか

すと、少将を茶室の中へみちびいた……。
「――どうぞ……」
茶室へ入ると、佐渡守は、少将を客の座へ請じた。
が、少将は、スーッと、ひとわたり茶室の中を見廻すと、ニッコリ笑った。
「よい茶室じゃ。お道具も結構……。佐渡どの、わしに、炉開きをして欲しいといわれたな？」
「いかにも……」
「では、わしが主人役を勤めましょう」
少将は、佐渡守の返答も待たず、ピタリと釜の前に座を占めた。
佐渡守は、サッと、顔色を変えた。――釣り天井は、釜前の主人の席だけは安全であるように細工がしてある。
計画では、主客が茶室に入って、四半刻（三十分）ののちに、釣り天井の綱を切り離すことになっていた――。ちょうどその頃、茶を喫し終った少将が、茶道具を見ている頃になる筈だったのである。
綱の切り手――隻腕の六角十字兵衛は、茶室の裏に潜んでいる。佐渡守にとって都合の悪いことには、十字兵衛が隠れている場所からは、茶室の中の様子は見えないのだ。
佐渡守は、止むなく客の座に坐った。
が……、気が気ではない。
六角十字兵衛は、少将が客の座にいるものと考え、予定の時刻には綱を切るだろう。
少将は、作法通り、みごとな点前で悠々と茶を立てている。
――こんな筈ではなかった……
佐渡守は、ズーンと、背筋を駈けあがる悪寒をおぼえた。
――今宵は楽しみが二ツあるわい。少将が血ヘドを吐いて命を落し、腰元の一枝が寝所へやってくる……。
そう考えていた佐渡守が、一瞬にして、生命の土壇場へ坐らされてしまったのである。
時刻がたつにつれ、佐渡守は、顔に脂汗を浮かべ、呼吸が荒くなった。
「――はて……、お加減が悪いのかな？」
少将が、ふッと振返ってたずねてみた。
「実は……、突然、寒気がいたしましてな」
「それはいかん。人間は病の器。いかなる勇猛の将、智謀の士といえども、病には勝てぬ。体をおいといなさらぬといかんな」
少将は、それとなくあてこすっているのだ。

が……、佐渡守は、それどころではなかった。――グズグズしていると、天井が落ちてくる。
「――まことに失礼ながら、本夕の炉開きはこれにて……」
「おう……、いや、お大事になされい……」
佐渡守は、駈け出すように、茶室を出た。
「――よッ！　こ、これは、どうしたのだッ」
茶室の裏で、正に釣り天井の綱を切ろうとしていた十字兵衛は、足早やに、遠ざかって行く佐渡守と少将の姿に啞然とした。
その反対に、帰って行く少将の乗り物に、ホッと、安堵の胸を撫でおろすものもいた。
――塀の外にいた妙雲老尼だ。

神鏡の契り

一枝は、長い廊下を、静かに歩いていった。
前には、昨夜までの同輩が二人、雲洞を持って、足許を照らしてくれている。そして、うしろから老女がついて来た。
やがて、廊下を曲り、一枝は、湯殿にみちびかれた。
お端下腰元の入る湯殿ではない。主人佐渡守の寝所にはべるものだけ使う、特別の湯殿である。
広い控え座敷の奥に、木の香が匂う浴室が続いている。
「――一枝どの……」
一枝は、ふッと、老女を見上げた。――奥女中総取締りともいうべき老女から「どの」をつけて呼ばれたのは初めてであった。いままでは、呼び捨てである。
「はい……」
「心静かに、湯あみをいたしますように……」
「はい……」
一枝がジッと立っていると、雲洞を傍らに置いた腰元二人が、老女の合図で一枝の帯をとき、着物を脱がせた。
これは、既に一枝を佐渡守の愛妾として敬い、かしずいているのではない。――刃物、或いは毒薬の類いを隠し持っていないか……、それを調べるためだったのである。
一枝は、老女から指図をされるままに、浴室に入り、湯舟に白い体を沈めた。
浴室は薄暗く、ここまでは、老女も腰元も入っては来ない。

一枝は、湯気の中で、ホッと溜め息をつくと、ジッと、眼を閉じた。

——既に、覚悟は出来ている……。佐渡守に抱かれる前に、舌を噛み切る積りなのである。

万一……、佐渡守にスキがあれば、枕刀を抜いて命を狙う……。が、恐らく、それは不可能であろう……。

「——母さま……。今宵、死にまする……」

一枝は、ソッと、湯気の中で呟いた。と……そのとき——

「——おい……、一枝って、お前か？」

押しつぶしたような声に、一枝は、ギョッと、顔をあげた。

金網につつまれた、小さな灯りがついているが、湯気のたちこめた浴室の奥までは、光がとどかない。

「もし……、一枝なら、助けてやる」

奇妙な声だった。——男のような乱暴な言葉ではあるが、声は女だ……。

湯気の奥に、伊豆の山娘津矢が黒装束、黒頭巾で潜んでいたのである。

「——は、はい……。か、一枝です……」

一枝は、乳房をかくして、小さな声で答えた。

「あ、あなたさまは？」

「余り喋るな。向うには、幾人いる？」

「御老女さまと、腰元が二人……」

「なんだ。たった三人か……」

そういうと、津矢は、初めて一枝の方へ近づいて行った。

「——一枝さま……、おながしいたしましょうか？」

控え座敷から、腰元が声をかけた。——と、覆面の津矢が、断れと首をふる。

「——い、いいえ……。結構でございます」

すると、老女が腰元達に話す声が聞えて来た——。

「そなた達は、さがっているがよい。後ほど呼びまする……」

老女は、一枝が湯からあがるのを待って、その体をあらためるために、腰元二人を遠ざけたのである。

——第一に、生娘であるかどうか……。第二に、主人の愛妾とするに好ましくない傷痕や畸形の個所がありはしないか……。

勿論、生娘かどうかが外見でわかる筈はないが、老女は長年のカンで判断するのであり、或る意味では、形式的なことでもあった。

「——フフ……、ひとりになったな……」

津矢は、低くつぶやくと、ソッと、仕切り戸の前に

立った。

「——一枝どの……、そなた、長湯じゃな。それとも、恥かしいのかえ？」

老女の声が仕切り戸のすぐ向うで聞える。

——ガラリッ……と、出し抜けに、津矢が仕切り戸をあけた。

「——あッ！　曲者……」

老女は、叫んだ積りであった。——が、事実は、ただかすかに唇を動かしただけで、気を失っていた。

——津矢の拳が、思いッ切り老女の脇腹を突きあげていたのである。

「——さ、一枝さん、早く着物を着ろよ」

「でも……、あなたは——」

「また俺のことか……。俺の名前なんかいったって、あんたは知らないよ。そうだ！　俺の姉さまが、墨染の少将から頼まれた。それならわかるか？」

「まア！　少将さまがッ」

「おい、俺も女だよ。恥かしがらずに、早く着物をきてくれよ。グズグズして誰かやってくると、逃げられないぜ」

「はいッ……」

一枝は湯舟を飛び出すと、ろくろく体も拭かずに着物をひっかけた。

「よしかッ！　まっすぐ、東の潜り戸まで走るんだぜッ」

サッと、津矢が湯殿の戸をあけた。

運悪く、さきほどの腰元二人が近づいてくるところだった。

「やッ！　曲者ッ……」

「曲者でござりまするぞッ」

腰元二人が、同時に喚き立てた。

「ちぇッ！　一枝さん走れッ。わかってるなッ……」

そう言うと、津矢はダーッと、腰元の方へ走って行った。

「あッ！　くッ、曲者ッ」

腰元は叫んだが、そのときには、突き飛ばされて、廊下にひっくり返っていた。

そのスキに、一枝は、無我夢中で、教えられた東の潜り戸へ向って走っていた……。

それから半刻ほどして、青山の下屋敷から帰って来た本多佐渡守は、一枝が、何者かの手で連れ去られたと聞くと、いかにも意地の強そうな眉を、キュッと寄せた。

そのことを佐渡守に告げたのは、熊取内膳と、一枝を湯殿へ連れて行った老女である。

「――殿ッ、やはりあの女、切るべきでした。怪しい男を、手引きしたに違いありません」

いっしょに、下屋敷から帰って来た六角十字兵衛が、口惜しそうに歯噛みをした。

「いえ……、曲者は、おなごのようでございました」

恐縮し切っていた老女が、おどおどと顔をあげた。

「なに、女!?」

「はい……、黒装束をまとうて、一見、男のようではございましたが、体つきは、確におなごでございます」

そういう老女の言葉につづいて、内膳も口を開いた。

「殿……、どうやら、大久保石見守遺臣のものどもの仕業かと思われます。黒装束の女……と申せば、わたくしも十字兵衛も、伊豆で手をやいております。のう、十字兵衛」

「しかし、御家老……。もし伊豆の女共とすると、一枝はどうやって、連絡をとったのです?」

「それは、わしの方から聞きたい。母の病気見舞いに宿下りをした一枝をツケたのは、貴公と黒太夫ではないか」

「いや、わたしが見張っていた間、一枝の行動に不審なところはござらぬ」

佐渡守は、舌打ちをして、いきり立つ内膳と十字兵衛を押えた。

「いまさらいい争うてなにになる。そのときの模様を、詳しく話してみい」

佐渡守から促されて、老女は、湯殿での出来事を、ことこまかに物語った。

「では、一枝には、逃げ出そうとする気配はなかったのじゃな?」

「はい……、恥らいながら、素裸となり、浴室へ入りました。脱ぎました衣服をあらためましたが、変りはございません。持ちものも、懐紙と守り袋だけでございます」

「よい……。そちはさがれ……」

佐渡守は、老女に遠ざけると、内膳をそばへ呼んだ。

「一枝は、逃げる気ではなかった。むしろ、怪しい女に連れ去られたと考えてよさそうじゃ」

「本日は、全て、イスカの嘴と喰い違いましたな」

「用心せねばなるまい。一枝が、われ等の密談を立ち

聞いたもの、釣り天井のはかりごとが少将へ漏れたもの、更に、一枝が石見守の遺臣の手に陥ちたものと考え、すぐに手を打たねばならぬ。――千々輪の後室を呼べ……」

その頃、一枝は、駕籠に乗せられ、日本橋から、新堀端を南へ下っていた。――駕籠に付添うているお高祖頭巾の女は、深雪だった。

一枝は駕籠の中で、茫然としていた。

本多家上屋敷、あの奥庭の茶室から漏れてくる密談を立ち聞きしてからの一昼夜、まことに、めまぐるしい変転であった。

――十字兵衛の手裏剣に狙われ、佐渡守の寝所の伽を命ぜられ、そして、奇妙な黒頭巾に救われた……。

ただ、運命の流れに押しまくられているような一日であったのである。

いまも、この駕籠で、どこへ連れて行かれるのか、一枝にはわかっていない。

また駕籠に付添っているお高祖頭巾の女が何者なのかもしらない……。黒頭巾から言われるままに、潜り戸を飛び出したら、そこに、駕籠とお高祖頭巾の女が、待っていたのである。

潮風が、駕籠の垂れを通して匂って来た。

「――どこなのかしら……」

一枝が、胸のうちでつぶやいたとき、トンと、駕籠がおろされた。――汐留の船宿杉乃屋の表である。

「――なんだ、俺の方が早かったじゃないか……」

深雪にみちびかれて二階へ上った一枝に、明るい笑顔を向けたのは津矢である。

津矢は黒頭巾をとり、黒装束を娘らしい着物に着替えるところだった。

「――お世話になりました。でも……、ここは、どこでしょう?」

「いまにわかるよ、心配することはないんだ」

娘の着物を着ても、津矢の言葉は、相変らずである。

粋なおかみの姿をした真弓が入って来た。

「――この家の女あるじ、お弓ですよ」

「一枝と申します……。あの……、わたくしは、どうなるのでしょう?」

「わたし達は、どうもしません。帰りたければ、お帰りなさい。と言って、いま、大久保の母さまのところへ行くわけにはいかないでしょう。あすこには、六角十字兵衛の眼が光っていると思わねばなりませぬ」

「どうして、そんなことまで御存知なのです」
「もっと知っていますよ。墨染の少将さまは、みごと佐渡守のはかりごとの裏をかいて、無事に蔵前の大松院へお帰りになりました」
「もしや……」
一枝は、ハッと顔をあげて、真弓と深雪と津矢を眺めた。
「もしや……、どうしたのです？」
真弓が、ジッと、一枝を見返した。
「わたくしは、三月ほど前……八月の二十三夜でございました。浅草鳥越明神へまいりました」
「やっぱり……」
真弓は、深雪、津矢と顔を見合せて、ニッコリ笑った。
「まず、証拠の品を見せて頂きましょう」
「はい……」
一枝は、急いで守り袋をはずし、蓮華の花びらに型どった鏡をとり出した——
「——〝土〟の御鏡でございます……」
一枝が出した蓮華花弁の鏡を、ジッと見詰めていた真弓は、やがて、コックリうなずくと、ふところをさぐって、紫の包みを取り出した。
その包の中にも、同じ形の鏡が入っている。
「〝地〟の御鏡です」
一枝は、ハッと、顔をあげた。
すると、深雪が、ソッと、自分の鏡を真弓の鏡に並べた。
「〝水〟の御鏡です」
「俺のは〝火〟の御鏡だよ」
津矢も、鏡をとりだした。
一枝は、その度毎に、ひとりひとりの顔を見詰めたが、やがて、ポロリと、涙を落した。
「ようやく、お会いすることが出来ました。御鏡の、おひきあわせです」
「それにしても一枝どの……。なぜ佐渡守の屋敷につかえていたのです。まさか、佐渡守が、第一の怨敵であることを忘れたわけではありますまいね」
真弓が、きびしい態度でたずねた。
「母のいいつけでございます。本多家上屋敷の間取り、抜け道をさぐり、同志討入りのときに備えよと言われました」
「御苦労でした……」
真弓は、始めてニッコリ笑うと一枝の手をとって握りしめた。

「御鏡の契りに結ばれたわたしらは、わたしを姉と思うて下さい」
「はい……、いままでの心細さが、一度に消えたような気がします」
こんな話の間、津矢は、四ツの鏡を、並べたり、離したりしていたが、とうとう諦めたような顔をあげた。
「——駄目だ。同じような形をしてるけど、どうしてもうまくくっつかないぜ」
「それは当りまえのこと……」
真弓が一同を見廻した。
「御鏡は、天地人木火土金水の八片にわかれており、この順序でなければ、一つにまとまりませぬ」
「真弓さま……御鏡が、一ツにまとまれば、どうなるのです？」
深雪が、静かに答えた。
「八葉蓮華の形となり、不思議が現われます」
「その不思議とは？」
「それは、わたしにもわかりませぬ」
すると、津矢がカサカサと手をすり合せた。
「早く、揃えたいなア。あと四人か……。どこにいるのだろう？」
「あと、三人ですよ」
「え？　姉さまは、もう一人、知っているのか？」
「いいえ、知りませぬ。ただわかっているのは、そのお方は〝天〟の御鏡をお持ちだということです」
「〝天〟の御鏡!?」
真弓は、コックリ、うなずいた。
「わたし達の頭領です。他の七人が揃えば、さがさずとも、姿をお現わしになる筈です」
しばらくして、真弓と津矢の二人が、ソッと、杉乃屋の裏口から出た。
二人共、姿がかわっている。真弓は、大振り袖に、紫ぼかしの袴をはき、紫縮緬で顔を包んだ華やかな若衆姿……。津矢は尻切れ絆天に紺の股引き、豆しぼりの手拭で頬かむりをした船頭姿である。
杉乃屋は、表向き船宿……。裏口には幾隻かの屋形船がつないである。
その一ツに若衆姿の真弓が乗ると、船頭姿の津矢は艫綱をといて、竿を握った。
やがて……、竿が櫓にかわり、船は、大川をのぼって行く。
「——姉さま……、どこまで行くのだ？」
「蔵前まで……」

真弓が、屋形の中から答えた。
それから、四半刻ほどして……。
蔵前大松院のひと間で、喜平太の着物をつくろっていた木野が、ふっと顔をあげた。——ピシリッ……と、かすかな音が聞えたのである。
池の鯉が跳ねたのか……。いや、違う。何か、枯れ枝でも折れるような音であった。
木野は、傍らの小太刀をとると、ソッと立ち上って、部屋を出た。
月はなかった。——が、庭の白砂の上を、ツツツッと、音もなく突き切って、少将の寝所の方へ近づいて行く影が、木野の眼にうつった。
木野は、足袋はだしで、影を追った。——影は、顔を包んでいたが、若衆姿をしている。真弓である。が、木野は知らない……。
「——何者じゃッ」
木野が叫んだ。
と同時に、ピュッと、振り向きざまに、真弓は抜き打ちに切り込んでいた。
サッと、木野が、うしろへ飛びさがる……。
とたんに、——うッ……、木野は、持っていた小太刀をパッタリ落すと、のけぞるように、倒れてしまった。
そのあとへ、ヌッと現れたのは、墨染の少将であった。
「——御前！」
真弓は、サッと、砂の上へ片手をついた。
「待っていたのじゃ、そなたの姿を見て、声をかけようと思うたところへ、木野が飛び出して来た。止むなく当て落したのじゃよ」
「御手数をわずらわし、恐れ入ります。御前、一枝どのは、無事救い出しました。やはり、同志のひとりでございます」
「それはよかった……。一枝の母、大久保の老尼へも、報らせてやって欲しいな」
「この足で、廻る積りでございます」
少将は、ひと包みの金を、真弓に握らせた。
「老尼へやってくれ。何かのたしになろう」
「かしこまりました……。では、ひと眼につきまする故、これで失礼いたします」
真弓が立ち去って、一呼吸……。少将は、大きな声で叫んだ——
「喜平太ッ！　曲者が忍びこんだぞッ。ここに、木野が倒れているッ……」

佐渡の金山

十二月の三日……。
定例三ノ日の作法指南を終えて、宿舎大松院に戻って来た墨染の少将は、着替えもせず、ジッと、日暮れ近い庭を眺めた。
今年は、それほど寒さが厳しくないせいか、夕陽の名残りに輝く池の面近くまで、緋鯉真鯉が浮きあがって来ている。
が……、少将は、暮れなずむ庭の風情を楽しんでいるとは思われなかった。寒々とした庭石の一ッに、眼を向けている。
——眼は開いているが、何物をも見ているのではない。一心に、何ごとかを考えていたのだ……。
「——御前、お召替えを……」
木野が、ソッと、声を掛けた。
「いや……あとでよい」
少将は、振返りもせず、木野に答えた。
「それより、喜平太を呼んでくれ」
木野に替って、すぐ、近習の喜平太が、庭先きへ廻って来た。
「お呼びでございましたか？」
「喜平太……、わしは今日大奥で、将軍家におめにかかった」
「ほう……、お出会い遊ばしたのですか？」
「いや……、作法指南が終ると、お使番が呼びに来たのじゃ。そして、お休息の間で、おめにかかった」
「異例のことでございますな」
「うム……、お会いしたのも異例ではあったが、その場で出た話も、思いがけないことであった。順徳の帝のことじゃよ」
喜平太は、唖然として、少将を見上げた。
それもその筈、順徳天皇と申せば、人皇第八十四代のみかど、凡そ、四百年も昔のかたである。
後鳥羽天皇の皇子であり、土御門天皇の皇弟にあたられる。しかも、この御三方は、力を併せて、武家勢力——鎌倉幕府を倒そうとして、こと破れ、後鳥羽院は隠岐に、土御門院は土佐に、順徳天皇は佐渡へ流された。——これが、承久の乱である。
「順徳の帝は、佐渡ヶ島におわすこと実に二十二年、都へ御帰還の御望みもかなわず、ついに食を絶っておかくれになった」
「おいたわしいことでございますな」

「わが国国史上の大きな悲劇の一つであろう」
「それにしても、なぜ、左様な昔のことが、いまごろ将軍家のお口から？」
「帝の御陵が、佐渡にある。いや、帝ばかりではなく、皇子千歳の宮、皇女慶子内親王の御墓も島にある。実は、幕府にとって、その御陵が邪魔らしい」
「えッ！　帝の御陵がッ!?」
「将軍家は、邪魔だとは申されぬ。が、御陵の近くから、金が出るといわれる」
「なる程……、御陵があっては、金が掘れませぬな」
少将は、皮肉な笑いを浮かべた。
「ついては、わしに、佐渡へ行ってみてくれぬかとの御頼みじゃ……。どう思うな、このカラクリを？」
「――御前、ただいま、なんと申されました？」
喜平太が、いぶかし気にたずねた。
「将軍家は、わしに佐渡へ行ってはくれぬかといわれた。このカラクリをどう考える……とゆうたのじゃ」
「カラクリでございましょうか？」
「征夷大将軍とは申せ、天下のまつりごと全てを将軍家自らとっていられるわけではあるまい。それどころか、平たく申せば将軍家はなにもなされぬ。殆んど全く老中、若年寄の手で行われている。いわんや佐渡の金山のことなど、将軍家が知っていられるのがおかしい」
「佐渡は、金山奉行の支配でございましょう」
「金山奉行から勘定奉行、続いて若年寄、老中と、幾つかの道を通らねば、将軍家のお耳にはとどかぬことがらなのじゃ」
「将軍家は、佐渡で、御前になにをしてほしいと申されるのです？」
「みかどを始め、皇子、皇女の御陵の広さを調べ、金坑をどこまで掘ってよいか、故実にのっとって、縄張りをしてほしいといわれた。幕府には、御陵の取扱いに馴れたものがおらぬから、わしに頼むと申されるのじゃ」
「お受けになりましたか？」
少将は、ゆっくり、二、三度首を左右に振った。
「即答はいたしかねると申して下がって来た」
「お行きになりまするか？」
「行けば、みすみすカラクリにかかるだけのことじゃ」
「では、お断りになりまするか？」
「断る理由がみつからぬ……。将軍家の頼みを断る以上、江戸に止まっているわけには行くまい」

先刻来、少将が考えにふけっていた理由がそれとわかった。
「どうなさいます？」
「考えて見ねばならぬ、わしを佐渡へ行かせるのは、わしを江戸から遠ざけるためか、それとも、佐渡でわしの命を狙うためか？」
「誰がでございます」
「それをいまさらたずねるのか？」
「では、カラクリはやはり、本多佐渡守――」
「言うまでもあるまい」
そのとき、木野といっしょに、千々輪の後室お浅が入って来た。
「御前……、御出立は、いつでございますか？」
「はて……、どこへ？」
「佐渡でございますよ」
「それを、知っているのか？」
「ホホホ……、御陵のことなら、有職故実にあかるい御前にお頼みになるのが一番……、上様へ、そうおすすめしたのはわたしですもの」
「そなたがッ!?」
そのとき、木野が静かに、口を開いた――
「――佐渡金山奉行、竹村丹波さまがおいでになっていられます。いかがいたしましょう」
「――竹村丹波……」
少将は口の中でつぶやいたが、そのかすかな声を聞き逃さず、ふッと顔をあげて微笑んだ。
「御存知でいらっしゃいますか？」
「いや、知らぬ……」
少将は、さりげなく答えた。
「竹村丹波……、名は九郎右衛門。もと大久保石見守家来でございました」
「ほう……。お取潰しとなった大久保家の家臣が、いまは、故主にかわって、佐渡の金山奉行か？」
「丹波どのは、石見守の陰謀にかかわりなし……と、本多佐渡さまが裁きをおつけになったのでございます。が……、これは表向きのこと、まことは、難かしい佐渡の金山支配は、事情をよく知っている丹波どのにまかせるのが、一番無難だったから……と見てよいようでございます」
「同じ金山でも、伊豆より、佐渡の方が支配が難しいのか？」
「それはもう、幾倍も……。伊豆の金掘り人足は、ただの人足でございますが、佐渡は、江戸、大阪、長崎より送りました無宿者、科人を大勢、金山の水替え人

足に使うております」
「苦役じゃな？」
「はい……、よほどのことがなければ、生きて佐渡は出られませぬ。それ故に、人足の気風が荒々しく、ことごとにお役人にたてつきまする。よほど馴れたものでなければ、使いこなすことが出来ませぬ」
「それで、竹村丹波は、大久保石見守の家来でありながら命が助かり、その上、直参に取り立てられて、金山奉行となったのか……」
「いまでは、本多佐渡さま腹心のひとりでございましょうなア……。御前、お会いになりまするか？」
お浅は、意味ありげに、ニンマリと、少将へ笑いかけた。
「――うム……」
少将は、控えている木野へ顔を向けた。
「――木野……、丹波を客間へ通しておけ」
「まア……」
木野より先きに、お浅が驚きの声をあげた。
「御前、お会いになるのですか？」
「会ってはいかぬか？」
「いいえ……、御前は石見守びいき……。いわば、故主を裏切った丹波どのに、お会いになろうとは思いませんでした」
「いつから、わしは石見守びいきなのかな？」
「おや……、違いましたかしら？」
そのとき、再び木野が入って来た。
「――竹村丹波さま、お通りでございます」
少将は、うなずくと、いつになく荒い足取りで客間へ入って行き、立ったまま、平伏している男を見降した――
「――わしが、黒染の少将じゃ……」
「はッ、佐渡奉行竹村丹波にございます」
丹波が静かに顔をあげた。――四十五、六であろう。赤ら顔で、眼光が鋭かった……。
「――本日、御老中本多佐渡守さまより、お指図がございました。御前にお眼にかかって、お旅立ちの御日程などうかがい、万遺漏なきよう手配せよ……とのことでございます」
丹波は、低いがはっきりした声で、来訪の事情を語った。
「わしの旅の日取りか？」
「は……、佐渡へは、幾つかの道筋がございます。まず奥州街道にて白河より山路を会津若松に達し、阿賀川渡りに新潟へ出る道。次ぎに、中仙道を追分より信

州路にとり、善光寺平を越後の寺泊へ出ずるもの。更に、同じく中仙道を高崎より三国連山に向い、峠越えにて出雲崎に参る道……。しかしながら、既に厳寒、どの道筋も雪におおわれておりますれば――」
「丹波……。話の中じゃが、わしは、佐渡へ行くとは申しておらぬ」
「は？」
「本日、将軍家より、佐渡へ行ってみてくれぬかとのお話はあった。が……、わしは、お受けしたわけではない」
「御前……。上様のお望みは、御命令と同一と考えまするが……」
「嫌やでも行かねばならぬか？」
「それが、御前のおためではございませぬかな」
少将は秀でた眉を、ピクリッと動かした。
「わしは、将軍家の家来ではない。将軍は右近衛の大将、わしは四位の少将……。位置に上下はあるが、同じくみかどの臣じゃ。行く気があれば受けるし、いやなれば断る。それが悪いかッ」
「では……。お断りになりまするか？」
「わからぬッ……。その返答は、将軍家へ直々に申上げる」
「わたくしは、御前が、佐渡へお渡りになることをおすすめいたします。徒らに、事を荒立てては、御損でございましょう」
「おどすのか？」
「いや……、老婆心でございまする」
そう言い残して、竹村丹波は、静かに部屋を出て行くと、少将は、すぐ手を叩いて喜平太を呼んだ。
「――千々輪の後家どのは？」
「奥で、茶など立てているようです」
「では、あの女にさとられぬよう、すぐ旅立ちの用意をしてくれ。佐渡へ行く」
「御前ッ。将軍家が、おそろしいのですか？」
「いまさら、誰を恐れよう。わしは、わしの判断で、行くことに決めたのじゃ。ただ、誰にも知らさず、内密で旅立ちたい」
少将は、声をひそめると、幾つかのことがらを、喜平太の耳へささやいた。
「――よいか、わしは、内藤新宿の旅籠でまっている。あとから木野と来い」
それからしばらくして、旅姿の少将が、闇に包まれた大松院の裏門から忍び出た。
が……、その姿を、ジッと見ていたものがあった。

——傀儡師の黒太夫である……。

少将は、内藤新宿の名刹大宗寺の門前にある旅籠、帯屋の前で駒を止めた。

この界隈には、五十軒に余る旅籠屋が軒を並べている。——が、旅籠屋とは表向きだけのこと、その殆んどが、色を売る女を抱えた遊女屋なのである。

そんな中で、帯屋は、格式もあり、信用も出来るまっとう旅宿であった。

客あしらいに馴れた番頭は、馬から降りた少将の人がらを読んで、店先きへ飛び出して来た。

「——この馬を、表へつないでおいて貰いたい。あとから来る供の者への目じるしじゃ」

「かしこまりました。が、念のために、お供の方々の御様子をうかがっておきとうございますが……」

「若い男女二人じゃ。男は、見るからにいかつい田舎侍風……、女は、腰元風で美しい顔をしている。わしは、墨染の少将じゃ」

番頭が、ポカンと、少将の顔を見詰めた。が……、すぐ、パッと土下座をして両手をついた。

「——これこれ……、わしは、そのようなことをするのが大嫌いじゃ。部屋へ、案内をしてくれ……」

それからしばらくして、少将を、奥まった最上の部屋へ通した番頭が、この寒空に汗を拭きながら帳場へ戻ってくると、ヌッと、表から、醜い顔の傀儡師が入って来た。——少将のあとを追って、蔵前から新宿まで走り通した黒太夫である。

「——番頭さん……、大そうもない立派なお客さまが泊ンなすったんじゃないか……」

黒太夫は、この辺りを流している人形遣いのようなふりをして、心安く番頭に話しかけた。

「あんなお方に泊って頂くなんて、帯屋さんも冥加至極ってわけのもんだねエ」

「お前さん、いまのお方がどなたか知っていなさるのかい？」

「あっしゃ、江戸中を流して歩く芸人だよ。たいていのことは耳にも入るし、眼にもつく。いまのお方は、大奥へ作法指南においでになっている墨染の少将高平さまゃじねエか」

「そうなんだよ。いや驚いたのなんのッて。なにしろ、出し抜けに馬をお乗りつけになるんだからねエ」

「しかし、なんだって、少将さまが、内藤新宿などへお泊りになるんだろう？」

「お話の御様子じゃ、急に思い立たれて、京へお戻りになるらしいよ」

「京へ!?　京なら、東海道じゃねエか」

「それが、甲州街道から中仙道へ出て、木曽路を辿りながら、名古屋へお出になるらしいね。木曽のかけ橋、ねざめの床を見たいとか……。お公卿さまは風流さね」

やがて、黒太夫は、四谷伝馬町を麹町の方へと素ッ飛んでいた。本多佐渡守へ注進しようというのである。

それとは反対に、喜平太と木野が、内藤新宿へ急いでいた。

「——ハハハ……、少将め、とうとう逃げ出したか……」

本多佐渡守が、膝を叩いて大声で笑った。

佐渡金山奉行の竹村丹波と、千々輪の後室お浅を相手に、酒をくみながら、密談を交しているところへ、家老の熊取内膳が、黒太夫の話をもって駈け込んで来たのである。

「——熊取さん、それは本当のことでございますか？」

お浅が、顔色を変えてたずねた。

「本当にも嘘にも、既に少将は内藤新宿の旅籠屋帯屋とやらに泊っている。さすがの少将も佐渡へ行けといわれて驚き、早々に大松院を逃げ出したらしいのだ。帯屋で喜平太と木野と落ち合い、甲州街道、中仙道と辿って名古屋へ出るそうだよ」

「信じられませぬ。わたしは、新宿へ行って見ます」

お浅が出て行くと、内膳は、声をひそめた。

「殿……、どうなさいます？」

「少将か……、放っておけ」

「大丈夫でございましょうか？」

「わしは、忠長さまを将軍の職におつけするためには、なるべく京都の公卿共を刺戟しとうないのじゃ。それなればこそ、女色を以て少将を味方にしようとも考えた。この度の計画にしても、少将を佐渡で討つ積りではいたが、出来ることなら、京都へ逃げ帰ることを願うていた。京へ戻ってしまえば、邪魔にはならぬわい」

それから佐渡守は、竹村丹波を見た。

「貴公には、色々と智恵を借りたが、どうやら、佐渡での荒療治はせんでもよいようじゃ」

「それは残念でしたなア。ここでひと手柄立てさせて頂こうと思うて居りましたのに」

「いや、貴公は忠長さまの軍用金係じゃ。どしどし、

その時、編笠に顔をかくした鳥追い姿の女四人が、帯屋の前を通り過ぎて行った。——真弓、深雪、津矢、そして一枝である……。

吹雪街道

次ぎの日は、夜明け前から、凄まじい雪であった。

「——いさぎよく降るわい……」

本多佐渡守は、熱い茶をすすりながら、傍らに控えている熊取内膳を振返った。

既に肩衣(かたぎぬ)をつけ、長袴をはいている。老中として登城の身仕度を終え、供揃えの出来るのを待っていたのである。

いつになく上機嫌だった。——墨染の少将は江戸を逃げ出した……。そう考えると、のしかかっていた黒雲が吹き払われたような気がして、降りしきる大雪も、寧ろ心地よかったのである。

「わたくしには、この雪はこたえますな。伊豆で受けた傷が、ズキズキと痛みまする」

「熊取内膳ともあろうものが、たかが女の二人や三人にいためつけられるとは、馬鹿げた話じゃ」

「しかし、あの女共、捨てておくわけには参りませぬ金を掘り出して貰わねばならぬて」

丁度その頃、本多家のお長屋では、片腕の六角十字兵衛が、大刀を鷲摑みにして立ち上り、遮ろうとする黒太夫を突きのけていた。

「ろ、六角さん！　どうする積りだッ？」

「決ってらあ。おめおめ、少将と木野を、京へやってなるものかッ」

「だってお前さん、もう木野にゃ未練はないと言った筈ですぜッ」

「未練ではない。遺恨だッ。俺は、あの二人を斬らねばならぬのだッ」

四半刻ののち、十字兵衛は、帯屋の店先きで、パッタリ、お浅と顔を合した。

「ま……、十字兵衛さん！」

「そなたも、少将を追うて来られたのかッ！」

「ええ……、でも、遅うございましたよ」

「遅い!?」

「御前は、半刻近く前に、旅立たれました」

「こ、この夜半にかッ？」

「ええ……、しかも、馬三頭、くつわを並べて早駈けで甲州街道へ……」

「糞ッ！」

ぞ。狙われているのは、わたくしや伊豆屋のお石だけではござらぬ。殿も……、いや、殿こそ最大の仇と考えておりまする」

「よいよい……、忠長卿が将軍の座におつきになれば、わしは大老として天下の政権を握る。そうなれば、草の根をわけても、大久保石見守の残党を狩り出し、命を絶つことも出来るのじゃ。それも、遠いことではない」

「上様の日光御参拝は、明春三月の御予定でございましたな？」

「うム……、その折り、宇都宮城にて、一挙にことを決する。家光公のお命頂戴……。ハハハ……、来年は、よい春を迎えられるわい」

「いまだから申上げますが……」

内膳は、ホーッと、溜め息をついた。

「わたくしは、墨染の少将が恐ろしゅうございましたよ。殿の大望を妨げるものは、少将ではないかと考えておりました」

「ハハハ……、あの貧乏公卿どのは、わしも買いかぶった。もう少し骨のある男かと思うていたわい。ともあれ、本日登城いたしたなれば、第一番に、少将の逃亡を家光どのに報らせてやろう。驚くことじゃろうて……」

が……、登城した佐渡守は、なかなか将軍に会うことが出来なかった。御台所が、盛大な雪見の宴を開き、将軍を大奥に引きとめていたからである。

その日の夕刻……、将軍は、ようやく、表の御座所へ顔を見せた。

「早速ながら、墨染の少将のことにつきまして……」

佐渡守がそう言いかけると、将軍がニッコリ笑った。

「そのことなら、存じている。昨夜、木野とか申す少将の侍女が大奥に参り、少将は佐渡へ旅立つと御台まで伝えて行った」

「えッ、佐渡へッ!?」

佐渡守は、スーッと、奈落へ落ち込んで行くような気がした。と同時に——

——おのれッ、生かしてはおかぬぞッ……。

少将に対する憎悪が、メラメラッと、胸の中に燃え上って来た……。

「——内膳ッ！　内膳はおらぬかッ……。十字兵衛ッ……。六角十字兵衛を呼べッ……」

屋敷へ戻るなり、佐渡守は、大声で喚き立てた。

「——はかられたぞッ！　墨染の少将は、佐渡へ向っ

たのじゃッ」
「えッ、佐渡へ……」
駈けつけた内膳と十字兵衛は、愕然と佐渡守を見詰めた。
「昨夜、大奥へ木野がつかいに行き、佐渡へ行くと伝えている。京都へ戻るなどとは、まっ赤な偽りじゃッ」
が……、考えて見ると、誰も少将から、直接に京都へ帰るといわれたものはいない……。黒太夫が、内藤新宿の旅籠帯屋の番頭の話を聞いて、勝手に、そう決めていたのである。
「——十字兵衛、貴公の早合点のせいじゃぞ」
熊取内膳が十字兵衛を責めると、佐渡守まで——
「そうじゃ、十字兵衛、責めをはたせ、責めを……」
「少将を斬ればよろしゅうございますか？」
「斬れるか？」
「よしッ、行けッ。幾人でも連れて行けッ」
十字兵衛が出て行くと、佐渡守は、矢つぎ早やに指図をした。
「内膳ッ、佐渡金山奉行竹村丹波へ使いを出せ。十字兵衛と力を合せて少将を討てとな。——いや、十字兵衛ひとりでは心もとない。黒太夫を佐渡へ行かせいッ。よいかッ、ぬかるなよ、内膳……」
朝がたの落着きとは打って変った苛立ちを示している。
それから半刻ほどした頃……。
黒太夫は、お浅の家を訪れていた。
「えッ、墨染の御前が佐渡へ!?」
「それで、殿は、この黒太夫にも佐渡へ行けと仰有る。この寒空に、雪の山路を越後へ……。もし、途中で少将一行に出会えなきゃ、海を渡って行かにゃならぬ。飛んだ貧乏くじですぜ」
「それで、十字兵衛どのは、もう江戸を離れたのですか？」
「離れたと言っても、この大雪、どこまで行けるもんですかねェ。少将たち三人は、ゆうべのうちに馬を飛ばしている。明け方までに八王子につき、まだ雪が積らぬうちに小仏峠を越えて、いま頃は与瀬の宿で、ヌクヌクと寝てるかも知れない。こう立ち遅れちゃ、佐渡へ着くまで、とても追っつけませんぜ……」
ところが、少将たち三人は、まだ小仏峠を越えてはいなかった。
甲州街道をかためる小仏宿の関所に近い旅籠屋の一室に少将と木野がいた。

「——御前……」
喜平太が、慌しく入って来た。——髷と肩に、雪がこびりついている。
「関役人の話では、小仏の雪は二尺余り……。ここ四、五日は、とても越えられぬということでござりまする……」
「——まずいな……」
少将はジッと腕を組んだ。
本多佐渡守が小細工を施すまえに佐渡へ渡りたい……、そう考えて、一刻をも惜しんで江戸を出たのだが、この小仏の宿で三、四日も足止めをされては何にもならない。
「間道はないのか？　少し遠回りをしてもよいが……」
「ございません。小仏の関所を護るために、あらゆる間道をふさぎ、岩石、老樹などを横たえて、通行不能にしてあるとのことでございます」
「ぐずぐずしていると、佐渡守の手のものが、ここへやってくるぞ」
「左様……、まず、六角十字兵衛でございましょうな……」
喜平太が答えたが、その十字兵衛は、門弟二人を連れて、雪の夜道を、甲州街道府中の宿へ近づいていた。
「先生……、もう直ぐ真夜中ですぞ。府中の旅宿は起きていましょうか？」
「心配するな。府中では泊らぬ」
「え？　では、夜どおし、歩き続けるのですか？」
「少くとも、八王子の宿まで行く。夜明け前には辿りつけるだろう。そうでもせねば、少将へ追いつくことが出来ぬ」
十字兵衛は、少将に対する火のような闘志にかり立てられ、雪を蹴散らすようにして歩き続けた。
「——先生……お手の傷口は痛みませぬか？」
「うム……かなりこたえる。この寒さに、ズキズキとうずき続けている。糞ッ……、この腕一本、墨染の少将に奪われたが、その返礼には、少将の細首を叩き切ってくれる」
「先生に傷を負わせるとは、少将もかなりの使い手のようですな」
「なアに、たかの知れた公卿剣法じゃ。が……油断をするなよ。殿は、幾人でも連れて行けと言われた。が、おれは貴公達二人だけにした。なぜかわかるか？大勢いては、衆をたのんで油断がちとなる。伊豆で

は、それで失敗したのだ。こんどは、相手も三人、こちらも三人、一人が二人を斬ればよいのだ」

十字兵衛は、まるで、眼の前に少将がいるかのように、激しい言葉で言った——

「——少将はおれが斬るッ……。貴公達は、喜平太と木野を斬れッ。あなどるなよ。喜平太は自源流らしい。それに、拳法を使う。木野は、女ながらも、甲賀流の忍法を心得、香月紋之助直伝の応変夢幻剣じゃ」

「しかし、木野は、伊豆屋のお石が少将のもとへ送りこんだ間者……、いわば味方ではありませぬか」

「お石の勘定違いじゃよ。木野は、お石の言うなりに動くような女ではない」

夜明け近く、八王子の宿へ入った十字兵衛は、雪のために小仏の街道が止まっていると聞いて躍りあがった……。

「——しめたぞッ！　小仏宿へはわずか二里半……。墨染の少将は、すでにわが掌中にありだッ」

十字兵衛達三人は、八王子の旅籠屋で、朝までのわずかな時間をグッスリ眠ると、再びわらじの紐を締めなおして、小仏宿へむかって出発した。

雪はすっかり晴れあがり、白一色の相武の連山は、折からの朝陽にギラギラと輝いている。

「——御前！　猪狩りの一隊が、今朝未明に小仏へ発って行きましたッ……」

喜平太が、少将の部屋へ駈け込んで行ってこう言ったのは、ちょうど、十字兵衛が八王子宿を出た頃であった。

「登れるのか？」

「この雪で、枯れ葉、落ちた木の実をおおわれた猪が、餌を求めて人里へ近づいて来ます。猪撃ちは、雪の翌る日が一番だと言うことでございます」

「幾人くらい登ったのじゃ？」

「凡そ二十人と聞きました」

「では、かなり、雪が踏みかためられているな？」

「と、思います。それに、早くも、甲州へ向う旅人が、猪狩りのあとを追うようにして、峠へ向ったそうでございます」

「ほう……、余ほど、急ぎの旅じゃな」

「それが、鳥追い姿の女四人でございます」

少将は、ジッと喜平太の顔を見詰めた。——真弓達だ……と察したのである。

江戸を出るに当って、少将は木野と喜平太を使いに出している。木野は大奥へ、喜平太は汐留の杉乃屋へ……。何れも、少将の佐渡行きを報せに行ったのであ

る。

「よし……。わし達も行こう」

しばらくして、少将は、喜平太と木野をつれて、小仏峠への九十九折りを登っていった。

甲州街道に二つの難所がある。——一つは笹子峠、もう一つが、この小仏峠である。

ただでさえも嶮しい山坂……。それがいまは、膝を埋める雪におおわれているのだ。

よく晴れていたが、登るにつれて風が強くなった。粉雪が舞い上り、一間さきは、見通しがきかなくなることもある。

「——大丈夫か、木野？」

少将は、幾度も、木野を振り返った。

「はい……、まだまだ大丈夫でございます」

「くたびれたら、喜平太に手をひいてもらえ」

木野は、ハッと顔をあげると、ポッと頬を染めて、まぶしそうに少将を見た。

と……、このとき、猟人姿の男が二人、峠の方から、駈け降りて来た。

「駄目だ、駄目だ。雪崩で道がふさがったぞ。仲間の猟師が三人、谷底へ押し落された。わし等は宿へ助ッ人を頼みに行くところだが、おまえ方も、引返したがええぞ」

叫びながら、猟人は駈け抜けて行った。

「——あ、しばらく……」

少将は、いそいで、猟人を呼び止めた。

「四人連れの鳥追い女を見かけなんだか？」

「——鳥追い女!?」

「あ……、あの女達だ」

猟人の言葉に、少将は、せきこむようにたずねた。

「見たのじゃな？　女達は、無事に峠を越えたのか？」

「いや、越えたかどうかわからぬ。恐ろしく足の達者な女が先に立ち、美女谷の方へ降りて行ったようじゃ」

「美女谷!?」

「小栗判官照手姫の物語を御存知か？」

「話は聞いている」

「その照手姫の生れ故郷じゃ。峠より間道を右へ降りて行くと、七ツ淵に出る。その淵に、照手姫の化粧の湯が湧いているのじゃ」

言い残して、猟人達は、雪の山道を滑るように駈け降りて行った。

「御前、あの女達、なぜ美女谷とやらへ向ったので

しょう？」
「わからぬ……。が、雪崩には呑まれなんだようじゃ。とにかく、行けるところまで行って見よう」
少将が歩き出すと、木野は、ソッと、喜平太にたずねた。
「その鳥追いとやらは、何者なのですか？」
「木野どのが、修善寺と下田で刃を交えた相手だよ」
「まア！　あのおなご衆が、また近づいているのですか？　なぜでしょう？」
「そのわけは、わしにもわからぬ。さ、急ごう。御前は、案外足がお丈夫だ……」
喜平太は、言葉を濁して、木野をせき立て、少将へ追いついた。
それから一刻ほどして、ようやく峠に辿りついた少将は、そこに集っている漁師達から、真弓達四人が美女谷へ道をとったわけを聞くことが出来た。
雪崩と大雪のため、下山の街道は、完全にふさがれ、わずかに美女谷への道だけが通行できたからである。
この道が、風の吹き抜け口になっており、積雪が少なかったのだ。
「――雪崩に落された猟人達はどうした？」
少将は、集っている男達にたずねた。
「谷底から、声が聞えるのじゃ。死んだものがあるかもしれぬが、生きているものもある」
「それはよかった。助けあげる手立てはあるのか？」
「小仏の宿から、縄やもっこを持った人数が来れば、なんとか助けられますわい」
「そうか……。無事を祈るぞ……」
少将は、男達にわかれて、美女谷への道を降りていった。
昼近く、小仏宿からの助けの人数が、峠へ駈けつけて来たが、その中に、六角十字兵衛と門人達も混っていた。
「男二人、女一人の、まさしく少将の一行に違いない。とうとう足取りを摑んだぞッ」
十字兵衛は、無気味な笑いを浮かべると、これまた、美女谷への道を急いだ……。
冬の陽は、早くも西に傾き、十字兵衛達が美女谷の里へ近づく頃には、ひとつまみほどの家々は、既に夜の色に包まれていた。
「――先生、あすこですぞ……」
門人のひとり、大慈宗一郎が、チロチロとまたたく山里の灯火を指さした。

「あれが、照手姫の生れ故郷か……。つまりヒナには稀れな美女だった、と言うわけだな」
もうひとりの門人古長三之助の言葉に、大慈宗一郎も大きな声で笑った。
が……、十字兵衛は、笑わなかった。
「――あなどるなよ。少将は、決してなまやさしい相手ではないぞ……」
門人達をいましめながら、美女谷の里へ近づいて行った。
その頃、少将たち三人は、里長の家にワラジを脱ぎ、燃えさかる囲炉裏の火に手をかざしていた。
「――やんごとないみやこ人をお迎えいたしましても、何んのおもてなしも出来ませぬ」
少将が身分をあかしたので、里長は、山里のわびしさに恐縮していた。
「いやいや、山海の珍味よりも、この火が何よりの馳走じゃ。かもうてくれるな」
「おかまいいたしたくも、出来ませぬが。もう一つだけ、よいものがございます。里の入口の七ッ淵の湯につかりますと、冬の夜寒も苦にならず、朝までよく眠ることが出来まする。のちほど御案内いたしましょう」
その七ッ淵の湯では、十字兵衛達が、湯につかっている女二人に声をかけていた。
「男二人、女一人の旅人が来た筈じゃが、見かけなんだか？」
「ウン、見たぞ。一刻ほど前に、この里を通り、小原の宿の方へ行った」
若い女が、乱暴な言葉で湯の中から応えた。――津矢である。が、辺りの暗さと湯の煙に、十字兵衛は気付かなかった。
「なに……、小原の宿へ？」
「うん、ここには泊る家もない。小原宿へは一里半、甲州街道の本宿じゃ」
「そうか……。よし、急ごう」
門人を促して、七ッ淵を離れて行く十字兵衛に、津矢が声を掛けた。
「気を付けて行けや。夜道じゃ。猪と間違えて射たれるな」
やがて、十字兵衛達三人の姿が遠ざかった。
「――津矢……、撃つ気じゃな」
それまで、うつむいて、十字兵衛達に顔を見せなかった女が、初めて口を開いた。――真弓だった。
「うん。あいつ、熊取内膳や伊豆屋のお石の仲間だ。

撃ってやる。ハハハ……、残ったやつは、猪と間違えられたと思うだろうよ」

それからしばらくして、静まり返った山峡の里に、銃声が一発聞えて来た。

「――いまのは、鉄砲の音のようじゃな？」

ふッと顔を上げてそう言った少将へ、里長が、少しも騒がず、ゆっくり答えた――

「――猟人が、猪を撃ったのでございましょうよ……」

編笠三人旅

墨染の少将の一行三人が、小仏峠へのぼった日から二日遅れて、佐渡金山奉行竹村丹波が小仏の関所へ着いた。

丹波は七千石の旗本である。が、天領佐渡一国を支配する金山奉行だ。関役人は丁重に出迎えて、役宅で茶菓をすすめた。

「幸い、雪も踏みかたまったことでございましょう。峠越えも、さほど困難ではございますまい」

「それはなにより……。佐渡の島暮しで雪には馴れているが、旅には雪は禁物……。ときに、墨染の少将が、この関を通られた筈だが……」

「はい、一昨日でございました。あいにく、大雪の朝でございましてな」

「ほう……。無事に越えられたかな？」

「猟人どもの話では、少将どのらしい三人連れが、美女谷への道を辿られたとのことでございます」

「美女谷へは、出られたのか？」

「はい、風当りの加減で、あの里への道は雪が少のうございます」

「もうひと組、六角十字兵衛と申す本多家家中のものが通った筈だが、記憶しておらぬかな？」

「存じております。これも三人連れでございました」

そういってから関役人は、ちょっと首を傾げた。

「竹村さま……。二刻ほど前、同じようなことをたずねて行ったものがございます」

「同じようなこと？」

「はい、墨染の少将と、六角十字兵衛のことを……」

「何者だな、それは？」

「もと大目付千々輪どのの後室、お浅と申すお方……。おかしなことに、傀儡師ふうの男を供に連れていました」

「黒太夫だな……」

竹村丹波がひとりごとのようにつぶやいた。

その頃、小仏を越えて、小原の宿はずれの茶店で休んでいたお浅のところへ、黒太夫がかけ戻って来た。

「御苦労でした。少将さまの様子が、なにかわかりましたか？」

「それが、とんと足取りがつかめませぬわい。おとついの大雪以来、峠を越えた旅人はごくわずかなのに、男二人女一人の三人連れを見かけたものがない」

「では、他の道へ……」

「いやいや……、少将が小仏へのぼったことは、関役人のことばでもあきらかですわい。もしかすると……」

「え!?」

「山の中で、雪崩に押しつぶされるか、鉄砲で撃たれるか……」

「まさか！」

「ところが、猪と間違えられて撃たれた侍が、この宿の旅籠で養生している。それがどうやら、六角さんらしいんですがね……」

黒太夫の聞き込みは正しかった。――六角十字兵衛は、小原宿の旅籠かねやのひと間で、やけ酒をあおっていた。

津矢が放った猪撃ちの弾が、十字兵衛の左太腿の肉をひと握りほど、むしりとったのである。

門弟二人に、この宿へ担ぎこまれてからの二日間、十字兵衛は、酒に溺れて苛立ちを押えて来たのであった。

「――あ……、やっぱり……」

女の声に顔をあげた十字兵衛は、障子をあけたお浅と黒太夫を見て、ぷンと、鼻の先きで笑った。

「――黒太夫、こんどは御後室のお供か？」

「佐渡さまのいいつけでさ。――黒太夫、そちも行け、十字兵衛ひとりでは心もとない……とね」

「なにッ！」

「おこるこたアねェや……。現にお前さんは、こんなところで動けなくなっている。佐渡さまはお眼が高かったわけだ」

「俺の腕のせいではないッ。糞ッ、小仏の山猿猟師め、俺を猪と間違えやがった」

お浅は、投げ出した十字兵衛の左脚を、痛ましそうに眺めた。

「十字兵衛どの、そのお体では、少将を追うわけにはゆきますまい」

「いや、もう痛みはとれた。肉もあがってきている。もう大丈夫だ」

「しかし、冬の傷は、なかなか口がふさがりませぬ」

すると、黒太夫が、ニタリッと、皮肉な笑いを浮かべた。

「片手片足か……。六角さん、無理をしなさんな。少将はあっしが引きうけた」

「ほざけッ！　少将は、この十字兵衛が必ずたおす……。たとえ、両手両足を失おうとも、この歯で、あの生ッ白いのど笛へ喰いついてやる」

お浅は、十字兵衛の執念に、思わず眉をひそめた。

「お浅どの、少将は、俺の宿命の敵だよ」

「そうらしいですね。ところで、少将の足取りは？」

「わからぬッ。門弟二人に調べさせているのだが、手掛りがない。小仏から、美女谷へ下ったことは確かなのだが……」

その墨染の少将は、小原の宿から七里離れた大月の町へ入り、相模屋という旅籠へ投宿した。

が、いままでの少将とは、姿が変っている。——いや、少将だけではない。喜平太も、女の木野も、ぶッ裂き羽織に野駈け袴、それに深編笠という武家姿である。

木野など、大小の差し方も板につき、笠をとると、前髪立ちの美しい若衆振りだった。

その夜、真夜中過ぎ……。

ソッと、廊下を踏んで、少将の部屋へ近づいた黒頭巾があった。

「——御前……、地の御鏡、まいりました……」

「——そちらは冷えよう。もっとこちらへ寄れ……」

既に床についていた少将は、起き上ると、火鉢のそばへ、忍び姿の真弓を呼んだ。

「佐渡金山奉行竹村丹波は、今宵小仏の宿に泊り、明日峠を越えまする」

「わしとの間に、二日のひらきがあるわけだな。向うは、かりにも金山奉行、供揃えなどして静々とやって来る。その点、こちらは身軽だ。これから、いよいよ間がひらくわけだ」

「しかし、御油断はなりませぬ。千々輪の後室と黒太夫が、小原の宿へ入っております」

「お浅が……」

「はい、御前との間は、わずか一日のひらき。その上、黒太夫は、一日に二十里を走る足を持っております」

「小原の宿には、六角十字兵衛が傷の養生をしている筈だな」

「それも、黒太夫が探し出し、千々輪の後室は、十字兵衛を見舞いました」

「なにごとか、相談することであろうな」

「それを、津矢と深雪がさぐりに行っております」

その頃、小原宿の旅籠では、十字兵衛とお浅と黒太夫が、同じようなことを話していた。

「かりに、少将がわれわれより先きに行っているとしても、せいぜい一日の開きだ。遠くて大月、近ければ上野原の宿に今夜は泊っていると考えてよいだろう」

十字兵衛は、傷ついた足をさすりながら、そういった。

「でも、黒太夫どのの調べでは、美女谷から先き、少将の足取りがプッツリと切れております。もしかすると、美女谷から、道を変えたのかもしれませんねエ」

「うム……、美女谷から、北へのぼって、五日市から青梅街道へ出る道はある。が……、この雪では無理だろう。ことに、木野という足弱な女を連れていてはな」

すると、黒太夫が口をひらいた。

「ハハハ……、そんな甘い考えだから、六角さんは木野から振られたんだ」

「黒太夫、俺をおこらせる積りか？」

「なアに……。木野は、そんな並みの女じゃないといってるんでさ。あいつは男まさりだ。雪くらい、なんとも思っちゃいない」

二人の話を、じッと聞いていたお浅がふッと顔をあげた。

「あたしは、やっぱり甲州街道だと思いますよ」

「じゃ、あッしの調べが悪いのだと——」

「いえ、もしかすると、少将達は姿を変えているかもしれない」

「なーる！　よしッ。ひとっ走り、与瀬、吉野、上野原と、近くの宿を調べて来よう」

黒太夫は、年に似合わぬ身軽さで、旅籠を飛び出した。

と……、そのあとを、軒下の闇を伝って、黒い影が二ツ追いかけて行く……。忍び姿の深雪と津矢だった。

「おい、黒太夫……」

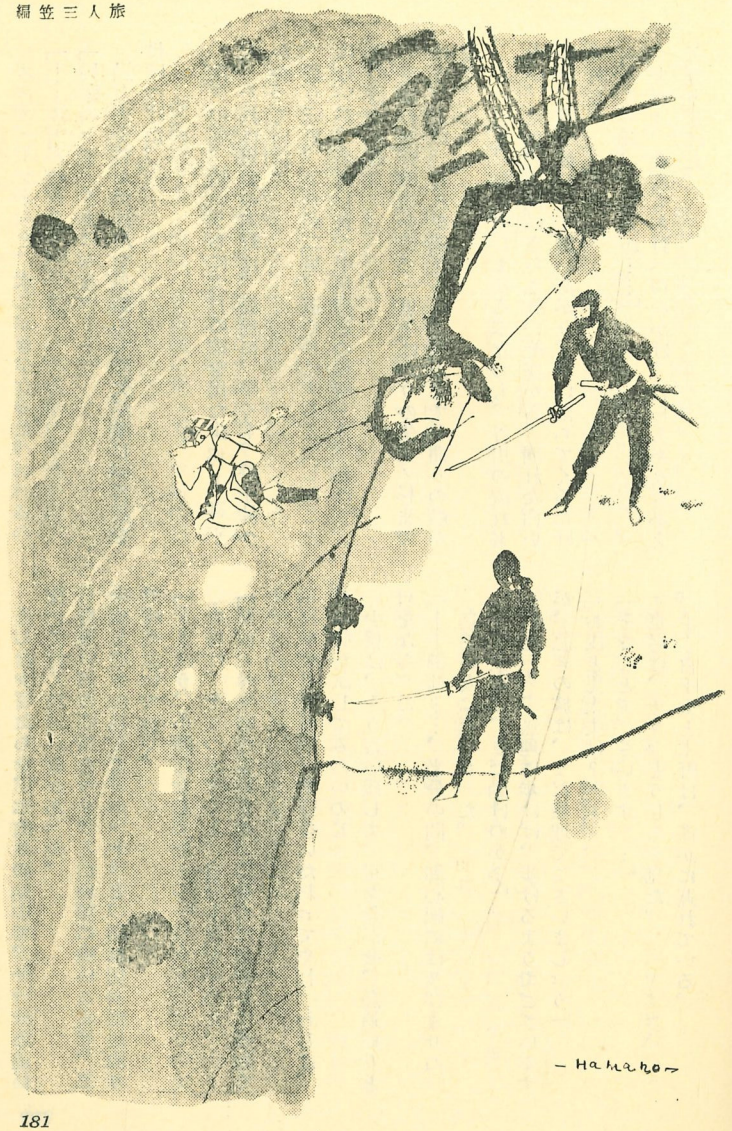
小原の宿を出はずれたところで、津矢が出し抜けに声をかけた。

左側は、雪水を集めてふくれあがった桂川。右は、長く御岳山へ続く奥多摩山塊の岩場である。

「な、なんだお前達？」

黒太夫は、忍び姿の津矢と深雪を、雪あかりで、すかすようにして眺めた。

「俺の名を言ったところで、お前は知っちゃいないさ」
「その声……、女だな？」
「だったら、どうした？」
「よっ！」
黒太夫は、パッと、うしろへ飛びさがると、腰を落して、身構えた。——既に、両手に手裏剣を握っている。
が……、津矢と深雪も、じっとしてはいなかった。サッと左右に別れると、ピタリッと、刀を構えていたのである。
「おのれ等、伊豆の修善寺で……」
「その通りだッ……」
口をきくのは、いつも津矢である。
「悪家老の熊取内膳や、伊豆屋のお石を襲ったのは、俺たちだッ」
「今度は、わしを斬る気かッ？」
「本多佐渡の手先きは、全て斬るッ」
「糞ッ！」
黒太夫は、右手を振りあげた。
が……、手裏剣を投げることは出来なかった。——津矢を狙えば深雪が、深雪を狙えば津矢が、グイッと出てくる。
黒太夫は、じりッ……、じりッ……と、あとへさがった。
「——いよーッ！」
津矢の口から、鋭い気合が飛んだ。
「けーッ！」
黒太夫は、とっさに津矢へ狙いをつけた。
その一瞬、深雪が、無言で飛びこんで行った。
「ちぇーいッ！」
黒太夫は体をひねって、深雪の刃をかわした。しかし、次ぎの瞬間——
「しまったッ！」
黒太夫の口から、悲痛な叫び声が飛んだ。——サッと一歩ひいて身構えようとした時、力をいれて踏んばった足許が、グズッ……と、崩れたのである。
街道は、雪におおわれていた。黒太夫は、まだまだ大丈夫と思って川岸の方へ下がって行ったのだが、実は、雪だけが岸からはり出し、その下に土がなかったのである。
「わーッ！」
黒太夫は、脚が短く、背の曲った体は、一度傾くともう戻しようがなかった。



ズズズズーン……と、水しぶきが立った。
「――津矢どのッ……」
「馬鹿めッ！　ざまアみろッ……」
黒太夫を呑んだ桂川を見詰めて津矢が激しい言葉を投げつけた。

次ぎの朝、暗いうちに大月の宿を出た少将と喜平太、それに男姿の木野は、昼前に、早くも、笹子峠へかかっていた。
登り三里、下りが二里、道のりにすると大したことはないが、名にし負う甲州街道の難所……、わけて、雪の道である。
東麓の黒野田宿を出て一里半ばかりの矢立ノ杉まではまだよい。これを過ぎると、頂上まで七曲りの嶮が続く。
この辺り、眼を楽しませる木立ちも、谷川の流れもない。ただ、雨風にさらされた絶壁から、崩れた白い砂が、雪を混じえて舞いあがり、舞い落ちてくるだけである。
「――木野、大丈夫か……」
少将は、幾度も木野へ声をかけ、自らもあえぎあえぎ登り続けた。

そんな少将たちを、七曲りの途中で、サッサと追い抜いて行く鳥追い女があった。
鳥追い笠の紅緒をキリッと白い顎に喰いこませ、三味線を逆さに抱えて、トットッと、馴れ切った足取りで峠へ急いで行く。
「――ほう、小癪な女じゃな……」
少将は、そうつぶやくと、自分も足を早めた。
「御前、おやめなさいませ。山登りにあせりは禁物です」
「喜平太、そちは、木野をいたわってやれ。わしは、この脚を試してみたいのじゃ」
少将は、そう言い残して、足を急がせ、鳥追い女と肩をならべた。
「――御前……、当分の間、御心配には及びませぬ」
鳥追い女は真弓だった。
「十字兵衛は、まだ動けぬか？」
「いえ……、無理に歩けば、歩けるようでございますが、急ぎの旅は、まだ無理でございましょう」
「お浅と黒太夫は？」
「そのことでございます……」
真弓は、チラッとうしろを見た。
――喜平太と木野は、遙かに遅れている。

「深雪と津矢が、黒太夫を桂川へ追い落しました」
「死んだのか？」
「わかりませぬ。でも、夜中のことではあり、雪で水かさも増しておりました。寒さは寒し、どうなりましたことやら……」
それから半刻ほどして、喜平太と木野が峠に辿りつくと、少将は、山かげの甘酒茶屋で、熱い番茶をすすっていた。
「――御前……、鳥追いの女はどこへ行きました？」
「いや、とてもかなわぬ。わしの負けじゃ。さて、今宵は勝沼泊りとしようかな」
「もう一と足伸ばして、石和宿へ出ましょう」
「ハハハ、そう急ぐことはあるまい……」
少将の気持ちには、ゆとりが出来ていた。
が、その頃、半死半生で担ぎこまれた黒太夫からわけを聞き、十字兵衛がいきり立った。
「――駕籠だッ！　俺は、早駕籠に乗って、少将に追いつくぞッ！」
「――お待ちなさい、十字兵衛どの。なぜそのように死に急ぎをなさいますか？」
いきり立つ六角十字兵衛を、お浅は静かに眺めた。
「――俺が!?　俺が死に急ぎをしているといわれるのか？」
「駕籠で、少将を追うといわれたではありませんか」
「少将を斬るために……」
「いいえ、少将に、斬られるだけです」
「御後室ッ！」
十字兵衛は、眼を血走らせて、ダッと立ち上った。
が……、うッ……と呻めくと、傷ついた脚を押えて、ドスッと倒れた。
「ホホホ……、その脚で、少将が斬れますか？」
「無念だッ！」
「わたしに、よい考えがございます。少将の足取りを摑み、いつでも追いつけるようにしておけば、勝負を五日や十日先きにしてもよいのでしょう」
「そう出来るといわれるか？」
「わたしが少将をさがし出し、あなたに報せてあげましょう」
「黒太夫も、二、三日は動けまい。御後室ひとりで少将を捜し出せるか？」
「ひとりではありませぬ。今宵この宿に、佐渡金山奉行竹村丹波どのがついた筈。丹波どのの力を借ります」
しばらくして、お浅は小原宿の本陣に竹村丹波を訪

ねた。
「ほう……。十字兵衛が猪と間違えられたのでござるか……」
「はい……。本人は、そう申しております。でも、わたくしは、別のことを考えております」
「少将に、撃たれたといわれるのか？」
「いいえ……、大久保石見守の家来に――」
「なにッ、石見さまの家来に!?」
もと、大久保石見守の家来であった丹波は、ハッと顔色を変えた。
「わたしの連れの黒太夫は、石見守のもと家来と名乗るおなご二人に桂川へ追い落されました」
「女？」
「油断はなりませぬ。いずれもなかなかの腕前……。熊取内膳どのを幾度か狙い、廻船問屋伊豆屋のお石どのを危地に追い詰めたおなご達でございます」
それからお浅は膝を進めた――
「丹波どのも、御用心遊ばせ」
「わしが!? なぜ？」
「石見守のもと家来どもは、裏切者は逃しはしませぬ」
「わしは石見さまを裏切った覚えはない」
「ま、よろしゅうございましょう。用心に越したことはありませぬ。つきましては……」
お浅は、声をひそめた。
「――なに、人数を貸せといわれるのか……」

江戸の山犬

江戸を出て七泊八日、墨染の少将の一行三人は、北陸街道の寺泊宿へ辿りついて、初めて荒海に横たわる佐渡の島を眺めた。
「――あれが佐渡か……」
少将は、堂々と本陣に入ると、喜平太を船番所へ走らせたあと、海に面した廊下に立ち、黒い島影を指さしてつぶやいた。
ここでは、姿も公卿の旅姿。木野も女姿に戻っていたし、身分も明らかにしていた。
「――はい、この浜辺から順徳のみかども、日蓮上人も佐渡へお渡りでございました」
本陣越後泉屋の主人は、紋付羽織袴で、両手をついて答えた。
寺泊は、伊井家の支藩二万石の領内では、指折りの町である。また、北陸街道では大宿であるし越後の国

一ノ宮の弥彦山はすぐ近くである。従って、大名の宿泊には馴れている越後泉屋の主人も、四位の少将と言う公卿衆の接待は初めてで、いささかとまどっているようであった。
「佐渡は、ここからどれくらい離れている？」
「寺泊から佐渡の寺泊まで海上十五里でございます」
「金山奉行所のある相川へは？」
「相川へ直接まいる船はございません。寺泊や出雲港からは、寺泊か小木か沢根。新潟からは両津へ参ります」
「いまは、海の荒れる頃か？」
「はい、冬のうちは、どうしても北風が吹きつけますので……」
主人はそう言うと、少将のうしろに控えている木野を、心配そうに眺めた。
そのとき、喜平太に伴われて、中年の侍が、あわただしく入って来た。
「――御前、船番所頭、長岡三左衛門どのでございます」
「おう……、わざわざ済まぬな。佐渡へ渡る便船を都合してくれるか」
すると、船番所頭は、万事心得ているというように、丁寧に頭を下げた。
「明日、明け五つ刻に出港の御用船に、御座所の用意がしてございます」
「わしのために、わざわざ用意をしてくれたのか!?」
「は……、佐渡奉行竹村丹波さまからのお指図により まして、お待ちいたしておりました。ただ、御前のお許しを頂ければ、江戸より佐渡へ送る水替え人足を十五人同船させていただきとうございまするが……」
「わしはかまわぬ。船出は五ツ刻じゃな？」
「は、明朝、お迎えにうかがいます」
船番所頭が帰って行ったあとで、少将は喜平太、木野と顔を見合せた。
「喜平太、してやられたぞ。遙かに引き離した積りの竹村丹波が、先手を打っていたわ」
「わかりませぬ。丹波は、まだ善光寺平辺りにいる筈です」
喜平太も首を傾げた。
翌朝、少将一行は、御用船で寺泊を離れた。――案内役として、船番所頭長岡三左衛門も乗りこんでいた。
船は、かなり大きく揺れ続けた。
木野が、蒼い顔をしている。――剣をとっては男ま

さりの木野も、荒海にもまれると、かよわい女に過ぎなかった。
「木野……、苦しいか？」
「はい、胸を、しめつけられるような気がいたします」
「帯をゆるめて、横になっておれ……。喜平太、面倒を見てやるがよい」
そういい残して、少将は胴の間を出た。
ともの方に、唐丸籠が十五、荷物のように押しこめられてあった。
籠の中には、ひとりずつ、髭ののびた男が入っていた。
「あれが、水替え人足か！」
「はい……。むさ苦しい者共がお眼にとまって、恐れ入ります」
船番所頭が恐縮している。
「人足を、罪人のように、唐丸籠で送るのか」
「はい、人足と申しましても、殆んどが、江戸でもてあまされた無宿者でございます。それに、伝馬町のお牢より移す罪人も幾人か混っております」
「それを、金山の人足だけでは足りませぬので……、既に、二百人余り使うております。何れも暴れ者揃い、佐渡では、江戸の山犬と申して恐れております」
話しているうちに、船は、いよいよ大きく揺れて来た。
「――出してくれーッ！」
「――く、苦しいッ！　縄をといてくれーッ」
「――俺達は、金山掘りを助けに行くんだぞーッ、もっと、だいじにしろーッ……」
唐丸籠の男達が、口々に喚き始めた。
「――長岡……」
「はい……」
「こうしていても、胸がむかついて来る。唐丸籠の中にとじ込められていては、さぞつらかろう。出してやってくれぬか？」
「は……、しかし、御前のおそばなどに近づくようなことがございましては……」
「かまわぬ。出してやってくれ……」
やがて、十五人の男達が、ゴソゴソと唐丸籠からはい出して来た。
「――御前のお口添えだ。御礼を申し上げろ。佐渡へ着く前には、籠へ戻るのだぞ……」
船番所頭からそういわれて、男達は、遠くから、ペコペコと少将に頭を下げた。
「――これ、もっとこちらへ来て、手足を伸ばせ。ハハハ、おとなしい山犬達じゃ……」
こだわりのない少将の言葉に島送りの男達が、始めてノビノビと笑った。
その日の夕方、御用船が赤泊の港へ入ると、山犬達は、口々に礼を言って籠へ戻った。
「――わしも、佐渡の山々を歩く。どこかでまた会うこともあろう。体をいとえよ……」
少将は、山犬達に言葉を残し、喜平太と木野を連れて、船を降りて行った。
が、船から岸へかけられた板橋の上で、ハッと、立ち止まった。
船着場に、千々輪のお浅がニコニコと笑っていたのである。
「――ほう……、これは変ったところで会うたな……」
少将は、驚き顔で、お浅に近づいて行った。
「――おあとを、追うてまいりました……」
お浅は、ずばりと、本当のことを言った。――なまじっか隠し立てしても、通じる相手ではない……、お浅はそう割り切って考えていたのである。
「わしのあとを？　なぜだ？」
「ひまをもて余している後家暮しでございます。御前が佐渡へお立ちになったと聞くと、わたくしも佐渡が見とうなりました」
「あとの鳥が先きになったな？」
「はい、御前は出雲港へ向かわれたものと思い、早駕籠で参りました。この赤泊には、昨夜着きました」
「ひとりか？」
「はい、ひとりでございます」
そのとき、寺泊の船番所頭が、ひとりの侍と老僧を連れて近づいて来た。
「御前、金山奉行所手代、賀来陣五郎どのと、長禅寺の住職一貫和尚でございます」
賀来陣五郎は、デップリとして、うわ背があり、馬乗り袴にぶっさき羽織、陣笠をかぶって、どういう積りか、手に、ドキドキと光る鉈を持っていた。
「――お奉行の命により、御世話いたします……」
陣五郎は、噛みつくような調子で言った。
「世話をかけるな……」
越後の寺泊では、佐渡奉行の手配が先きについたので驚いた少将も、今度は驚かなかった。
――奉行の竹村丹波という男、なかなか油断ならぬやつ……そう考えていたのである。

「が……、わしは、格式ばったことは大の嫌いじゃ。出来れば、勝手に歩かせてもらいたい」
「わたしは、お奉行の指図に従わねばなりません。いま、わたしが受けている御命令は、御前を、長禅寺に、三日間お泊めせよと言うことです」
「三日!? この赤泊の港にか？」
少将が、思わずたずね返したとき、御用船ではこばれて来た水替え人足達が、唐丸籠でひとりずつ降され、船着き場へ並べられた。
と……、陣五郎は、うしろに控えている老僧一貫和尚を振返った。
「――和尚、わしは、山犬共を扱わねばならぬ。御前の世話は、頼むぞッ……」
そう言うと、もう、少将一行には目もくれず、唐丸籠に近づいて行った。
「――奉行所下役共、ここへ来いッ……」
陣五郎が、大声で怒鳴った。
踏込み袴にワラジばきの軽装が四、五人、ばらばらと駈け寄って来た。
「――よいかッ。申しつけたとおりにするんだぞッ」
そう叫んだ陣五郎は、手に持った鉈を振り上げるなり、ハッシと、唐丸籠へ振りおろした。――籠の縄が、プッツリ切れて飛んだ。
「――みんな、駕籠から出ろッ！」
唐丸籠の縄を、次ぎから次ぎにと鉈で叩き切った賀来陣五郎は、大声で喚いた。
ゾロゾロと、連れられて来た水替え人足たちが唐丸籠から出た。
が……、もともと、江戸の無宿者や、小悪党の寄せ集めである。その上、大揺れに揺れた御用船から、陸へあげられたばかり……。いずれも、ふて腐れた顔付きで、あくびをしたり、足を撫でたりしている。
「――おのれ等ッ、舐めるなッ……」
陣五郎が、またぞろ喚き立てた。
「――集まれッ！ 一列に並べッ。相川金山まで、わずか十里足らずだッ。走れ。明け六ツまでに、金山へ入れッ」
すると、ポカンと、怒鳴り散らす陣五郎を眺めていた人足共が、にわかに騒ぎはじめた。
「――無茶だッ！」
「――足が立たねエッ」
「――けッ！ 鉈でどやされたッて、おっかなかアねエぞッ」
「水ッ……。水くらい飲ませてくれッ」

「うるさいッ！」
陣五郎は、歯をむき出して、ねめ廻した。
「うぬ等、罪人だぞッ」
「罪人だって、人間だッ。馬じゃねエぞッ」
「そうともよッ。山越しの十里を、ひと晩で走れるけッ」
「黙れッ……」
陣五郎は、ダッと、一歩前へ出た。
「うぬらだけが走るのではないッ。奉行所下役も走るのだッ……。さ、並べッ、走るのだッ」
少将は、さっきから眉をひそめていたが、たまりかねて、陣五郎へ近づいて行った。
「これこれ……、賀来とかいったな？」
「賀来陣五郎です。何か御用ですか？ 御用なら、長禅寺の和尚に申付けて頂きたい。わたくしは、御覧の通り、いそがしいのです」
「いや、わしのことではない……。そのもの達を、もそっと、いたわってやってはどうじゃ。無宿者、とが人とは申せ、遙々江戸からこの佐渡へ、公儀御用の金山掘りに来たのじゃ」
すると、陳五郎は、ニヤリッと笑った。
「そういうお話なら、御無用に願いましょう。佐渡には佐渡のおきてがありますからな」
と……、このとき、思いがけぬ女の声が聞えて来た――
「――おい、お前さん達……。気付けをあげるよ。グーッと一ぱいおやり……」
ワーッと、人足達が、喜びの声をあげた。
少将は、思わず。眼を見はった。
おんぼろ姿の人足達に取り巻かれて、若い女が、ニコニコと笑い、ひとりひとりに、樽の酒を注いでやっていたのである。
「――千里ッ……。貴様ッ……、また……」
陳五郎が、舌打ちをした。
「――あれは、なにものじゃ？」
少将は、一貫和尚にたずねた。
「はい、赤泊の網元の娘でございます……」
「――チサト……。チサトという名であったな、あの娘は？」
「はい、千の里と書きまする。当年十九でございますが、老齢の父親にかわって、荒くれ漁師共を仕切っております」
一貫和尚の説明を聞いているうちに、千里は水替え人足たちに、樽の酒を飲ませてしまった。

おかしなことに、鼻息のすさまじい賀来陳五郎が、そっぽを向いて、見て見ぬ振りをしている。

その夜、少将一行三人は、陳五郎の指図どおり、長禅寺へ泊ることにした。

寺の門前には、三ツ葉葵の紋を打った高張り提灯をかかげ、かがり火を焚き、奉行所の軽輩十数人が、襷鉢巻きで寝ずの番に立った。

しかも、とっぷりと暮れると同時に、佐渡は猛烈な吹雪に包まれたが、それでも、番士達は立っていた。

「和尚、江戸の山犬達は、この雪の中を、相川へ急いでいるのか？」

「止むを得ませぬ。――甘い顔をすればつけあがる……と、奉行所では考えておりまする」

「結局、力で押えつけているのか？」

「はい……、従って、時には、大勢で島破りをいたすこともございます」

そんな話をしているとき、庭先きから声をかける女があった――

「――和尚さま……、お客人の夕御膳は済みましたか？」

「千里でございます」

和尚は、そう言って障子をあけると、千里が、吹きつける雪の中に立っていた。

「夕食はお済みじゃ」

「やれしもうた。夕浜で水揚げした鯛を持って来ましたのに……」

なる程、千里は、目の下二尺余りの鯛を一匹、逆さにぶら下げていた。

「これ、寺に生臭さものを持ち込むとは何ごとじゃ？」

「ホホホ……、和尚さま、お目をつむっておいでなされ……。江戸のお客人に、お精進はお気の毒。わたしが、生きづくりにして差上げましょう」

少将は、千里の言葉に、思わずほほ笑んで木野を呼んだ。

「――折角のこころざし、木野、その魚を貰うておけ。あとで和尚に引導を渡して貰うてから賞味しよう」

それから、少将は笑顔を向けた――

「こう、厳重に見張られていては、自由に外を歩くことも出来まい。うまいものでも喰うて、うさを晴そうぞ」

「御前、奉行所は、御前の御身辺を警戒いたしているのでございます」

「ハハハ、ものは言いよう、考えようじゃな。わしは、押し込められたような気持ちじゃ」

少将がそう言ったとき、けたたましい、番士の叫び声が聞えて来た――

「――曲者ッ！　曲者が忍び込んだぞッ……」

――ギャッ……と、凄まじい悲鳴が、吹雪に乗って、少将の耳へ聞えて来た。――誰かが、斬られたのであろう。

「――御前ッ、御用心をッ……」

喜平太が駈けつけて叫んだ。

「男か女かッ？」

「わかりませぬ。黒衣黒頭巾の曲者が三、四人……」

そう叫ぶと、喜平太はまた、駈け出して行った。

「――木野！　木野はどうした？」

が……、木野ばかりか、千里も姿を消していた。

――千里が持って来た鯛は、縁側へ放り出してある。

「御前、千里は心配ございません……」

一貫和尚が、鯛をとり上げて、少将を見た。

「千里は、女ながら、佐渡一心流の剣を使います、ただ、木野どのが……」

「いや、木野も応変夢幻剣のつかいてじゃ」

「ほう！　それで安心いたしました……」

その頃、吹雪の中で、喜平太、木野、千里の三人がそれぞれ黒装束一人を相手に、ピタリと刀を構えていた。

奉行所から派遣された番士たちは、この六人を遠巻きにしているだけである。

「――おいッ、気に入らぬぞッ……」

木野と相対している黒装束が叫んだ。女の声……津矢である。

「おれの相手は、いつもお前だなッ」

「おう、その声は……」

木野も、相手が、修善寺と下田で闘った奇妙な女であるとわかると、思わず闘志をかき立てられた。

千里は、早くも刃を交えていた。

――小手を狙った相手の剣先を、みごとにはじき返していたのである。

千里の相手は一枝だった。が……、もちろん、千里は相手を知らない。

喜平太は、――しまった……と思った。黒衣の女三人が、真弓の一党であることに気付いたのである。

だが、番士達が見守っている。――ヘタなことをして、疑われるようなことがあっては一大事である。

「――木野どのッ、千里どのッ、おひきなさいッ。拙

者ひとりでひきうけた……」

喜平太は叫びながら、ズイッと一歩前へ出た。——前に立って刃を構えているのは深雪である。

ところで、真弓は……、少将の前で手をついていた。

「——佐渡奉行竹村丹波は、明後日、寺泊より御用船にて、相川金山に一番近い沢根の港へ入ります。つまり、御前をこの赤泊に釘づけにしておき、その間に先き廻りする積りでございます」

「十字兵衛や黒太夫は？」

「丹波の行列に加わっております」

そのとき、喜平太の声が聞えて来た。

「——御前……、曲者三人は追い払いました。御心配には、及びませぬぞ……」

少将と真弓は顔を見合せて、ニッコリと笑った。

黒木御所

墨染の少将は、赤泊に着いて足かけ三日、一歩も、宿舎の長禅寺から出なかった。

真弓達四人が忍びこんでから、番士の数は倍になり、金山奉行所手代賀来陣五郎みずから、本堂に腰を据えて警護の指揮をとるようになった。

少将が、表門へ行くと、陣五郎が飛び出してくる。

「——御前……、お出かけなれば、ひと言お知らせを願います。乗り物の用意もいたさせますし、供揃えもせねばなりませぬ。佐渡は人気の荒いところ、軽々しい御外出は、おやめに願います……」

これでは、警護ではなく、体のよい監禁である。少将はそれっきり、外出しようとはしなかった。

が……、退屈はしなかった。一貫和尚から、佐渡の様子を詳しく聞くことが出来たからである。

その他に、網元の娘千里も、度々、新しい魚を持って訪ねて来た。

千里からも、いろいろの話を聞くことが出来た。

「——喜平太……、一貫和尚も、千里も、奉行の竹村丹波をひどく褒めているぞ」

「思いがけぬことでございますな。本多佐渡守の腹心とあれば、さぞ評判の悪いことと考えておりましたが……」

「金山人足からも慕われ、港々の町人、船頭からも尊敬されているとのことじゃ……。それにひきかえ、賀来陣五郎の評判は悪い」

「虎の威をかる狐とは、ああいう男のことでしょう。

傲慢無礼、しかも頑固で融通がききやせん」

「しかし、その陣五郎も、千里には一目おいているようじゃな」

「二ツ理由がございます。第一は、千里の怒りを買いますと、佐渡全島の漁師共が承知しません。第二の理由は、柄にもなくあの男、千里に恋慕いたしているようです」

「ハハハ……、その方が第一の理由ではないかな……」

そのとき、庫裡の方から、華やいだ女の笑声が聞えて来た。

「千里のようじゃな？」

「はい……、木野どのに、鯛の生きづくりの仕方をおしえているのです。二人は、ウマが合うと申しますか、大そう仲がようございます」

ところが、長禅寺に、毎日通うて来る客がもうひとりあった。——お浅である。

「そなたは、佐渡の見物に来たのではないか？　この小さな港町に足を止めていても、格別面白うはあるまい」

「まア、御前……。わたくしが来るのは、御迷惑でございますか？」

「わしは、おなごと話をするのは苦が手じゃ」

少将は、あからさまに言ったが、それくらいで引きさがるお浅ではなかった。

そして四日目の朝、沢根の港に上陸した金山奉行竹村丹波が、赤泊へやって来た。——とうとう、追いつかれたわけである……。

「——しかし、御前もおひとの悪い……」

挨拶がすんだあとで、竹村丹波は、少将を眺めてほほ笑んだ。

「蔵前大松院におたずねした折りのお言葉では、とても佐渡へお渡りとは思えませなんだ」

「わしは、つむじ曲りなのじゃ。押しつけられると、はね返しとうなる」

「わたくしが、御前に何か押しつけましたか？」

「——将軍家の言葉には、さからわぬ方が身のためであろう……と、言うたな？」

「おう、申しました。が、あれは御前のおためを思えばこそ……」

「そのおためごかしが、大嫌いじゃ。丹波、わしはこの三日間、我慢に我慢を重ねて来た。が……これからは、なにをするかわからぬぞ。あらかじめ、申しておく」

「わかりませぬな……。何がお気にいりませぬ？」

「賀来陣五郎の、警護振りが気にいらぬのじゃ」
「あ――！　陣五郎でございますか……。これは気付きませなんだ。他の手代に御警護いたさせればよろしかったものを……。なに分、わたくしが島を離れておりましたための不調法、どうか、お許しを願いまする」
　少将は、腹の中で、舌打ちをしていた。――この狸め、なにを言うことやら……、そう考えていたのである。
「――御前、明日は、わたくしがお供をいたし、相川へ向いまする。明け六ツ半立ちと、お含みおき下さい……」
　丹波は、そう言って、長禅寺から帰って行った。
と……、丹波と入れちがいに、千里がソッと、縁先きに忍び寄って来た。
「御前……よろしゅうございますか？」
「おう、千里か……。何事じゃ？」
「これを、旅の女芸人に、ことづかりました」
　そう言って千里は、ふところからヤの字に結んだ紙をとり出した。
　――御用心、十、黒、浅、密談中……。
ただ、それだけが走り書きしてある。が、それで充分だった。――六角十字兵衛と傀儡師の黒太夫とお浅が、いまどこかで落合って、密議をこらしていると、真弓からしらせて来たのである。
「千里、その女芸人は、ひとりだったか？」
「いいえ、二人でした。美しい鳥追い姿でございます」
　――真弓と、深雪か津矢か一枝であろう。
「千里、いろいろ世話になったが、わしは明日、相川へ行くことになった」
「わたくしもご一緒にまいります」
「そなたも!?」
「はい……。木野さんと、約束をしました。お供をさせて下さいませ……」
　その頃、お浅が泊っている旅籠の一室で十字兵衛が、黒太夫とお浅に言っていた――
「――よしッ、決めた。場所は、黒木の御所だッ……」
　次の日の朝、黒染の少将を乗せた大名駕籠は、三十余人の佐渡金山奉行所の番士に護られて赤泊の町を出た。
　行列の先頭には賀来陣五郎、駕籠のうしろには奉行竹村丹波が馬でつき添っている。

　喜平太と木野が駕籠わきについていた。――網元の娘千里は、身軽ないでたちで、行列のあとからついて行く。裾を高くからげて、赤いものをチラつかせた千里の姿に、赤泊の人々は驚きの眼で行列を見送った。
「――おう……。あれが真野の入江か……」
　四ツ（十時）前に、経塚山の峠にさしかかったとき、小将は駕籠から出て、眼下にひらけた青い入江を指さした。
　佐渡ヶ島は、大佐渡と小佐渡と、これを結ぶ国中の野とから成り立っている。――国中の東が両津の入江、西が真野の入江である。そして、小佐渡の最高峰が経塚山であった。
「――御前、相川の町へは、まだ七里を残しております。よろしければ駕籠にお乗り下さい……」
　宰領の賀来陣五郎が、景色を眺めて、いっこうに動こうとせぬ少将を、苛立たしげに促した。
「丹波……」
「はい」
「そなたは、わしの役目を知っているのか？」
「存じております。佐渡金山に、新しい金坑を掘るにつき、順徳のみかどをはじめ皇子、皇女方の御墓を崩さぬよう、墨縄を張って頂くためでございます」
「それなれば、わしがここに、いつまで立っていようと、文句はあるまい」
「と、申されますと？」
「真野の入江、それに続く真野の山野は、順徳のみかどのゆかり深いところ。わしは、景色を楽しんでいるのではない、地形を按じているのじゃ」
「恐れ入ります」
　丹波が頭を下げたので、賀来陣五郎は、渋い顔をして引き下った。
　が……、少将の本心は、地形の目測にあったのではない。行列の日取りを狂わすのが目的だったのである。
　――丹波並びに六角十字兵衛一味の計画を狂わせてやる……、少将はそう考えていたのであった。
　少将の狙いは図に当り、その日は、遂に佐渡の都相川の町へ着くことが出来ず、真野の河原田宿泊りになってしまった。
「――糞ッ！　この雪の積った道を、幾日歩かす積りだッ」
　河原田の宿で、陣五郎がいまいましげな言葉を吐き出している頃、暗いうちに赤泊を相川にたって先き廻りしていた六角十字兵衛も、不自由な足でジダンダを

踏んでいた。

「――千々輪の御後室、黒太夫……。行列に喰い下らねば駄目だぞッ……。今夜のうちに、河原田へ引返そう……」

「――じょ、冗談でしょッ！」

黒太夫は、十字兵衛の言葉に手を振った。

「風は吹きつけてくる。雪は積ってる。いまから夜道を河原田へなど行ったら、凍え死んじゃいますぜ」

「いやならよせッ。俺は行く。少将は、一旦相川の奉行役宅に落付き、それから黒木の御所へ行くだろうと考えたが、これが怪しくなった。河原田から黒木の御所はすぐだ。明日河原田を立てば、黒木の御所へ廻っても、夕方までには楽に相川に着く。だから、俺は引返すことに決めたのだ」

「それも、お前さんのひとり合点。少将はやっぱり、まっすぐ相川へ来るかもしれねエでしょう」

「よし……。こうしよう。お前は御後室とここで少将を待ち伏せしておれ。俺は、河原田へ行って、黒木の御所で待つことにする」

――両道をかければ、どちらかの網にかけることが出来る……、十字兵衛はそう考えたのである。

が……、この密談を、縁の下に潜んだ忍び装束の津矢がすっかり盗み聞いていたことは、十字兵衛もお浅も知らなかった。

更に、河原田に泊った少将が、既にこのとき、夜の闇にまぎれて、黒木の御所の前に立っていようとは、十字兵衛は夢想だにしていなかった。

少将は、竹村丹波の日程を狂わして河原田へ泊り、その夜、単身宿舎を抜け出して黒木の御所を訪ねたのである。

その昔、鎌倉幕府のために佐渡へ流された順徳天皇は、真野の入江に入り、恋ヶ浦の磯に上陸、浜辺に近いあばらやを宿舎とされた。――それが黒木の御所である。

悲風百年……。御所を囲む松林の中に立った墨染の少将は、しばらくの間、ジッと、眼を閉じていた。

こな雪を含んだ北海の風が、松の梢をピューッと鳴らして吹き抜けて行く。――この音を、順徳のみかども夜半の寝ざめに耳にされたことであろう……。

やがて、少将は、静かに御所のまわりを歩き始めた。ただ、歩き廻っているのではない。

――一歩、二歩、三歩、……百一、百二、百三……。

少将は、御所の囲りを歩数ではかっていたのである。

と……、出し抜けに、スッと、近づいて来た一ツの影があった。

――天蓋に、顔を隠した虚無僧姿である。

「――しばらくでございましたな……」

虚無僧は、静かな声で話しかけた。

「ほう……、伊豆の普化僧どのか？」

「下田以来ですな」

「いまは、佐渡を流しておいでか？」

「ハハハ……、御前に引きずられましてな」

それから虚無僧は、低い声でいった――

「――御用心……。帰りの御道に、賀来陣五郎が、人数を伏せております……」

少将は一歩虚無僧に近づいた。

「――お聞かせ願いたい……」

「くどういわれるな。いつかは、名乗る時が必ず参ろう」

虚無僧の声は、佐渡を吹き渡る北国の風よりも冷やかであった。

「いや、重ねて名前を聞いているのではない。なぜ、わしに力を貸されるのじゃ。伊豆で二度。今宵で三度ではないか。わけを聞かせて頂きたい」

「それとても、いつか明す折りもござろう」

「そういって、二、三歩あとへさがる虚無僧へ、少将の厳しい声が飛んだ――

「待てッ！　三島明神の唐金の燈籠を始め、伊豆各地の山神に奉納された大久保石見守ゆかりの品々を奪い去ったのは貴公であろうッ？」

「左様……」

虚無僧の声は、飽く迄静かであった。

「しかし、私利私慾のために奪ったのではない。燈籠、鰐口、賽銭箱などにかくされた黄金は、天下のために用うべきものと考えて奪ったまで……」

「では、奪い去った品々を、幕府の金蔵へ納められたのか？」

「いや……、徳川のふところを肥やすことが天下のためとは申されますまい」

「なにッ!?」

「お待ちなされ……。いまはそれを論じている場合ではない。この黒木の御所の調べは済みましたか？」

虚無僧は、なにもかも承知しているようである。

――少将は、ゆっくりうなずき返した。

「では、河原田の宿舎まで、安全な道を御案内いたそう」

「わしは、別に賀来陣五郎を恐れはせぬ」

「佐渡の木ッ葉役人などを相手にされずともよろしかろう。喜平太、木野にまかせておきなされい」
「喜平太と木野？」
その頃、喜平太の部屋へ、木野が駈けこんでいた。
「――御前さまが、危のうございます」
「なに、御前が!?」
「黒木の御所へ行かれたそうです。それを待ち伏せしているものがあります」
「木野どのには、どうしてわかったのだッ？」
「わたしの部屋へ、結び文を投げこんだものがあります。投げ込んだのが誰か、わかりません」
「よしッ。とにかく行ってみようッ」
ふたりは宿舎を飛び出した。――木野も刀を抱えている。
「待てッ！」
凡そ、七、八丁も来たところで、覆面に顔を包んだ男が、喜平太と木野の前に立ちふさがった。
「――どこへ行くッ？」
「貴様等か、御前を狙う曲者はッ」
「よッ、おーい、少将の家来共だぞッ」
その声に、十人近い覆面の男がバラバラッと現われて、ふたりを取り囲んだ。
「――覚悟ッ！」
ひとりの男が、喜平太の正面から躍り込んで来た。
「馬鹿者ッ！」
喜平太の右手が、ガッと、男の顎を突きあげていた。――南蛮拳法の突きがみごとに決って、男は、グエッと、奇妙な呻き声をあげてのけぞっていた。
「――手ごわいぞッ。ぬかるなッ」
頭立った男が叫んだ。賀来陣五郎である。
と……、そのとき――
「――待てーッ……」
河原田宿から駈けつけた五人の武士が、サッと、喜平太と木野をかばうように取り巻いた。
五人が五人共、全く同じ姿である。――白のラシャ羽織に胸当て、かぶと頭巾に面当てをつけた火事装束である。手には、細い鉄の鞭を持っていた。
「――な、なんだ。貴様たちッ」
覆面の陣五郎が嚙みつくようにたずねた。
「――火事装束五人組ッ」
「なにッ」
が……、火事装束五人組は、陣五郎達には、目もくれず、喜平太と木野にいった――
「この場は、われわれが引き受けた。貴公達二人は、

少将どのを迎えに行くがよい」
「かたじけない。が、貴公達は？」
「御無用……。たずねられても、答えることは出来ぬ……。さ、行かれいッ」
火事装束五人組は、喜平太と木野を囲んで、ジリッと動いて行った。
陣五郎一味の囲みが、もろくも崩れる。
「――急げ！　黒木の御所へは、一本道だッ」
それから半刻ののち、河原田の宿舎の一室で、少将と喜平太と木野は、首を傾げていた。
「――わからぬ、あの虚無僧はなにものであろう？」
少将がそういうと、喜平太もいった――
「わかりませぬ。あの火事装束五人組とやらは、なにものでしょうか？」
「その五人は、全て男ばかりか？」
少将は、真弓達の変装ではないかと思ったのである。が……、
「はい、男のみでございます。面当てのため、顔はわかりませぬが、声といい、身のこなしといい、明らかに男でございます」
――真弓達ではないとすると、誰であろう？　少将にも見当がつかなかった。
その頃、佐渡金山奉行、竹村丹波を、賀来陣五郎と、六角十字兵衛が訪ねていた。
「ふーム……、火事装束五人組……。陣五郎そちは何者だと思う？」
「わかりませぬ。いずれもかなりの剣の使い手……。わたしの配下は全部、鉄の鞭で、叩きのめされてしまいました」
丹波と陣五郎の話を聞いていた十字兵衛は、いまいましげに舌打ちをした。
「――少将は、もう黒木の御所へは行かぬだろう……。あの淋しい場所こそ、少将を斬るにふさわしいところと考えていたのに……」

地獄梯子

次の日、河原田宿を早めに立った少将の行列は、昼前に、佐渡金山の中心相川へ入った。
道は狭いが、家の造りは大きく、中には、江戸でも見かけないような三階建もあった。立ち並ぶあきんど店も、活気にあふれ、人通りも多い。
その人々の中には、まだ昼前だと言うのに、酒に酔っているものがかなりいた。その男達は、言い合わせ

たように、ぜいたくな丹後縞のどてらなどを着ている。
「――あれは、金山人夫ですよ。坑の中は、ともし灯の油煙がたちこめ、それを吸うので、みんな短命なんです。それで人夫達は、休みの日は有金はたいて飲んでしまうんです」
木野に、そんなことを語り聞かす千里の声が、駕籠の少将にも聞えてきた。
金山奉行所は、町の中央に当る高台の上にあった。奉行の役宅を始め、種々の役所から白洲金銀吹きわけの仕事場までいっしょになっている。
竹村丹波は、奉行所の書院と、これに続く四部屋を、少将一行の宿舎にあてることにしていた。が……
「――わしは、かた苦しいのが大嫌いじゃ。宿舎は、別のところがよい。この町にも旅籠はあろう……」
少将は、駕籠を降りようともせず、こう言ったのである。
「それでは、何かと警護にさしつかえます」
「警護などは、して貰わずともよい。わしは自由に、好きなときに好きなところへ行きたいのじゃ」
「旅籠にては、お口に合うような料理も出来ますまい。ここは離れ島、料理人もろくなのがおりませぬ」
「ご心配はいらぬ。わしは、賄い方を連れて来ている……」
そう言って、少将は、木野と並んでいる千里を見た。――千里がおれば、毎日の食膳をにぎわす海の幸には困らぬわけである。
止むなく、竹村丹波は、相川随一の旅籠新浜屋を少将の宿舎とするよう、賀来陣五郎に命じた。
「――けッ！　御奉行もしっ腰の弱いッ。俺なら、佐渡へ来たら金山奉行の指図に従ってッと、一喝をくらわしてやるのにッ……」
陣五郎は、むかっ腹立てながら、新浜屋へ泊っていた商人や山師を追い出し、玄関へ三ツ葉葵の幔幕を張りまわした。
「喜平太、丹波は渋い顔をしていたな……」
新浜屋の奥座敷へ落着いた少将は、喜平太と顔を見合せて笑った。
「次ぎ次ぎに計画をはぐらかされ、丹波どのも慌てていることでしょう」
そのとき、赤泊以来顔を見せなかった千々輪のお浅が入って来た――
「――御前、わたしもここへ泊めて頂いてよろしゅうございますか……」
「――千々輪の後室……、どうしていられたな？」

「御前が相手にして下さりませぬので、先に相川へ参りました。すると先きほど、奉行所の賀来陣五郎どのが来て、この旅籠は御前の御宿舎となる故、早々に立ちのけと申されます」
「ほう……。それは飛んだ迷惑をかけたな。わし達は三人、赤泊の千里を加えても、三部屋か四部屋ですむ。先客を追立てるとは、たいそうなことをするものじゃ」
「では、ここにいてもかまいませぬか？」
お浅は、大げさな身ぶりで、ホッとしたように胸を撫でおろした。
「御前に断られたら、どうしようかと思いました。このあたり、五六軒の旅籠は、この新浜屋から追い出された客で、いっぱいでございますよ。わたしは、三軒たずねて、三軒共断られました」
そう言ったお浅の言葉は嘘ではなかった。新浜屋のとなりの王管屋では、殆んどの部屋が相部屋……。ひと部屋に、三人、四人と詰めこまれている。
そのひと組に、六角十字兵衛達がいた。――六畳の部屋に、十字兵衛と黒太夫、それから門弟二人が、押しこめられていたのである。
「――でも、却って都合がよいと言うものでさア、奉行所に泊っていられちゃ、ちょっと手が出せねエが、町の旅籠なら、忍び込んで寝首を掻くことも出来るッてもの」
そう言う黒太夫に、十字兵衛が首を振った。
「旅籠でも、三ツ葉葵の幕を張った以上、手が出せぬ。宿舎で少将を斬れば、奉行竹村丹波の落度になるぞ」
「丹波のことなど、知っちゃいねエ」
「そうはいかぬ。御主君佐渡さまの大望に佐渡の金山は、なくてはならぬ金づるだ。そのため、奉行の丹波をお味方に引き入れた。その丹波が、いま奉行をやめさせられるようなことになっては一大事……」
「じゃ、どうするんです？」
「少将の外出を狙って斬る……。そのためには、少将が奉行所に泊ってくれていた方が都合がよかったわけだ。動静がよくわかるし、外から、少将へ連絡をとることも出来ぬ」
「外から？　あの黒装束の女達のことですかい？」
「それから、賀来陣五郎が手痛いめにあわされた火事装束の五人組……。ありゃ一体、なにものだろう……」
そこへ、ソッと、賀来陣五郎が入って来た。
「――お奉行所からの使いで参ったのだ。千々輪の御

後室は、新浜屋へ泊ることになった。……そう伝えてくれとのお言葉だ」
「おッと、よしよし……」
黒太夫は、ピョンと立ち上がると、傀儡箱から遠眼鏡をとり出して、新浜屋の方を眺めた。
「あ、お浅さまが、右手で髪をなおしてるッ」
「それが、どうした？」
たずねる十字兵衛へ、黒太夫が答えた——。
「ありゃ、少将が出かけるって合図でさア」
「——少将を追うのだッ、続けッ！」
門弟二人に、噛みつくような言葉を叩きつけて、十字兵衛が部屋を飛び出した頃、喜平太を連れた少将は、既に新浜屋の玄関へ立っていた。
「——御前！　どちらへッ……」
若い番士がひとり、駈け寄って来た。
「金山を見て来る」
「しばらく……。ひと口に金山と申しましても、御直山だけでも三十六ヵ所ございます」
「御じき山とは？」
「公儀のお持ち山、即ち、金山奉行所が直々に支配いたしているものでございます」
「わしは、順徳のみかどの御遺跡に一番近い金山を見たい」
「それは、鶴子金山でございます」
「ここより、どれほど離れている」
「凡そ、一里でございましょう」
「わけはない……。喜平太、行こう」
「お待ち下さいッ」
若い番士は、少将の前へ廻って両手をついた。
「警護のものが、お供をいたします」
「無用じゃ。わしは、勝手にさせてほしい」
「それは、危のうございます。金山人夫は気性の荒いもの。どんな御無礼を働くことかわかりませぬ。——おのおのッ。御前のお出かけでござるぞッ」
番士はそう叫んでおいて、パッと、表門から駈け出して行った。
「喜平太、あの男、奉行所へ注進に行ったようじゃな」
「御前……、大丈夫でございますか？」
「警護隊変じて刺客団となる……か。が……、この真ッ昼間、奉行所の役人が、四位の少将を暗殺も出来まい。竹村丹波は、いや、ひいては本多佐渡守は、わしを、人気のないところで消したいのじゃ。心配するな。参ろう」
少将は、平然として新浜屋をあとにした。

が……、町へ出た少将と喜平太は、いつの間にか、六尺棒を抱えた番士達に囲まれて歩かねばならなかった。
しかも、鶴子金山への途中、金山奉行所の前を通りかかると、そこには、注進を受けた竹村丹波が、待ち受けていた。
「——御前、御案内いたします……」
丹波は、いや応なしに少将の前に立った。
鶴子金山の近くには、順徳帝の皇子、皇女の御墓がある。それをよく眺めてから、人夫頭の案内で、少将は坑内へ入ることにした。
人夫頭は、灯火の油壺を口からぶらさげて地底へ降りて行く。降りる梯子は丸木梯子だ。
そのあとへ続く少将と喜平太の顔へ、ムッと異様な臭気が吹きあげてくる。すえたような魚油の燃える匂いである。
少将の姿が見えなくなった頃、穴の入口で見送っていた丹波の横に、ヒッソリと十字兵衛と黒太夫、陣五郎の三人が近づいた。
「お奉行、少将は自ら地獄へ行きましたな」
十字兵衛は、ニヤリと笑うと、少将を追って穴へ入って行った。
坑内は段々畑のように、岩肌を刻んで幾層にもなっていた。
平らなところは切場と呼ばれている。上の切場から下の切場へ、丸木梯子がかけられている。
後世、——佐渡の金山この世の地獄、のぼる梯子は針の山とうたわれたのが、この丸木梯子だ。
十字兵衛と黒太夫は、陣五郎に連れられて、この切場を幾段か降りた。
切場には、魚油が燃えている。凄まじく油煙をあげるこの灯火は、ポーッと、二、三尺ほどを、ほの暗く照らしているだけである。
焔の環から一歩離れると、冥土を思わせる常闇だった。
「——しかも、この闇の中には、幾つとなく、掘りかけの穴がある。殺して、穴へ投げ込めば、捜そうにも捜しようがござらぬ」
陣五郎は、十字兵衛の耳へ、そうささやいた。
「しかし、人夫がうろちょろしているようだが……」
「御心配御無用……。やつ等はモグラモチ、十日に一度しか地上へ出られぬ水替え人足……。江戸から送られて来た罪人か無宿者でござるよ」
その水替え人足たちは、意志を失ったからくり人形

のように、黙々と、同じ動作をくり返していた。——数知れぬ鉄の桶に、下の切場の溜り水をくみあげて引きあげ、上の切場にいる水替え人夫に水を送る。つまり、これが手ぐり水替えである。

こうして地底の水をくみあげて、金掘り人夫の仕事を助けているわけであった。その頃、少将と喜平太は、一番下の切場に立っていた。

「——ここは、どの辺りになるのか？」

少将が、案内の人夫頭にたずねた。

「釜の口から、二十五六丁、北へ寄っておりましょう」

——釜の口と言うのは、鉱坑の入口のことである……。

「では、順徳のみかどのみささぎへはどのくらい離れているのか？」

「まず、二里半はございましょう」

「皇子、皇女のお墓へは？」

「一番近くのお墓でも、小一里は離れていると思います」

「近々に、その下辺りまで、掘って行くか？」

「飛んでもねエ。第一、その辺りに金や銀があるかどうかわかりません。第二に、そこまで掘り進むにゃ、五、六年はかかりましょう」

この言葉に、少将は、佐渡に於ける任務は終った……と思った。

——御陵の墨縄張りなどとは、単なる口実に過ぎなかったのだ。本多佐渡守は、何も知らぬ将軍を動かし、少将に佐渡へ旅をさせたかっただけなのだ……。

と……このとき、暗がりの中を、ソッと近づいて来た二人づれが、突然叫んだ——

「——おーッ！　常州、間違いねエ。やっぱり、このひとだぜ……」

「——待てッ……。なんだ、お前エ達ア？」

人夫頭が、近づいて来た二人をとがめた。

「そういうお前さんは？」

「鶴子六番方の三右衛門だ」

「六番方の頭か……。あっし達ア、江戸送りの水替えだ」

「そ、それが、な、なんの用だ？」

人夫頭は、ギョッとしたようである。

佐渡の金山人夫は、平人夫と水替え人夫とにわかれている。平人夫は、水替え人夫を軽蔑しながらも、怖れていた。捨て鉢で、命知らずのものが多かったからである。

つまり、江戸の山犬だ。

「——頭にゃ、用はねエ。ちょいと、のいていておくんなさい……」

山犬二人からそういわれて、人夫頭が、思わずあとへさがった。

「——旦那……、おわすれでござんすか御用船で、お情をかけて頂いた唐丸籠の無宿者でござんす」

「おう……あの折りの者たちか？」

「さっき、上の切場で、チラッとお見かけいたしやした。もしかしたら、あのときの旦那じゃねエかと思ったんですが……ちょいとごめんなすって……」

ひとりの山犬が、スイッと少将に近づくと、耳もとでささやいた——

「——旦那……、お命を狙う、妙な三人連れが、四段ばかり上の切場に忍んでいやすぜ」

「侍が二人、もうひとりは、傀儡師風の小男ではないか？」

「御存知ですかい？」

「多分、そうであろうと思うた」

「旦那……ここんところは、あっし達にまかせておくんなさいまし……。おい、常州、みんなを集めろやい……」

「合点だ！」

常州と呼ばれた水替え人夫は、そばにあった水はこびの鉄の桶を、ガンガンガンと、打ち鳴らした。——ただ鳴らしているのではない、火事を報らせる半鐘と同じ打ち方である。

と……、あちらこちらの闇の中から、狐火のように、ホロホロと燃える灯火が集まってきた。——口に、魚油の灯火の紐を咥えた水替え人夫達である。

その中の幾人かが、少将の姿を見ると、なつかしそうに驚きの声をあげた。——あのとき、同じ船できた男達である。

他の男達も、仲間からわけを聞くと、ペコペコと、少将へ腰をかがめた。

「——さ……、旦那をお送りしようぜ……」

灯火を咥えた人夫三十人余りが、グルリと、少将と喜平太を取りかこんだ。

「——おッ！　こりゃアいかん！」

四段上の切場にいた陣五郎は、狐の嫁入りのように並んだ灯火の行列に、驚きの声をあげた。

「——十字兵衛どのッ。水替え人足共が、なにごとか企てた模様だッ。脱走かもしれぬ。うかうかしているとこちらの命が危いッ。早く外へ出て、鉄砲をぶちこもうッ……」

少将をとりまく灯火の群は、一段また一段、切場をのぼって行った。

のぼるにつれて、灯火の数が、みるまにふえて行く。いまは、七八十にもなっていたであろうか。

やがて、灯火の一群が通り過ぎたあとの切場に、傍らの廃坑から、火事装束に顔を包んだ男が二人現われた。

「――奇妙なおかただ……」

ひとりが、水替え人夫に護られて上へ上へとあがって行く少将の方を見てつぶやいた。

「思いがけぬところにお味方がいて、少将は危機を脱け出される」

「御人徳であろうな。もう心配はあるまい」

「うむ……、われ等はお役にたたなかった。が、その方がよいのだ……」

二人は、遙か上の切場を見上げた。

が……、少将は、必ずしも安全ではなかったのである。――鶴子金山の釜の口近くでは、賀来陣五郎の指揮する鉄砲組が、銃口を揃えて、待ち構えていたのである。

「陣五郎、間違いはないのか？」

奉行の竹村丹波がたずねた。

「水替え人足共が徒党を組み、脱走を企てていると言うのは、間違いではないのか？」

「やつらは、数十人が集っています。しかもなお、鉄桶を乱打して人数を集めていますぞ」

「少将は、どうなさったのじゃ」

「人足共の人質にとられたと考えるべきでしょう？」

「それで？」

「一挙に射ち払います。少将は、その混乱の中に落命した……とすれば、公儀への申しわけはたつでしょう――。おッ、来たぞッ。射てッ！」

轟然と、銃声が、鶴子の山々にこだました。

「――っ、常州っ！」

まさに、釜の口を出ようとしていた水替え人夫達は、ハッと足を止めた。――露払いのように、二、三間先きを歩いていた人夫のひとり常州無宿の音松が、凄まじい悲鳴と共に血にまみれて倒れたのである。

「――出るなッ！　出てはならぬぞ……」

少将が叫んだ。

「そなた達は引けッ。徒党を組み、何ごとかを企てていると奉行所に思われたのじゃ。この上、わしのために怪我人は出しとうないッ」

「しかし旦那ッ。こいつら我慢がならねェ。出し抜けに鉄砲を射ちかけるとは、なんてエやり方だッ」

「その理非は、わしが正してやるッ」

「いけねッ。やつ等は、おれッちより旦那を狙ってるのかもしれねェッ」

そのとき、意外な女の声が、釜の口の外から聞えてきた。――木野と千里である。

「――お待ち下さいッ！　お奉行さまは、少将さまを救おうとはなさらぬのですかッ。御前は、将軍家のお使いでございますッ」

「お待ちよ、陣五郎さん。もう一度射ったら、あたしゃ佐渡中の漁師をつれて、お奉行所へたてつくよッ」

佐渡の火祭り

その日の夕刻……。

「――まことに……、まことにこの度は飛んだ手違いにて、申しわけがござらぬ……」

竹村丹波が、少将の前で額の汗を拭いた。――宿舎新浜屋の奥座敷である。

「あれを、手違いと言われるか？」

「されば、水替え人足共が、脱走を企てしものと早合点いたしました。これまでにも、数度に亘り、脱走騒

ぎがございましたので」
「早合点したのは誰じゃ？　貴公は金山の外にいた。中で、人足が集ったことは御存知なかった筈」
「配下の者でございます。が……それが誰であったにもせよ、配下のしくじりは拙者の責め。罪は、わたくしが負います」
「よかろう……。この始末は、江戸でつけることになろう。わしは、明日、佐渡を立ちさる積りじゃ」
「明日!?　まだ、御陵のお調べは済んでおりますまい」
「調べは済んだ。船の用意をして貰いたい」
「御前……、左様なこととは存ぜず、御用船全てに、掘り出しました金銀銅を積みこみ、本日寺泊へ向かわせました。帰着は、三日後の予定でございます」
「わしは、御用船で送ってくれとは申しておらぬ。どんな船でもよいのじゃ」
「奉行所としては、将軍家の御使いを、御用船以外の船にお乗せするわけに参りませぬ」
　こんな話を、お浅が盗み聞いていた。
　更に、このお浅の様子を、黒太夫が遠眼鏡で見ている……。
「――どうだ、黒太夫……。千々輪の後室から、何か合図はないか？」
　部屋の中で、やけ酒をあおっていた十字兵衛がたずねた。
「ありませんね……。少将の部屋の外に、ジッと立ってるだけでさア。この分じゃ、少将は用心して、当分どこへも出ねエかもしれませんぜ……」
　その頃、金山奉行所では、賀来陣五郎が、二人の水替え人夫を相手に、喚き散らしていた。
「ならぬ、ならぬッ。とっとと山へ戻れッ」
「旦那……。きょうの出来事は、お奉行所のカン違いだったと、お奉行さまが、江戸からおいでになった旦那へおあやまりになったってエじゃありませんか。その間違いで射ち殺された常州の葬式をしてやりてエんですよ」
「無用だッ。音松は奉行所で埋めてやった」
「じゃ、せめて、仲間の水替え人足一同に、墓まいりをさせておくんなさい」
「馬鹿者ッ！　おのれ等とが人の癖に、ひとなみなことをぬかすなッ」
　その夜――
　鶴子金山の方にあたって、一条のかがり火が、突如として天をこがした。

と、見る見るうちに、鶴子に続く末広、三光、雲子、白子の金山からもかがり火が燃え上り、相川町の東南の空は、薄くなれいに色どられた。
　噂はたちまち相川の町中へ拡まった。
「――山犬が暴れだしたぞッ……」
「――みんなで三百人を越えるそうだぞッ！」
「――女を隠せッ……」
「――かねめのものを隠せッ」
　そんな言葉が、いやが上に町の人々を恐怖のどん底へ叩き込んで行った。
　奉行所では、水替え人夫の暴動鎮圧の人数を繰り出す一方、町の騒ぎをとり静めようとしたが、早くも、荷車に家財を積んで避難を始めるものもあり、手のつけようがなかった。
　が……、この騒ぎを、手を打って喜んだものがある。――六角十字兵衛だ！
「――よしっ。このどさくさにまぎれて、少将を討とうッ……。どうだ、黒太夫？」
「いや……、少将はお前さんまかせだ。あっしは、千々輪の御後室を連れて、心配のねえところへひとまず逃げる」
「なにッ、逃げる!?」
「はっきり言やア、あっしは少将なんか生きようが死のうが、どうだっていいのさ。あのお浅後家の方が大切だ」
「貴様ッ……」
「おっかねエ顔をしなさんな。お前さんだって、少将を憎む腹の底にゃ、木野を自分のものにできなかったモヤモヤがあるからさ。佐渡さまへの忠義ばかりじゃねエでしょう。あっしだってそうだ。お浅を少将にとられるなア我慢が出来ねエ。だが、いまはそんなことを言ってる場合じゃねエ。まごまごしてると、女に餓えた山犬共から、お浅がどんなめにあわされるかしれねエ。少将よりお浅だ」
「糞ッ！　勝手にしろッ」
　十字兵衛は、隻腕に大刀をひっ掴むと、障子を蹴破るようにして部屋を飛び出して行った。
　その頃、少将は、新浜屋の奥座敷で、ただひとり、ジッと目を閉じ、巷の騒ぎを、耳でくみとろうとしていた。
　いまは、警護の番士達も、ひとり残らず奉行所へ駈け戻ったようである。
　喜平太と木野は、町の状況を、手わけをして調べに行っている。

「——墨染の御前……」
突然、庭先きから、声を掛けたものがある。
「誰じゃ……」
「この声、おわすれか？」
「ほう……」
少将は、閉まっている縁側の障子へ視線を向けて、ニッコリ笑った。
「思い出したぞ。六角十字兵衛か？」
「伊豆の天城峠の勝負、つけて頂きましょうか」
「ハハハ……、執念深い男よのう……。片腕を失い、片足を不自由にして、なお、わしと闘う気か？」
「よッ！　おれの足の怪我を知っているのかッ」
十字兵衛は、片足で跳ねるようにして縁側へ飛びあがると、ダッと、障子を蹴飛ばした……。
少将は、坐ったまま、片頬に笑いを浮かべて、十字兵衛を眺めた。
「——わしを斬る積りか？」
「斬るッ！」
十字兵衛はかみつくように鞘を堅えると、スラリッ、と刃を抜放った。
「みごと斬れるか？」
「斬るッ」
「よしよし、かかって来い」
「おのれッ！」
十字兵衛が、グイッと腰を割って、サッと、刀を横へ伸ばした。
「——しばらくッ！」
突然、駈けこんできた木野が、少将と十字兵衛の間に立った。——水替え人夫の暴動と聞くと同時に、男袴をつけて、大小を腰にしていた。
「木野、のいておくれ。十字兵衛はわしを斬る積りじゃ」
「いいえ……。御前、千里さんが船を用意しました。わたくしが防ぎます。その間に、御旅立ちの御用意をなさいませ」
「ほう……、千里が？」
「水替え人足は、町はずれまで迫っております。お急ぎ下さいませッ……。いざッ！」
木野は、刀を抜くと、ダラリと両手を下げ、冷やかな眼で十字兵衛を見詰めた。——構えるが如く、瞬時にして変に応ずる夢幻剣の極意である。
「小癪なッ！　どうせ貴様も斬る積りで来たのだッ。庭へ出ろッ」
叫ぶと同時に、十字兵衛は、びッこを引きながら、

庭へ駈け降りた。と——
「ワッハハハ……なんだ、そのざまは」
突然庭の暗がりから、からかうような声が響いた。
——女の癖に男のような乱暴な言葉……。津矢である。
「——よッ！」
十字兵衛は、始めて、自分がいま、敵の重囲の中にあることを知った。——忍び姿の黒装束が四人、四方に刀を構えている。しかも、木野が、縁側を降りて、ツツツッと迫って来る！
「糞ッ！　みな殺しだッ」
十字兵衛は、捨て鉢に喚いた。
「おい、木野……、おかしなことだな……」
津矢が、木野に話しかけた。
「おれとお前は、いっか勝負をしなきゃならない。が、今夜は、お前に力を貸してやるぞ」
「いらぬことじゃッ！　引けッ」
「そうはいかぬ。姉さまのいいつけだッ」
その姉さまの真弓は、サッと刀を引くと、少将のそばへ駈け寄って行った。
「——この騒動、ご心配に及びませぬ」
「人足達は、相川の町へ乗り込んで来るのではないのか？」
「はい……、あのもの達の望みはただ、賀来陣五郎に恨みをむくいることでございます」
その時、庭では、津矢、深雪、一枝の黒装束三人に、木野を加えジリッジリッと、四方から十字兵衛に迫っていた。
「——退けッ！」
少将が叫んだ。
「御前ッ……。佐渡への置き土産。十字兵衛を討ちましょう」
忍び姿の真弓が、そう叫び返して、十字兵衛に迫る仲間のもとへ戻ろうと立ち上った。
「待てッ。十字兵衛も一流の剣士。手足が不自由とはいえ、むざむざ討たれはすまい。誰かが手傷を受ける。悪くすると命を落すぞッ」
「止むを得ませぬッ。討つか討たれるかです」
「いや、大事の前……。十字兵衛ごときは物の数ではない。命を粗末にするなッ。退けッ。木野ッ、退けッ……」
「わかりました」
真弓は庭へ駈け戻った。
「——御一同。お退きなされッ……」

その声に、深雪、津矢、一枝の三人は、スッと真弓のそばへ集まり、木野は少将の傍らへさがった。

「――十字兵衛……」

少将は、庭の中央に立って、フーッと、荒い呼吸を吐き出している十字兵衛へ話しかけた。

「今宵は引きわけじゃ。引きとれッ」

「えーいッ、一騎討ちと来いッ」

「よかろう……。が、いまではない。わしは今宵佐渡を離れて江戸へ戻る。十字兵衛、後日、必ず勝負をつけよう」

そういうと、少将は、チラッと真弓達へ視線を向けてから、木野を促した。

「――木野、案内せい。千里の船はどこじゃ……」

その千里は、町はずれの吹上浜で、木野が少将を連れて来るのを待っていた。

相川の町は北東南が山で、西だけが海に面している。その山々には、あかあかとかがり火が燃えあがり、水替え人夫の群が、グルリと取り巻いていた。

相川周辺で、江戸の山犬と恐れられる水替え人夫の姿が見えないのは、この砂浜だけだった。

千里は、漁船の親船を沖にとめ、吹上の浜には、はしけだけを着けさせていた。

「――遅いねエ……。ちょいと様子を見てくるから、しばらく待っていておくれ……」

船頭へいい残して、千里は町へ走った。

ときの声がひっきりなしに聞えた。水替え人夫達が、気勢をあげているのだ。

既に、人夫の総代三人が、奉行所へ押しかけ、竹村丹波とかけ合っていた。

「――俺達は、奉行所に憎みはねエです。手代の賀来陣五郎さえ渡してくれりゃ、おとなしく山へ戻りますぜ……」

ところが、陣五郎は、いち早く姿をくらましていた。そして、海路、河原田宿へ逃れようと、吹上浜へやって来たのだ。

「――おッ！　千里ではないかッ……。こいつア有難い。俺といっしょに来いッ……」

少将をさがしに行く千里の前に、陣五郎が大手を拡げて立ちふさがった。

「――おれといっしょに逃げようッ……」

陣五郎は、千里の手を摑んだ。

「何をするのさッ」

「千里ッ、おれの気持ちはわかっているだろうッ」

「冗談おしでないよッ」

千里は、パッと陣五郎の手を振り切った。

「おいッ。おれは、佐渡にいられなくなったんだ。山犬共は、おれを狙って暴れ出しやがったッ」

「自業自得さ。あたしの知ったことじゃないよッ」

「千里ッ！」

陣五郎は、一歩さがると、ペロリッと唇を舐めた。

「道は二つだッ。おれと逃げるか。それとも」

「お斬りよ。斬れるものなら」

「畜ッ！」

陣五郎は、抜き討ちに、ピュッと、刃を千里の胸許へ走らせた。

が……、ヒラリッと体をかわした千里は、三尺横へ飛んでいた。――佐渡一心流の冴えた腕前である。

「ハハハ……、血迷うたか、賀来陣五郎……」

出し抜けに浴びせられた声に、ギョッと振返った陣五郎は、悠然と立っている少将の姿に、ギリリッと、歯を嚙み鳴らした。

「斬るぞッ！」

「ハハハ、水替え人足が山犬なら、奉行所手代陣五郎は狂い犬じゃな、誰にでも嚙みつく」

「ほざけッ！」

陣五郎が、ダーッと、飛びかかって行った。

が……、チカッと、火花が散ったかと思うと、陣五郎の体が、ドサッと、砂浜へつんのめって動かなかった。

いつの間にか、少将の手に、刀が抜かれていた。

「――斬ったんですか？」

「いや、かりにも奉行所役人、斬りはせぬ。峰打ちじゃ」

「どうなさいます。陣五郎を？」

「さて……、どうすればよいのかな？」

と……、意外な声が聞えて来た――

「――そのもの、われらがお預りいたします……」

三間ほど離れたところに、火事装束の男がひとり、片手片膝をついて、会釈していたのである。

「ほう……、五人組の方じゃな？」

「はッ……。一刻も早く御乗船を……」

「御身分を、うかがえぬか？」

「いずれ、御挨拶の折りもございましょう」

そこへ、喜平太と木野が駈けつけて来た。

しばらくして、少将は、漁船の甲板に立って、相川の町を眺めていた。

町をとりまく山犬のかがり火は、なお燃えさかっている。

「――御前……、一路、出雲崎へ向います」
千里の声が聞えた。
キリリッと、帆がまきあげられる。――船は、北海の寒風をはらんで、真一文字に走りはじめた。

日光社参

「――静かだ……」
少将は、いま飲み終えたばかりの茶碗を静かに撫でながら、開け放した座敷から、庭を眺めていた。
昨夜、江戸へ帰りつき、ひと月振りに眺める蔵前大松院の庭は、なにか、しみじみとしたなつかしさを少将に感じさせた。
今朝は、早めに登城して、まだ大奥にいた将軍家光と、御上段の間で会って来たのである。
「――ほう……、もう戻られたか……」
「順徳のみかどの御遺跡調べは、とどこおりなく済ませました故、急いで立ち戻りました」
「遠路、御苦労でしたな」
将軍も、少将へは丁寧な言葉を使った。
「それで？」
「金山の新規御開発は、いささかも差しさわりございませぬ。少なくとも、ここ四、五年は、掘り進んでもよろしいでしょう」
「それは結構……。順徳のみかどの御遺跡も大切じゃが、金山の開発も、国のため……。ゆるりと、休養をおとりになるがよい……」
本多佐渡守の企らみを知らぬ将軍は、満足そうであった。
少将は、わざと、佐渡での騒ぎはひと言も告げず、大松院へ戻った。
「――御前、もう一服たてましょうか？」
その声に、少将が振返った。――千里がつつましやかに、両手をついていたのである。
「ハハハ、千里、そなた、人が変ったようにしとやかじゃな」
「ま……、おからかいになるのですか？」
「いや、わしのそばにいる間は、もっとのびのびとしているがよい。が……、佐渡のてて御は、心配しておられぬかな？」
「いいえ、船頭が、千里は御前のお供をして江戸へ行った……と伝えております。御前を島から連れ出したわたくしがいては、なにかとお奉行所がうるさいのです。父は、わたしが江戸へ出たので、却ってホッとしているでしょう」

「あれから、相川の騒ぎは、どうなったであろうな？」
「山犬達の申すことが正しいのです。もし御前のことがなければ、わたしも山犬の味方をして、暴れていたかもしれませぬ」
「おう……、そう言えば、そなた、佐渡一心流とやらを使うそうじゃな」
「いいえ、ほんの真似事です」
「見たいものじゃ……。木野と立ち会うてみぬか……」
しばらくして、千里と木野が、庭で木太刀を構えた。
「木野は、応変夢幻流。千里は佐渡一心流。双方油断するなよ……」
少将の声に、木野と千里が、パッと左右に別れた。
ピタリッと青眼につけた千里……。それに対して、ダラリと木刀を下げた木野……。
「――はてな!?」
少将の優しい瞳が、キラッと異様に光った。
「――とおーッ！」
鋭い気合と共に、ダッと、千里が大地を蹴った。
カチーッ……と、木刀が凄まじく触れ合って、木野と千里の位置が入れ替った。
「――それまでッ！」
少将が、サッと片手を上げた。
「木野さん……お見事なお腕前、恐れ入りました」
千里が、鉢巻をとって、木野を褒めた。
「いいえ、千里さんこそ……。ピリッと、胸に響く太刀さばきでございましたよ」
「ウム……。確かに鋭い……」
少将も木野の言葉にうなずいたが――
「千里……、そなたの剣法は、邪剣じゃ」
「えッ？　邪剣とは……」
「剣は本来身を護るためのもの。が、千里のは、人を斬るための剣じゃ」
「御前！　な、なぜわたしの剣が――」
「待て……。わたしに聞く前に、自らの胸に聞いてみい。そなたの木刀からは、メラメラと殺気が立ちのぼっていたぞ」
千里は、じっと少将を見詰めていたが、やがて、ガックリ、うなだれた。
「御前……、仰有る通りです。わたしは、人を斬る剣を学びました」
「まこと、ひとりを斬りたいのか？」

「はい……」
「なぜじゃ？」
「言えませぬ」
「誰を斬る積りじゃ？」
「それも、言えませぬ」
「斬りたい相手は、どこにいるのじゃ？」
「いまは、江戸にいます」
「それで、わしについて来たのか？」
千里は、パッと、両手をついた。
「お願いでございます。わたしを、ここから追い出さないで下さいませッ。わたしを、お側におおきになって……」
「そなたの親は、知っているのか？」
「はい……親娘三代の悲願でございます。でも御前、御迷惑はおかけしません。正しいことなのです。悪人を斬るのです。わけがわかれば、御前もきっとわたしを褒めて下さることと思います」
少将はニッコリ笑った。
「よし……。何も聞くまい……」
そのとき、千々輪のお浅が、廊下を回って近づいて来た。
「ほう……。お内儀は、いつ戻られた？」
「ひどい御前……。わたくしを、置きざりになされましたな」
「あの騒ぎじゃ。捜しようもなかった」
「嘘でございます……。騒ぎは、すぐおさまりました。すると御前の姿が見えませぬ。奉行所はまた大騒ぎ、奉行の竹村どのは急いで御用船で寺泊へ――」
「なに、丹波は江戸へ向ったのか!?」
「はい……わたしは竹村どのといっしょに一ツ刻前に江戸へ戻って参りました……」
丁度その時、大松院の庫裡の扉を、人眼を忍ぶように、ソッとあけた武士があった。――佐渡金山奉行竹村丹波である。
供も連れず、角頭巾で顔を隠していた竹村丹波は――
「――墨染の御前に、内々にてお眼通りを願いたいと、お取次ぎ下さい……」
そう言ってから、頭巾をとった。
「――おう、今夕、江戸へ入られたそうじゃな……」
少将は、客間に入ると、下座に坐って待っている丹波へ、こだわりのない言葉をかけた。
「御前は、どうして御存知でございます」

「向うの部屋へ、千々輪の後室が参っている」
「あー、左様で……」
丹波はひとひざ乗り出すと、あらためて両手をついた。
「佐渡に於ては数々の不行届、深くおわびいたします」
「いやいや、こちらこそ世話になった。その上、山犬騒ぎのため、心ならずも挨拶をせず佐渡を離れた。許してもらいたい」
「実は、そのことでございますが、公儀には、ありのままをお話しなさいましたでしょうか？」
――そうか……、そのことを心配して、様子をうかがいに来たのか……。
少将は、胸の中で、笑っていた。
――将軍直々の頼みで御陵調べに佐渡へ渡った四位の少将を、佐渡奉行が粗略に扱い、見送りもしなかったことが表沙汰になると、これは飛んでもない失態として処罰されねばなるまい……。
いかに、本多佐渡守が老中の実力者であろうとも、うやむやに揉み消すことは出来ぬ筈である。
「わしは将軍家にお会いしたが、順徳帝の御遺跡は金山開発にさしさわりなしと申上げただけじゃ。他には何も申さぬ」
丹波は、ホッとしたように顔をあげた。
「今後とも、何分よろしく……」
「わかった。尋ねられたら、そなたにはひと方ならぬ世話になったと答えよう」
「お願いいたします……」
丹波は、ソッと額の汗をふいている。
「それより、山犬騒ぎのあと始末はどうする積りじゃ。騒ぎはすぐおさまったそうじゃが、公儀へは奉行所の処置を話さねばなるまい」
「既に、暴徒側、奉行所、各一名を処罰し、山は落着いております」
「山犬の中から、誰が処刑されたのか？」
「はい。常州無宿の音松と申す水替え人足」
少将は、丹波を見詰めた。――音松は、鶴子銀山の入口で鉄砲に射たれて死んだはず……。
「なる程、死人に責めをとらせるとは、そなたなかなか名奉行じゃな」
「奉行所側は、賀来陣五郎を佐渡より追放いたしました。それで水替え人足も、相川の囲みを解いて金山へ戻りました……」
ところで、その賀来陣五郎、いま、ノッソリと、蔵前大松院の門前に立っていた。

ウッソリと、大松院の門内をのぞく陣五郎の顔は、気力がなく、やつれ切っていた。

佐渡の赤泊に着いた水替え人夫の唐丸籠を迎え、ナタを振り上げて喚き散らしていた当時の傲慢さは、すっかりあとを消している。

こういう男は自分の力でいばるのではない。金山奉行所手代という肩書でいばり散らしていたのだ。ひと度、その肩書がなくなると、腹がすき切っているときのように、無気力になってしまう。

「――ククククッ」

突然聞えた含み笑いに、陣五郎はギョッと、頭の上を見上げた。

太い松の枝が、築地塀を越えて道路まで張り出している。――その幹に、小さな男の影が、チョコンととまっていたのだ。

――うっ……と、陣五郎は、息を呑んだ。

「――どうしなすった、陣五郎さん……」

「さっ……そ、その声は!?」

「へへへ……、黒太夫でさア……。お前さんも、江戸へ出て来なすったか……」

黒太夫は、花咲爺のような恰好で、陣五郎へ話しかけた。

「お前さん、まだ少将を狙ってるのかい?」

「い、いや……、そ、そんなわけではない」

「なんだい、ひどく元気がねエようだなア」

陣五郎は、ようやく落着きを取戻して、あらためて、黒太夫を見上げた。

「貴公、なにをしているんだ?」

「御覧のとおりよ。見張ってるのよ」

「少将をか?」

「うン……。それもある。が……、それよりも、あたしゃ、千々輪の後室の方が心配なんだ」

「あ――、お浅どのか?」

「いま、後室は、少将を訪ねて来ている。困ったものだ。少将は所詮、われわれの敵なのに、後室は少将を思い切れねエらしい。あんな男と浮気されちゃ、黒太夫、なんのために伊豆から佐渡まで苦労して歩いたか、わけがわからなくなる」

「貴公……、お浅どのに思いを掛けているのか?」

「ククク……、そう正面切っていわれると小っ恥かしい。色恋にゃ、身分も年もねエやね」

「いや……、わかる……」

陣五郎は、大きくうなずいた。

「黒太夫どの……、そこから、院内の様子がわかるか?」

「うン、手にとるようにな」

「ち、千里が……。千里は、おらぬか?」

「はは――ん、なる程……」

黒太夫が、ニンマリ笑った。

「こいつア妙だ。少将のまわりの女にゃ、それぞれ振られ男がついている。木野にゃ十字兵衛、千々輪の後室にゃこの黒太夫、そして千里にはお前さん」

その黒太夫が、スッと背伸びをした。

「おっ、千里が、茶をはこんでくぜ。金山奉行が来ているんだよ」

「なんとっ! あの丹波めがっ!?」

「――お前さん。金山奉行に恨みがあるのか?」

息をはずませる賀来陣五郎に、松が枝の黒太夫がたずねた。

「拙者は、佐渡から追放されたので」

「知っている。そうしなきゃ、金山の山犬達に、相川の町は踏み荒されていたかもしれねえさ。山犬は、お前さんひとりを狙って暴れだしたということだ」

「拙者は、金山のために、つまりは金山奉行所のために、山犬達をこき使った。それなのに、竹村丹波は、わしを素ッ裸で放り出しやがった。命からがら、やっとのことで島を脱出した拙者が、丹波を恨むのは無理か?」

「なる程……。お前さんにゃ、お前さんのいい分があるってわけか……」

その頃客間では、茶をはこんで来た千里に竹村丹波が笑いかけていた。

「――千里、とうとう江戸までついて来たのか?」

「はい……、無理に、お供をして参りました」

そう答えて、千里はチラッと、少将の方を見た。

「丹波どの、千里はな、佐渡を逃げ出したのじゃ」

「はて……、なぜですかな?」

「奉行所の許しを得ずして、わしを持ち船で送ったことを、とがめられはせぬかと心配してのことじゃ」

「ハハハ……、わたくしは、御前から叱られはせぬかと心配して、千里は、わたくしからとがめられはせぬかと心配していたのですな」

丹波は、千里へ顔を向けた。

「千里……、そなたにとがはない。いつでも佐渡へ戻ってよいぞ」

「安心いたしました。でも、せっかく江戸へ来たのですから、しばらくここでお世話になります……」

そういって千里が出て行くと、丹波は、ひと膝乗り

出した。
「いや……、あの山犬騒ぎの起る直前、お宿舎の新浜屋で、わたくしは御前からお叱りを受けました。——話は江戸でつけよう……とな」
「それで、わしを追うて、急の出府か？」
「はい……。上様、日光御社参の御用は、是非とも果したく存じましたゆえ——」
「なに、日光御社参?!」
少将は、ハッと、丹波を見詰めた。
「ほう……、御前は、未だ御存知なかったのですか？尤も、いまだ内々のことばではございますが……。わたくしに、御奉納の金の鈴を調整するようにとの御下命がありました。いま、罷免されては、この光栄の大任を果すことが、出来ません……」
「江戸を出て、三日目のお宿でございます」
少将は、愕然とした。——宇都宮は本多佐渡守の居城……。そこには、青山の下屋敷でためした釣り天井が、城中いずれかの部屋に仕掛けられることになっている……。
「——喜平太！　喜平太ッ……」
竹村丹波が帰って行くと、少将はあわただしく喜平太を呼んだ。
「——はい……、宇都宮へ参るのでございますか？」
「おのれ……。いまの話を盗み聞いたな」
「釣り天井の有無を、調べて参るのでございましょう」
「その通りじゃ。が……、そなたが行くのではない。汐留の杉乃屋へ、使いに行って貰いたい」
「では……、真弓どのに、宇都宮城取調べをお命じになるのですか？」
「そなたでは、警戒厳重な城内へ忍び込むことは出来まい。が……、真弓なら出来る」
「しかし……、佐渡から戻っておりましょうか？」
「竹村丹波すら江戸へ入っている。真弓一党も、今宵あたり戻っていよう」
「わたしにも、それくらいの調べは出来ると思うのですが、この手柄は真弓どのへゆずりましょう……」
喜平太は、いつものように、高歯の下駄をつっかけて大松院を出た。
が……、その喜平太が、両国橋に近い大川端で、ハッと、足を止めた。
十数間前を、ゆっくり歩いて行く角頭巾の武士は、さきほど大松院を辞した佐渡奉行竹村丹波に違いない……。

が、喜平太が立ち止まったのは、丹波のためではない。丹波のあとを追う大小二つの影を見たからである。
そのうち、大きい方の影が、スルスルッと足を早めると、サッと、丹波の前へ廻った。
ちょうど、両国の広小路へ出たところだ。——昼間はにぎやかな広小路……。夏なれば夜も人出が多いのだが、師走の夜は、人通りが絶え、立ち並ぶ水茶屋もよしずを立てかけていた。
「——お奉行……。佐渡の金山奉行。竹村丹波どのでしょうな？」
声をかけた影は、賀来陣五郎だった。
「ほう……。陣五郎……江戸へ来ていたのか？」
「来て悪いかッ！」
陣五郎が、嚙みつくように喚いた。
「何ッ!?」
「佐渡追放の恨みッ、覚えたかッ」
「たわけッ！」
陣五郎と丹波の体が、サッと、入れ違った。——その一瞬、チカッと、青い火花が飛んだ。斬り込んだ陣五郎の刃を、丹波の刀がはね返していたのである。
その後、ピタリッと構えた二人は、ジッと睨み合って動かなかった。
——あ——長引いてはいかん……。
喜平太が腹の中で叫んでいた。
腕は、丹波の方が優れているようである。——だが、年をとっている……。
既に、丹波は、肩で息をしている。呼吸が乱れて来たようであった。
——よし……、丹波に助勢してやろう……。が、もう一つの小さい影、あいつは一体何者だろう……？
それが、傀儡師の黒太夫であることを喜平太は知らない。
喜平太は、ソッと、足駄をぬいだ。
と、この時、丹波と陣五郎の体勢が、ガラリと変ることになった。——水茶屋の陰から、ツツツッと出て来た四人の火事装束が、丹波をうしろにかばって、サッと、陣五郎を囲んだのである。
「——やッ、うぬ等ッ……」
陣五郎が、悲鳴に近い声で叫んだ。
喜平太もハッとした。——佐渡の黒木の御所で喜平太と木野に助勢してくれた火事装束五人組の四人に違いない。
「——くッ、黒太夫ッ。助けてくれッ」

火事装束五人組の腕前を知っている陣五郎は、いくじ無くも、喚き立てた。
「――よッ！　あれは黒太夫かッ！」
そうわかると同時に、喜平太は、ダッと、小さな影へ飛びかかって行った。
「わッ！　喜平太かッ!?」
今度は、黒太夫が叫んだ。
次ぎの瞬間、黒太夫は、横ッ飛びに、両国橋の上を走っていた。
「――待てッ！　一度片をつけねばならぬわしと貴様だッ、引返して勝負をしてはどうだッ……」
喜平太は、そんなことを怒鳴りながら、どこまでも黒太夫を追いかけて行った。
両国橋を渡ると本所である。
掘割り沿いに、元町、相生町、松坂町と、喜平太は黒太夫を追い続けた。
「――けッ！　ノッソリめッ。しつこい野郎だッ」
黒太夫は、いまいましげに叫ぶと、サッと、暗い露地へ飛びこんで行った。
「――おッ……おらぬッ……」
一呼吸遅れて露地へ駈け込んだ喜平太は、慌てて辺りを見まわした。
露地は、行き止まりだった。――高い石塀、右側は白々とした築地塀……。左側だけに、生け垣越しに、明るい障子が見えていた。
しゃれたつくりの仕舞家であった。――障子には、内儀風の女の影がうつっている。
黒太夫が逃げ込むとしたら、この家の庭だけである。
「――この家のおひと……。おたずね申す。いま、怪しいものが逃げこみはいたしませなんだか？」
その声に応じて、女の影がスラリと立ち、静かに障子をひらいた。
「――やッ！　そなたは……」
「まア！　喜平太どの……」
女は伊豆屋のお石だった。
「あれ以来、どうも体が悪いので、この家を買い、気ままな養生をしているのですよ」
それからお石は、いぶかしげに首を傾げた。
「――怪しいものと申されましたな……。いいえ、一向に気がつきませなんだ……」

狂恋夜叉

本多佐渡守は、灯火をかき立てた下に図面を拡げて、ジッと腕を組んでいた。
図面は居城宇都宮城の見取図である。
佐渡守は、今日、武州岩槻城主大岡丹後守、下総古河の城主土井大炊頭と三人揃って、将軍にお別れの挨拶をして来ている。
ここ一両日中に江戸を離れ、三人はそれぞれ居城へ戻り、将軍お宿泊の用意をしなければならないのである。
まだ、極秘にされているが、将軍は明春早々、日光東照宮参拝と決っていた。――江戸を出て第一夜は岩槻城、第二夜は古河城、そして第三夜は宇都宮城に泊ることになっている。三つの城では、城内を清め、将軍御寝の間を新築しなければならない……。
佐渡守がふっと顔をあげた。――近づく足音が聞えたのである。
「誰じゃ？」
「内膳でございます」
「おう、戻ったか……。待ちかねたぞ……」
佐渡守は、入って来た熊取内膳を見ると、思わずひと膝乗り出した。
「御安心下さい。万事、順調に参りました」
「大工共はどうした？」
「御領内より、達者なものを十人かり集めました。いずれも、親兄弟、女房、子のないもののみでございます」
「逃げ出すようなことはあるまいな」
「いまのところ、お天主の手入れのみにて、城内の出入りも自由にさせておりますから、逃亡の心配はございません」
「この図面を見せれば、さぞ驚くことであろうな」
佐渡守は、前に拡げた見取図を指さした。
「五間四面の仮家の新殿じゃ。それに一丈四方の湯殿をつける」
「そのお湯殿が釣り天井でございますな？」
佐渡守は、ニンマリ笑った。
「内膳、この工事にかかるのと同時に、大工共は禁足じゃぞ」
「勿論のことでございます……。禁足どころか、工事完了と共に、十人の命を奪わねばなりますまい……」
佐渡守は図面をたたんだ。

「わしは、明後日宇都宮に戻るが、ただ一ツ、心にかかることがある」
「墨染の少将でございましょう」
「うム……伊豆でも、佐渡でも討ち漏らしたが、いまや、大事を行うべき時は迫っている。どうしても、少将の命は絶っておかねばならぬ」
「心得ております……。実は……」
内膳は、佐渡守のそばに近づくと、声をひそめてささやいた。
「――ほう……、千々輪の後家が……」
「はい、いよいよ心を決めたようでございます」
その頃、少将は、喜平太を供に、小石川大日坂を登って行った。
――お浅から、年忘れの茶会へ招かれたのである……。
「――御前、やっぱりわたくしは、気がすすみませぬ……」
大日坂の途中で、喜平太が立ちどまった。
「わしも、好き好んで行くのではない」
「では、お断りになればよいでしょう」
「断る理由がない」
「風邪気味とか、腹痛とか……」
「喜平太。そなたは、わしに仮病をつかえというのか？」
「時によっては、仮病も方便でしょう」
「いやじゃ……。わしは、いままで、どんな場合にも逃げようとはせなんだ。佐渡守から招かれれば、釣り天井の茶室と知っても入って行った」
「しかし、進むを知り、退くのを知るは、兵家の常と申しますぞ」
「喜平太……」
少将は、喜平太を促して、ゆっくり、坂をのぼって行った。
「今年もあと一両日……。明春早々、将軍は日光へ社参される。将軍が宇都宮城へ入られる日こそ、わしが生涯をかけた大事がなるか破れるかの瀬戸際なのじゃ。それまでは、何事も慎重に……。時の動きにさからわず、流れに身をまかせて行く積りなのじゃ」
「御前……」
喜平太は、諦めたように、溜め息をついた。
「流れに身をまかせるつもりだが案外、渦へまきこまれることになりはせぬかと、それがわしは心配なのです」
ところで、お浅の屋敷には、先客が二人あった。

――大奥表使いの染村と、伊豆屋の女あるじお石である。
「――お浅さま、かれこれ五ツ（八時）でございますぞ。お覚悟は、出来ておりましょうな」
染村が右からお浅の顔を見詰めると、お石が左からひと膝乗り出した。
「いまとなっては、少将をお味方にひきいれる望みは絶えました。御決心なさいませ……」
そういってお石は、ホーッと、長い息を吐き出した。
「わたしは、もうもう、ひとの命を奪うことはこりごりでございますよ。下田から江戸へ向う船の上で、石見守さま奥方の幽霊を見たときには、心の臓を引き抜かれるほどのおそろしさでございました。二度と、むごたらしいことには加担すまい……、そう考えたものでございます。しかし……、少将だけは生かしておけませぬ。上さまの日光御社参を目前に控え、少将をたおさねば、佐渡さまの大望が成らず、佐渡さまがおしくじりになれば、わたし達も命はございません。生きるか、死ぬかですよ。お浅さま、御決心なさいませ」
「お浅さま、なぜ少将に、そのようにお心をひかれるのです？　もっともっとよい殿御が、必ずみつかりましょうものを……」
「そうですとも……、お浅さま……。さ、これをお使いなさいませ……」
お石は、小さな薬の包みをとり出した――
「オランダ渡りの秘薬……。昏々と眠り続け、なんの苦もなく死んで行けまする……」
お浅は、ジッと、前に置かれた毒薬の包みを見詰めていた。
「――お浅さま……、毒殺は、お気に入りませぬか？」
染村が、お浅の顔色を続むようにして、たずねた。
「毒を、なににもるのです？」
「お酒なりと、お肴なりと……」
お石が答えた。
「もし、少将が用心深く、毒味をせいといわれたら？」
「まさか……。年忘れの集りに、お毒味などと……。なア、染村さま」
しかし、お浅は首を振った。
「あなた達は、佐渡での少将を御存知ない。少将は、金山奉行所がこしらえた日程の裏をかいて勝手なところを歩き、奉行所で用意した宿に入らず、自分で旅籠

を選んだのですよ。全ては、不意討ちを避け、毒殺に気をつけたもの……、わたしはそう見ています」

それからお浅は、ジロリと、染村とお石を見た。

「それに、もし少将がこの屋敷内でなくなった場合、わたしの立場はどうなるのです？」

「闇から闇へ……。さすれば、お浅さまにきずはつきますまい」

「染村どの……。あなた、少将がひとりで来るとお思いですか？　また、大松院の住職や木野達に、ここへ来ることを言い残しておらぬとお考えですか？」

「でも、食当りとでもいうことにすれば……」

「相手は四位の少将ですよ。必ず、厳密な御検屍があるでしょう。とても、ごまかすことはできますまい」

すると、お石が、こっくりうなずいた。

「――わかりました。では、わたしを迎えに来るものに、少将の帰り途を狙わせましょう」

「あなたのお迎えに？」

「お浅さまも御存知の賀来陣五郎……」

「まア、金山奉行所手代の？」

「五、七日前から、本所にあるわたしの寮で寝泊りしています」

と……、スルスルスルッと、縁側の障子をあけて、黒太夫が顔を出した。

「その陣五郎を、伊豆屋さんの寮へつれてッたのはあっしですよ。陣五郎に少将を討たせるなら、あッしも加勢しまさア。十字兵衛に報せりゃ、やっこさんだって、すッ飛んで来まさア……、おッと、肝腎のことを忘れていた。少将と喜平太が、そろそろやって来ますぜ。あッしゃ、やつ等二人が、大日坂をのぼり切るのを見とどけて来たんですからね」

ちょうどその時、少将と喜平太は、屋敷の玄関に立っていた。

「――喜平太、案内を乞え……」

「大丈夫でございますか、御前……」

「心配するな、わしに考えがある」

「そういわれても心配せずにはおられませんが、止むを得ませぬ。――誰かいられぬかッ。墨染の少将さまおつきでござるぞーッ」

喜平太が、やけくそで大声を張りあげた。

「――まア、御前……」

お浅が、いそいそと出迎えた。お浅のうしろには、染村とお石がついている。

「ほう……これはこれは伊豆以来のお顔が揃うているな」

「はい、両三日前より、父親急病のため宿下りをいたしておりました」

染村がそういうと、お石も両手をついた。

「伊豆この方、病いで伏せておりましたが、十二月に入って、ようよう起きるようになりました」

「いや、これはよい年忘れじゃ。久し振りに伊豆の話などしようか……」

少将と喜平太は、奥の座敷へ案内された。

「――さ、御前、まずお一ツ……」

お浅が、朱塗りの木盃をとりあげた。

「いや、それはやめよう」

「えッ!?」

お浅、染村、お石の三人は、毒酒の相談もしただけに、ギロッと、少将を見あげた。

が……、少将は、さりげなく、ニッコリ笑った。

「今宵は、都ふうの年忘れをしようではないか？」

「ま……都では、どのようにするのでございます」

「まず、五合か一升入りの大盃を用意して貰いたい……」

お浅は、すぐ五合入りをとりよせた。

少将はその盃に、自ら前にあった銚子をとりあげると、なみなみと酒をついだのである。

「さ……、まず御主人、そなたから呑むのじゃ」

「わたくしから？」

お浅は、驚いて、大盃を眺めた。

「みな呑めというのではない。ひと口含んで客へ廻す。つまり、ひと口ずつの呑み廻し。身分も立場も忘れて、一ツ盃の酒を呑む。これこそ真の年忘れであろうがな……」

お浅は、思わず、染村とお石を見た。――三人共、内心、ホッとしていた……。

もし、酒に毒薬を投じていたら、まずお浅から、その毒薬を呑まねばならなかったのである。

――よかった……と思うのと同時に、三人は、少将の用心深さに、いまさらながら舌を捲いていた。

酒の呑み廻し……と言えば聞えはよいが、結局、毒味をさせられているのと同じである。

しかも、すすめ上手な少将のために、女達の方が、先きに酔わされていた。

「――御前。よいものをお見せしましょう」

お浅は、トロンとした眼で少将を見あげると、グッと、少将の手を握った。

「――こうおいでなさりませ……」

いや応なしに立たされた少将は、長い廊下を渡っ

て、奥まった座敷へ連れて行かれた。
「――あれでございます……」
お清が指さした違い棚に、蒼ざめた顔の能面が一ツ飾ってあった。
――夜叉の面である……。
「――あの能面の謎が、おわかりでしょうか？」
お浅は、トロンとした酔眼で、少将を見詰めた。
「はて、能面に謎があるのか？」
「はい、女心の謎がございます」
「ハハハ……、外面如菩薩、内心如夜叉……。左様な言葉もあるのう」
「御前……、そのようにごまかしごとを申されますと、わたしは夜叉になりますぞエ」
「ほほう、それが謎か？」
「御前のお心一ツで、わたしは仏にもなれば、夜叉にもなるのです」
そう言うとお浅は、少将の手をとって、抱きしめるように胸にあてた。
「御前は、わたしの気持ちを御存知の筈でございましょう。なればこそ、伊豆でも、佐渡でもわたしをお避けになりました。そんなにわたしがお嫌いでございますか？」
「これは困った……。嫌いなれば、今宵わざわざたずねはせぬ」
「では……、わたしの希いを――」
「待て……」
少将は、手をとられたまま、じッと、お浅を見返した。
「わたしは、そなたを嫌いはせぬ。が……そなたが持っている影が嫌いじゃ」
「え？」
「そなたは、伊豆の韮山代官所から、山神図絵を盗み出している」
「ま！　それをどうして……」
「そなたは、佐渡への旅に、傀儡師の黒太夫を供に連れていた」
お浅は声をのみ、いつか、少将の手を離していた。
「そのわけが聞きたい」
「あッ……」
「山神図絵が、なぜいるのじゃ？　わしをつけ狙う黒太夫は、そなたの家来か？」
「御前……。そ、そ、そのわけは……」
「うム、そのわけは？」
「し、しばらくお待ち下さいませ。あと三月……」

は、春が過ぎれば、なにもかも申上げます」
「左様か……。では、わしも、春が過ぎれば返事をしよう」
少将は、ニッコリ笑って部屋を出ると、もとの座敷へ戻った。
既に、染村とお石の姿はなく、喜平太がひとり、心配そうに待っていた。
「――あ――、御前……」
喜平太が、ホッとしたように少将を見上げた。
「戻るとしょうか、喜平太」
「はい、帰りましょう……」
その頃、お浅がひとり残った奥の座敷へ、縁側から、スーッと、黒太夫が上って来た。
「どうするんですい、お浅さま。ここが思案の決めどころですぜ……」
お浅は、スッと違い棚に近づくと、戸棚から短銃をとり出し、黒太夫へさし出した。
「へへへ……、やっと決心がつきましたね」
黒太夫が、ニヤリと、お浅を見上げた。
「所詮、少将はわたしのものにならぬひと……。でもわたしは、少将を誰にもわたさぬ」
「可愛さあまって憎さが百倍。古い言葉だが、そんな気持ちでしょうな」
「討ちましょう。佐渡さま始め御一党も、満足されましょう。大日坂はまッ暗闇。黒太夫どの、仕損ぜぬように……」
「引き受けやした。じゃ、出掛けますぜ……」
その頃、少将は喜平太をつれて、大日坂を下っていた。
大名屋敷に挟まれた急な坂である。坂のまん中どころに、小さな大日如来の御堂があった。――この坂の途中で、灯りといえば如来堂の常夜燈だけである。
「――待っていたぞ、墨染の少将……」
黒い影が二ツ……、常夜燈の蔭から、スッと出て、少将の前に立ちふさがった。
二人共、覆面をしている。ひとりは袴をはき、他のひとりは着流しだった。
「――ほう……、聞き覚えのある声じゃな」
「ふン、古馴染みさ……」
袴をはいた男が、片足をひきずって前へ出た。――片手を失い、片足に傷を受けた六角十字兵衛である。
着流しの男が、いわでものことを喚いた――
「――佐渡吹上浜の恨み、おぼえたかッ！」
「ハハハ……、賀来陣五郎か」

「行くぞッ」
喜平太が前へ出た。
「御前……、うしろで御見物を――」
「くたばれッ！」
やにわに、陣五郎が喜平太の足許をなぎはらった。
パッと飛び上った喜平太が、ダッと、オランダ拳法の指を突き出した。
「おッ！」
陣五郎が、よろめくように、かろうじて身をひねったとき、スッと、十字兵衛が刀を抜いた。
「少将ッ、相川新浜屋庭前での一騎討ち、ここで続けるとしようかッ」
「フフフ、由来一騎討ちとは正々堂々の勝負じゃ。闇討ち、待ち伏せの一騎討ちとは合点が行かぬぞ」
「闇討ちも、一騎討ちも冥土へは一本道。抜けッ。行くぞッ」
「おうッ！」
少将が、常夜燈を背にして、ピタリと刀を青眼につけた。
そのときだった。轟然！　大日坂の暗闇に、銃声が響き渡った。
「うッ！」
少将の体が、グウッと、横にかしいだ。
「――やった！　やったぞッ……」
黒太夫の喚き声が聞えた。
と、サッと、風のように、闇から飛び出したのは、謎の虚無僧だった――
「喜平太ッ。少将はあずかるッ。心配無用ッ」

マリヤ観音

墨染の少将は、夢とうつつの間を、うつらうつらとさ迷っていた。
謎の虚無僧にこの屋敷へ連れ込まれて、かれこれ三刻（六時間）になるであろう。
「――ご心配には及びません。鉄砲傷をすておいては一大事。もし、鉛弾の毒、全身に回れば、お命にもかかわりましょう。お手当をいたさせます……」
虚無僧は天蓋もとらず、そういって手を叩くと、武家風の若い女がでてきた。
「――三輪……、お床をのべてから、弾傷の毒消しをして差し上げろ」
「はい……、お薬を、お呑ませした方がよろしゅうございましょうか？」

「うむ、一応傷口をお調べする方がよかろうが、かなり痛む、ご服薬になった方がよいな」
「はい……。心得ました」
三輪と呼ばれた女は、甲斐甲斐しく少将をたすけて奥へ導くと、すぐ床をとって、少将を横にした。
「――ここはどこじゃ？」
「天香さまのお屋敷でございます」
「あの虚無僧どのの名か？」
「はい……。あの、余りお口をお聞きになりませぬように……」
女は、少将から言葉をかけられるのを避けるようにそういうと、ソッと、部屋をでていった。
傷は、左腕の、肱と手首のちょうどまん中に受けていた。ちょっと、しびれてはいたが、それほど痛みはしなかった。
少将は、横になったまま、首を動かして、座敷の中を見廻した。
枕許に、奇妙な形のギヤマン行燈がともされている。――異国から渡来したものだろう。ギヤマンの玉の中の灯は小さかったが、まぶしいほど明るかった。
〝――ランプ……、とやらいうものであろう……〟
少将は、かつて噂に聞いた異国のあかりの名を思い出していた。
しかし、明るいギヤマン行燈の灯も、床の間までは届かなかった――なにやら、女人の立像を描いた掛軸がかけてある……。
三輪という女が戻って来て、少将に、一服の薬を呑ませた。
しばらくすると、全身から力が抜け、スーッと奈落へ引きずり込まれるような気がした。
「――お痛みでございましょうか？」
三輪の声が、耳もとで聞えた。
ふっと気がつくと、三輪が血止めの布をほどいて、傷口をあらためていた。――が、不思議に、痛みは感じない……。さきほどの薬がきいているらしい……。
「――痛くはない……」
少将は、そう答えた積りだが、はっきり口が動かなかったようである。
「――よかった！　弾は、抜けております。傷も、大したことはございません……」
少将は、安心して、夢とうつつのさ迷いに入ったのだった。――女は、ジッと、枕元に坐っていた……
少将が、ハッキリ眼をさましたときには、夜が明けていた。

「――お眼ざめでございますか……」
少将は寝たまま仰向くようにして、三輪の顔を見た。
昨夜は気が付かなかったが、丸く、頬が豊かで、愛くるしいつぶらな眼を持っている。
「そなた……眠らなかったのか？」
「はい……うわ言を申されましたので、つい気がかりの余り、おそばで一夜を明かしました」
「それは気の毒なことをした」
それから少将は、三輪の眼をジッと見詰めて、静かにたずねた――
「わしは、なんとゆうた？」
「え？」
「うわ言をゆうたそうな……なんとゆうたか、聞かしてくれぬか？」
と……三輪が、ふっと、口もとに笑いを浮かべた――
「ゆうても、よろしゅうございますか？」
「うむ……。聞きたい」
「あのウ……母上……もうしばらく……と、申されました」
「本当か？」
「わたくし、ウソは申しませぬ」
「それだけか？」
「はい……。同じことを、二度申されました」
少将は、ホッとした。――三輪の眼は清らかで、いつわりのかげは見えなかったからである。
「口をすすぎたいが……」
「ただいまお仕度いたします」
三輪が立って行くと、少将も体をおこした。
「――や……！」
少将は、思わず、床の間を見て腰を浮かした。――掛け軸の女人像は、観世音のようであるが、どこか違っている！
「――マリア観世音じゃ！　禁制切支丹仏じゃッ……」
少将が、胸の中でそう叫んだとき三輪が、うがい水と、硬くしぼったぬれ手拭を持って戻ってきた。
「――あ、御無理を遊ばしてはなりませぬ」
三輪は四角な白羽二重の布を三角に折って、少将の左腕を、首からつり下げるようにしてくれた。
「――この家は、隠れ切支丹のすまいか？」
口をすすぎ、顔をふいてから、少将はズバリとたずねた。
「お気が付かれましたか……」
三輪は、ソッと床の間のマリア観世音を振返ると、胸

に十字を切った。
「では、あの男は切支丹だったのか」
「はい、天香さまは、わたし達に神の道を説き聞かせて下さるのです」
「ふーム……神の道を説く者が、剣をふるい、他人の財宝を盗むのか？」
と、その時、サラリと襖を開いて、虚無僧天香が入ってきた。――今朝は、天蓋をかぶってはいない。が……白い頭巾で、顔を包んでいた……。
虚無僧の天香は、立ったまま、ジッと少将を見降ろした。
「――神の道を説くものが、剣を使い、盗みをした……と、わたしを責められておりましたな？」
「わしは、貴公が三島明神の黄金燈籠を奪い、吉奈の湯泉明神から金の鰐口をかすめとったものと考えているが、違うかな？」
「わたしです。その他にも、下田のお宿で頂戴した山神図絵をたよりに、伊豆金山の神社から、数々の財宝を集めました。しかし、これは、埋もれた財宝を、神の御ために役立てるためですよ。更に……」
天香は、ゆったりと坐ると、言葉を続けた。
「わたしは、時に剣を使う。が、人を斬るためではなく、人を助け身を護るためです」
「貴公から、斬込んで行くことはないか？」
「常に、受けて立ちます」
少将は、ジッと覆面の天香を見詰めると、ズバリッと鋭い言葉を浴びせた――
「――それが、応変夢幻剣の極意かッ？」
天香は、うッと息をのんだが、ゆっくり、傍らの女へ顔を向けた。
「――三輪、しばらく遠慮せい……」
三輪が出て行くと、天香は、静かに白い頭巾をほどいた――覆面の下から現われたのは、四谷津之守坂に道場を構える、応変夢幻剣の達人香月紋之助の冴々とした顔であった。
が……、少将は、ちらりと、口もとに笑いを浮かべただけであった。
「――わしは、伊豆にいた頃から貴公であることを知っていた。あの両腕をダラリと下げる構えは、木野から度々見せられている。それと同じ構えを貴公はしていた」
「ハハハ……、頭隠して尻かくさずでしたな」
「しかし、貴公が切支丹とは気がつかなんだ」
「徳川幕府の眼をくらます仮りの姿ですが、御前には

みごと見破られました。が……、わたしも、あなたの正体を――」

「なにッ！　わしの正体じゃとッ」

少将の表情が、サッとひきしまった。

「しばらくッ……。お見せするものがあります。こちらへおいで願いたい……」

香月紋之助は、立って床の間へ近づくと、床脇の壁を、トンと叩いた。

と……、クルリッと壁が回って地下室へ降りる石段が現われた。

「――おう！　これはッ……」

地下へ降り立った少将は、異国風の机の上に並べられた数多くの燦然たる黄金のかたまりに、思わず眼を見張った。

「――伊豆各所の山神から集めた財宝を鋳直したのです。これ等の財宝が総て、先きの金山奉行大久保石見守どのが隠しておかれたものであることは御承知でしょうな？」

「知っている」

「従って……。この金塊は、御前のものということが出来ますな」

「なんとッ？」

サッと、うしろへさがった少将の手が、とっさに刀の柄へかかっていた。

「――わたしは、御前の正体を知っていると申した筈です」

香月紋之助は、少しも騒がず、けしきばんだ少将を見返した。

「あなたは、石見守どののわすれがたみでしょう」

「わしは、先きの侍従、墨染正平の子じゃッ」

「それならば、そうしておいてもよろしい。が……、御前。本多佐渡守は、明朝宇都宮へ向いますぞ」

「えッ!?　あすの朝？」

その頃、佐渡守は、書院の前庭をいらいらとした面持ちで歩き廻っていた。

「――佐渡さま……」

庭伝いに、千々輪のお浅と伊豆屋のお石が近づいて来た。

「どうじゃ？　少将は、大松院に戻っていたか？」

「いいえ……、お戻りではございませぬ」

答えたのは、お石だった。

「わたくし、――昨夜の年忘れの集いでの御無礼のお詫び……との口実で、大松院を訪ねてみましたとこ

ろ、喜平太も木野も、蒼い顔で、落付きを失しておりました」

「芝居ではあるまいな、芝居では」

「そうは思われませぬ。大松院の和尚さまなど、お勤めも手につかぬうろたえ方でございます」

佐渡守は、いまいましげに、お浅を睨みつけた。

「そなたは、少将に心をひかれた。その浮気心が、この騒ぎのもとになったのだッ」

「佐渡さま……」

お浅は、佐渡守の視線を避けようとはしなかった。

「わたしは、浮いた心ではありません。シンから、少将を慕うていたのです。でも……、昨夜、キッパリ諦めて、黒太夫へ短筒を渡しました。その時の気持ちは、心の臓に釘を打ちこまれるほどせつのうございました」

「馬鹿々々しいッ！　よい年をして、何の色気沙汰ッ。たわけたことじゃッ」

「たわけたと仰有いますか？」

「おうさ……。天下を狙う大事の前に、色恋がなんじゃッ。わしなどは、老中の職をかけ、宇都宮十五万五千石をかけている。命などは、もとより投げ出しているのだッ」

「佐渡さまは忠長卿を将軍になおし、御自分は副将軍の実権を握ろうとの夢に生きておいでです。でも……、わたくしは女です。権勢よりも、富よりも、恋に生きとうなることもございます」

「その飛ばッちりは、まッ平じゃッ」

そのとき、熊取内膳が急ぎ足で、廊下を渡ってきた。

「――殿……。残念ながら、いまだ、少将の行方がわかりませぬ」

「えーい、さがせッ。みつかるまでさがせッ」

「はい、十字兵衛と賀来陣五郎と黒太夫が、人数をつれ、大日坂附近を軒並みに、調べております……」

本多佐渡守が、千々輪のお浅に当り散らしている頃、幾人かの御用聞きが、大日坂附近の家主を、しらみつぶしに訪ねていた。

江戸では、家主は店子の家の責仕をもっている。店子は、かわったことがあれば、すぐ家主へ報らさねばならない。

――お前さんの持ち家に、虚無僧は住んじゃいないかね……。

――昨夜、怪我をした侍が担ぎ込まれたって話を聞かねエかね……。

御用聞き達は、こう言って、一軒々々、家主をたずねて歩いたのである。

——御老中佐渡守さまのお声掛り……、そういわれただけで、御用聞き達は、素っ飛んで歩かねばならなかった。

その御用聞き達の調べが、大日如来堂で待っている六角十字兵衛のところへ、次ぎ次ぎにもたらされてくる。

十字兵衛には、黒太夫と賀来陣五郎がくっついていた。

「——駄目だねェ……。これだけ調べてもわからねェんじゃ、少将は近くにゃいないかもしれませんぜ」

既に、昼近くなった陽を仰ぎながら、黒太夫が言った。

「いや、手傷を負うた少将を、それほど遠くへ連れて行ける筈はない。もっと調べさすんだ」

「ねェ、六角さん、いま調べているのは、家主ばかりだ。それじゃ、自分の持ち家に住んでるやつ等のことはわからねェ」

「うン……、そうだ。家主調べが終ったら、家持ちを調べろ」

「そいつア大事だ……。幾十軒、いや、幾百軒あるかわからねェ」

「わけはねェ。かりに千軒あるとして、御用聞きや下っ引き五十人動かせば、一人が二十軒調べりゃいいわけだ。是が非でも、少将をみつけ出せッ……」

ちょうどその頃、少将の寝床をかたづけていた三輪は、玄関の方で人の気配がしたので、急いで立って行った。

「——ごめんなさいよ。ちょいとものをたずねてエ……」

玄関に立っていた男は、手にしていた十手を示すと、ジロリと、家の中をうかがうようにして言った——

「この家にゃ、虚無僧が出入りしているってねエ……」

三輪は、御用聞きの顔を見た。——この男は、知っているのだろうか、それともカマをかけているのだろうか……？

「いいえ、虚無僧などは……」

「いないと言うのかい？　しかし、この家から、時時、尺八の音が聞えるって噂だぜ」

「まア……、オホホ……。それは、わたくしがお稽古しているのです」

「お前さんが!?」

御用聞きは、じッと三輪を見詰めた。

「よし。一ッちょ、聞かせてもらいたいね。お前さんが、本当に吹けるかどうか……」

「——お聞かせいたしましょう……」

三輪は、一度奥へ入ったが、すぐ、一尺八寸の尺八を持って玄関へ戻って来た。

「——明暗流でございます。では……」

ピタリと座を構えた三輪は、目を閉じて、朗々と、尺八を奏ではじめた。

御用聞きは、尺八の味がわからぬ男であったらしい。しばらく、照れたように、三輪の前に立っていたが、やがて、コソコソと、門を出て行ってしまった。

が……、三輪は、なお吹き続けた。あるいは、峰の松が枝を吹き渡る風の叫びの如く、あるいは、山峡の岩場を流れ落ちるわき水のささやきの如く、尺八の音は変転を続けた。

この音色は、地下の密室にいる少将と香月紋之助の耳にも聞えた。

「——ほう……、あれは、急々非常の曲です」

紋之助が、少将へニッコリ笑いかけた。

「何者かが、この屋敷をうかがっていると考えてよいでしょう」

「合図の曲か？」

「左様……、三輪が吹いているのですよ」

「わしをさがしているのじゃな」

「佐渡守一味は、必死ですからな。六角十字兵衛が総大将で、目明し、御用聞きを大勢くり出しているのです」

「わしを、科人扱いしているのか」

「いや、名目は……、なんとでもつきます。悪人のわなにおちいられた御前をお救いするためなどと……」

尺八の音が絶えた。

「どうやら、立ち去ったようですな」

「では、わしも帰らせて貰おう」

「いや……、夜まで、お待ちになった方がよいでしょう。十字兵衛たちの見張りは厳重です。それにまだ、傷のお手当もせねばなりませんからな……。三輪を呼びましょう」

紋之助が地下室を出て行くと、すぐ三輪が、銀の盆に、薬品や白い布をのせて降りて来た。

「——お手当をいたします……」

少将は、左腕を差し出した。——三輪の手つきは、慣れ切っていた。

「そなた、医術の心得があるのか？」

「いいえ、ただ、天香さまから、教えて頂いただけで

す」
「それにしては、手ぎわがよいな」
「はいあちらこちら、けが人、病人の手当に行きますから」
「あのご仁は、医者もしているのか？」
「いいえ……神の教えに従い、貧しい人々を、ただお救いになるのです」
少将は、香月紋之助の、さえざえとした目を思い浮かべた。
——神のために、埋もれた財宝を盗み集める一方、神の名において貧しい者たちに恵みを与える男……。しかも、紋之助は、剣をとれば一流の達人である。
——不思議な男だ……。
その紋之助が、夜になって降りて来た。
「——もう、よろしいでしょう。三輪、しばらく御前のお供をしてお手当を続けろ……」

からす長屋

少将が地下室を出た頃、蔵前では、喜平太、木野、千里の三人が、こっそり裏門から、大松院を脱け出していた。

——少将殿御無事、今宵五ッ刻、千住大橋まで迎えに出向かれたし。なお、十字兵衛一味の見張りあれば、旅姿にて、くれぐれも御用心のこと……。伊豆の虚無僧……。
こんな文が、大松院に投げ込まれたのは、暮れ五ッ前であった。
されば、喜平太達は、師走の闇にまぎれて、別々に大松院を出て、駒形堂の前で落ち合ったのである。
「——もし……」
ホッと、一息ついた三人へ、突然、声をかけたものがある。——身軽ないでたちをした若い男だった。
かたぎの町人なのか、無職渡世の遊び人なのか、ちょっと見わけのつきかねる姿である。——尻はしょりをして、手甲脚絆をつけ、頬かぶりをしている。
「墨染の御前さまの、御家来衆ですね？」
「貴公は、なんだ？」
木野と千里をかばって、喜平太がたずねた。
「千住から、お迎けエに参りました。天香先生のおいいつけでござんす」
「天香先生？」
「ヘエ、伊豆の虚無僧さんでござんす」
「はっきり言って、信用できんな」

「御尤もさまで……、が、どっちみち、お前さん達は、千住へお行きなさるんでしょう。あっしが、近道を御案内しやアしょう。いやでなかったら、ついておいでなせエやし……」
そう言うと、男は、もう歩きだしていた。
喜平太は、木野達と顔を見合せた。——腕に覚えのある三人である。男を信用は出来ぬが怖れはしない……。
「——よし……、ついて行こう……」
三人は、男のあとを追った。
男は、今戸から日本堤へ出て、小塚ッ原を抜けた。
小塚ッ原には、仕置場がある。
チロチロと焚き火の焔が見えるのは、獄門首があって、非人達が張り番をしているのであろう。
「——おーい、上州熊はいるかい……」
案内の男は、暗い道を歩きながら、焚き火の方へ声をかけた。
「おーい、熊は俺だ……。誰だね？」
「千住の団平だ」
「ああ、千住のひとか……。いま時、なにごとだね？」
「天香先生のお客人の案内だアね」
「そいつア、御苦労さんだねエ」
「病人はねエかよう？」
「おかげさんで、ここンとこ息災だ。先生によろしく言ってくんな……」
「達者でいなよ……」
男は、一度ゆるめた足を、また早めた。
やがて、金杉を過ぎて、千住大橋が近づいてくる。
——その橋のたもとに、十人余り、黒い影が立っていた……。
「——兄貴か……」
千住大橋の橋詰めにいた人影の中から、ひとりの男が近づいて来た。
「おう、迎えに来てくれていたのか？」
喜平太を案内した団平という男が応えた。
「客人は？」
「お連れした……。お三輪さんは？」
「まだだ……」
「じゃ、とりあえず、こちらの客人を、御案内してくれ……」
「合点だ……」
その男が、喜平太達に、ペコリと腰をかがめた。
「——こう、おいでなさいまし……」
千住は、奥州への関門である。すぐ眼の先きを、滔

-Hamano-

沼と荒川が流れていた。

が……、男は、橋を渡らず、川岸を右へ入って行った。

「――どこへ行くのだ？」

男について行きながら、喜平太がたずねた。

「すぐその先きの、十二天の森ン中ですよ。あっし達は、からす長屋と言ってるのですがね、ここいらのやつ等は、非人村と呼んでいやすよ」

「非人村!?　ものごい乞食のすまいか？」

「ヘエ……。それも、病人ばかりですよ」

千住大橋から一丁余りのところに、黒々とした杉、さわらの森がわだかまっていた。

森の入口に、小さな富士浅間の祠がある。――そのうしろに続く森が、十二天の森と呼ばれているらしい。森の中に、三棟ほど、屋根の低い長屋が並んでいた。

喜平太と木野と千里が連れて行かれたのは、まん中の長屋であった。

「――ほう……！」

喜平太は、長屋に入ると、思わず、木野や千里と顔を見合せた。

プーンと、煎じ薬の匂いが流れていた。――それは、決してむかつくような匂いではなく、まるで香木でも炊いているかのように、爽やかなものであった。

長屋の中は、棟割りではなく、七、八間ぶッ通しの細長い建物で、両側の壁に沿って、大勢の男女が寝かされていた。

いずれも、さっぱりとした、汚れのない夜具を着せられている。

まん中が通り路になっていて、ところどころに行燈がおいてあった。

たすき掛けで働いている幾人かの若い娘がいた。

――或る者は薬を煎じ、或るものは病人の頭をひやし、また、脚腰を撫でてやっているものもある。

「この病人達は、みんな非人なのか？」

「ヘエ、世話をしてる娘も、このあっしもつまり非人なんですよ」

男はそういって、わだかまりもなく、ニッコリ笑った。

その頃、十二天の森へ、影のようにまぎれこんだのは、黒太夫である。――蔵前から、喜平太達を追って来ていたのだ……。

「――おかしなところへ来やがった……」

十二天の森を五、六間入ったところで、黒太夫がつ

ぶやいた。

昼間、十字兵衛や陣五郎といっしょに、大日坂附近で少将をさがしたがみつからず、夕方から蔵前の大松院を見張っていたのである。

その網に喜平太達がひっかかっていた。——喜平太達三人は気付かなかったが、今戸から小塚ッ原と、黒太夫は巧みに追い続けて、この森へやって来たのである。

黒太夫は、三棟並んだからす長屋の、右端の建物に近づくと、雨戸の隙間から中をのぞいた。とたんに——

「——うッ！」

黒太夫は、三、四尺飛びさがっていた。

地獄！　餓鬼の群……。

病みほうけた男……、顔の崩れただれた女……、手の無いもの、腰が抜けたもの、髪のぬけあがったもの……、凡そこの世から忌み嫌われる業病のもの達が、長屋にあふれんばかり、横たわっていたのである。

「——汚たねエッ……」

黒太夫が、ベッと唾をはいたとき、二挺の駕籠が、十二天の森の入口でとまった。

幾人かの男達に丁寧に迎えられて、駕籠から出たのは、墨染の少将と、三輪であった。

「——天香先生は、おいでにならねエのですか？」

そうたずねたのは、千住の団平だった。

「あとから、おいでになるかもしれません」

そう答えたのは、三輪だった。

「でも、天香さまのお話は、うかがっているのでしょう？」

「ヘエ……、昼間おいでになりましたから、あらましのことは……」

「では、御前のお供の方々は？」

「ヘエ、二番長屋でお待ちでございます」

「御世話さまでした……」

三輪はそういうと、少将を促して、先きに立った。

「——ほう……、赤子の泣き声が聞えるな」

少将が、ふッと、足を止めた。

「はい、ここには、三棟の治療所がございます。東から、産婦の長屋、五臓の長屋、外科本道の長屋と並んでいるのです」

「医者がいるのか？」

「天香さまと弟子達がみとっております」

やがて、少将は、まん中の長屋へみちびかれて行った。

「——おう！　御前……」

「御前ッ、お怪我をなさいましたかッ……」

喜平太と木野、千里が、はずんだ声で、かけよって来た。

「心配はない。かすり傷じゃ……」

そういって、少将が、首から吊った左腕をソッと押えたとき、出し抜けに、表の方が騒々しくなった。

「——この野郎ッ！　逃がすなッ」

「——傀儡師だぞッ！　見かけねエ野郎だッ」

「——やッ、気をつけろ。短筒を持ってるぞ」

黒太夫が、非人達に見つけられたのである。

「——やいやいやいッ！　近よると、ぶっぱなすぞッ……」

短銃を握りしめた黒太夫は、暗がりの中で、歯をむき出した。

「馬鹿野郎ッ……。そんなものを振り回して、この森から出られると思うのか？」

千住の団平という男が、ズイッと、黒太夫の前へ出た。

「見えねエのか？　お前エのまわりは、すっかり取り巻かれている。こけおどしの玩具はひっこめろッ」

「し、死人の山を、築いてやるぞッ」

「大きなことを言うねエ。その短筒に、五十発も百発も弾が入ってるわけじゃあるめエ。高々入っていても、五発か六発、それを射ち尽せば、お前はとッ捕まるんだ」

「糞ッたれめッ！　弾が無くなりゃ、のど笛へくらいついてやるぞッ」

「やめな。無駄なことだ。たとえひとりでも、俺達の仲間を殺しゃ、お前エは明日、荒川にプカーリ、プカーリ、浮かんどるぞ」

黒太夫は、ゴクリと、唾をのんだ。と同時に、しまったと思った。いつの間にか、四、五十人は集まって来ているようだ。逃げ出すのなら、もっと早く、短銃を射ちまくって森を飛び出すべきだったのである。

「——か、勝手にしやがれッ……」

黒太夫は、短銃を叩きつけると、ドッかと坐りこんでしまった。

——わッ……、と、幾人かの非人が飛びかかり、手どり足どり、黒太夫は、またたくうちに、太い杉の木に縛りつけられていた。

「——団平兄貴、こいつをどうする？」

「——兄貴、この野郎は、天香先生のお客人をねらってるんだぜ。あと腐れなしに、絞めちまっちゃどう

だ」

騒ぎ立てる非人達を、団平が手で押えた。

「まてまて、そいつア、お客人にたずねて見なきゃわからねェ」

その声に、非人達をわけて、少将が前へ出た。

「――この男、わしの知り人じゃ……」

少将は、黒太夫を見て、ニッコリ笑った。

「が……、ちと手数のかかる男でな、わしの傷も、この男に射たれたのじゃよ」

「じゃ、やっちまいますか？」

「いや……、とらわれびとの命を奪おうとは思わぬ。わしがここを出たあとで、放してやって貰いたい」

そう言い残すと少将は、黒太夫の前から離れた。

が……、まん中の長屋へは戻らず、西側の長屋へ入って行った。

――さっき、黒太夫が驚いた、重病人ばかりの治療所である。

若い娘が七、八人、その病人達の間を動きまわり、手当をしている。

――うみただれた病人達の悪臭も、娘達には気にならぬらしい。

「――あのご達は、天香さまの弟子でございます。中には、お旗本のお嬢さまや、大商人のお娘御も混っております」

三輪が、小さな声で説明した。

少将は、その夜、なかなか眠れなかった。

普段は、看病の娘たちの休息室になっているらしい小さな部屋に五人が枕を並べたのである。少将に喜平太、それから木野に千里に三輪……。

喜平太は、気楽な男だ。どんなところででも、グッスリ眠ることが出来る。

木野と千里も、昨夜は少将のことを案じてまんじりともしなかったのか、よく眠っているようである。

少将は、さきほど見た外科本道の治療長屋のことを思い出していた。――醜怪な業病の非人乞食たちと、優しくこれをみとる娘たち……。

「――いままで、夢にも考えなんだ人間の姿じゃ……」

少将は、胸の中で、そうつぶやいていた。

となりの産婦の治療長屋からはひっきりなしに、赤子の泣き声が聞えてくる。――生れながらにして非人の運命をになったみどり子たちである。

「――それにしても、橋の下やまぼこ小屋でうまれず、このような手厚い看護のもとに生を受けたことは幸せであった……」

少将は、そんなふうに考えた。襖一重を隔てた五臓の病人たちも時々うめき声をあげた。苦痛を、こらえているのであろう。

が……、病人たちのうめきは、単なる唸り声ではなく、全て一つの言葉になっている。

「――おう、さんた、まりあ……」

うめき声が息ぜわしい時には、横になっている三輪が、ソッと起きて行く。――小声で娘たちに指図しているようである。

幾度目かに三輪が立ったとき、少将も、部屋を出て、病人たちのところへ行った。

「――あ……、御前……」

病人の手を握り、脈を見ていた三輪が、驚いて、少将のそばへ来た。

「――このようなところでは、おやすみになれぬとみえまするな」

「いや……、つい、考えさせられたのじゃ……。あの虚無僧天香に、多額の金銭がなぜ必要なのか、わかったような気がする」

「いいえ、天香さまは、まだまだ大きな仕事をなすっております。ここに要るお金などは、ものの数ではございません」

「それは、どんな仕事だ？」

「わたくしも存じません。でも、神の御名によるお仕事ですもの、立派なことに違いありません」

少将は、うなずいてから、長屋を出た。

あと数日で新しい年を迎えるのである。

師走の風は冷たかったが、少将はそれを、すがすがしいと思った。

寒天にきらめく星の光も、江戸のまん中を離れた千住で見ると、澄み切って、驚くほどあざやかである。

と、突然、少将の瞑想を破る声が聞えた。

「やッ！　黒太夫だなッ。ハハハ……、なんてざまだッ……」

津矢の、男のような声だった。

少将は、静かに声の方へ近づいて行った。

杉の大木に縛りつけられた黒太夫の前に、津矢が、両脚を踏ン張り、両腕を組んで、胸をそらせていた。

姿は、毒消し売りである。――手甲脚絆、背中には、四角な包みをせおっている。包みの上には、三度笠がつけてあった。

「――悪人めッ！」

津矢は、憎々しげにいった。

「おれはお前を、地獄の入口まで送ってやった。それ

だのに、お前はいつも、生きていた。憎まれッ子世にはばかるとは、お前のことだぞ……」

それから津矢は、クスリッと笑った——

「おい……、小仏峠の美女谷で、猪撃ちの鉄砲で狙ったのは、おれだぞ」

「えッ！」

それまで、観念したように眼を閉じていた黒太夫が、思わず、驚きの声をあげた。

「ハハハ、ビックリしやがった。おれは、二ツ玉で、十字兵衛とお前を、いっしょに射ち倒してやる積りだった。ところが、十字兵衛の脚にあたっただけだった。次ぎの晩、おれはお前を、相模川へ叩きこんでやった。ところが、またお前は助かった」

「畜生めッ……」

「おいッ……。もう一度、おれと勝負するか？」

津矢は、ツイッと黒太夫に近づくと、縛りつけた縄をほどきはじめた。

が……、フッと、手をとめた。

「おお、そうだ……。勝負はあとだ。おれは、会わねばならぬ人があった。ここに、墨染の少将がいるか？」

その言葉に、少将が答えた——

「わしに用か？」

「あ……、なーんだ、来ていたのか」

「そなたは、津矢という娘じゃな？」

「そうだよ。伊豆の金山の津矢だ。お前とは、幾度も出会ったが、話をするのは初めてだ」

「わしがここにいるのを、どうして知った？」

「蔵前の大松院へ行ったのだ。すると、門前にいた虚無僧がおしえてくれた。——あいつは確かに、伊豆の下田にいた虚無僧だと思うんだけど……」

「そうか、天香から聞いたのか……。それで、なぜわしをたずねてきた？」

「これじゃ。これを見てくれ……」

津矢は、ふところから一通の封書をとり出して、少将に渡した。

「——真弓からじゃな。宇都宮の様子をしらせて来たのじゃろ」

「おいッ！　口が軽いぞッ」

津矢はハッと、うしろを振り返った。

「あッ！　畜生ッ……」

津矢は、急いで辺りを見廻した。

——津矢がほどきかけた縄を、巧みに抜けて、黒太

夫は姿を消していたのである。

「ハハハ、わしは知っていた。知って、わざと逃がしたのじゃ。その方がよいからな……」

疾風街道

「——御後室ッ……。御後室……」

大日坂上のお浅の屋敷の表門を、さきほどから叩き続けている男があった。——黒太夫である。

「——おう、誰だ？」

門の内からたずねたのは、賀来陣五郎だった。

「おや、陣五郎さんか。お前さん、ここに泊っているのか？　俺だ。黒太夫だ」

「なんだ、いま頃……。どこへ行っていたんだ」

ブツブツいいながら、陣五郎が、潜り戸をあけた。

「お浅どのは？」

「いま幾刻だと思ってるんだ。とっくにおやすみさ」

「起してくれ……。いや、お前さんに頼むことはねエ。俺が行って起す……」

黒太夫は、腰をおさえ、足をひきずり、逼うような恰好で式台へ近づいて行った。

「——なんという姿です、それは……」

お浅が、雪洞を片手に、奥から出て来て、式台に立った。——白い寝間着に、前で大きく帯を結んだ姿は、凄まじい色気だった。

「おう……、お浅さま！　みつけましたぞ。少将をみつけましたぞ」

「え!?　どこに？」

「千住の乞食村でさア」

「乞食村!?」

「病人乞食の治療所が三棟並んでいやしてね。その真ん中の棟にいますよ。少将も、喜平太も、それから木野も佐渡の千里も」

「それで？」

「だから、報らせに帰って来たってわけでさア」

「黒太夫どの……」

お浅は、ジッと黒太夫を見降ろした。

「そなたには、短筒があずけてありましたな」

「そ、そのこと……」

黒太夫は、べったりと式台に腰を落すと、ホーッと、溜め息をついた。

「すんでのところに、命をとられるところでしたよ。百人余りの非人共に取り巻かれましてね。あっしだからこそ、どうにか逃げ出すことが出来たのでさア……」

黒太夫は、十二天の森の出来事を物語った。しかも、相手の人数を、五倍十倍に話したのである。
「多勢に無勢だ、とうとうとっ捕まって、踏んだり蹴ったり……。あっしでなきゃ、五体がバラバラになっていたでしょうよ。その上、伊豆で暴れ廻っていた女の黒頭巾まで現われやがった」
「では、あの女達はやっぱり少将と……」
「勿論ですとも……。ところで、明日の朝は本多佐渡守さまが江戸を出て、宇都宮へ向われる。いやでも千住をお通りだ。どうします」
お浅が、キッと、陣五郎を見た。
「――賀来どの、佐渡さまのお屋敷へ行って頂きましょう。大至急、人数がいります……」
それから半刻のち……。
三十人近い人数が、上野山下から、金杉、三ノ輪とかけ抜けて行った。
夜明けに近く、いわゆるあかつき闇。それに、びッと、骨をさす寒さである。
その人数の中に、駕籠が一丁混っていた。――乗っているのはお浅である。
「――黒太夫ッ……。まだかッ？」
たずねたのは、先頭を走っている六角十字兵衛だった。
「まだまだッ。とにかく、千住大橋まで行かにゃならねえ」
「大橋を渡るのかッ？」
「うんにゃ、手前ですよ。もうすぐだッ……」
黒太夫は、痛む腰を押えながら走っている。
この一団が通り過ぎて、一呼吸ののち、別の一団が、同じ方へ走って行った。――火事装束に身をかためた五人組である。
五人組も、明らかに、十字兵衛の一行を追っているのである。
「おッと、こちらこちら……」
千住大橋のたもとにたどり着くと、黒太夫が先きに立って、右へ折れ、荒川沿いの細い道へ入って行った。
「――それ、あすこに黒々と森が見えるでしょう……。あれが十二天の森……。その中に、小さな祠と、乞食村がありまさあ」
「よしッ……、非人どもの寝込みを襲えッ。ただし、めざすは、少将ただひとりだッ」
「叩き切って、よろしいな？」
たずねたのは賀来陣五郎である。

「もちろんだ。御後室、文句はあるまいな？」
「なぜ、わたしにたずねるんです？」
「いや、念を押しただけだ。あとで、うらまれたくないからな」
すると、黒太夫が、皮肉な顔で十字兵衛を見た。
「木野は、どうするんです、木野は？　叩き切ってもかまいませんかね、十字兵衛さん」
「おのれ……、からかうのか？」
「いや、念を押しただけでさあ。あとで、うらまれたかあねえですからな」
「くえッ！　木野は、わしがぶッた切るッ」
「フフフ、少将は、あっしが手裏剣で刺しますぜ」
が……森の中へ入って行った黒太夫は、あッ…と、驚きの目を見はった。
森の中は深閑と静まり返り、人の気配どころか、三棟の治療所までこつ然と消え失せていたのである。
しかも、なんということ、確かに治療所があったはずのところには杉や桜の苗木が一面におい茂っているではないか！
「おかしい！　こんなはずはねえ」
「うぬ、夢でも見たかッ」
十字兵衛が、黒太夫をにらみつけたとき、カラカラと、高笑いの声が聞えて来た。
「――夢ではないぞ。わしの幻術で、お前たちをここへおびき出したのじゃッ」
それは、津矢の声だった。
「――やッ、津矢かッ!?」
黒太夫が叫んだ。
「そうじゃッ。伊豆の大仁金山の津矢じゃッ。黒太夫ッ、斬られに舞い戻ったかッ」
「じゅ、十字兵衛さん！」
黒太夫は、暗がりの中で、津矢を指さした。
「あいつだッ。美女谷で、お前さんを撃ったのは、あの女だッ」
「何ッ!?　猪撃ちの猟師ではなかったのかッ？」
「違う違う！　あいつなんだ。二ツ玉で、狙い撃ちにしたんだッ」
「おのれッ！」
十字兵衛は、ギラリと刀を引き抜くと、津矢の声を頼りに、駈け寄って行った。――その十字兵衛は、まだ心持ちびっこをひいている。美女谷で受けた傷が残っているのだ。
それだけに、津矢に対する十字兵衛の怒りは、火のように燃え上っていた。

が……、四、五間前へ出た十字兵衛が、ハッと、立ち止まった。

津矢ひとりかと思ったら、同じような黒装束、黒頭巾が、そそり立つ杉の大木の前に、四人並んでいたのである。

しかも、暗がりの中ではあったが、その中のひとりの手に、短銃が握られていることがわかった。

「――黒太夫の短筒だなッ……」

「そのとおりじゃッ。あいつが手土産がわりに置いて行ったのだ」

短銃を握った黒頭巾が叫び返した。

「きッ、貴様かッ」

「おれが津矢だ」

「卑怯者ッ。短筒を捨てて勝負しろッ」

「ワッハッハ……。こりゃ面白いぞッ。お前達から、卑怯者呼ばわりされるとは思わなかった。笑わすないッ」

そう言った途端に、ズダーン……、津矢の手から、短銃が火を吹いた。

――わッ！　十字兵衛が、パッと身を伏せた。弾傷には、こりているのだ。

と、同時に、四人の黒頭巾は、気を呑まれている男達の中へ、ドッと駈け込んで行った。

しかも、男達にとって思いがけないことが起った。背後から、火事装束の五人組が斬り込んで来たのである。

不意を打たれた男達は、見る見るうちに人数が減って行った。

「――津矢どのッ……。津矢どのと言ったなッ……」

火事装束のひとりが、斬りまくりながら叫んだ。

「――御前はッ……、御前はどうなされたッ」

「御前とは……、誰のことだッ」

返事をする津矢も、幾人かを相手にしている。

「少将ッ……。墨染の少将だッ」

「知るもんかッ……。少将なんか知るもんか」

この乱闘の中で、黒太夫は素早く、お浅のそばへ駈け寄っていた――

「――お浅さまッ、こいつはまずい！　逃げるが勝ちだ。こうおいでなさいましッ……」

闘いは、完全に十字兵衛側の負けだった。

「――退けッ！　退けッ……。またの日があるぞ……」

喚きながら十字兵衛は、いつか三ノ輪近くまでさがっていた。

小塚ッ原よりに、牛頭天王の社がある。その鳥居前

に集まった人数は十余人……。はじめの三分の一に減っていた。

「――お浅どのは……？」

賀来陣五郎が、左腕に受けた傷の手当をしながら、辺りを見まわした。

「黒太夫がつれて、一番先きに逃げたようでした」

ひとりの侍が応えた。

「黒太夫が!?」

十字兵衛が、その侍を睨みつけるように見た。

「はア……。お浅どのの手を引きずるようにして、走って行きました」

「糞ッ……。そう言うやつだ、黒太夫も……。決して、損な役には廻らぬやつだ」

憎々しげに唾を吐き捨てる十字兵衛に、陣五郎が近づいて行った。

「ところで、あの黒装束の女達、なに者なのか御存知か？」

「大久保石見守ゆかりの者……、それだけはわかっている。が、正体不明だ。いつも四人で出没し、われわれの邪魔をしやがる」

「邪魔と言えば、火事装束の一党……。あいつ等には、拙者も邪魔をされた」

「佐渡奉行を狙ったときか？」

「左様……。やはり正体不明だ……。墨染の少将ゆかりのものなら、竹村丹波をかばう筈はないしわけがわからぬ」

「黒装束の女達もだ。果して少将とつながりがあるのかないのか、いまだに摑めぬ……。それにしても、われわれは、なんのためにこの夜の夜中、千住まで行ったのだ。いまいましい黒太夫めッ。少将はおろか、喜平太も木野も姿を見せなかったではないかッ」

「そうだッ。千里もいなかった……」

十字兵衛と陣五郎が、腹立たしげに、そんなことを言っているとき、千住大橋から四、五丁川下の枯れ葦の間で、四人の女が着物を着替えていた。

長い冬の夜も、そろそろ明けそめて、荒川の水面がいくらか薄あかるくなっている。

黒装束を脱いで、津矢はまた、毒消し売りの姿に戻った。

他の女達も、それぞれ娘姿にかえっている。

が……、この三人、津矢の同志の真弓達ではなかった。――木野と千里と三輪だったのである。

「――では、俺は行くぞ……」

津矢が、薬函の包みを背中にしょって、木野達へ言

った。
「――お世話になりましたな……」
木野が軽く頭を下げた。
「御前には、よろしく申し伝えます」
「ふン……。それより木野さん、俺達は仲間じゃない。いつか勝負をつけようぜ……」
木野と千里と三輪は、枯れ葦の中を遠ざかって行く津矢の姿を見送っていた。
「――おかしなひと……」
千里が、つぶやいた。
「木野さん、なぜあのひとと、勝負せねばならないのです？」
「津矢どのは、あたしのもとの主人、伊豆屋のお石さまをつけ狙っている人々の仲間なのです」
「ま……、あなたは、香月紋之助先生の内弟子だったのではありませぬか？」
すると、三輪がハッと顔をあげた。
「木野どのは、香月先生の指南を受けられたのですか？」
「はい……。三輪どの、あなたも、応変夢幻剣をお使いのようですね？」
「えッ!?」

「さきほど、六角十字兵衛一党との争いの中で、あなたの剣法を拝見しました」
「では、隠しますまい。わたしは、この一年半ばかり、香月先生の教えを受けております」
「まア……。それでは、わたしが姉弟子ですよ。わたしは、幼いときから津之守坂の道場にひきとられ、二年前まで、内弟子でした。伊豆屋から御前のところへ移ったのも、香月先生のお指図です」
そのとき、枯れ葦を踏みわけて、喜平太が近づいて来た。
「木野どの……。いずれも無事か？」
「奇妙な火事装束五人組の助勢があり、怪我人も出さずに済みました」
「ほう……。また出たか!?」
喜平太は、首を傾げた。――喜平太は、佐渡の黒木御所と江戸の両国橋と、二度火事装束の姿を見かけているのだ……。
「それにしても、津矢の姿が見えんではないか」
「いま、毒消し売りの姿に戻り、どこかへ行ってしまわれました」
「そうか……。それならそれでよい。さ、参ろうか。御前が待っておいでだ……」

その黒染の少将は、すでに荒川を渡り、川向うの土堤で待っていた。――少将の近くに、たくましい馬が五頭、つないである。
「――御前、津矢は、いずれかへ立ち去ったようです」
「うム……、ついさきほど、大橋を渡って北へ行くのを見かけた。わし達も行かずばなるまい」
すると、三輪がそばへ駈け寄った。
「御前、傷のお手当をいたしましょう」
「いや。あとでよい。それより、三輪、それから千里、馬に乗れるか？」
女三人が、はっきりうなずき返した。
「よし！　では急ごう。これから川口へ出て、お成街道を一気に走り、粕壁へ出るのじゃ」
その頃、本多佐渡守の行列が、大名小路の屋敷を出ようとしていた。
「――殿、今宵は粕壁泊り。途中曲者の待ち伏せがあるかもしれませぬから、先発いたします」
佐渡守に、熊取内膳がささやいた。
明け六ツ過ぎに、佐渡守の行列は上屋敷を出た。
奥州街道を、千住、草加、武州大沢を過ぎて、今宵は粕壁泊りの予定である。この間凡そ九里、大名行列としては長丁場で、早立ちは当然のことだった。
それよりひと足先きに屋敷を出た熊取内膳は、若侍五人を連れて道を急ぎ、上野山下まで来たとき引揚げて来た六角十字兵衛の一党と出会った。
「――十字兵衛、少将は？」
内膳が、せわしげにたずねた。
「姿さえ見ません。それどころか、この人数を見て下さい。十五、六人やられました」
十字兵衛は、千住十二天の森での出来事を手短かに物語った。
「黒太夫のやつ、なにを血迷ったのか、われわれを飛んでもない死地へさそいこんだのですぞ。しかも、自分だけは、千々輪の後室をつれてさっさと逃げてしまいましたよ」
「では、千住界隈には、まだ黒装束の女どもがいるのか!?」
内膳は、伊豆で幾度か危いめに会わされているだけに、真弓や津矢達がおそろしかったのである。
「わかりません。しかし、或はいたとしても、夜が明ければ大して心配はありますまい」
「いやいや、伊豆では白昼、鉄砲で狙われたこともある」

「御家老、人影まばらな天城街道と、人馬あとを絶たぬ奥州街道とは違うでしょう」
「それにしても、用心に越したことはない。貴公達もわれわれといっしょに、街道筋を調べてくれ。殿に万一のことがあっては一大事だ。少将らしいものを見かけなんだか、怪しい女の一団を見たものはないか。それを調べるのだ」
その頃、少将一行は五頭の馬を並べて、お成街道を、一路、北へ、北へと走り続けていた。
江戸から日光へ行くのに二つの街道がある。一ツは、佐渡守の行列が進む予定の奥州街道。もう一ツが、いま少将一行が走っているお成街道である。
将軍が日光へ社参するときには、川口、鳩ヶ谷、大門、岩槻を過ぎて、奥州街道へ出る……、これをお成街道と呼んでいた。
「――先き回りをするのじゃ。真弓からの報せでは、佐渡守は今宵、粕壁の本陣高砂屋へ泊る筈じゃぞ……」
少将は、馬を急がせながら、あとに続く喜平太へ言った。
「途中で狙う方が、楽ではありませんか？」
「いや、途中は警戒厳重……。それに、わし達をさがしに、先発しているものがあるかもしれぬ。奥州街道に、わしの足跡をのこさねば、心の紐をゆるめて油断しようぞ……」
「いよいよ、今宵、決行ですか!?」
「場合によってはな……」
少将は、走る馬上で、チラリと口許に笑いを浮かべた。
「――喜平太、粕壁には真弓が待っているぞ」

網中の魚

奥州街道越ヶ谷の宿を、本多佐渡守の行列が通り過ぎていった。
既に、七ツ（四時）近くである。
ここから今宵の泊り粕壁まで二里二十八丁……。着く頃には、トップリ暮れている筈である。
その頃、熊取内膳をはじめ、六角十字兵衛、賀来陣五郎の一行は、粕壁の宿はずれ、三枝橋にかかっていた。
「――御家老、怪しいものの姿は、見かけませなんだな」
さすがに十字兵衛が、ホッとしたようにいった。
「しかし油断は禁物だぞ」

「いや、案外、われわれの方がとり越し苦労をしているのかもしれませんぞ。少将がまだ江戸にいるとすると、飛んだ無駄骨折りです」
「十字兵衛……。拙者は、少将より、黒頭巾の女たちがこわいのだ。少将は味方ではない。が、殿の敵に廻らねばならぬ理由もないのだ」
「そうではありますまい。既に、幾度かわたしが少将を狙っています。わたしは、本多家の家臣ですからなア」
「少将は、木野のことで、貴公から恨まれていると考えているかもしれぬ」
「それに、大日坂では、黒太夫から狙撃されています」
「それも殿とはかかわりがないと言えるのではないか。千々輪の後室の恋慕をすげなく振った、その意趣ばらしと考えたかもしれぬ。それに引替え、黒頭巾の女たちはいかん。あいつ等は、大久保石見守ゆかりの者共だ。はっきり、殿を、わしを、伊豆屋のお石を狙っている……。鉄砲は撃ちかける、火はつける、斬り込んでくる。手がつけられぬわい」
熊取内膳は、いまいまし気に、舌打ちをした。
「その女共の人相は？」
陣五郎がたずねた。
「それが、どうもはっきりせんのだ」
十字兵衛が、眉を寄せて、下唇をつき出した。
「首領は、確かに神ト仙女真弓という女……。拙者は一度見ているのだが、夜のことで、よくおぼえておらぬ」
「十字兵衛、大奥勤めをしていた深雪も仲間らしいな」
「左様……。が、この女を知っているのは、染村どのか、千々輪の御後室だけ。津矢とやらいう大仁の女人足は、誰も素顔を見ていないでしょう」
「一枝はどうだ？」
「さア、一枝があの仲間にいるのですかな？」
そのとき、野良着姿の百姓女がひとり、落ち葉を詰めた籠を背負って内膳を追い越して行った。
「――ごめん下せエまし……」
女は、腰をかがめて、チラリと笑いを浮かべた。
――真弓である。
が……、誰も気付かなかった。
その頃、墨染の少将一行五人は、粕壁宿とは利根川一ツ隔てた八丁目村の不動院境内で馬を降りていた。
正しくは、新義真言京不動院総願寺……。関東三不

動の一ッで、関東山伏の司、西光坊天道が院主であった。

少将は、喜平太達を仁王門のそばに待たせて、ひとり、奥へ入って行った。

さすがに境内は広く、正面の不動堂の前には、みごとな黄銅の大燈籠が二対並び、見るからに時を経た古碑がいくつかたっていた。

梅の古木が多く、既に、蕾がふくらんでいる……。

そう言えば、元日は明後日に迫っていた。

「――お願い申す……」

方丈の入口に立って少将がそう言うと、殆んど同時にガラリと格子戸があいて、痩せた老山伏が姿を現わした。

「みえたか、少将どの……」

そう言う声は厳しく、老人ながら眼光は鋭かった。

「院主どのか？」

「左様、わしが、西光坊天道じゃ」

「わしは――」

「待たれい！」

西光坊は、大きな珠数を握った手をあげて、少将の言葉を押えた。

「何も聞かずともよい。万事、神卜仙女から頼まれている。お宿いたそう。いくたりじゃな？」

「男女五人……」

「よろしい……。おいでなされい」

「では、供のものを呼びまする」

「いやいや、弟子に迎えさせる。まず、少将どのはお通りなされい。御案内いたそう……」

西光坊は、一歩一歩を踏みしめるような足取りで、長い廊下を渡り、少将を客殿へみちびいて行った。

「わしは、ここまで……。あとは、御自由になされい……。後ほど、茶など参らせよう」

「お手数かけまする……」

丁寧に礼を述べる少将を、西光坊は鋭い眼でジッと見ていたが、やがて、ニンマリ笑いを浮かべると、廊下を方丈の方へ戻って行った。

と……、スルスルスルッと、廊下に面した障子があいた。

そこに、鳥追い姿の女がひとり、両手をついていた。――真弓である。

「そなた、待っていたのか？」

「はい……。御前、お手をどうなさいました？」

「撃たれたのじゃ、鉄砲に」

「まア……。何者の仕業でございます？」

「黒太夫じゃ」

「おう、あの傀儡師が……。憎いやつ！　わたしが、必ず黒太夫を斬ります」

「ハハハ……、雑魚じゃ、黒太夫など、物の数ではない。それより、今後の方策は？」

「はい、御前……。大魚は、既に網に入ったも同様でございます……」

真弓はひと膝乗り出すと、ふところから一枚の絵図をとり出した。

「ただいま、宇都宮の城内では、将軍家日光御社参に備え、お宿舎仮御殿の新築を急いでおります。これが、その図面でございます」

そう言って、真弓は絵図を拡げた。

「御休息の間、御寝の間、お湯殿、それから、とのいの間となっております。このお湯殿に、釣り天井が仕掛けられます」

「どうして、それがわかる？」

「ご覧下さい。お湯殿の柱は、他のお部屋の倍の太さの材木を使うようになっております。五十貫近い石をのせた釣り天井をささえるために違いありません」

「なる程……」

「また、とのいの間が、お湯殿から一番遠く、廊下廊下に、いりようもない扉が幾個所もつけられています。変事の際、駈けつけるとのいの方々の働きを遅らせる計画と見られます」

「大工共は、それを承知で仕事をしているのか？」

「いま城内では、十五人の大工が働いております。夜は、座敷牢造りの長屋へ入れられ、厳重な見張りがつき、思うままに話も出来ぬ有様です」

「そうか……」

「ところで……、佐渡守今宵の宿、本陣高砂屋の様子も充分にさぐってあります。なお、その上に、深雪どのが下働きの下女となって、高砂屋へ入りこんでおります」

その深雪が働いている高砂屋では、あるじ彦右衛門が羽織袴で、玄関脇の砂利の上に両手をついていた。――宇都宮城主、老中本多佐渡守の行列が、いま本陣前に着いたのである。

が……、奇妙なことに、佐渡守は乗り物を出ず、駕籠のまま、家の中へはこびこまれて行った。

玄関に近い建物の蔭では、下女や下男達が六、七人すき見をしていたが、同時に首を傾げた。

「なんでエ、殿さまはお顔を見せねエじゃねエか」

「どうしたんだろ……。お加減が悪いのかしら？」

すると、ちょいと年をとった下男が、したり顔で言った——

「——いやいや、こりゃただごとでねエよ。わしは長年本陣で働き、大名のお駕籠は随分見て来たが、いまの駕籠は軽過ぎる。ありゃア、どうやら、から駕籠らしい……」

と……、その中から、ソッと離れて行く女があった。——下女に化けた深雪である。

「——から駕籠……。もしそれがまことだとすれば、佐渡守はどうしたのかしら……。用心深い佐渡守のこと、鉄砲や切り込みを恐れて、家来の姿で歩いて来たのかもしれぬ……」

深雪は、そんなことを考えながら、庭づたいに奥まった座敷へ近づいて行った。

既に陽は沈み、座敷の障子は、行燈の光に明るんでいた……。

深雪は、縁先きの植込みの蔭に身を潜めた。

と……サラリと障子があいて、大名姿の男が出て来ると、あたふたと厠へ駈けこんで行った。

あけ放した障子の間から、座敷の様子が眺められた。

——大名駕籠が置いてあった。その前に、供廻りの侍が二人あぐらをかき、何がおかしいのか、クスクスと笑っている……。

やがて、先刻の大名姿の男が、ノウノウとした表情で出て来た。

「——いやはやどうも、今日ほど困ったことはないぞ……」

すると、中の二人が大声で笑った。

「まアまア小便がつまるくらいのことは我慢しろ。どうだ、お大名になった気持ちは？」

「いやア……。どこかから鉄砲の玉が飛びこんで来はせぬかと、一日中、ヒヤヒヤものだった」

——あ——、替え玉！

深雪は、ドキッと、胸の底から突きあげられるような気がした。佞奸邪智……。いかにも本多佐渡守らしいやりかただった。

座敷の侍達の高笑いはまだ続いていた。

「しかし、われわれは十里近くを歩き続けた。貴公はお駕籠だ。文句は言うなよ」

「いやいや、この気持ちは、その身になってみねばわかるまい。拙者は歩いた方がよい。胆っ玉はちぢまる。小便は詰まる。おい、明日は貴公、お駕籠に乗ってくれ」

「ハハハ……、よっぽど困ったと見えるな。それにしても、殿はどうしていられるかなア」

「いま頃、越ヶ谷の本陣で、一献傾けておいでであろうよ」

「あー、家来はつらいものじゃ……」

深雪は、ソーッと、植込みの蔭をはなれた。

——そうだったのか。佐渡守は、行列よりひと宿遅れて来ていたのか……。

このことは至急真弓に報らさねばならぬと思った。もし……、今宵、佐渡守を狙ってこの高砂屋へ斬込みをかけるようなことがあっては、みすみす敵の術中に陥るだけのことである。

深雪は、中庭を小走りにつっ切ると、裏木戸へ近づいて行った。

「——待てッ、女……」

突然、深雪の前に立ちふさがったのは、賀来陣五郎だった。

「どこへ行く？」

「は、はい……。ちょっと、うちへ帰って来ます」

「うち？　お前は、ここの下女のようだな？」

「はい、近くの在方から、奉公に来ています。でも、兄さんが急病との報せがありましたので、おひまをいただきました」

「では……。手形を持っているか？」

「えッ!?」

「主人彦右衛門が出した手形だッ」

陣五郎は、グイッと手を差し出した。

「今宵、御老中本多佐渡守さま御逗留に相なる。明朝出発までは、一切の出入りは禁じられている筈だ。しかし、止むを得ぬ者に限り、高砂屋彦右衛門が通行の手形を出すことになっている。持っているか？」

「い、いいえ……」

伸ばしていた陣五郎の手が、突然、深雪の腕を摑んだ。

「持っておらぬようだな。取調べる。来いッ」

と、その刹那、深雪が、パッと、陣五郎の手を振り切った。

「や、おのれッ」

陣五郎が、大手を拡げて、深雪に飛びかかろうとした。

が……、突然、うッ……と呻いた陣五郎は、額を押えて、ヨロヨロッと、うしろへさがった。

「——深雪ッ！　おれだッ。早く逃げろッ」

津矢の声が聞えた。——高くめぐらした土塀の上

に、黒装束の津矢がしゃがんでいたのである。
「――曲者ッ！　曲者だぞーッ！」
陣五郎が、喚き立てた。
だが、その時には、深雪は潜り戸をくぐって、表へ飛び出していた。
「――深雪どのッ！」
別の黒装束が駈け寄って来た。
――一枝であった。
「大丈夫か？　怪我はしなかったかい？」
津矢も、土塀から飛び降りて来た。
「わたしは大丈夫？　真弓さまは!?」
「姉さまは、川向うの不動院だ」
「一大事！　佐渡守は、ここにはおりませぬ」
「でも、行列が入ったぞ」
「あれは、替え玉……。佐渡守は、越ヶ谷の本陣に泊っています」
「そうかい……。よし、おれはいまから、越ヶ谷を調べて来る……」
土塀の中が、急に騒々しくなった。
「おッ……、騒ぎ出したぞ。深雪、一枝、早く姉さまへ知らせてくれ。おれはすぐ戻ってくる……」
津矢は、既に走り出していた。

「――深雪どのッ」
一枝が深雪を促した。
熊取内膳の喚き声が、塀の中から聞えて来た――
「――油断ならぬぞッ。本陣の内外をかためろッ。十字兵衛ッ……。いや、近くの大池、新宿、川向うの八丁目村も調べるのじゃッ」
その声をうしろに聞いて、深雪と一枝は、細長い粕壁の宿を走った。
その頃、数人の若い者にとりまかれた三挺の駕籠が、江戸の方から粕壁へ入った。
が……、粕壁ではとまらず、そのまま宿を通り抜けて、杉戸の方へ走って行く。
前の駕籠には黒太夫、うしろの駕籠には千々輪のお浅、そして、中の駕籠には、町人姿の本多佐渡守が乗っていた……。
佐渡守は、裏の裏を考えていた。
策士であるだけに、佐渡守は疑い深く、誰も信じなかった。――腹心の熊取内膳や六角十字兵衛にさえも打ちあけぬことがある。
その一つが、今宵の行動だった。
――行列には替え玉を乗せ、自分は越ヶ谷に泊る……、そこまでは内膳達も知っている。

が……、佐渡守は江戸を出る時から、粕壁の一ッ手前の越ヶ谷ではなく、一ッ先きの杉戸に泊る積りだったのである。
お浅達とは、越ヶ谷の茶店で休息しているときに出会った。そこで、駕籠を三挺揃え、町人に姿を変えた近習達に護られて、粕壁を素通りし、利根川の橋を渡り、八丁目村を走り抜けた。
その八丁目の不動院……。
客殿で、三輪から傷の手当を受けていた少将が、ふッと顔をあげた。
「――三輪……、しばらく待ってくれぬか」
少将は静かに立ち上ると、障子をあけて、庭へ出た。
「――御前……」
昇天の竜のように枝を張った老梅の蔭に、真弓が片手をついていた。
「――網の中の魚が逃げました」
「佐渡守が、どうかしたのか？」
「替え玉でございました。佐渡守は、越ヶ谷に泊っております。越ヶ谷へは凡そ三里、この夜道を急いで、斬込みをかけるのは不利と考えます」
「真弓……。わしは、今宵佐渡を討とうとは思わぬ」
「え？」
「さき程、そなたが戻ってから考えた。佐渡を斬る……、それは必ずしも難しいことではない。三里や四里、夜道をかけようとも、討てぬとは思わぬ。が……、佐渡を倒すだけでは承知出来ぬ」
「勿論、熊取内膳、伊豆屋のお石も討ちます」
「いや、それだけではまだ不足じゃ。佐渡守の一族を亡ぼさねばならぬ」
「――一族を!?」
少将は、老梅の枝越しに、凍るような師走の夜空を仰いだ。
「真弓……、忘れたか。大久保石見守は、妻子まですべて、酒匂河原ではりつけとなったのじゃぞ」
「はい……。忘れませぬ」
「それに、わし達だけで討つべきではない、御鏡の八片がことごとく揃わねば……」
「それを待ってては、いつのことかわかりませぬ」
「いや……、揃う。もうすぐ揃う。わしにはそれがわかっている」
と、この時、方丈の方から、院主天道の大きな声が聞えて来た――
「――たわけッ！　関東山伏の司、この不動院を調べ

るというのかッ」
「御老中佐渡守さまのお指図だぞッ」
十字兵衛の声である。
「出直せッ。当院は勅願所じゃ。将軍たりとも、みだりな立入りは許さぬッ」

男体女体

墨染の少将は、まさに明けようとする東の空を眺めていた。
宇都宮城下の北、臼ヶ峯の頂上にある二荒山神社の境内である。
「――御前……、新しき年の夜明けですな……」
うしろに控えている喜平太が言った。
北から吹きつける帝釈おろしの寒風が、滑らかな少将の頬にピリリとしみた。
「新しき年が……。行き去った年は、波乱に富んでいたな」
「この新しき年が、御前にとってよき年でありますように……。御前、神前にお進みになりませぬか」
「待て、喜平太……。わしはいま、初日の出を眺めながら考えた。――神仏には祈らぬ。わしは、わしの運命を、わしの自らの手で拓いて行く。これが、元朝に於けるわしの決意じゃ」
「しかし、人力に限りがあります」
「わしの力に限りがある如く、佐渡守の力にも限りがある筈。恐れることはない」
「でも――」
「喜平太……。わしをひとりにしておいてくれぬか……」
少将は、喜平太から離れて、境内のはずれに出た。
眼をめぐらせば、北に、日光連山の主峰男体山が聳え、さしのぼった初日の光を受けて、雪に包まれた頂上が金色に輝いている。
その手前に望まれるなだらかな峰は女体山であろう。
少将は、男体の峰をしばらく眺めていたが、やがて、胸一ぱいに冷やかな空気を吸いこむと、クルリと体を廻した。
南に宇都宮城の天守閣が聳えている。――そこに、本多佐渡守がいるのだ。
「――佐渡守よ……。近く雌雄を決しようぞ。城廓をめぐらし、家臣にとりまかれた佐渡守が強いか、太刀一本の墨染の少将が強いか。人力の限りをためして見

ようぞ」
少将はまなじりを決して天守閣を睨んだ。
ちょうどその頃、佐渡守も天守閣から東の空を見渡していた。
「――内膳……。内膳……」
佐渡守の声に、熊取内膳が階段をのぼって来た。
「お呼びでございましたか？」
「初日が昇ったぞ」
「昇りました。めでたき年の夜明けでございますなア」
「今年こそ、念願のかなう年じゃ」
「左様……。あとひと月もしますと、家光将軍は当城に新築の仮御殿で血へどを吐いて横死……。駿府の忠長卿が四代将軍の座におつきになります。さすれば、殿はさし当って、大老職でございますな」
「そのためには、神々の加護を祈願いたさねばならぬぞ」
「はい、既に、臼ヶ峯の二荒山神社へは、殿の御名代として十字兵衛をさし向けました」
「十字兵衛には、奉納金を持たせてやったか？」
「はい……。例年は年頭小判五枚の奉納ですが、本年は殿にとって大事の年ゆえ、ズンとはずみました。小判十枚に羽二重五ッ巻を持たせました」
「よかろう……」
佐渡守は、二荒山神社の方角へ向って、ポンポンとかしわ手を打って眼を閉じた。
「八百万の神々、別しては当所二荒山の大神、なにとぞ忠長卿を以って、四代将軍の座につかしめたまえ。この大願、本年こそ成就なさしめたまえ……」
墨染の少将が独力、身を捨てて人間の力の限りを試そうと決意したとき、佐渡守は悲願達成を神仏に念じていたのである。
その代参の使者となった十字兵衛は、珍しく袴姿で、供の中間に奉納金と羽二重を納めた白木の箱をさし担いにさせ、臼ヶ峯の麓へかかっていた。
が……、一の鳥居を眺めるところへ来ると、突然――
「――木野ッ……」
のどの奥で叫んで、足を止めた。
鳥居の前に、女が三人立っていたのである。――木野と佐渡の千里……。あとのひとりは、大日坂から少将について来た三輪だが、十字兵衛は知らなかった。
「――隠れろっ……」
十字兵衛は、箱を担いだ中間にそういうと、自分も、参道の桜の木の蔭へ飛び込んだ。

そのとき、高い石段の上に、少将と喜平太の姿があらわれた。

「――やっぱり！　やっぱり御城下へ入りこんでいたな……」

十字兵衛は、桜林の中から、少将の姿を睨んだ。

が……、少将が容易ならぬ剣法者であることはよく知っている。

その上、喜平太と木野がいる。千里も、かなりな使い手である。この四人を相手に廻して勝てる自信はなかった。

「おいッ……」

十字兵衛は、中間のひとりを振返った。

「大急ぎで人数を集めてこい。おれのお長屋へ行って、賀来陣五郎も呼んで来るのだ。急げッ」

その頃から、二荒山神社は急ににぎやかになって来た。――初詣での町人百姓が、城下や近在から集まって来たのである。

少将は、喜平太や女達を供にして、その人ごみの中をわけて行く。

「――お前はここにいて、人数が来たら、わしのことをおしえてやれ」

残った中間にそういうと、十字兵衛は少将のあとを追った。

少将は、西の方へ向っている。

小伝馬町、新石町を過ぎると、すでに城下はずれである。

やがて、少将達は塩谷村へ入って行った。

途端に、十字兵衛の顔色がサッと変った。

塩谷村は、宇都宮近在の村としては大きな方であった。

が……、格別、とりたてていうほどの村ではない。

近在のどこでもみかけるありふれた村である。

しかし、この村に墨染の少将が入って行くと同時に六角十字兵衛の顔色が変ったのには、大変なわけがあったのである。

いま、宇都宮城内では、日に夜をつぎ、暮れも正月もなく、将軍家日光社参の折りに使う仮御殿の新築が急がれていた。

この仮御殿の御湯殿は、釣り天井である。

領内から集められた十五人の大工は、城中のお小屋へとめられ、外出は禁じられている。いずれ、仮御殿が出来上れば、一人残らず命を奪われることになるであろう……。

十五人のうち、十四人までは、親兄弟身寄りのない

ものばかりであった。しかし、棟梁ともなれば、年配からいっても、ひとりものというのはいない……。

仮御殿造営の棟梁は、与五郎という男であった。

――これが塩谷村うまれで、妻子が村にいる……。

「――少将のやつ……。なぜ塩谷村へ行くのだろう……。まさか、与五郎のことを知っているわけではあるまいが……」

それでも十字兵衛は、いつか息をはずませていた。

万一、少将が与五郎のことを知り、その妻子に接近しているとすると、これは一大事である。

「――よッ……」

更に少将のあとを追っていた十字兵衛は、思わず驚きの声をあげた。

喜平太はじめ、木野達三人を連れた少将が、塩谷村の庄屋藤左衛門の家へ入って行ったのである。

しかも、出迎えた下男達は、――おかえりなさいませ……といっている。

「――糞ッ……。あいつら、塩谷村へかくれていやがったのかッ……」

十字兵衛は、スーッと大きく息を吸いこむと、急いで、いま来た道を引返した。――勿論、人数を揃え、庄屋の家を取り囲んで、一挙に少将達の命を奪う積りである。

ところが、この帰り道に、思いがけぬ敵が待っていた。

十字兵衛が、城下町と塩谷村のまん中頃にさしかかったとき、傍らの稲むらから、ヌッと現われて、道をふさいだのは、火事装束に顔を包んだ男だった。

「――六角十字兵衛どのですな……」

火事装束の男が、静かにいった。

「なんだ、貴様はッ」

「御存知であろう……。佐渡以来、墨染の少将の身辺を守護いたす、火事装束五人組を」

「それがどうしたッ」

「お命、頂戴いたしましょうかな」

火事装束の男は、飽く迄静かな声でそういうと、スラリと、刀を抜いた。

と、同時に、バラバラッと十字兵衛をとりまいたのは、同じ装束の男四人であった。

「――誰だと思うッ、六角十字兵衛だぞッ」

十字兵衛は、腰をひねって、隻腕の左手に刀を抜くと、ピタリと片手無双に構えた。

が……、火事装束五人組の陣立てを見た十字兵衛は、ハッと、胸の中で驚きの声をあげていた。

グルリと取り巻いた五人は、ジリッ……と、左へ廻って行く……。かと思うと、スーッと右へ廻る。

敵は、ジーッと十字兵衛を見詰めて動いているのだが、十字兵衛は、次ぎ次ぎに変る相手を睨まねばならない。

もし、ひとりの敵から眼を離すまいとすると、自分が、体を廻さねばならないのだ。

しかも、火事装束五人組の動きには、変化があった。一二三と左へ寄って、一二と、右へ戻る。また一二三と左へ寄ったから、右へ戻るかと思うとそうでない。そのまま、四五と左へ廻り続け、ヒョイと一歩右へ戻る。

まるで、踊りの足どりのように、格調があって、変化に富み、それが熟練した踊り手のように一糸乱れず、五人の足さばきが揃っている。

「――おのれッ！　甲州流渦紋の陣立だなッ」

「ほう、おみごと……。よう御存知だなア」

五人組の一人が、動きながら、応えた。

「いずれ、貴公は、わしらの渦の中へ巻き込まれることになる」

「ぬかせッ！」

十字兵衛は、手負い猪のように、火事装束のひとりに斬り込んで行った。

サッと、渦巻きの一角が崩れる。

次ぎの瞬間、十字兵衛は、ダーッと、城下町の方へ走っていた。

――これ以外に、助かる手段はなかったのである。

――いかん！　容易ならぬ相手だ。一人では、とても勝てぬ……。

剣に生きる十字兵衛は、早くも、相手のてなみを読みとっていたのだ。

が、十字兵衛は、思うように走れなかった。――美女谷で津矢に撃たれた足が、自由に動かなかったのである。

「――見苦しいぞ、十字兵衛ッ」

火事装束の一人が叫んだ。

「糞ッ！　命あってのもの種だッ」

十字兵衛は、隻手に刀を握ったまま、転がるように走った。

「待ていッ！　勝負せいッ」

五人組が、あとを追ってくる。

あと四五丁……。城下へ入れば助かる……。十字兵衛は、必死だった。

だが……、更に、意外な敵が、十字兵衛の前に現わ

れた。

道をふさいで、四人の黒装束が、同じように腕を組み、足をふんばって立っていたのである。

「――待ってたぜ、十字兵衛……」

そう言ったのは、津矢であった。

「――元日早々、お前を斬れるなんて、今年は縁起のいい年だ……」

「――うぬ等、みな殺しだぞ――ッ！」

十字兵衛が狂人のように喚いた。――もはや剣客としての自信と落付きは完全に失われていたのである。

火事装束五人組と黒装束の女四人……。その何れもが強敵であることをよく知っていた。

しかし、悲しいことに、十字兵衛は隻腕であったし、佐渡守の代参であるため身動きの不自由な裃姿である。

――駄目だ……。

そう考えると、不敵な十字兵衛も眼先きがまっ暗になった。

「――とーッ！」

津矢が、まっ先きに飛び込んで来た。

「けーい！」

津矢の刃を、十字兵衛は本能的に払いのけていた。

が……、次ぎの瞬間、十字兵衛は、チカッと背筋に電光の走るのを感じた。

「――覚えたかッ！」

叫んだのは真弓であった。

十字兵衛の裃はサックリ背中が切り裂かれ、プーッと血をしぶいていた。

「――糞ッ、糞ッ、糞ッ……」

十字兵衛は、左手に握った刀を、めくら滅法に振り廻した。

数呼吸のうちに、更に幾太刀かが十字兵衛の体へ血を吹かしていた。

切り込んだのは、全て真弓、津矢、深雪、一枝の四人である。火事装束五人組は、真弓達を護るように、遠巻きにしていた。

が……、火事装束の一人が叫んだ。

「……それまでッ！　ひけッ……、加勢のものが来たぞッ……」

宇都宮の城下はずれに、二三十人の人影が見えたのである。

「ひけッ！　ひけッ！　充分じゃッ。命はあるまい。助かっても二度と刀は持てまいッ」

その声に、真弓達は、サッと、刀をおさめてかたま

った。
「――いずれのおひとかッ？」
真弓が、火事装束にたずねた。
「そなた達は名乗るか？」
「わたくし達は、仔細があって――」
「名乗れまい。わし達も名乗れぬ。いずれ、遠からずわかることであろう。助勢が近づいたぞ。別れよう。さらばじゃ」
「おさらばッ……」
火事装束五人と黒装束四人は、パッと左右に別れた。
残された十字兵衛は、全身に血潮を浴びながらも、ユラユラと、風に煽られる大木のように体をゆるがせていたが、やがて、ドサッと、俯伏せにぶッ倒れた。
「おッ！　十字兵衛どッ」
「いけね！　こいつアひでエや……」
まっ先きに駈けつけた賀来陣五郎と傀儡師の黒太夫が、殆んど同時に叫んだ。
「――シ……、し……、塩ッ……」
十字兵衛は、塩谷村に少将がいると言いたかったのだ。が、言えなかった……。
四半刻の後、半死半生の十字兵衛は、戸板で城下の本道外科医上尾道針の家へ担ぎこまれていた。
「――どうだ、助かるか？」
駈けつけた熊取内膳が道針にたずねた。
「傷が多い割りに、いずれも急所をそれております。問題は、出血の多いことで、全快されるとは請けあいかねますな」
道針は、手当をしながら、そう答えた。
「陣五郎、黒太夫、十字兵衛が、何か言わなかったか？」
「は……、確か、塩……と」
「塩!?　はて……あれは、塩谷村への道であったな」
すると、黒太夫が、かぶりを振った。
「いやいや、六角さんが言ったなア、塩じゃねエ。少……ですよ」
「少……将……と、言いかけたと言うのか？」
「そうですよ。塩だの、塩谷村だのって、六角さんになんのかかわりもねエじゃありませんか。中間の話じゃ二荒山神社の前から六角さんが追っかけたなア、確かに少将でさア」
「うム……、或はそうかもしれぬ。そこで、大事をとって、塩谷村に少将が潜んでいる……と考えてはどうじゃ」

「なる程、あっしが、さぐって来ましょうか」
その頃、少将は旅装をととのえ、庄屋藤左衛門に送られて、塩谷村を離れようとしていた。
「――御前、どうしてもおたちでございますか？　本日は元旦、明日になさいましては？」
「いや、元旦なればこそ思い立ったのじゃ。近々に戻って来る。止めてくれるな」
「必ず、お戻り下さいますか？」
「戻らずには済まされぬのじゃ。そのときは頼むぞ」
少将は、藤左衛門に別れると、喜平太達をつれて、宇都宮の城下とは反対の、日光街道へ足を向けた。
「――御前……、六角十字兵衛らしいものが斬られたとの噂、お聞きになりましたな？」
「うム、庄屋宅の下男達の話が耳に入った」
「十字兵衛が斬られたとなると、熊取内膳が必ずさぐりの手を塩谷村へのばす。それで、急におたちになりましたな」
「それもある……。が、それは、塩谷村を離れる本来の理由ではない……。喜平太、そなた、城下の旅籠立花屋へ行ってくれぬか」
「あの四人へのお使者でございますか？」
「うム……、わしが、華厳の滝で待っていると伝えてくれ」
「承知しました。では、あとから追いかけます」
喜平太は、宇都宮城下へ急いだ。――その同じ道を、傀儡師の黒太夫が塩谷村へ向っているのだが、神ならぬ身の、少将も喜平太も知らなかった。
少将は、木野、千里、三輪の三人をつれて日光街道に入り、遙かに男体山を仰ぐと、小声でひとりごとをつぶやいた――。
「男体山、女体山……。これぞわしの姿か……」

非情の鬼

宇都宮城下相生町の商人宿立花屋の一室で、喜平太はいらいらと、真弓の帰りを待っていた。
「――正月はあの女衆の稼ぎどき、帰りはいつのことやらわかりませんよ……」
宿屋の女中はそう言ったが、使いの役目を果たさずに少将のあとを追うわけにはいかなかった。
天井にも壁にも、雨もりのあとがしみ込んだ薄汚い部屋であった。畳も、たばこや炭火の焼けこげの跡が多く、見るからに寒々としている。
僅かに、壁にひっかけた紅裏の袢天が二枚……。深

雪か一枝のものであろうが、いかにも女旅芸人の持ち物らしく、艶めかしかった。——真弓達四人は、例によって、鳥追い女になり澄ましていたのである。さき程出された番茶は、もうすっかり冷え切っていた。

そう言えば、この部屋には火の気がない。——宿泊人ではない喜平太には、火鉢も出してくれなかった。それでも、女中が、おずおずと、二度目の茶を持って来た。

「——熱いのを持って参りましたよ。どうぞおひとつ……」

「かもうてくれるな。あの女達は、どの方面に行っているであろう」

「さア……、河原町辺りでしょう」

「河原町と言うと？」

「あのう……、廓ですよ」

そう言って、こそこそと出て行こうとした女中を、喜平太が呼び止めた。

「その河原町とやらへ行けば、会えるであろうか？」

「わかりませんねエ」

「廓とすると、昼間はそれほど人は通っておるまい」

「でも、鳥追いは、あの衆だけではありませんもの……」

「困ったな……」

「どうぞ、お茶を召し上って下さい」

そう言う女中の態度には、初めのときと何かしら変ったものがあったが、苛立っている喜平太は気付かなかった。

「——済まぬが、筆と紙を貸してくれぬか」

「ちょっと、待って下さい……」

喜平太は、女中が出て行ってから、熱い番茶をひと息に呑んだ。

しばらくして、女中が、すずり箱と紙を置いて、早早に立ち去って行った。

「——不愛想な女中だ……」

喜平太は、そんなことを考えながら、紙に筆を走らせた。

——華厳の滝のほとり、待人あり、天……。

そう書き終ったとき、喜平太は、突然めまいを感じた。

——あー、あの茶には毒が……。

そうと気付いたが、もう動けなかった。

その時、となりの部屋との境いの襖がスッ……と、開かれた。

「——これはしもうた……」

次ぎの部屋から姿を現わしたのは、虚無僧姿の香月紋之助であった。

「——わしがわかるか？」

紋之助は、喜平太を抱えるようにして、顔をのぞきこんだが、喜平太はもう、答える気力すら失っていた。

「苦しいか？」

喜平太がかすかに首を振った。——それがせい一ばいの残された力だったらしい。

「——大丈夫だ。毒薬ではない。麻薬じゃ。一刻中か二刻で薬は消えよう……」

喜平太の脈を見ながらそう言った紋之助がふッと、顔をあげた。——忍び足で近づく人の気配を感じたのである。

「——安心せい。わしが引きうけた……」

紋之助は、喜平太が書いた紙きれを手の内に握ると、ツイッと、となりの部屋へ戻って襖を閉めた。

その直後、ソーッと、うしろの障子をあけて、黒太夫が顔を出した。

「——しめたぞ。陣五郎さん……。土左衛門のように伸びてまさア」

とたんに、大勢の足音が乱れ、狭い部屋に、七、八人の侍がなだれこんで来た。——先頭に立っているのが賀来陣五郎である。

「——これはまずかったぞ……」

陣五郎は、置いてある紙を見て舌打ちをした。

「こいつめ、置き手紙を書く前に倒れてしもうたようじゃ」

「なアに、御城内の土牢に閉じこめて拷問にかけりゃ、カエルのようにはらわたまで吐き出してしまいまさア。……さ、戸板で運びやしょう」

「そうだ。人数をわけよう。五、六人で、この男を運んで行け。あとのものはここに潜んで、喜平太が会いに来た鳥追いとやらを待とう」

「それが、黒装束の女共の正体でやしょうな。ふン、今度こそアとッ捕めエてやる。糞ッ、裸にひんむいて、御城下を四ツンばいで歩かしてやらなきゃ腹がいえねエ」

ところが、旅籠立花屋のただならぬ様子を、相生町の町角に隠れて、真弓と深雪が見ていた。

「——宿は、囲まれているようです……」

「黒太夫と陣五郎……。どうしてここを嗅ぎつけたのか……」

「津矢どのと一枝どのへ報らさねばなりませぬな」
「河原町を流している筈です。急いで報らせてやってください」
「真弓さまは？」
「しばらく様子をさぐり、塩谷村へ行きます。集まる場所は大工の棟梁与五郎の家……」
その頃、立花屋を抜け出した香月紋之助は、天蓋に顔をかくして、河原町の廓へ入って行った。——真弓達をさがすためである。
が、津矢の方が先きに、紋之助に気付いた。
「——おい、隠れろ、一枝……。あの虚無僧は見覚えがある。おれ達の敵だ……」
津矢は、一枝に事情を話した——
「——あの虚無僧、悪い野郎なんだ。トンビみたいなやつだぜ」
「トンビ？」
「そうだよ。トンビに油揚っていうだろう。おれ達が命がけで闘っていると、あいつが横から出て来てヒョイッとさらって行きやがる」
「何を？」
「おれもよく知らないよ。が、姉さまが、とても口惜しがってたから、よっぽどだいじなものに違いないんだ」
津矢は、伊豆の下田で奪い返すことの出来なかった山神図絵のことを言っていたのである。
「真弓さまでも勝てぬ相手ですか？」
「なアに、普通だったら、おれひとりだって勝てるさ。ところがあいつ、危くなると、おかしな火薬弾をなげつけやがる……」
「佐渡守の隠密と違うでしょうか？」
津矢は、ちょいと首を傾げた。
「いや……、そうじゃないよ。この前は蔵前の大松院前で、少将は千住にいるとおしえてくれたこともある」
「では、敵ではないのでしょう」
「わからんよ……。とにかく、油断のならないやつさ」
そんな話が、すぐ近くでささやかれていることに、香月紋之助は気付かなかった。
「——こりゃまずい……。真弓達への伝言はあとまわしとして、少将に喜平太のことを報らせてやらねばなるまい……」
そう考えた紋之助は、河原町から伝馬町を抜けて、塩谷村へ通じる街道へ出た。

塩谷村を通り過ぎると日光街道へ出る。それから今市、日光と通って、華厳の滝へ行く積りなのである。
津矢と一枝が、見えかくれに、そのあとを追った。
「——津矢……。津矢どの、一枝どの……」
伝馬町近くで、スッと、もうひとりの鳥追い——深雪が近づいて行った。
「あ……、深雪……。あの虚無僧を見つけたぜ」
「おう！　伊豆の虚無僧！」
「うン……、あいつ、どこへ行くんだろう」
「それどころではありませんよ。立花屋は、陣五郎、黒太夫始め、佐渡守の家来大勢からとりまかれていますよ」
「糞ッ！　嗅ぎつけやがったか……。十字兵衛を斬ったからカン付いたんだな。姉さまはどうした？」
「塩谷村の棟梁、与五郎どのの家へ集まれといわれました」
「深雪！」
津矢が、深雪と一枝を見て、前を行く香月紋之助を指さした。
「——おい、あいつ塩谷村の方へ行くぜ……」
その頃、がんじがらめに縛り上げられた喜平太は、天守閣裏に掘られた穴牢へ放りこまれていた。
——深さ凡そ十五、六尺、上には頑丈な格子がはめられていた……。
神ならぬ身の少将は、宇都宮での出来事など、知る由もなかった。
「——御前、喜平太どのは、遅うございますな」
今市近くになって、木野が少将にそういった。
「木野は、先きほどから、うしろばかり気にしているようじゃな」
「いいえ、そんなことはございません」
「そうかな。……実は、わしも気になっていたのじゃ」
「では、わたくしが引返して、見て参りましょうか？」
そう言う木野の顔には、喜平太に対する思いがこめられていた。
「あの武骨者の喜平太め、木野からこれほど慕われるとは幸せなやつじゃ」
「御前！」
「おこったのか？」
「いいえ……。でも、困ります」
「いまのは冗談じゃ」
少将は、傍らの並木の杉の蔭に風を避けた。

からりと晴れたよい元日ではあったが、男体颪は肌を刺して冷たかった。

「木野……、二ツのことが考えられるのじゃ。一ツは、わしが使いにやった相手が戻らぬため、喜平太は待っている……」

「そうであればよいと思いまする」

「もう一ツは、最悪の場合じゃ」

「わたくしも、それを心配しているのです。十字兵衛は傷ついた模様ですけど、まだ喜平太どのを知っているのに、熊取内膳始め、黒太夫、賀来陣五郎などがいます。御前、行ってもよいでしょうか？」

「いかんな……」

「見殺しになさるのですか？」

「万一、喜平太が敵の術中に陥ったとすれば、敵は必ず第二段の構えを布いて、わしが行くのを待っている」

「ですから、わたしが行くのです」

「木野の顔は、みんなに知られている」

「知られていても構いません」

「そうはいかぬ。三輪がよいかも知れぬな」

少将が言うと、木野はムキになって、

「いいえ、わたくしをやらせて下さい。どうせ敵地に入り込むのですから、顔を知られてなくともおなじことです。忍びの術でまいればきっと喜平太どのに会えると存じます」

「会いたいか――」

すると、木野は眼をうるませて、

「わたくしの手で喜平太どのはお救いしたいのです」

と言った。

「なるほど」

少将はうなずいた。喜平太が捕われているとすれば、それを誰よりも木野は自分の手で救い出したいのにちがいなかった。木野が言うように、甲賀の忍びの手をもちうれば、喜平太に近づくことはさして難事ではないのだろう。

千里にしても三輪にしても、また深雪とか津矢にしても大なり小なり甲賀流はわきまえているはずである。

香月紋之助の師、香月流雲斎の息が、大久保石見守の遺臣には伝わっているはずであった。しかし、そのなかでも少将の見るところでは、香月紋之助に育てられた木野が一番術をきわめているようであった。

「では、木野に行ってもらおう。必ず無理をするではないぞ。様子をわしに報らせてくれるのが、そなたの

役目なのだ」

少将は、恋する男の許へ一刻も早く行きたがっている木野の一途さが、ふとあわれであった。

「おれも行こう」

津矢が木野について来た。

「わたくしひとりで行きます。ひとりの方がやはり敵に目だたないでしょう」

木野は喜平太と会うことを思うと、なるべく自分ひとりで行きたかった。男まさりの津矢について来られるのは厭だった。

「だってお前――」

と、津矢は一向に足をとめそうもなく、

「御前に報らせるのに、おれが必要じゃないか。ひとりでは困るぜ」

そう言われればその通りだった。

「では、一緒に行っていただくわ」

木野はちょっとベソをかく顔で足をはやめた。

すると、木野達の前方五、六間のところを、見おぼえのある虚無僧姿の男が横道にそれて行くのが見えた。

「おッ、あの虚無僧だ！」

津矢が言った。二人はそのまま虚無僧のあとをつけて行った。まるで飛脚のような早い虚無僧の足どりだった。

塩谷村から日光裏街道を、野沢、小池、大沢と辿って今市まで――いつのまにか二人は虚無僧のあとをつけて六里近い道をあるいていた。

「いったい、どこまで行くつもりでしょう？」

木野がなかばうんざりして言うと、

「おれひとりがつけてもいいぜ」

津矢が言った。

「でも、喜平太どのの様子をさぐるにしても、どうせこの方向ですもの」

木野は虚無僧のことより、いまは喜平太のことだけしか頭になかった。

と、三ツ辻のところに来て、不意に虚無僧が足をとめた。それから、ゆっくり振り返ると、

「おふたり、御苦労だな」

と言った。

「ゲッ、おれらのつけているのを知っておったのか」

津矢はもう戦闘態勢をとって、

「やい、虚無僧、どこへ行くつもりなンだ」

「まあまあ、いまはケンカをしているばあいではないぞ、実は喜平太どのが毒を……」

「城内へ――？」
「そうです。今夜をおいて、外の日では忍びこめません。見張りのきびしい城内も、今日だけは正月の祝い酒に酔いしれているでしょう……。仮御殿の絵図面は、どうしても手に入れなければならない。それに、喜平太どのも、城内で捕われの身となっておられるはず――」
「はい。でも、絵図面を、大工の与五郎棟梁が用意しておいてくれるでしょうか」
「与五郎どののおかみさんが、わたしの文を手渡してくれることが出来さえしたら……」

からくり絵図

その与五郎の女房は、城内仮御殿作事場の近くで、面やつれした夫与五郎と会っていた。
与五郎達大工一同は、仕事が始まって以来一日も帰されていない。
が、今日は元日、唯一人の家族持ちである与五郎は、久振りに女房との面会を許されたのである。
――だが、厳重な見張り付き……夫婦は、ただジッと顔を見合せているだけであった。

「ええッ！」
「飲まされたが命に別条はないのだ」
「ど、どこにおります！」
「城下の旅籠でな……何しろ、そこを大勢で取りかこまれ、あの大の男をはこぶことも出来なかったのだ」
「では、やっぱり捕われたのですね！」
木野は、真蒼になった。
その頃――
宇都宮城内では、本多佐渡守が苛立たしげに、こめかみに真田紐のような血管を浮き上らせていた。
「内膳！　まだ四人組の黒装束は見つからぬのかッ」
「はア……、どうも、本年は、殿お国入りとあって、正月の遊芸人が諸方から御城下へ入り込み、鳥追いの数も大変多うございまして……なかなか、それらしい女がみつかりませぬ」
「ひとり残らず、鳥追い女どもを牢舎へぶち込めッ。その中に、黒装束のやつ等も必ず混っているにちがいない」
しかし、現実には、虎の威をかりる目明しや捕方達は、牢獄へつなぐよりももっとひどいことをしていた。
宇都宮の城下を流す鳥追い女は、片っ端から捕まえられ、番所へ引っ立てられていた。しかも、番所では、表戸をしめ切った中で、女達は殆ど丸裸にひんむかれていたのだった。
鳥追い女の着付けには、きまった形があった。――帯を、腰から胸もとまで巻きあげているため、体をまげることが出来ないくらいである。このため、柳腰の粋な鳥追い姿が生れて来たのだが、目明し達は、この帯をクルクルと解かせ、ニヤニヤしていたのだ。
かれらに言わせれば、女達に身許を白状させるための一種の拷問ということなのであろう。が、実は、居蘇機嫌の目明しどもが、おのれの色好みの目をたのしませていただけのことだった。
一方真弓は――城下の鳥追い女達が、自分達のためにこんなひどい目に会っているとも知らず、その頃、津矢と別れた木野と二人で、大工の棟梁与五郎の家に入り込んでいた。
津矢はまだ虚無僧が怪しいと言って、荒っぽい言葉を浴びせながら彼のあとを追って行った。
真弓は、喜平太のことをしきりに案じている木野に言った。
「わたくしたちは、宇都宮でしなければならぬことがありますよ。いよいよ、城内へ忍びこむのです」

「――ご安心下さいませ。お手紙は確かに与五郎の手に入った筈ですから……」
六ツ近くになって塩谷村へ戻って来た棟梁与五郎の女房お早は、真弓にこう言った。
「与五郎どのはお達者でしたか？」
「いいえ、見るかげもなくやつれておりました」
「城内でのとり扱いがひどいのですか？」
「仕事のためだと申しておりました。公方さまお泊りの御殿をこしらえるのは大工冥利、骨身をけずっても一世一代の仕事をするのだと申しておりました」
「どんなお仕事かわかりますか？」
「いいえ……。与五郎はなにも申しません。そばにお作事のお役人が付いておいでしたから、言えなかったのでしょう」
「それで、よく手紙が渡せましたねエ」
「渡したのではありません。落して来たのです」
与五郎とお早が、交す言葉も少なく、ただじっと顔を見合せていると、見張りに付いていた作事方が――もうよかろう……と、お早を促した。
「有難うございました。帰らせて頂きます」
「御門まで送ってやる。ついて来い」
作事方が先きに立って歩きだした。

――真弓からの手紙を手渡しなどしていて、見付かっては一大事……、そう考えたお早は、ソッと手紙を足許に落して、作事方のあとについて行った……と言うのである。

「お早さん、あなた、与五郎どのの言葉を信じますか？　一世一代のお仕事とやらを？」

「信じるものですか！　本当に仕事に打ちこんでいるなら、顔はやつれても、眼が光っているはずです。与五郎の眼には、涙が浮かんでおりました」

そういうお早の頬を、スーッと、涙の糸が光った。

「与五郎は、覚悟しているのです。与五郎ももとは大久保石見守さまのお供をして、気風の荒い伊豆、佐渡を歩き廻った金山大工、度胸は出来ております」

「与五郎どのをむざむざ死なせるようなことはしませんよ」

その夜――

「真弓さま、津矢どのは大丈夫でしょうか？」

「心配はいらないでしょう」

「でも……荒っぽいから何をするか知れません。あの虚無僧がわたくし達と争う気がないことを言っても、承知しないで、つけて行きましたもの」

「まあ、津矢が仕かけても、相手にはしないでしょう。津矢などが勝てる相手ではありません」

「それで、宇都宮城へはいつ入り込むのです」

と、木野はさすがに蒼い顔をして言った。

「今夜、……わたし達二人で入り込みましょう」

四ツ（十時）……元日の夜の城下町は、すでに寝静まっていた。黒装束の真弓と木野は、宇都宮の濠端に立っていた。

「――考えたとおりですよ……」

真弓が木野にささやいた。

「辻番所は、油障子をしめ、夜廻りの火の番は、姿も見せません。早やばやと、初夢でも見ているのでしょう」

「でも……」

「でも何です？」

「城内はそうはいかないと思います。天下を狙う大事をたくらむからには、油断も隙もなく……喜平太どのはもう殺されたのかも知れませぬ」

「喜平太どののことだけが心配のようね」

「いいえ、でも……」

と、木野はガタガタ慄え出していた。グーッと濠の上にはり出した松が枝越しに、天守が、黒々とそびえている。

真弓と木野は、土堤をおりて、濠の水際に立つと、背中にしていた丸い板をおろして、それを両足に一つずつつけた。――甲賀流忍者が用いる水行足。……つまり、水の上を歩く下駄であった。

二人は、静かに濠の水を踏み渡って石垣に辿りつくと、刀を背中にくくりつけて、よじのぼりはじめた。

しばらくして――

「ごらん。木野どの……城内も静まり返っている。無理もない……正月じゃもの」

真弓が、自分の言葉にクスリと笑って、

「仮御殿の釣り天井絵図が手に入れば、佐渡守陰謀の動かぬ証拠……。佐渡守の首根ッ子を押えたも同じことじゃ」

「仮御殿の作事場は、天守の裏側と言うことでしたが――」

「与五郎どのが待ちかねていよう」

その与五郎が、作事場に近い大工宿舎で、薄ッペラな布団をかぶり、真弓の来るのを待っていた。――宿舎と言っても、牢座敷のような格子造りである。

いつもは、寝ずの番人が見張っているのだが、さすがに今宵は番人の姿が見えない。

「――俺達十五人の大工は、多分、仮御殿が出来上り次第斬られることだろう……。が、誰が糞、むざむざと死ぬものか。釣り天井のからくり絵図を真弓とやらいう女に渡しゃ、宇都宮十五万五千石がひっくり返るのだ……」

与五郎は、布団の中で大きな眼を開き、そんなことを考えていた。

ところで、天守閣の最上階にも、起きている人間が二人いた。――千々輪の後家お浅と黒太夫である……。

「――落付いた、よいお城下……」

お浅が、ひとりごとのように言った。

「北の小江戸と言いましてな。北関東随一の城下町ですわい。へへへ……、佐渡さまの気持ちが、わかるような気がするでしょう」

「気持ちがわかるとはえ？」

お浅が、黒太夫へ視線を向けた。

燈火のない天守の最上階である。うるしのような闇……。が、それも、眼が馴れたいまは、狭間から流れ込む星の光に、ボンヤリ、醜怪な黒太夫の姿が見えた。

「その昔、平の将門は、四明ヶ岳に登って京の都を眺め、天下を狙う大悪心をわきあがらせたと言いますな。佐渡さまにしても、この天守から江戸に似た宇都

宮の町を見降していると……」
「でも佐渡さまは、御自分が将軍になりたいのではなく、忠長卿のために――」
「同じようなものですわい。忠長さまが四代将軍になれば、佐渡さまは太鼓判大老職……。忠長さまは人形みたいなもの、天下の実権は佐渡さまの手に入るというもの……」
「そうなると、黒太夫どの。……そなたは、どういう身分になるのじゃえ？」
「へへへ……。さてと……」
闇の中で、黒太夫がペロリと舌なめずりをした。
「全ては、お浅さまのお考え次第」
「ほう……、わたしが言うとおりにおしかえ」
「左様々々、お浅さまが、大名の奥方になりたいとお考えなら、是が非でもわたしは大名にして貰いますわい。また大名など窮屈でおいやなら、十万両ほど頂戴して、札差しでも始めますかね。お浅さまは、大名と大商人と、どちらがお好きです？」
「ホホホ……、面白いことをお言いじゃ」
「なア……、お浅さま……」
黒太夫は、ソッと、お浅へ寄り添って行った。
「もう、この黒太夫の心は、よくおわかりの癖に――」
「黒太夫どの……」
お浅は、狭間から下を見降すと、キッとした声で言った。
「いま、誰やら、作事場の近くを走り抜けて行きましたぞ」
「えーい、お浅さま！　そんなことでごまかそうとは、つれないおひとじゃわい」
「いや、まことじゃ……。はて、いま時分作事場へ近づくとは、誰であろう……」
お浅が見た黒い影とは、真弓と木野であった。
「真弓さまか……」
大工の棟梁与五郎は、布団を抜け出すと牢舎造りの格子に近づいて、ソッと、声をかけた。
「与五郎どのか？」
「お待ちしていましたぞ。さ、絵図面です」
与五郎は、更に早口で言葉を続けた。
「――今日昼頃、地下牢へ閉じこめられた侍があります。喜平太とか申すそうです」
「――喜平太どのが！」
木野が、思わず声をあげた。
「本日は元日のこととて、わたしども大工一同にも御酒が下されました、その折り、酒肴をはこんで来た中

間達が、コソコソと話をしていたのです」
「確かに喜平太と申していましたか？」
「はい、少将の家来……とか、鳥追い女は全てお召捕り……などとも申していました」
「わかりました。地下牢は、どこでしょう？」
「これも中間どもの話ですが――乾（いぬ）のやぐら下……と、耳に入りました」
真弓は絵図面をふところに納めると、牢造りの格子越しに、与五郎の手を握った。
「仮御殿の出来上りはいつです？」
「一月一ぱいに完成せよとの厳命です」
「その間は、お命を狙うようなことはありますまい。必ずお助けに参りますよ」
「出来るだけ仕事をひきのばし、お待ちしています」
与五郎は、しっかり、真弓の手を握りかえした。
「――では、近いうちに……」
真弓と木野は、足早やに、作業場を立ち去った。
それと、殆んどひと足違いに、天守閣からお浅と黒太夫がおりて来た。
「ごらんなされい。誰もおりませぬぞ」
「でも、確かに、わたしはひと影を見ました」
「つれないお方じゃ。とかなんとか言うて、わしを避けようとなさる。お浅さまは、これほど尽す黒太夫を可哀そうとは思われぬのですかな」
「地下牢へ行って見ましょう。喜平太を助け出しに来たのかもしれませぬ」
「あー、またそのような、うまくごまかそうとなさる」
「いいえ……。浮わついた話などしている場合ではない。万一、喜平太を奪い返されたらどうなさる？」
お浅は、気ぜわし気に黒太夫を促して、乾のやぐらへ急ぎはじめた。
と――暗い作業所の横から、回廊へ音もなく飛来してきた二つの影があった。それはまったく二羽の黒鳥の影のように、黒太夫とお浅には見えた。
「おッ、黒装束！」
まず黒太夫が叫んだ。お浅も声をあげた。二人の叫声につれて、城兵達が口々にわめきながら飛び出して来た。
二個の黒い影はもちろん真弓と木野、二人は追手の出現を見るなり同時に無言のまま顔を見合せた。それは忍者同士のもつ咄嗟の暗黙の合図であった。
真弓は短音を発して近づいて来る追手の方へむかって、素早く一個の黒いまりを投げた。まりは回廊に反

転しながらもうもうたる白けむりをあげた。つまり甲賀流煙遁の術によって、ふたりはこの危機をのがれようとしたのであった。

白煙と同時に、黒装束の一つの影は、ひきがえるのように庭内の植込みの中へまぎれ込んで行った。そのばあい、庭内へ逃げるのがいちばん安全な方法であり、追手に気付かれずに位置を変更する最良のみちでもあった。

だから、一つの黒装束真弓はいちはやく庭内に逃げ去ったのであり、当然、つづいて木野もそのあとを追うべきであった。

が、木野は、その時己れの安全よりも、その回廊の向うの地下牢にいるはずの喜平太のことが頭のなかから離れなかった。いちど庭内に逃げ去れば、ふたたび喜平太に近づくことは容易なことではなかった。何としてもこの機を失いたくなかった。どうにかして喜平太に会いたかった。救い出せないとしても、一目でも喜平太の顔を見、喜平太に声をかけてやりたかった。

いや、すでに喜平太は殺されているのかも知れない。そう思うと、木野はゾッとした。しかし、あの喜平太が、そう簡単にいのちを断たれているとは、やはり、考えられないことだった。

生きてさえいれば、そして、木野が彼の名を小さい声で呼びさえすれば、

「よオ、木野か――」

と、あのどこかのんびりしたひげ面の顔が、一種言いようのない懐しい表情で木野に向けられるにちがいないと思うと、木野は、どうしても、この回廊を向うへすすんでゆきたかった。

木野は、一瞬前、真弓がしたのとおなじように、一個の黒いまりを自分の足下に投げつけ、湧きあがるけむりを身にまとい付かせながら、更に前進した。回廊から渡り廊下をリスのように走り抜け、そこから細長い右廻りの廊下に突きすすんで行った。

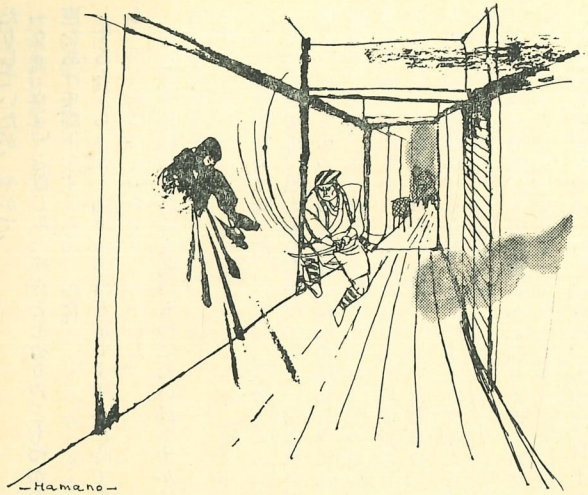
その廊下を右に折れて行けば、喜平太のいる地下牢があるはずである。

が、その廊下に身を入れた途端、

「あっ」

と、木野は息を呑んだ。廊下の向うからも十人ばかりの城兵が喚声をあげて向って来るのがわかったのである。

木野は背後を振り返った。背後からは憎い黒太夫が先頭に近づいて来つつある。黒太夫は袋のねずみになった木野をみて、ゲラゲラ笑いながらやって来るのだ。



進むことも引き返すこともはや木野には出来なかった。煙遁の術をもちいてもいまとなっては格別の効果もない。剣に自信があっても、この多人数では抗すべくもない。

――いや、死にたくない！　と、木野は全身で思った。いま死んでは、死にきれない。喜平太に会いたい。

木野は、その時ふたたび最後に一つ残っている黒いまりを投げた。

「わッ、要心しろ！　術者だぞッ」

両方から、そんな叫声が口々におこり、廊下は白けむりとともに、叫声と怒号で埋まった。そして、その人声と白けむりが、だんだん薄れて行ったが、廊下の中ほどにすすんでいたはずの木野の姿は、まったく掻き消えていた。まるで、そこに立ちこめたけむりの一片に化して薄れ去ったようであった。

「おッ、どこへ行ったのだ！」

「消えたぞッ、外へ出ろッ」

城兵達はそんなことをわめきながら、廊下から飛び出して行った。しかし、黒太夫だけはしばらく首をひねって突立っていた。

それから、天井を見たり、右手の白い壁面をながめたりしていたが、やがて、
「ウォ、ウォ」と獣じみた嗄声とも唸り声ともつかぬ声をあげて廊下をすすみはじめた。
すると、ちょうど廊下の中ほどまですすんだ時である。黒太夫はふと小鼻をうごめかした。
いま彼の鼻にたしかに人間のもつにおいがかすかに漂って来たのである。
「ウォ」
ふたたび黒太夫は唸った。
それと同時に、黒太夫の右手はするどい太刀風を壁面にむかって送ったのである。ただの壁面とみえた一個所に、突然、赤い花びらが散りしいた。じっさい、それは白い壁面をいろどる時ならぬ花々の光景にしか見えなかったが、その時、壁面に、全身を潜ませていた木野のからだが、ぐらり、と前によろけて来たのであった。
黒太夫の一刀で、木野は肩口から斬り下げられていたのだ。
血は赤く壁面を染めたのと同時に、かつて喜平太が「木野のうなじは美しいのう」とひそかに言ったその美しいうなじをも、点滴のように赤くよごしていたのであった。
黒太夫はケタケタと引き釣るような笑声を立てた。
それは獣が獲物をねらった時とおなじ残忍さと喜悦の情をたたえた笑いであった。
事実、黒太夫がいま一刀を払いさえすれば、木野の女体は残酷に斬り裂かれるはずであった。
が、その時、不意に黒太夫の背後から人声がおこり、何人かのものが曲者呼ばわりをしはじめたかと思うと、黒太夫の猫背のからだが、いきなり前のめりになった。次の瞬間、黒太夫はわけのわからぬ叫声をあげながら失神して行った。
「逃げられよ！　傷は浅いぞッ」
虚無僧姿の男が木野の面前に立っていた。
「は、はい」
木野はその男をまっすぐに見つめたまま言った。
「あとは引き受けた、行け！」
「はい！」
木野は、疼痛を堪えて廊下を前進して行った。出血で、ともすれば気が遠くなりそうだった。が、倒れないうちに、一刻も早く、喜平太に会いたかった。
木野は、よろけながら、けんめいに前進して行った。

根来同心

その頃——騎馬の武士が六人、中禅寺内の社務所へはいって行った。
まもなく、雪白の顎髯をたくわえた、白衣、浅黄袴の老人が出迎えて、
「おお、根来組の方々ですな？」
と、きいた。
「左様——」
六人の中で、一番年配の男が前に出た。
「拙者、根来組組頭成瀬大学です」
「申し遅れました。わしは、中宮祠社務職赤羽宗円です。かねて、本日よりお見廻りありとの御達しにより、お待ちしておりました」
やがて、成瀬大学達根来同心六人は、客間に通された。
「この厳冬、毎日の御登山は大変ですな」
「いや、組内百人のものが、毎日五人ずつ登ります。将軍御社参まであとわずか。各自一度登れば済みましょう」
「根来衆のお受持ちは？」
「宇都宮城下はずれより、当所までです」
つまり根来同心百人は、将軍の日光参拝に備え、事前の警戒をするために、遙々と江戸から派遣されて来たのであった。
「念の為におたずねしておきましょう。当中宮祠に、身許不明のものなど、おらぬでしょうな？」
「おりませぬ」
「諸国旅廻り遊芸人など、宿泊してはいないでしょうな？」
「おりませぬ」
とそのとき、客間前の庭に、スッと墨染の少将が姿を現わした。
「おう！　これは来客中であったか……」
少将は、さも驚いたように、引き返そうとした。
「しばらくッ！」
成瀬大学が立ち上った。
「貴公は？」
「当中宮祠のかかり人じゃ」
大学は、キッと、赤羽宗円を振り返った。
「偽りを申されたなッ」
「はて？」
「怪しきものはおらぬと申されたではないかッ」

「身許不明のもの、旅廻り遊芸人などおらぬと申しました」
「この男の身許は確かだといわれるかッ？」
「これは困りましたな……。成瀬どのは、従四位の少将、墨染の高平卿を、うろんな者と申されますか？」
「墨染の御前!?」
成瀬大学は、ハッとしたように少将を見詰めた。
「まこと、墨染の御前でいらせられますか？」
「左様……。大奥作法指南のため江戸へ下った少将高平じゃ」
「口で、そうだといわれても、信用は出来ませぬ。証拠をお持ちですか？」
「これは困った。口だけでは信用できぬか？」
「出来ません。第一、墨染の御前が、このような場所へおいでになる理由が分りません」
少将は根来同心組頭成瀬大学を静かに見返した。
「わしが、江戸を離れて悪いか？」
「まこと、墨染の少将なれば、公儀にて特におまねきになったお方、みだりに江戸を離れる筈はないッ」
「年末年始の御用のあいだも、江戸におらねばならぬか？」
「江戸では、墨染の少将は行方しれずと大騒ぎをしている」
「誰が騒いでいるのじゃ？　ハハハ……、騒いでいるのは、本多佐渡守の一党だけであろう。わしは、佐渡守如きに、一々ことわらねばならぬとは考えておらぬ」
「――佐渡守如き!?」
成瀬大学の眼が、キラッと光った。
「御老中を、佐渡守如きとは、言葉が過ぎようッ」
「老中必ずしも賢人ではあるまい」
「なんとッ!?」
「老中必ずしも幕府の柱石ではあるまい」
少将の言葉に、大学は、ゴクリッと、生唾をのみこんだ。
「わしは、大奥のまねきで江戸へ下ったのじゃ。わしが日光へ来たことは、宿舎蔵前大松院の住職より、大奥へはお届け済みの筈。それを知らぬ佐渡守が、わしを捕えようとして騒いだだけじゃ」
「捕える？」
「左様……。眼の上のコブは、誰しもとり除きたいものじゃからな」
大学はしばらく少将を見詰めていたが、ゆっくり、縁側から降りると、出し抜けに、シュッと刀を鞘走らせた。
「えーいッ！」
凄まじい大学の気合が、中禅寺湖畔の静寂を破ってこだまする。
「とーッ！」
少将が、瞬間の変り身に刃を避けた。
「えい！　えい！　えいッ……」
大学が、二ノ太刀、三ノ太刀と、息つくひまもなく斬り込んで行った。
少将も、いつか小刀を抜いて、大学の鋭い刃を払っていた。――が、少将は、呼吸も乱していない……。
「――お見事ッ！」
突然、成瀬大学は、パッと、うしろへ飛びさがると、サッと、刀を背中に廻して、左手をついた。
「――御前、先刻来の無礼の数々、お許しを願います」
「わしを、墨染の高平と信じられるか？」
「はい……。かねて噂にうけたまわりました吉岡京流の小刀の冴え……。なによりの証拠でございます……」
その頃、宇都宮城内では、本多佐渡守が、不機嫌な顔で、千々輪のお浅と向きあっていた――。
「――いやな正月であった。代参に立たせた十字兵衛が瀕死の傷を負う、捕えた喜平太には逃げられる。さいさきの悪い年じゃッ……」
「――作事場の近くで、怪しい人影を見ましたが、わたくしたちが、もう少し、気を付けて参ればよろしかったのです……」
そういうお浅の顔を見て、佐渡守が、大げさに溜め息をついた。
「話にならぬぞ……。名にしおう曲者の黒太夫が廊下のまんなかで当て落されるとは……。相手はわからぬのか？」
「われながら、口惜しゅうございます。それこそ眼にもとまらぬ早や業……。佐渡さま、もしや、公儀の隠密が、仮御殿造営の様子をさぐりに来たのではありますまいか？」
「隠密!?　もし、隠密なれば、寧ろ安心じゃ。釣り天井のからくりは素人眼にはわかりはせぬ……。が、隠密ではなさそうじゃ。黒装束の女二人と怪しき虚無僧……このために、むざむざ地下牢に入れた喜平太まで奪われてしまった」
「いずれも、形に影の添うように、江戸と伊豆と佐渡とを問わず、墨染の少将の行くところへは、必ず現わ

れます」
「大久保石見守の残党共に決まっておるッ……。やつらは、少将をかついで、わしを狙い、熊取内膳を狙い、伊豆屋のお石を狙っている。蠅じゃッ。うるさい蠅どもじゃッ。必ず、叩きつぶしてくれる」
その時、熊取内膳が、渋い表情で、入って来た。
「殿……、悪いお話を、お耳に入れねばなりませぬぞ」
「えーい、正月の二日間、ろくな話を持って来んぞッ」
「しかし、良きにつけ悪しきにつけ、一応お聞き頂かねばなりませぬ。根来同心百人組が、今市に屯所を置き、騎馬にて、御城下はずれより日光までの警戒を始めました」
「それが悪い話か……。将軍社参の街道筋の警護はいつものこと、形式じゃ。慣例に従うたまでじゃ」
「お忘れでございますか？　根来同心には、大久保石見守の息がかかっております」
「む!?」
佐渡守が、キュッと、眉を寄せた。
「お能役者より成り上った石見守が、初めて金山奉行として佐渡入りする時、将軍家格別のおぼしめしによって、根来同心百人が供をして行きました」
「そうであった……」
「噂によれば、奸智にたけた石見守は、根来同心を厚くもてなし、根来衆も石見守には心服しているとのことでございます」
「おのれ……。またしても石見守の名を聞かされるのかッ。亡霊め！　とっとと消え失せろッ。うぬは十年前に処刑されているのじゃッ……」
佐渡守が、大久保石見守へのろいの言葉を投げつけているころ、中禅寺湖中宮祠の奥の間では、少将と成瀬大学が対座していた。
「御前！　それはまことのことでございますか？」
大学は、顔色を変えて乗り出していた。
「――このようなことを、軽々しく口に出せると思うか？」
少将は、キッとした表情で、成瀬大学を見返した。
「佐渡守は、もともと忠長卿びいきじゃ。二代将軍が世嗣を定められるに当っては、家光どのを推す大久保一族と、忠長卿派の本多一家とが激しく争い、御長男こそ世嗣たるべきものと主張する家光派の正論が勝った。破れた佐渡守は、大久保一族につながる石見守をおとし入れて、柳営より大久保一族を追う一方、虎視

眈々として、忠長卿を将軍の座に据えるべき機会を狙っている」
「ありそうなことでございますな」
「その折りも折り、将軍家には、日光へ御社参をおおせ出され、宇都宮城にもお泊りになることになった。佐渡守にとって、逃がすことの出来ぬ機会ではないか」
「なる程……。しかし、佐渡守をとり押えるには、確たる証拠がなければなりませぬ。推測だけでは、単なる中傷といわれても仕方がありません」
「その証拠を、いま、石見守の遺臣達が集めている」
「御前ッ……」
大学は、ジーッと、少将を見つめた。
「石見守さまの御家来が、いまだにおりまするか？」
「いる！　八人いる……」
「八人!?」
「石見守奥方が捕われる日、かねて秘蔵されていた蓮華型の銅鏡を鉄槌にて打ち砕かれた。その時鏡は、カッ然と鳴り響いて、八ツに割れた。――われ等石見守一族の恨み、この八片の鏡のかけらを持つものが受けついでくれよ……、奥方はそう言われたのじゃ。この八ツの破片を秘蔵する八人の女がいる」
「女……ですかア……」
大学は、ガッカリしたように首を傾げた。
「女とても、馬鹿にはならぬぞ。十年の間、ただ復讐の一念に燃えて来た女達じゃ、必ずや佐渡守謀叛の証拠は集めるであろう……。大学、そのときはどうする？」
「勿論、われ等根来組百人、一団となって宇都宮城突入の先陣をうけたまわります。一つには天下の御ため。また一つには大久保石見守さまの御無念ばらしのため……」
やがて、夕刻近く……。
成瀬大学達根来同心六人は、騎首を揃えて山を下って行った。
その途中、大学達はいろは坂で、奇妙な四人連れに出会った。――武士と、粋なお内儀風の女と、巡礼娘二人……。いずれも、身がるな道中姿である。
武士は傷ついた木野に助けられた喜平太、お内儀は真弓、巡礼娘二人は深雪と木野であった。
「――はてな……」
馬上の大学が、ひょいと、首を傾げた。――神鏡に結ばれる八人の女……。
「――まさか、あの若い女達ではあるまい……」

大学は部下を促し、駈け降りて行った。

火の函

「――御前……、明日は、宇都宮城へ参ります……」

正月六日の夕刻、中宮祠社務職赤羽宗円が墨染の少将の部屋へ来てそう言った。

「城主本多佐渡守どのより、火急のお召し」

「火急の？」

「それが……」

宗円は、ふっと、口許に笑いを浮かべた。

「七草節句に当り、易を立てて欲しいとのことでございます」

「宗円どのは、易を立てられるか？」

「はい、古易をいささか……」

「では、わしの卦をたてて貰うのであった」

「失礼ながら、当社へお出での夜、一存にて立ててみました」

「ほう……、なんと出た？」

「――水雷屯……と出ました」

「その意味は？」

「蒼竜水中に動き、草木やすからず……と言うことになります。つまり、この卦を得るひとは、国土創造のときと同じく、目的を達するに艱難苦労多く、幾多の妨害に遭遇しますが、これを乗り越えるときは、天運開通することになりまする」

「なる程……」

少将は、宗円と顔を見合せて、ニッコリ笑った。

次ぎの日、朝早く、宗円は日光山を下って行った。

宗円ひとりではなく、三輪が供をしている。――三輪の姿は、すっかり変っていた。髪を垂れ髪にして、白衣に緋色の袴をつけた巫女姿である。

少将が、特に頼んで、三輪をつれて行って貰ったのである。――木野と千里は顔を知られている。が……、三輪は、熊取内膳はじめ十字兵衛も、陣五郎も、黒太夫からも知られていなかったからである。

「――宗円は、まだ来ぬか？」

その頃、佐渡守が内膳にたずねていた。

「今朝、中宮祠を出れば、夕刻近くになりましょう」

「なぜ、昨日出発させぬ」

「ハハハ……殿も、気が弱くおなりですな」

「わしを、さげすむのかッ」

「飛んでもない……。ただ、既に矢は弦を離れたのです。いまさら後へは引けませぬ」

「引くものか。忠長卿を四代将軍と仰ぐのは、わしの悲願だ」

「なれば、気を大きくお持ち下さい。この際、易を立ててなになります」

「わからぬか。わしは、将軍家光と忠長卿の運勢をうらなわせるのだ」

そのとき、近習がひとり入って来た――

「江戸表より、伊豆屋の荷馬が着きました」

「おう！　来たか！」

内膳は、佐渡守と顔を見合せると、急いで大手門まで出て行った。

五頭の荷馬が、それぞれ振り分けにした荷函を両鞍につけ、数人の武士に護られて城門をくぐるところであった……。

荷馬は、そのまま二ノ丸まで引き入れられた。

「――よし……ここでよい」

出迎えた熊取内膳がそう言うと途端に、それまで肩肱張って付添っていた侍達が、ヘタヘタヘタとその場に坐りこんでしまった。

「どうした？」

「ヘエ、もうもうこの四日間、氷の刃の上を渡っているような気持ちでございましたよ」

宰領らしい男が、武士にしてはおかしな言葉で答えた。

「その方の名は？」

「ヘエ、伊豆屋の番頭喜之助でございます。他に手代四人が付添って参りました」

「いずれも、伊豆屋子飼いのものか？」

「その点は、御心配には及びません。いずれも長年伊豆屋で働き、八丈沖あたりで異国の船と抜け荷買いなどの荒仕事で鍛えあげた伊豆屋の古つわもの共でございます」

「ハハハ……」

内膳は、よい機嫌で笑った。

「古つわものにしては、いくじが無いではないか。僅か四日の道中で、ゲッソリやつれているぞ」

「だって旦那……。この荷物は、いつドカーン……と――」

「これこれ、御城内とは言え、声が大きい」

「相済みません。とにかく、馬五頭で、三十貫からの火薬。それも抜け荷で仕入れたオランダ火薬でございますよ。なにかにちょいとでもぶつかれば、馬も人間も、一度に吹ッ飛んでしまいます」

「それほど強烈な火薬か？」

「旦那……。この火薬を一度に爆発させてごらんなさいまし、こう言っちゃ失礼さんですが、このお城なんかあとかたなく――」
「これッ……」
内膳は、辺りを見廻した。
「縁起でもないことを申すな」
やがて、オランダ火薬を詰めた十個の函は、ひそかに、武器蔵へはこびこまれた。
「――そうか……、そんなに強い火薬か……」
佐渡守は、内膳から話を聞くと満足そうに笑った。
「はい、お城下はずれに仮屋を構え、お供の諸侯の同勢をそこへ泊めます。その仮屋の周囲にあの火薬を伏せ、これに火を放つときは数千、数万なりとも、一瞬にして木ッ葉微塵でございます」
「ハハハ……、内膳、元日以来初めて心地よいことを聞いたぞ」
その頃、大手門前に、二組の男女が立っていた。
ひと組は、中禅寺中宮祠社務職赤羽宗円と巫子姿の三輪……。
それよりひと足先きについていたのが、伊豆屋のお石と供の手代……。
「本日の木函十個の送り主。伊豆屋が参ったとお取次ぎを願います……」
門番へそう言うお石の言葉に、宗円のうしろにいた三輪の眼がチラッと光った。
赤羽宗円も取次ぎを頼んだ。
しばらくすると、まず、町人姿に戻った伊豆屋の番頭喜之助が、大手門から駈け出して来た。
「あ――、喜之助！」
「おかみさん、明日だろうと思っていましたよ」
「荷物が気がかりなので、駕籠を急がせたのだよ。無事に着いたのだね？」
「もう、お武器蔵に納まっていますよ」
そんな話が交されているところへ、近習らしい侍が出て来た。
「赤羽宗円どのは……」
「わしじゃ」
宗円が前へ出た。
「御苦労でした。殿にはお待ちかね……。御案内いたします」
それから、侍はお石の方へ顔を向けた。
「江戸、伊豆屋のお内儀か？」
「はい、お石と申します」

「御家老熊取さまが、御用部屋で待っておいでだ」
やがて、宗円と三輪は、佐渡守の前へ案内された。
「殿の御運勢を見るのですかな？」
「いや、そうではない……。今日は正月七日じゃ。このよき日に当り、わが国運と、将軍家の御運勢を見てもらいたい」
「国運と将軍家の御運勢と言われますか？」
「わしは老中筆頭じゃ。一宇都宮城主としてではなく、天下の老中として身を処さねばならぬのでのう」
「御尤も……。が、困りましたな……」
「卦が立てられぬか？」
「いえ……、易には天運、地運、人運と申しましてな、三種の卦がございます。天運とは国並に主上の御運勢、地運とは将軍家並に関白家の御運勢、第三の人運が個人の運勢でございますよ。この三種三様の卦の立て方がありましてな。天運と地運は、潔斎をした上で深夜に立てまする」
「では、この城内では出来ぬか？」
「いえ、出来ます。が……、静かなお部屋を拝借した上、今宵はお泊めを願わねばなりません」
「よい。泊って行け」
「それから……」
宗円は、ジーッと、佐渡守の顔を見詰めた。
「お城に、一つ不都合なことがございます」
「城内に!?」
「はい……。丑寅の方に当って、何やら妖気が漂うております。それを、別の場所へお移し願いたいと存じます」
「丑寅？　その方角には、武器蔵があるだけじゃが……」
「そのお蔵には、武器刀剣のたぐいだけでございましょうか？」
「いや……」
佐渡守は、控えている近習へ顔を向けた。
「――さき程の木函、天守へ移すよう伝えてこい……」
十個の木函は、武器蔵から天守へ移された。
「――静かに……、静かに……」
熊取内膳自らさしずをして、天守一階の板敷きに並べられた函にはいずれも――、御新茶……と、書いてあった。
「――ただいまより、易占をいたしまする……」
巫女姿の三輪が、近習までそう伝えたのが、その夜の四ッ（十時）であった。
佐渡守は、内膳とお浅とお石を連れて、奥座敷へ入

って行った。

「――まず、国運をうらないます……」

赤羽宗円は、与えられた文机の上に算木を置き、筮竹をとりあげた。

筮竹は五十本である。

宗円はうつむき加減にしばらく瞑目すると、大極の一本をとり除いて、残り四十九本をサラサラと鳴らした。

かくて、算木を並べかえること六回……。

宗円は、おもむろに口を開いた。

「――地沢臨……。まことに吉卦でございます」

「ふム……吉と出たか」

佐渡守が、たずね返した。

「はい……。地沢臨……、この卦の意味は、黄花群生の象と申しましてな、即ち、金色の花一時に咲き競う。国運は、いよいよ繁栄いたすことでございましょう」

「そうか……。では、次ぎに将軍家の御運勢を見て貰おうか」

「はい……。当上さまのお生れは？」

「慶長九年じゃ」

「されば、きのえ辰でございますな……」

宗円は、再び筮竹と算木を動かした。

「はてな……？」

「どうした!?」

「いや……。もう一度、卦を立て直してみまする」

宗円は、巫女姿の三輪に命じて、文机の上を拭き清めさせ、再び筮竹を鳴らした。

が……、現われた卦の表を見詰めると、ふーッと、長い溜め息を吐き出した。

「どうした、宗円？」

佐渡守が、膝を乗り出してたずねた。

「この卦は、申し上げられませぬ」

「なに故じゃッ!?」

「余りにも、凶運の卦でございます」

「二度、卦を立てなおしたな？」

「はい……、まことに不思議なことながら、二度とも、同じ卦でございます」

「もう一度、立て直してみい」

「その要はございません。幾度立て直しても同じことと存じます」

「言えッ。わしは天下の老中。将軍家の御運勢を、知っておかねばならぬぞッ」

宗円は、すーッと、息を吸いこんだ。

「止むを得ませぬ。申し上げますが、御他言無用……。卦は火天大有……。窓を開いて明を求むるのかたちでございます。即ち、将軍家暗愚なれば、何人かがこれを倒し、名君を迎える……との凶報でございます」

「――ワハハハ……」

佐渡守が、大声で笑った。

「将軍家が御代替りになると申すか？　馬鹿なことをッ」

「わたくしが申すのではありませぬ。算木と筮竹が申すのです」

「当上さまは極めてお丈夫……。万一、御病気の節には、当代一流の医師が御脈をうけたまわっている。御代替りなど、考えられぬことじゃ」

「医師は、病気を療治する。人命を左右するものではありませぬ」

「はてな？」

「つまり、ひとは病気のみで死するものとは限りませぬ」

「宗円ッ！」

佐渡守は、キッと、宗円を見詰めた。

「上さまが、不慮の災難で落命されると申すのか？」

「わたくしは、何も申せませぬ。卦のかたちを読んでお話しするだけです……。ねがわくは、わたくしの易学未熟にて、卦の読み違いであってくれればよいと思います」

「他言無用じゃ……」

佐渡守は、難かしい表情で、内膳、お浅、お石達を振返った。

「そなた達も、決して口外するな。このようなことが、万一大目付共の耳に入らば、赤羽宗円のお召捕りは勿論のこと、席に連らなったわしやそなた達も、ただでは済まぬ……。いや、多分、宗円の卦の読み違いであろう。上さまが、左様なことでおなくなりになる筈があろうか……。のう、宗円……」

「はい……わたくしは、本日限り筮竹を折って、二度と易は立てませぬ」

「まアよい。今宵は城内で休んで明日、山へ戻るがよかろう」

佐渡守は、渋い顔で廊下へ出ると、押えに押えていた笑いが一度にこみあげて、思わず、あとに続く内膳に、ニヤリと笑った。

「――殿……。元日以来の御不快が、一度に消し飛んだようですな」

「ハハハ……、火天大有か……。窓を開いて明を求む

るかたちか……。易は、忠長卿万々歳と言うわけじゃ」

それから佐渡守は、お浅とお石を振返った。——

「——火薬は着いたし、易はわが方に吉と出たし……。どうじゃ、一献かたむけようか」

やがて、奥の間で深夜の宴がたけなわとなった頃、天守近くに忍び寄った二つの影は、赤羽宗円と、巫女姿の三輪であった。

「大丈夫じゃ、三輪どの……。佐渡守達は、わしのでたらめでよい気持になり、もはや天下を握った気で、酒をくみ交している。いまのうちに、伊豆屋がはこんだ荷物とやらを確かめなされ……。わしが見張っている」

「はッ……。では、お願いします」

三輪は、ソッと、天守の石段を登り、入口へ近づいて行った。が、ハッと、足を止めた。——中に、白い人影が立っていたのである。

「——三輪どのじゃな……」

白い影が近づいて来た。——火事装束の男である。

「あなたは……千住で……」

「左様……。千住からす長屋。十字兵衛一味が襲撃の折、いささか力を貸したな」

「あなたは、どなたです？」

「いずれ、わかるときがくる。それまでは火事装束五人組と思ってもらいたい。いずれにしても、墨染の御前に味方するものじゃ」

「それにしても、厳重なこの城内へ、どこから……」

「わしは、濠を渡ったり、石垣をよじのぼったりはせぬ。が、自分の好むときに、自由に出入りすることが出来る」

「抜け道があるのですね？」

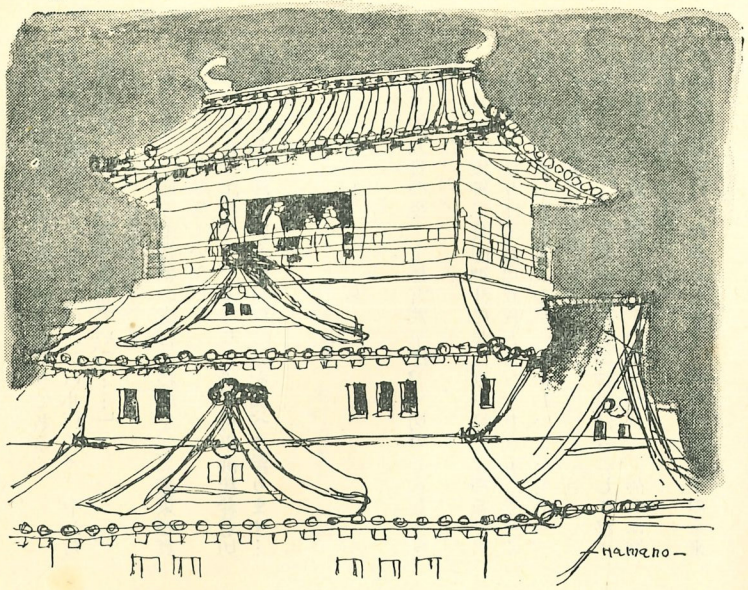
「左様……」

火事装束は、一歩三輪に近づくと、一段と声をひそめた。

「佐渡守も知らぬ抜け穴……。いや、佐渡守ばかりか、城内誰一人知るものはあるまい。三輪どのは、当宇都宮城の歴史を知っておいでか？」

「詳しいことは存じませぬ……。が、その昔、八幡太郎義家、北国討征の折から、武将宇都宮氏が築城したものと聞いています」

「その後、宇都宮氏二十三代の国綱の時、豊臣氏によって城を奪われることになった。国綱の家臣達はこれを拒み、籠城して一戦を交えようと、脱出路の抜け穴をつくった」



「あー。その道をあなたは……」

「知っているのじゃ。三輪どのへ教えよう。が……、その前に……」

火事装束は、並べてある白木の箱を、持っていた鞭で指した。

「——火薬じゃ」

「え!?」

「しかも、オランダ渡りの黒色火薬じゃ。わが国古来のものの幾倍かの力があろう」

「この火薬、なにに使うのでしょう？」

「使い道など、どうでもよい……。泰平の世に、このように大量のオランダ火薬を貯えた。この一事だけでも、佐渡守を処罰する大きな証拠じゃ。墨染の御前へ申上げてほしい」

それから、火事装束は、三輪を天守裏の松林へ連れて行った。

そこに、苔むした石囲みの古井戸があり、四人の火事装束が待っていた。

「——三輪どのじゃ……」

三輪を連れて行った火事装束が言った。

「存じております」

応える火事装束の言葉は丁寧だった。——三輪と並

んでいる男が、五人組の頭領のようである。
「――三輪どの、この古井戸はから井戸じゃ。中から地下道が、四ツの岸へ通じている……」
その頃、中禅寺中宮祠の少将の寝所を、黒装束の真弓が、ソッと訪れていた。
「――御前、江戸へ行って参ります。将軍御社参も切迫したこと、詳しい道中日程などを調べて参ります……」

鬼火の女

正月十五日の夜、宇都宮城下は、一切のともし火を消していた。
今宵は、氏神二荒山神社のおたりや祭りである。
おたりや祭りは、お足り夜ともお垂り夜とも書くが、お渡り夜祭りと言うのが一番正しいようである。
この夜は満月……。
その月明の下、二荒山神社の御神霊はみこしに移され、鉦、笛、鼓の神さびた楽の音につれて、静かに城下の町々を一巡する。
本多佐渡守は、かみしも姿で、熊取内膳以下の家来を従え、自ら馬場先きまで出てみこしを待っていた。
――これが、歴代城主、在国の場合のならわしだったのである。
みこしは、妻折り笠、たっつけ袴姿の氏子総代の先導で、馬場先きへ近づいて来た。
――国もゆたかに、民草さかえ、治まる御代のためしには……。
そんな歌が聞える。みこしを取巻く氏子達が、城主佐渡守の御機嫌うかがいに歌っているのである。
「――はてな……」
佐渡守のうしろにいた内膳が、ふッと、背のびをするようにして、みこしに続く花笠の女達へ眼を向けた。
「――お内儀……、伊豆屋のお内儀……」
内膳は、佐渡守のそばを離れると、うしろに控えている家中のものの中から、あわただしくお石を呼び出した。
「――あれを見ろ！　花笠の二番目の女を」
「え？」
お石は、いわれた方を見た。
が……、ともし火は一ツもない。ただ、月あかりが、蜿々と続くおたり夜祭りの行列を照らしているだけである。

「――あの女、木野ではないかッ？」
「げッ……。き、木野がおりますかッ」
「わからぬかッ。あれじゃッ。それ、四人ずつ並んでいる。あの二番目の列の左端の女。木野ではないかッ」
内膳が、いらだたしげに言った。
と……、お石をおしのけるようにして前へ出た黒太夫が、ポンと膝を叩いた。
「――違げエねエ！　ありゃ、間違いもなく木野ですぜッ」
「そう思うかッ？」
「思うにもなんにもッ。畜生めッ、木野でさア。木野がいるからにゃ……」
「墨染の少将も、御城下にいると決ったッ」
「よしッ！　御家老……、あたしがソッと、木野をつけてみましょう……」
ところが、その頃少将は、城内松林の古井戸の底にいた。――三輪と喜平太が供をしている……。
少将は、いつもの通り公卿姿だが、喜平太と三輪は、黒装束だった。
「――これをのぼれば、天守の裏へ出るのか」
「はい……。御案内いたします」
「待て。今宵は正月十五夜、小豆がゆを祝う左義長の夜じゃ。わしが城内へ贈り物しようぞ……」
夜は静かに更けて行った。
おたりや祭りの行列も、とっくに二荒山神社へ戻ったことであろう。
「――いま、いく刻であろう？」
から井戸の底で、少将がたずねた。
「左様……。かれこれ、四ツ（十時）でしょう」
喜平太が低い声で答えた。
「もう、よかろう……。では、喜平太は、ここで待っておれ」
「お供しては、いけませんか？」
「ひと目につきやすい……。部屋々々の案内がすめば、三輪にも、ここへ戻って貰う」
「御前ひとりでは、心配です」
「フフフ……、幽霊に、供はいらぬぞ……」
少将は、そういうと、足がかりをたどって、ソッと、から井戸から外へ出た。
「――ご案内いたします……」
あとから、井戸を出た三輪が、こんどは先きに立って歩き始めた。

奥の間では、すでに、かなり酒がまわっていた。
「――佐渡さま……。わたしは、宇都宮が気にいりました」
千々輪のお浅が、トロンとした目で、佐渡守を見た。
「そうか……。北の小江戸じゃ。落着いたよい町であろう」
「わたしに、この町を下さいますか？」
「ハハハ……、ここは、わしの居城じゃ」
「でも、いずれ佐渡さまは、天下の副将軍格。百万石の大大名になられましょう」
「うむ……。わしは、駿遠三十三ヵ国を始め、伊豆、相模を領地とし、東海のおさえとなりたいと思うている」
「その時には、わたしは、宇都宮を頂きます」
熊取内膳が、カラカラと、大声で笑った。
「お浅どの、女大名になるお積りか？」
「ホホホ……。夫を持てばようございましょう。わたしの夫を、宇都宮城主にして頂きます」
「ほう……。あの黒太夫が、ここの御城主になるのか！」
「熊取どのッ」
お浅が、キッと内膳を睨んだ。
「だれが、黒太夫などと、夫婦になると申しましたッ」
「や！　これは失礼……。しかし黒太夫は、その積りでいるようですぞ」
佐渡守が、楽しげに笑った。
「――石、そなたは、褒美になにが欲しい？」
「はい……、わたしは、町人伊豆屋でございますから、お金儲けをさせて頂ければ結構でございます」
それからしばらくして、お石は手洗いへ行くため、ソッと、一座を抜け出した。
城内は不便なもので、長い廊下を渡って行かねばならない。
金網行燈の灯が、ポーッとついている暗い廊下である。
その長廊下のはずれに、異様な人影が立っていた。
――血みどろの白衣をまとい、髪をおどろに振り乱した女の姿であった……。
伊豆屋のお石が、長廊下の曲り角で、ふッと足を止めた。――どこからか、名を呼ばれたような気がしたからである。
が……それらしい姿も見えない……

――そら耳だったかしら……。
お石が、再び動きだそうとしたときである――
「――石……。しばらく待ちゃ……」
こんどは、はっきり聞えた。
「――どなた？」
なに気なく振り返ったお石が、ギクッと、息を引いた。
ッッッッ……と、滑るように長廊下を近づいて来る白い影を見たのだ。
「――石……、久しいのう。わかるか？　わらわじゃ……」
一間ほど離れて、ピタリととまった白い影が、引き裂いたような口を船底型にして、ニタッ……と笑った。
お石は、足がすくんで、動けなかった。ただ、両の眼を丸く見開き、まばたきすることも忘れて白い影を見詰めているだけである。
「石……、わすれたのか？」
「お……、お……、奥方さまッ……」
お石ののどから、破れふいごのような声が出た。
「そうじゃ……。思い出したか」
「は、は、はいッ……」
お石は、思い出したわけではなかった。――寧ろ、日夜忘れようと努めていたのである。
伊豆の下田から江戸へ向う船の中で、初めて石見守奥方の凄まじい姿を見たときから、頭の隅にこびりついて、忘れられなかったのであった。
白い影は、また、口を歪めて笑った。
「――ことのついでに、もう一ツ思い出してみい……。そなたの裏切りで、われわれは捕われ、酒匂河原ではりつけになった」
「お、奥方さまッ……。わ、わたくしは何も――」
「知らぬとはいわせぬ……。見い、ここと、ここと、ここにさびたヤリが突き刺さった……」
白い影は、両の乳の下と、のどもとを、蒼白い手で指さした。
「せつないぞえ……。石……く、苦しいぞえッ！」
白い影は、両手の指を尺取虫のように曲げて、グーッと、お石へ近づいて行った。
「――おッ、お許しッ……」
お石は、のけぞるように胸をそらせると、恐怖に顔をひきつらせて、その場に悶絶してしまった。
それからしばらくして、腰元二人が、あわただしく、奥の間の酒宴の席へ駈けこんで行った。

「――御家老さまッ、伊豆屋のお内儀が……」
「お石が!?」
「お廊下に、倒れておいでした。とりあえずお居間に移しましたが……」
腰元は、内膳ににじり寄ると声をひそめた。
「――あの……、奥方さまが来たッ。奥方さまの幽霊じゃッ……と、うわごとを……」
「――内膳、どうしたのじゃ」
佐渡守がたずねた。
「伊豆屋が、発作を起したようです」
「お石が!? あれには、持病があるのか?」
「はい……、何か、大きな喜びがあると、発作を起すようでしてな。先般、伊豆からの帰途、船が江戸に近づいたときにも発病いたしました」
すると、お浅がハッと顔をあげた。
「では、もしや……」
が……、内膳は、眼顔でお浅の言葉を押えると、静かに立ち上った。
「――ちょっと、様子を見て参ります」
お石は、意識をとり戻してはいたが、ガタガタと、瘧がついたように体をふるわせ、喜之助始め伊豆屋の番頭や手代が、手足を押えていた。
「――伊豆屋、どうした?」
熊取内膳が、お石の蒼白になった顔をのぞきこんだ。
「あ……、く、熊取さまッ。……お、奥方が……。石見守さまの奥方が……」
「妄想だッ。気のまよいだッ」
「い、いいえッ……。声を聞きました。はっきりと、――ここと、ここを、錆びた槍で突かれた……と、血みどろの胸とのどを、指さしました」
「馬鹿なッ……。ここは、野州宇都宮の御城内だぞッ」
「お、怨霊は、宇都宮であろうが、江戸であろうが……」
「よいよい……。今夜は薬湯を呑んで、眠れ。何よりも、気を静めることだ……」
お石は、カチカチと歯を鳴らしながら、内膳を見送っていたが、やがて、せつな気につぶやいた――
「――気のまよいではない……。あたしは、こ、この眼で、はっきり奥方さまを見たのだ……。この耳で、奥方さまの声を聞いたのだ……」
内膳は、長廊下を、奥の間の方へ戻って行った。
「――困ったことだ……。気の強いようでも女は女。十年前の裏切りに、われとわが心を責めているらしい……。この大事の瀬戸際に、つまらぬことを喚きちらされても困る……」
チラッ……と、内膳の顔に、残忍な表情が走った。
「あんな様子が長く続くようであれば、大事の前の小事、可哀そうだが、お石を生かしておくわけにはいかんな……」
そんなことを考えていた内膳が、ふと、足をとめた。
「――内膳……。熊取内膳……」
そんな声が、どこからか聞えて来たのである。
内膳は、思わず辺りを見廻した。――が、金網行燈に照らされた長廊下に、人影はなかった。が……
「――わらわじゃ。内膳、わすれたか……」
細い女の声は、傍らの部屋から聞えて来た。
内膳は五、六歩あとへもどって、女の声が聞えた部屋の前に立った。
「――誰だ……。わしを呼んだのは誰だ?」
が……、応える声は聞えなかった。
しかし、誰かがいる。――部屋の中から苦しげな呻めき声が、聞えて来た。
内膳は、ガラリッと、大襖をあけた。とたんに、ウッ……と、息を呑んだ。
暗い部屋に、白衣の女が立っていた。
そこは、二十畳余りの広間である。――女は、そのつき当りの壁ぎわに立っていた。
両足を揃えて立ち、両手をまっすぐ左右へ伸ばしている。手首から先きだけが、ダランと、垂れていた。
丁度、はりつけにされている恰好である。
「――おのれッ……」
内膳は、口の中でうなった。
十年前のことを、はっきり思い出したのであった。
大久保石見守処刑ののち、石見守の妻妾子女十余人を捕えて、小田原の城下はずれ、酒匂川の河原ではりつけにしたのは熊取内膳である。
――お石が見たというのは、これかッ……。
内膳が、二、三度続けざまに生つばを呑んだときに、うなだれていた女が、スーッと、顔を持ちあげた。蒼白い顔。
「――熊取内膳……、久しいのウ……」
「な、何者だッ、おのれッ」
「忘れたかえ? 大久保……、石見守が内室……」
「ぬかせッ!」
「苦しいぞエ、内膳……。キリキリキリと、槍でつかれた傷口が……」

「とッ！」
出し抜けに、内膳は、脇差を抜いて、女に斬りつけていった。
が……、どうしたことか、全く手応えがなく、内膳はダーンと、われとわが顔、わが肩を、壁へぶっつけていた。
「――あッ……」
思わず顔を押えた内膳の耳に、ククククッと、低い笑い声が聞えて来た。女は、いつか、うしろへ廻っていたのである。甲賀流変化の術――。
「――内膳……、あれから十年……、いまこそ、そなたの亡びるときが来たのじゃ……。そなただけではない。本多佐渡守……、伊豆屋お石……、みな亡びるのじゃ。ホホホ……、嬉しや……。あら、嬉しや……」
女の声が、遠ざかって行った。
「――ま、待てッ！　しょ、正体みあらわしてくれるッ……。待てッ……」
痛む半面を左手で押えて、内膳が廊下へよろめき出たときには、既に女の姿は見えなくなっていた。
白衣の女は、早くも中庭へ出ていたのである。
そのまま、滑るように、天守閣の方へ動いて行く……。
そのあとを、黒い影が、地面をはうようにして追っていた。黒太夫である……。
白衣の女は、天守閣の角を曲りかけて、キッと振返った。
「――おッ！」
ツケていた黒太夫が、パッと、一間ばかり飛びさがって、地面にはらばいになった。
その辺りには、月光を浴びた天守の影が黒々と落ちていて、黒太夫の姿は、白衣の女の目には入らなかったようである。
「――へへへ……、あれが幽霊かい……。怨霊かい……。ふざけちゃいけねえ」
黒太夫は、ソーッと身を起こすと、竹藪へ入って行く女のあとをつけようとした。
が……、出し抜けに、うッ……と、低い声でうめくと、ヨロヨロッと二、三歩あるいて、バッタリ、倒れてしまった。
黒太夫に当て身を食わせたのは、三輪であった。
「御前々々……」
三輪は、竹藪へかけ込むと、小声で少将を呼んだ。
「――三輪か……。すぐ参る。しばらく待っておれ」
「御前……。黒太夫が、あとをつけておりました」

「ほう……あれは、黒太夫であったか……。何者か……、追いかけてくるとは思ったが……」
「いま、当て落してありますが、どういたしましょう？」
「黒太夫は、三輪の姿を見たのか？」
「いえ……うしろから襲いました。何も見ておらぬと思います」
「よし……。では、喜平太と相談して、どこか変ったところへ運べ……」
翌朝、明け六ツ……。
大手門を開いた番士が、ギョッと、目を見張った。
――堀にかけた大手橋の上に、叩きつけたようになって倒れている人影があったからである。
それが、城内をわがもの顔にノシ歩いている傀儡師の黒太夫であることが、すぐわかった。
「――どうしたッ!?　黒太夫。しっかりせいッ……」
駆けつけた熊取内膳を、やっと意識をとり戻した黒太夫が、ジーッと見上げた。
「――あたしゃ……どうしたのです？」
「それは、こちらで聞きたいことじゃッ」
「ここは、どこです？」
「わからぬかッ、大手橋の上だ。お前は、いつ、どこから、ご城内を脱け出したのじゃ。暮れ六ツ以後の出入りは、出来ぬ筈だぞッ」
「はてね……」
黒太夫は、首を傾げて、内膳を見たが、内膳の左半面が、薄黒くなっているのに気付くと、ポンと膝をたたいた。
「そうだ！　あの女だッ」
「えッ！　女!?」
「御家老、ゆうべの血染めの白衣を着た女ですよ」
「お前も出会うたかッ!?」
「おかしいねえ。あたしゃ天守のところまで行ったんだが、いつこの大手へ来たんだろ？」

お小姓変化

宇都宮城下では、二荒山神社のおたりや祭りが済むと、春になるといわれている。
事実、一月も二十日を過ぎると春の遅い宇都宮にも梅の便りがチラホラと聞えるようになった。
が……、本多佐渡守の顔は、厳冬の如くきびしく暗澹としていた。
「――しかし……、いまとなっては、どうにもなら

ぬ。いや、この度の日光社参をはずしては、二度と機会はないッ……」

昼下りの書院でただひとり、脇息に両肘をついた佐渡守が、われとわが胸にいい聞かせるように、ひとりごとをつぶやいたとき、ひきずるような足音が聞えた。

「――殿……、お目通り、お許し願えますか……」

六角十字兵衛の声だった。

「――入れ……」

「ごめん……」

静かに襖をあけて、不自由そうに、十字兵衛が入って来た。

「――死に損いめ！　もうよいのか？」

口ではそう言っても、人を斬るために生れてきたような十字兵衛が起きてきたことは、佐渡守を喜ばせた。

「失った血潮をとり戻すだけでも、半年はかかりましょう。しかし、こう悪い噂ばかり耳にしては、寝ているわけにもゆきませぬ」

「ぬかせ！　ケチの付き始めは、元日に傷を負うたその方からではないか」

「その埋め合せは、必ずつけます。殿、将軍社参の日取りは？」

「二月上旬江戸発とは決まっていたが、詳しい日取りの報せはまだ来ぬ」

「釣り天井は、間に合いまするか？」

「うム……是が非でも……」

それから、佐渡守は声を潜めた。

「賀来陣五郎を、江戸へ送った。大奥の染村に連絡をとらせ、社参の日取りを聞き出させるためじゃ」

「染村どのは知っているのでしょうか？」

「もう決まっている筈じゃ。老中、若年寄は極秘にしているに違いない。が、大奥の主だった女中は必ず知っている」

その頃、大奥表使いの染村は、御台所代参として、芝増上寺へ赴いていた。――増上寺には、二代将軍の御霊屋（おたまや）がある。

「――御役目、御苦労さまでございました」

代参を終えた染村は、霊廟守護職の増上寺末寺宝松院の客殿でくつろいだ。

その接待をしているのは、紫ぼかしの大振袖を着た、なまめかしい寺小姓であった。

奥女中の代参は、かた苦しい大奥からのいわば息抜き……寺方でもそのことを呑みこんで、酒肴を用意

し、美しい若衆、寺小姓をはべらせたものである。

「――これ、そなたの名は何んと言う？」

盃を手にした染村は、色好みな熱っぽい眼で、じッと、寺小姓を見詰めた。

「――はい……小三郎と申します……」

が、それは、津矢の声であった。

「――年は？　いくつになりじゃ？」

染村は、脇息によりかかって、しんなりと、からみつくような甘い声でたずねた。

「明けて、十八でございます」

「いつから、この宝生院にいる？」

「まだ、五日でございます」

「ほう……。では、それまでは、どこにいたのじゃ？」

「あのウ……」

寺小姓小三郎になり澄ました津矢が、ちょっと口ごもった。――こんなことを訊ねられるとは予測していなかったのである。

が……染村は、寺小姓が、はずかしがっているものとカン違いした。と同時に、この可愛いらしい振袖若衆をいじめてみたい年増女の奇妙な好みにかり立てられた。

「これ……、言えぬのかえ？　わたしには、聞かせとうないのかえ？」

「いいえ、そういうわけでは……」

「では、言うてみや。ここへ来るまで、どこで、なにをしていたのじゃ？」

「は、はい……、わたくしは……」

津矢の小三郎が、ふっと顔をあげた。

「はい……、日光におりました」

「日光!?」

「はい……、野州の日光でございます」

「嘘じゃ……。日光東照宮には、そなたのような寺小姓はおらぬ筈」

「いいえ、東照宮ではござりませぬ。あれより、ずーっと上へ登った、中禅寺湖の中宮祠でございます。社務職赤羽宗円さまに、おつかえしておりました」

「ほう……、中宮祠……。それがまた……、なぜこの宝松院へ移って来たのじゃ？」

「それは……、日光は、寒うございます」

「寒い？」

「はい。それに、淋しゅうございます」

「ホホホ……。十八にもなって、そなた、ねんねじゃなア。さ、ついでたもれ」

染村がさし出す盃に、津矢の小三郎が、わざと、お

ずおずと酌をした。
「――日光か……。日光、宇都宮……」
染村は、蕩然と、ひとりごとをつぶやいた。
「はい、日光は、宇都宮から十里ほどでございます」
「いや……。わたしはいま上さま御社参のことを考えていたのじゃ」
「上さま？　将軍家のことでございますか？」
「そうじゃ。徳川三代将軍、家光公のことじゃ」
「その上さまが、日光へ？　いつでございます？」
「それは――」
そのとき、スーッと、襖をあけて、宝松院の納所が両手をつかえた。
「――染村さまへ申上げます。ただいま、もと佐渡金山奉行所手代賀来陣五郎なるもの、お目通りを願い出ておりまするが……」
納所は、密封した手紙をさし出した。
「――まず、この書状を御覧願いたいと申しております」
染村は、納所が差し出した封書に、ザッと目を通すと、いかにも大奥女中らしく権威ばった声で言った――
「――賀来陣五郎とやらを、これへ……」

それから、若衆姿の津矢へ、チラッと微笑みかけた――
「小三郎、しばらく、さがっていや……。すぐ用は済むほどに、遠くへ行ってはなりませぬぞ」
やがて、染村ひとりの座敷へ、旅姿の陣五郎が案内されて来た。
「賀来陣五郎とはそなたか？　わたしが、染村じゃ」
「本多佐渡守さまのお使いで参りました」
「そのことは、書状で読んだ。そなた、もと佐渡金山奉行所手代とのことじゃが、いつから佐渡どのの家臣になったのじゃ」
「まだ、仕官はしておりませぬ。わたくしは墨染の少将のために佐渡ヶ島を追われる身となり、本多家の食客となりました」
「家臣も大勢いように、佐渡どのは、なぜ食客のそなたを使いにしたのであろう？　わたしは、そなたを信じてよいのであろうか？」
「本多家の家中の者が動けば、人目につきやすうございましょう。また、本多家のものが、密々にてあなたさまにお会いしたとわかれば、なにかとうるそうございましょう。よって、佐渡さまは、かかわりのないわたしを選ばれたのです」

「わかった……。わたしは、そなたを信じましょう……」
染村は、手まねきをして、陣五郎を膝近く呼び寄せた。
「佐渡どのの御用は？」
「上様日光御社参の正確な日取りを伺って参れとの御命令です」
「ほう、佐渡どのは、まだ御存知なかったのかえ？」
「老中よりの報せが参りませぬ」
「臆病者揃いの、若年寄は、上様江戸お立ちの直前まで伏せておく積りであろう。御発足は、二月十二日の御予定じゃ」
「では、宇都宮城御宿泊は、十四日でございますな」
「十六日は神君家康公の月例祭日じゃ。よって、十五日早朝宇都宮を発し、同夕刻日光着。十六日の例祭に臨まれる御予定じゃが……」
「フフフ……、その例祭には出られますまい……」
「これ……」
染村は、ハッと陣五郎の言葉を押えた。
それからしばらくして、陣五郎が帰って行くと、染村は、せわしげに手を叩いた。
「――小三郎！　小三郎はいやらぬか……」
が……、その小三郎――お小姓姿の津矢は、二度と、染村の前には現われなかった。
それどころか、染村が坐っている客殿の床の下で、――けッ……と、男のように舌打ちをしていた。
「――将軍の宇都宮泊りは十四日か……。おっと、陣五郎をこのまま帰しちゃまずいな。よーし、やっつけてやろう……」
宝松院を出た賀来陣五郎は、増上寺の松林を抜け愛宕下へ急いでいた。――虎ノ門へ出る積りだったのである。
一月末の増上寺境内は静かであった。
わけて今日は御代参日……。まだお使いの染村が宿房宝松院にいるので、通行止めになっているのか、一般参拝者の姿もない……。
その陣五郎の目に、花やかな姿がうつった。――松林のはずれに紫ぼかしの大振袖を着た小姓がひとり立っていたのである。
津矢であった。
が……、陣五郎は、津矢の顔を知らない。――その上、場所が悪かった。
芝神明は、すぐ近くである。――神明のさかり場には、増上寺始め子院末寺の僧侶の相手をする蔭間――

色若衆が大勢巣食っている。
「――ふン……、坊主を呼び出しに来ているのだな……」
陣五郎は、津矢を蔭間のひとりとカン違いして、ジロリと横目で睨んで、通り過ぎようとした。
と……、津矢も、ふンと、鼻の先きで笑った――
「――田舎侍め……」
陣五郎が、キッと振返った。
「これ……、わしのことか！」
「ひとりごとだ」
「なにッ！」
若衆に似げない乱暴な言葉に、思慮の浅い陣五郎は、カーッとのぼせあがった。
「辺りにひと影はないぞッ。わしのことを笑ったのであろうッ」
「だったらどうした。おかしいものを見れば笑う。おれの勝手だッ」
「おのれッ！　おれがおかしいかッ」
「おかしいから笑ったのだ」
「なにがおかしいッ」
「そのまッ赤な顔がおかしいのだッ」
「ぬかせッ！」
陣五郎は、夢中で刀を抜いていた。
「ハッハッハ……、おれを斬る積りかッ。笑わせるない、山猿めッ」
優しい姿からはとても考えられぬ悪口に、陣五郎は既に前後の判断を失っていた。
「――とおーッ」
殴りつけるような一刀……。
が……、ヒラリと体をかわした津矢は、サッと松林から飛び出すと、クルリと陣五郎の方を向いてペロリと舌を出した。
「――ま、待てッ」
陣五郎は、刀を振り廻して走った。津矢は、派手な振袖と袴の裾を翻して逃げる……。
いつか、山門脇を走り抜け、方丈へ近づいていた。
そこで、突然ピタリととまった津矢が、グイッと、陣五郎へ指をつき出した。
「おいッ！　どこだと思うッ。殺生禁断の増上寺境内で刀を抜いたなッ」
「げッ！」
ガク然とした陣五郎の耳に津矢の声が響いた。
「――おーい、出てこーい！　狼藉者だーッ」
津矢の大声に、陣五郎は慌てた。

「――しまった！」
が……、遅かった。既に、方丈から、手に手に長い棒を持った若い僧侶が七、八人駈け寄ってくる。
それだけではなかった。近くの子院や末寺からも、僧侶や寺侍が飛び出して来た。
「はかりおったなッ！」
陣五郎は、若衆姿の津矢に、歯をむきだした。
だが、ぐずぐずしてはいられない。――殺生禁断の増上寺境内で刀を抜いたことは、なんといっても大失敗であった。
野鳥をうち落しても、重い科はまぬがれぬ。まして、人を斬ろうとしたのだ。捕まれば、足腰を叩きのめされた上、寺行奉行の手へ渡されるであろう。
「お、おぼえておれッ！」
陣五郎は、役にもたたぬことを喚くと、ダッと、山門の方へ走った。
「――逃げるぞーッ！　狼藉者は、山門へ逃げるぞーッ」
津矢が、大声で叫びながら陣五郎を追いかけた。
陣五郎は、ツンのめるように走り続けた。
が……、やっと辿りついた山門で、ギョッと立ち止まった。――六尺近い大坊主が、ころもの袖をたくし上げて背中で結び、六尺棒をかまえて立っていたのである。
「――違う！　違う……。おれは狼藉者ではないッ」
「刀を捨てよッ」
「間違いなのだッ。見逃してくれッ」
「直参か、陪臣かッ？」
「お、おれは……、浪人だッ。だがッ、御代参染村さまに用があって来たのだッ」
「黙れッ！　御代参の奥女中が、寺で浪人者などに会われる筈はないッ。神妙にせよッ」
「糞ッ！　デク坊主ッ！」
短気な陣五郎は、無謀にも刀を振り廻して飛びかかって行った。
ピシッ……、陣五郎は、右肩へ、すさまじい一撃をうけて、山門の外へ、はじき飛ばされていた。
このとき、数人の女が、バラバラッと駈け寄って来なかったなれば、陣五郎は、その頭上に第二撃をうけていたかもしれない。
「――静まれッ！　静まれッ！　御代参染村さまのお行列先きでございますぞッ……」
御殿女中風の女達が、口々に叫んだ。
「は！　御無礼いたしました……」

大柄な僧侶は、六尺棒をうしろに投げ捨てると、山門の前で両手をついた。

おかげで、陣五郎は命が助かった。——夢中で走り続け、神明前の裏町へ逃げ込んだのである。

「——ちぇッ！　運のいいやつだ……」

津矢は、見え隠れに陣五郎を追い続けた。

そのあとを、染村の行列が、静かに通り過ぎて行った。——染村は、小姓小三郎に逃げられて、ひどく不機嫌であった。

恋情駕籠

「——どうしたものであろう？　陣五郎の戻りが遅いが……」

既に、一月もあと二、三日を残すのみとなった。が……将軍社参の日取りは、江戸表の老中からも報せが来ないし、密使として派遣した賀来陣五郎も戻って来ない。

宇都宮城内では、本多佐渡守が苛々としていた。

「染村どのに、会えないのでしょう」

答えているのは、まだ半面に、うっすらと黒痣を残した家老の熊取内膳である。

「そんな筈はない。わしが書状を持たせたのじゃ、直接会えずとも、返書はうけとれる筈じゃ」

「では、染村どのも、将軍家社参の正確な日取りを知っておらず、返事が出来ぬのでしょう」

「いや、決定すれば、御台所やお手付きの中臈にはすぐ話がある。表使いの染村の耳に入らぬ筈はない」

「とすると、いまだ日取りが決定していないのではありますまいか？」

「しかし……、もはや月末じゃ。表沙汰にはなっておらぬが、内定はしていると思う」

「残るところは、ただ一つの場合しか考えられませぬな。陣五郎の身に、なにか変事があったということになります」

佐渡守は、渋い顔をした。——賀来陣五郎を江戸へ行かせたのは佐渡守自身である。誰を責めることも出来ない。

「第二の密使を立ててみましょう」

「うむ……。日取りを聞き出すと同時に、陣五郎の動静も調べさせねばなるまい。誰をやる？」

「千々輪のお浅どの……。お浅どのなれば、大奥への出入りは自由です。わたしなら、最初からお浅どのを江戸へ送ります」

「わしを責めるのか？」

佐渡守は、苦が笑いをした。

「内膳、そちの受持ちはどうじゃ、釣り天井の工事は進んでいるのか？」

内膳は、ちょっと、頭を押えた。

「残念ながら、遅れております。が……、将軍宇都宮入りの日がわかれば、それに間に合うよう、昼夜をわかたず働かせ、是が非でも仕上げさせます」

その頃、中禅寺湖畔、華厳の滝を眺める明智平の岩蔭では、そぞろ歩き姿の墨染の少将が、毒消売り姿に身をやつした真弓と話していた。

「御社参は、来月十二日江戸御出発、宇都宮泊りは十四日でございます」

「間違いはないか？」

「津矢が、大奥女中の染村と賀来陣五郎の密談を聞きました。陣五郎は、佐渡守の密使でございます」

「陣五郎は、それを佐渡守へ報せたか？」

「肩の骨を折り、江戸の安旅籠で寝込んでいましたが、今日辺りは千住を越えているかもしれませぬ。津矢と深雪がツケています」

真弓は、おかしさを噛み殺すような表情で少将を見上げると、言葉を続けた——

「賀来陣五郎が肩の骨を折ったのは、津矢のためです」

「津矢が陣五郎を打ちこんだのか？」

「いいえ、打ったのは増上寺方丈の番僧ですが、そうしむけたのは津矢です」

真弓は、増上寺宝松院に於ける御代参染村と津矢の出会いから、陣五郎の訪れ、増上寺境内での陣五郎の不覚の抜刀を詳しく物語った。

「ハハハ……、津矢もなかなかわるさをするのう」

「津矢は伊豆の金山育ち。ときどき、わたくしも手を焼きます。やはり、江戸育ちの深雪や一枝とは違います」

少将はニコニコと真弓の話を聞いていたが、突然、眼下の大谷川を指さした。

華厳の滝は、まだなかば以上凍結しているが、それでも、大谷川は、いくらか水かさを増していた。

その河原を、若い三人の女が歩いている。——木野と千里と三輪である。千里だけが、裾をからげて、ザブザブと、雪解けの冷たい流れの中を歩いていた。

「あの三人もそうじゃよ。江戸育ちの木野と三輪はおとなびているが、佐渡ヶ島育ちの千里は向う見ずで、

荒々しい。が……、三人が三人共、なにか異ったものを身につけている。木野は思慮深く、千里は勇気を持ち、三輪は仁愛に富んでいる」

楽しげに語る少将の言葉を聞いていた真弓が、ハッと顔をあげた。

「御前！　では、木野どの達三人は……」

「うム……、そなたの妹分じゃ」

「確かでございますか!?」

「確かじゃ……。わしは、三人が湯へ入っているとき、それぞれの守り袋を調べた」

「では……、揃ったのですか！」

「揃うた……。わしの手に木野、千里、三輪……。そなたのところに深雪、津矢、一枝……。いまは二タ手に別れているが、やがて、一体となる」

「あー、ようございましたなア……」

「よかった……。神鏡の不思議な力によって、相引き、相呼ばれて集まったのじゃ……。おう、そう言えば、一枝はどこにいる」

「宇都宮に潜入しております。城の出入を見張り、わたくしと津矢、深雪との連絡をとるのが役目です」

ところが、その一枝は、宇都宮にはいなかった。

――日光街道栗橋宿と幸手宿の間を、江戸へ向って小走りに急いでいたのである。

一枝は、巡礼の姿をしていた。

その一枝のうしろから、二丁ほど遅れて、千々輪のお浅を乗せた駕籠が行く。――駕籠脇には、相変らず黒太夫が寄り添っていた。

「――はてな……」

黒太夫が、ヒョイと、首を傾げた――

「あの女巡礼、宇都宮を出たときには確かうしろから来たが、いつの間に前へ行ったのかな？」

「――巡礼がどうかしましたか？」

お浅が駕籠の中から、黒太夫にたずねた。

「どうも変ですぜ。昨日宇都宮を出てからあとか先きかに、必ずあの女巡礼が見えてるんでさア」

「気のせいでしょう……。このところ半歳余り、女の子にいじめつけられているので、つい気になるのですよ」

すると、お浅を乗せていた駕籠屋二人がニヤリと笑った。

「――お供の旦那、女の子にいじめ続けられてるたアうらやましいですねエ。酒手をはずんで貰いますぜ……」

「けッ！　そんなじゃねエや……」

全く黒太夫にとっては、浮いた話ではなかった。

――黒装束四人組……。それに少将をとりまいている木野、千里、三輪……。その誰からも、黒太夫はひどいめに合わされている。

この頃では、若い女を見ると、ギョッとする……そんな黒太夫だった。

やがて、幸手を過ぎ、古利根を渡ると、道が二ツに別れる。

右は岩槻廻りで王子から江戸へ出る御成り街道。左は粕壁から千住を回って江戸へ入る日光街道である。

「――おッと、駕籠屋。左へ左へ粕壁へ行ってくれ……」

「でも、今夜は岩槻泊りのはずじゃなかったのですかい？」

「いいんだ。粕壁泊りに変えたんだ……。ねエ、お浅さま、それでようござんすね？」

お浅は、駕籠の中から前を眺めて、ニンマリ笑った。

「黒太夫どの……よほど怖ろしいと見えますな……」

そういうお浅の眼は、お成街道を岩槻の方へ行く巡礼姿の一枝を見詰めていた。

「お浅さま……わしは長生きしとうございますからな」

「ホホホ……人の定命は五十年。それを思えば、黒太夫どのなど、年に不足はありますまい」

「どっこい……。これからですわい。せっかくここまで漕ぎつけたあと一歩で、わしも大名暮しができる。フフフ……」

その黒太夫の笑いの中には、お浅に対する執念深い恋慕がかくされている……。

ところで、その夜……。

岩槻へ向ったはずの一枝の姿が粕壁とは川一ッ隔てた八丁目村の不動院に現われていた。

「――ほう……これは一枝どの、巡礼とは変った姿じゃのう……」

出迎えたのは、院主西光坊天道だった。

「千々輪の後室と黒太夫が江戸へ向っております。その目的を知るために、つけて来ました」

そのとき、うしろから声を掛けたものがあった――

「――おい、一枝！　どうしてここへ来た？」

珍しく武家娘姿の津矢だった。

「――津矢どのこそ、どうしてここへ？」

「おれ、賀来陣五郎を追いかけて来たんだ」

すると、西光坊天道が、カラカラと楽しそうに笑っ

た。

「――相変らずだな、津矢どの……。入ってくるなり、挨拶もせずに、男のような言葉を吐き続ける。その武家娘風の旅姿が泣くぞ」

「いやなんだよ、院主さま。こんな着物を着ていると窮屈でしようがないよ」

一枝が、津矢にたずねた。

「――賀来陣五郎は、粕壁に泊っているのですか？」

「うン……、本陣の高砂屋へ、大きな顔をして泊りやがった」

「千々輪の後室と、黒太夫も粕壁泊りです。同じ宿かもしれませんね」

「へエー、お浅と黒太夫もかア……」

それから津矢は、ニヤリと笑った。

「深雪がビックリしてるだろう」

「深雪どのは、どうしているのです？」

「この前、佐渡守が宇都宮へ行くとき、深雪は女中に化けて住みこんでたから、高砂屋の様子をよく知っている。だから、庭へ忍びこんで、陣五郎を見張っているのだ」

事実、高砂屋の庭へ忍びこんだ深雪は、意外なお浅と黒太夫の登場に驚いていた。

「――困った！　これでは、手筈をかえねばならぬ……」

深雪と津矢が、日光中宮祠の少将のもとへ急ぐ真弓からうけた手筈は、陣五郎を不動院の土蔵へ閉じこめることだった。

「――わたし達が力を合わせれば、陣五郎の命を奪うことはたやすい。が……、殺すよりも、陣五郎を使って、佐渡守の計画をゆさぶろう……。もし、二月七、八日まで陣五郎を閉じこめておいて放せば、陣五郎は早駕籠を飛ばして宇都宮へ帰るであろう。そして、初めて将軍家の江戸出発を十二日と知れば、佐渡守は慌てるに違いない。それに乗じて、宇都宮藩の息の根を止める手を打つことが出来る……」

これが、真弓の計略だったのである。

ところが、お浅と黒太夫が高砂屋へ現われた。二人は当然、陣五郎から将軍社参の日取りを聞くことであろう……。

「――おい……、深雪……」

そっと、津矢が、深雪に忍び寄って行った。

「――深雪どの……」

一枝もいっしょである。

「あー、では一枝どのは、千々輪の後室を追っておいでしたか」

「では、やっぱりこの宿へ？」

「泊っています……。手筈が狂いました」

すると、津矢が、ふンと鼻の先きで笑った。

「狂うものか。三人共、不動院に閉じこめてしまえばいいじゃないか。院主さまに頼んで来たよ」

一方、座敷では、お浅と黒太夫を前に、陣五郎が肩を押さえ、顔をしかめていた。

「ひどいめに会った。肩の骨が折れたのだ。しかも、その後もおれは、誰かにツケられてるような気がしてならぬのだ……」

それから、一ッ刻ほど過ぎた。

お浅の部屋から、陣五郎が出て行く……。

「――黒太夫どのも、お引きとり願います」

ニンマリ、ふくみ笑いをしてそういうお浅の顔を、黒太夫が、うらめしそうにながめた。

「いつになったら、追ッばらわれねえで済むんでしょうねエ」

「さア……、そんな日が来るでしょうか？」

「来ますよ。いや、来るようにしてみせまさア。あッしの一念をお浅さまにわからせずにゃ、おきません

ぜ」

「それはもう、ようわかっております」

「わかっていても、追ッばらうんですかい。殺生なおひとだ」

黒太夫は、ギロギロと光る眼でジッと、お浅を見詰めた。

「あッしが、そんなに嫌いですかね？　この黒太夫が、醜男だから、いやなんですかい？」

「ホホホ……、十九や二十の小娘ではあるまいし、いまさら男振りには惚れませぬ。ただこれは女の秘密、いずれ、時が来れば話しましょう。さ、お引きとり願います……」

それからしばらくして、お浅は、ひとり、夜着の中へ入った。

その部屋の外へ忍び寄って、ジッと、中の様子をうかがっている白い影があった。――巡礼姿の一枝である。

と……、どうしたことか、一枝はスッと部屋を離れて、庭へ降りると、トットッと、高砂屋の裏口の方へ行く……。

「――畜生ッ……」

暗がりでつぶやいたのは、黒太夫だった。

「やっぱり、あの女巡礼め、俺たちのあとをつけやがったのだ。今日、岩槻へ行ったはずなのに、ちゃんと、この粕壁へもぐりこんでいやがる」

黒太夫は、ニヤリと笑った。

「――ふン、こんどは、こっちがツケる番だ。女め、いまに、ほえ面かかせてやるぞ……」

黒太夫は、陣五郎の部屋へ飛んで行った。

「――女だ！　追っかけようぜッ」

「黒装束四人組か？　少将に付添ってる女たちか？」

「これが千里なら、お前さん、大喜びだろうが、あいにく、そうじゃねェ。たぶん、四人組の片われだろうよ」

やがて、寝静まった粕壁の宿を出て行く一枝のあとを、陣五郎と黒太夫が、見えかくれに追って行った。宿を出はずれると土橋がある。それを越えると八丁目村……。こんもり、夜空に黒々とそびえているのは、関東山伏の総本山不動院の森である。

「――黒太夫……」

陣五郎が、ささやいた。

「どこまでツケて行くのだ？」

「隠れ家を知りてェんでさ」

「どこまで行くか、わからぬぞ、いっそ、捕まえて、泥を吐かせてはどうだ？」

「それも、ようがしょう……」

不動院の森にかかったとたん、一枝は、うしろから声をかけられた。

「――おい、女ッ……」

呼びかけたのは、賀来陣五郎である。

が……、すぐ、黒太夫が言葉を続けた。

「おのれッ。宇都宮からあとをツケやがって……。うぬの正体はなんだッ？」

「お、おゆるしをッ……」

一枝は、五、六歩、森の中へ逃げた。

だが、黒太夫が、転がるように走って、行くてに立ちふさがった。

不動院の森は暗かった。梢を漏れる星あかりに、わずかに人の姿がみえるだけである。

「言えッ！　少将の手のものかッ、黒装束の一味かッ？」

陣五郎が喚いた。

「わたくしは、関東の霊場を廻る巡礼――」

「黙れッ！　ひッ捕え、素ッ裸にひんむいて泥を吐かせるぞッ」

そう言う陣五郎の声と同時に、ダッと黒太夫が飛び

かかった。

その手を、ぴしッと払った一枝が、動きの素早さには似合わぬ悲しげな声で――

「――あれ――ッ！　助けて――ッ！」

「けッ！　しおらしげなッ。いまの手のうち、ただ者ではあるまいッ」

黒太夫は、腰を落し、両手を拡げて、歯をむき出した。

陣五郎は、一歩さがって、油断なく眼をくばっている。――折れた肩の骨は、まだすっかりとはなおっていない。女巡礼をとらえるのは黒太夫にまかせ、ただ、逃げ道だけをふさぐ積りなのである。

「――女ッ！」

黒太夫は、もう一度、飛びかかろうとした。

と……出し抜けに、大きな男が三人、ぬっと、暗がりから現われた。――いずれも、頭巾、鈴掛の山伏姿、手に手に金剛杖を握っている。

「――馬鹿者ッ！」

山伏のひとりが、大声で怒鳴った。

「よッ！」

黒太夫と陣五郎は、ギョッと、息を呑んだ。

「ここをどこと心得るかッ。関東山伏の総本山、不動院総願寺の寺領内なるぞッ。みだりがましく、女をとらえ、手ごめにせんとする大たわけめッ」

「ち、違うッ！」

黒太夫が、あわてて手を振った。

「こ、この女とは、こみいったいわくがあるんだッ」

「黙れッ！　見れば、女巡礼……。うぬ等は傀儡師と侍姿。かかわりのあるとりあわせではないッ。それッ！」

山伏三人が、サッと、金剛杖を構えた。

「――あッ！　黒太夫ッ……」

陣五郎が、思わず飛びさがった。

――増上寺以来六尺棒を見ると、陣五郎はゾッとするのだ。

が、逃げようとした陣五郎が、グエッと、奇妙な声をあげた。――鬼門の六尺棒が、ピシッと、胸板へ飛んで来たのだ。

「――しまった！」

仰向けざまにそっくり返った陣五郎は、そのまま気を失ってしまった。

その頃、粕壁の本陣高砂屋のひと間へは、不動院の西光坊天道が、数人の荒くれた山伏を引きつれて乗りこみ、千々輪のお浅と会っていた。

「――この深夜、寝所にいるおなごを呼び出すとは、無礼ではありませぬかッ」
寝入りばなを起されたお浅は、不機嫌さをむき出しにして、西光坊を睨みつけた。
「無礼は承知の上でここへ来たのじゃ。お身の連れに黒太夫という傀儡師がいるか？」
「それがどうしたのです？」
「賀来陣五郎と言う男も連れか？」
「黒太夫と陣五郎がなにをしたのです？」
「連れなれば、取調べることがある。八丁目村不動院へ来て貰おう」
「わたしを取調べる？　あなたに、その権力があるのですか？」
「わしは、関東山伏の司じゃ……。不正があれば取調べる」
「それは、山伏だけのことでしょう。わたしは大目付千々輪の後室です」
西光坊天道の眼が、キラリと光った。
「まことか？」
「嘘だと言われますか？」
「その身分を示すものがあるか？」
「江戸へ行けば、わかりましょう」
「では、まず八丁目村へ来て貰わねばなるまい。身分があきらかに出来ずば、真偽のほどはわからぬ……。第一、もと大目付の後室ともあろうものが、傀儡師や素浪人を供にして道中とは、妙な話じゃ」
「供ではありませぬ。道連れです……。いずれにしても、黒太夫や陣五郎が、なにをしたと言うのです？」
「霊場不動院の聖域内にて、女を犯そうとしたのじゃ」
「え!?」
お浅は、呆れて天道の顔を見詰めた。
「二人がかりで、かよわい巡礼娘を手ごめにしようとしたのじゃ」
「え、巡礼娘!?」
――あ――、そうか……、お浅は、胸の中でうなずいた。
「同道願おうか？」
「行かねばなりませぬか？」
「お身が証人にならねば、黒太夫、陣五郎は、捉にようって、江戸寺社奉行へ差し送らねばならぬ」
――これはいかん……。お浅は、とっさに心を決めた。寺社奉行は大久保安芸守と言って、本多佐渡守とは仇敵の大久保一族である。黒太夫や陣五郎が調べられては一大事だ。
「――参りましょう……」
やがて、山伏に取囲まれたお浅の駕籠が高砂屋を出て行くと、築地塀の蔭から、若い女が二人、ソッと姿を現わした。
「フフフ、あいつも土蔵へ放り込まれるのだ」
そういったのは津矢であった。

決闘 いろは坂

本多佐渡守は、天守裏の仮御殿工事場へ出て、黙々と働いている十五人の大工を眺めていた。
既に、外廻りは出来上っている。
「――内膳、仕上りは、いつじゃ？」
うしろに従っていた熊取内膳が、ちょっと困ったようにロごもった。
「まだ、かなりかかるのか？」
「は……、あと、十日ほど……」
「仕上りは、一月末日までと厳しく申し付けておいたのではないか？」
「それが、いろいろと手違いがございましてな」
「手違い？」
「棟梁与五郎を始め、正月以来病人が続出しております……。冷えこみのため、いずれもかぜをひいております。それから……」
「まだ何かあるのか？」
「材木が不足いたしました」
「それはおかしい。木組みにいるだけの本数は、揃えておいたのではないのか？」
「はい、作事奉行を問い質しましたところ、確かに本数は揃えたと申しております。しかし、現場の本数を当りますと、矢張り足りませぬ」
「禁足を申しつけてある大工は持ち出せぬ筈だな」
「はい……。作事方の不正と考え、目下取調べる一方、取急ぎ、不足の分を取り寄せました。このような事情で仕事が遅れております」
佐渡守は、にがい顔をした。――大工の病気は、城内に閉じこめているためかもしれない。また、材料の不足が作事方の不正だとすると、仕上りが遅れていることで、大工を責めることは出来ないからである。
が……、事実は、大工達の病人続出は、棟梁与五郎の計画した仮病であり、材木の不足は、必要な材木を切りきざみ、或は削ってかんな屑にしてしまったことを、内膳は知らなかった。

全ては、工事を遅らせるための与五郎の手段だったのである。

「――将軍の社参が遅れているからよいようなものの、二月上旬であったなれば、一大事だぞ」

「はい……、一体、社参はいつでございましょうな」

「ここ数日中には、陣五郎か、陣五郎が行方不明としても、お浅から報せがあるであろう。いずれにしても、十五日過ぎであろうな」

「そうなれば、大丈夫です。工事仕上りは、十二日いっぱいと与五郎が申しております」

「では……」

佐渡守は声を潜めた。

「十三日には、大工共を斬れ」

「心得ております……。まずそれまでは、根来同心の動きでも見張っておりましょうか」

「うム、一度、中禅寺湖の中宮祠まで行き、途中、彼等の様子を調べてはどうじゃ」

「それはよいところにお心付かれました。本日、早速出かけましょう……」

熊取内膳は、六角十字兵衛始め選り抜きの剣士十人の外に、鉄砲組、槍組それぞれ二十人を従えて宇都宮城を出た。

日光街道見廻りに、こんな人数はいらない。江戸から派遣されている根来同心組に威勢を示すのが目当てであった。

それに、これだけの人数と槍、鉄砲が揃っておれば、黒装束の女四人組も、火事装束五人組も、大して怖ろしくはない。

「――十字兵衛……。やっぱり春じゃなア。同じ冷たい風でも、冷たさが違うている……」

内膳は、馬を並べている十字兵衛に、ノンビリと話しかけた。

「しかし御家老……。冷たい風は、やはり傷口にしみますな」

「そうであろうな……。貴公も、正月早々、飛んだめに会うたものじゃ」

「三度です。墨染の少将を討ち損なったのは、実に三度ですぞ」

「天城峠と佐渡の相川と……」

「江戸の大日坂ですよ。三度剣を合せて、三度勝敗が決せず、今度こそはと思うていたのに……」

「あせるな、いずれ、顔を合す折りもあろう」

「斬る！　他のものは見逃がしても、少将だけは、必ず、拙者が斬りますぞッ」

やがて、一行は、塩谷村へ入った。

「――あ……、そうだ御家老ッ！」

十字兵衛は、ツイッと、内膳のそばへ馬を寄せた。

「この村の庄屋藤左衛門を捕えましょう」

「庄屋を!?」

「左様……。少将が正月に身を隠していたのは、藤左衛門の屋敷です」

「それは駄目じゃよ。藤左衛門は、正月五日、御用始め早々、墨染の少将一行が元日の朝訪れ、半日休息して夕刻前に立ち去った……と届を出している」

「それは、逃げ口上だ。拙者が泥を吐かせます」

十字兵衛は、庄屋の門前で馬をとめると、不自由な足をひきずるようにして、中へ入って行った。

「どなたさまでございましょう？」

玄関へ、十字兵衛を迎えたのは、スッキリとした武家風の娘であった。

「本多家見廻隊のものじゃ。藤左衛門はいるか？」

「ただいま、不在でございます」

「嘘を申すと、ためにならぬぞッ」

「嘘は申しませぬ。根来同心組頭、成瀬大学さまの御用で、中禅寺中宮祠へ行ったのです。どんな御用か、それは存じませぬ」

「中宮祠!?　わし達も、明日は中宮祠どまりじゃ、嘘なれば、すぐバレるぞッ」

「嘘か真か、今市の根来同心屯所でおたずね下さい」

出て行く十字兵衛を見送った娘が、低い声でつぶやいた――

「いけない！　早く御前にお報せせねば……」

連絡に来ていた三輪であった。

その夜は、今市泊り……。

熊取内膳一行は、本陣住吉屋へ宿をとると早速、丸に本の字の幔幕を玄関にはった。

とたんに、バタバタッと駈け寄って来たのは、総髪姿で鉄砲をかついだ根来同心三人である。

「――お支配頭ッ！　お支配頭はどなたじゃッ」

根来同心のひとりが、大声で怒鳴った。

「公儀御派遣の根来同心組太田八十郎、お目にかかりたいッ」

「御用は、なんだッ？」

玄関に、ヌッと現われたのは、六角十字兵衛だった。

「幔幕によれば、貴公方は本多家の御家中か？」

「左様……。家老熊取内膳どのが、お泊りになっている」

「幔幕を、とって頂きたい」
「馬鹿なッ！」
十字兵衛のこめかみに、みるみるみみずばれのような血脈が浮かびあがった。
「根来衆は武家の作法を御存知ないとみえるな。定紋打った幕は、戦場に於ける旗印も同じこと、一度掲げた以上、とりはずすことは出来ぬわッ」
「では……、後ほど、いかなるおとがめがあっても、かまいませぬな？」
「おとがめ!? 誰の？」
「言うまでもなく、公儀の……。ちょっと、表へ出て、あれを見ていただきたい」
十字兵衛は、ムスッとした表情で本陣の外へ出ると、太田八十郎が指さすところを眺めた。
とたんに、十字兵衛は、——あッ……と、声を呑んだ。——本陣住吉屋につづく脇本陣たまやの玄関に、将軍家の紋章三ツ葉葵を染め抜いた幕が張ってあったのである。
「——家来の本多家の幔幕が本陣へ、将軍家の御幕が格下の脇本陣へ……。これで、よろしいですかな？住吉屋は風上、たまやは風下。本多家の幕をあおった風が、将軍家のお幕へ吹きつけますな……。これは、いかがですかな？」
「さ、さき程は、たまやに幕など、はってなかったッ」
「お黙りなさいッ」
太田八十郎は、キッと、十字兵衛を睨みつけた。
「われ等根来同心隊は、公儀御用にて半月前からたまやを宿舎となし、街道筋の警戒に当っています。お幕は、昨日今日はったものではござらぬッ」
十字兵衛は、歯ぎしりをした。
——いやがらせだとわかっている。が……、それがわかっていても、将軍家の幕の上席に、本多家の幕をはるわけにはゆかぬ……。
「——とれッ！ 幕をはずせッ」
十字兵衛が、いまいましそうに配下を怒鳴りつけた頃、三輪は、夜道をかけ、中禅寺湖畔の中宮祠へ急いでいた……。
三輪が、中宮祠へ駈け込んだのは、暁け方近くであった。
「——ほう……、熊取内膳と十字兵衛が来るのか？」
「剣士十人、鉄砲、弓、それぞれ二十人を連れております」
「来れば、当然、この中宮祠に入って来ることであろう」

「どのように用心したところで、わしには成算がある」
「御前……、万一と申すことがございます。本日のところは、この老人におまかせ願います」
「では、どうするのじゃ？」
「この中宮祠より西北三里のところに、中禅寺八湯があります。それへ御案内いたします」
それから一刻ほどして、少将が木野、三輪、千里の三人を連れ、赤羽宗円の案内で、雪の降り積った中禅寺湖畔から赤沼ケ原を通り過ぎる頃、熊取内膳の一行は、日光東照宮前を過ぎ、いろは坂へかかっていた。
と、そのとき、騎馬武者五騎が、くつわを並べて、追いついて来た。
「——しばらく……」
内膳の脇を駈け抜け、前へ廻ったのは、ひとめでそれとわかる根来同心である。
「いずれへ行かれる？」
「それを、貴公等に言わねばならぬのかッ!?」
内膳よりも先きに、十字兵衛が喚き返した。——昨夜の幔幕以来、むしゃくしゃしていたのである。
「われ等、日光街道取締りの根来同心組だ」
「小耳に挟みましたが、十字兵衛は、今度こそ御前を……と、申しています」
「そなた、顔を見られたのか？」
「はい……、塩谷村の庄屋の屋敷で、応対をしたのはわたくしです」
「よくそれで、中宮祠職の供をして宇都宮城へ行った巫女と気どられなんだな」
「わたくしが応対したのは十字兵衛です。あの頃、十字兵衛は、大怪我をして伏せておりましたから、わたくしとは初対面です。それより御前、どうなさいます」
すると、サラリと、横の襖をあけて、社務職の赤羽宗円が出て来た。そのうしろに、木野と千里が控えていた。
「御前、一応、当所をお立ちのき下さい」
「わしは、逃げねばならぬとは思わぬ。ここで顔を合せば、あわてるのは内膳や十字兵衛であろう。まさか、日光山領内で、墨染の少将をなぶり殺しにも出来まい」
「いや……、たとえここでは何もせず引揚げて行きましても、当然用心をし、護りをかためることでしょう」

「知っているッ。われ等も街道巡視の宇都宮藩士だッ」
「奇ッ怪！　公儀直命によって、当街道の取締りは根来組の使命……。徒党を組んでの往来はまかりならぬッ。飛び道具の携行は禁止だ。鉄砲、弓は没収する」
「なにッ！」
十字兵衛は、握っていた鞭を、ピシリッと、相手の横面へ振り落した。
「――無法ッ！」
根来同心は、危うく鞭をかわした。
「名乗れッ！　また家来の宇都宮藩士が、公儀御用の根来組に狼藉するのかッ」
「ぬかせッ！　その御用づらが気に喰わぬワッ」
十字兵衛が、二度目の鞭を振りあげた。
が、一瞬早く、相手の鞭が、十字兵衛の馬の鼻ッ面をひっぱたいていた。
馬が竿立ちになった。
「――かかれッ！　かかれッ！　相手は小勢だぞッ」
十字兵衛が、馬を取り静めながら喚いた。
十人の剣士が、一斉に抜刀して根来同心の五騎を取り巻く。
一瞬の出来事だった。
突然の変事に、茫然としていた熊取内膳が、やっと気がついた時には、剣士のひとりが、馬上の根来同心から斬り下げられていた。
――しまった！
内膳は、心の中で叫んだ。
――こんなことで、ことを荒立てたくはない……。将軍社参前に主人佐渡守が責任を問われ、江戸表へ呼びつけられるようなことにでもなったら、全ての計画が水の泡になってしまう……。
が……、こうなっては、もうどうにもならない。
内膳はとっさに心を決めた。
「――討てッ！　討ちとれッ、ひとりも逃がすでないぞッ……」
根来同心五人を斬り伏せて、死骸を隠し、しばらくの間、素知らぬ顔をしよう……、そう決心したのである。
「――鉄砲は射つなッ。弓組前へ出ろッ。馬を狙え、馬をッ」
内膳の指揮は、適切であった。根来同心の馬は、次ぎ次ぎに矢を浴びせかけられ、狂い立って、騎手を振り落した。
「――無念ッ！　無念ッ……」

いろは坂を血に染めて、早くも三人、根来同心が倒れ伏した。――落馬したところを、折り重なって、斬りきざまれたのである。
残る二人は、傷ついた馬をかばいあい、背中を合せて、血刀を構えていた。
「――どけッ！」
十字兵衛が、馬から降りて、前へ出た。
「おれの名を名乗れと言うたな……」
そう言う十字兵衛の口許には、残酷な笑いが浮かんでいた。
「天下の副将軍本多佐渡守家臣――」
「ふッ、副将軍!?」
手負いのひとりが叫んだ。
「ふン……、数日後には、そうなるのだ。わしは六角十字兵衛、おぼえておけッ！」
叫ぶのと同時に、キュッと腰をひねると、十字兵衛の隻手は刀を振り廻していた。
どこをどう斬ったのか、二人の根来同心は、トントンと左右に別れ、パッタリ倒れた。
「――死骸をとりかたづけろッ……」
熊取内膳が命じた。
「穴を掘れ……。うまく土をかぶせて、人目につかぬようにするのじゃ」
「御家老……」
十字兵衛が、内膳を見た――
「味方にも、死人が三人、手負いが七、八人ありますぞ」
「死人は、別の穴を掘って埋めろ。いずれ、忠長卿の御代となれば、あらためて手厚く葬うことにする。手負いは、今市宿で、ひそかに手当を受けさせる」
「中宮祠には、行かぬのですか？」
「引返そう……。万一、日光山領内での殺傷沙汰を気取られてはまずい」
やがて、死骸をとりかたづけると、内膳は残りの人数を取り纏めた。
「――よいか……。絶対に他言無用ぞ……。時到る前に、このことを漏らせば、命を失うものと思えッ」
こうして、熊取内膳一行は、早々にいろは坂を降りて行った。
「――御家老……、いずれ、根来同心共が騒ぎ出しますぞ」
今市の本陣住吉屋へ引揚げた十字兵衛は、となりの脇本陣にはり回らしてある三ツ葉葵の幔幕を眺めて、小気味よげにささやいた。

「――フフフ、いくら騒いでも、死骸はみつからぬ。五人がしめし合せ、脱走したということにでもなろうよ」

ところが、根来同心五人の死骸を埋めた穴の上に、大きな丸石を建てているものがあった。――喜平太である。

やがて喜平太は腰の矢立てをとると、筆を走らせた。

――根来塚……。

墨黒々とそう書きつけたのである。

その夜、墨染の少将は、奥中禅寺の湯室で、喜平太からいろは坂の出来事を聞かされた。

「――喜平太、その五人の同心を助けることは出来なんだのか？」

「わたしがいろは坂にかかった時には、既に五人は斬り伏せられておりました。しかし、たとえひと足早く行ったとしても、助けることは難かしかったでしょう。何しろ、鉄砲、弓を揃えているのですから」

「可哀そうなことをした。が……公儀御用の根来同心を斬るとは、愚かなことをしたものじゃ……」

少将は、手を鳴らして、木野、三輪、千里の三人を呼んだ。

「これから、いろは坂へ行く、支度をせい」

「御前！」

喜平太が、驚いて前へ出た――

「なにをなさるのです？」

「根来同心五人と、佐渡守の家来三人の死骸を掘り出す。八人の片袖を切り取って、佐渡守反逆の証拠にする」

喜平太が、ポンと膝を叩いた。

「なる程……。御案内いたします」

風雲日光颪

二月五日、将軍は突如として江戸を出発し、日光へ向った。

――不逞浪人の横行甚だしきにより、御社参の日程は臨機に変更せられるものなり……。

老中からは、こう発表された。

とにかく、その前日の四日亥の刻（午後十一時）老中首席井伊掃部守は御供先の第一陣として江戸を発し、その後、一刻おきに、阿部備中守、安藤対馬守、板倉伊勢守、松平周防守とそれぞれ同勢を引きつれて出発、将軍家光が江戸城を出たのは白々明けの卯の上刻午前六時であった。

「――しまった！」

慌てたのが、大奥表使いの染村である。

本多佐渡守の密使賀来陣五郎には、将軍の江戸出発は十二日と言ってある。佐渡守は、その積りで準備しているであろう……。

そう考えると、気が気ではなかった。

が……、今となっては、どうすることも出来ない。

――佐渡どのの陰謀は、破れるかもしれぬ……。

染村は、大奥の一室で、ジッと唇を噛んだ。

将軍は今宵岩槻城泊り……。先鋒の井伊掃部頭は、四里八丁先きの幸手まで行く予定である。

が……、その井伊家の同勢より遥かに先きを、矢のように馬を走らせて行く男袴の女が四人……。真弓を先頭に、深雪、一枝、しんがりは津矢であった。

四人は、馬を乗り次ぎ、昼過ぎには古河を過ぎ、そこから間道に入って、鹿沼、文挟を走り抜け、夕刻には、今市の宿に入った。

「――とまれッ！」

突然、鉄砲を構えて、四人の前をふさいだのは、今市脇本陣から飛び出した根来組の同心数人であった。

「――や、女だなッ。馬を降りて名を名乗れッ」

同心のひとりが叫んだ。

「――日光中宮祠ゆかりのものッ。先を急ぎまする。お通し下さいッ」

真弓が、馬上から叫び返した。

「ならぬッ！　将軍家御社参相済むまでは、怪しい者の日光入山は許されぬッ。馬を降りよッ」

「その御社参について、中宮祠社務職への急使でございます。上さまには、今朝江戸城御発駕になりましたッ」

「なにッ！　本日御出駕ッ!?」

同心達は、顔を見合せた。

「いよいよ以て怪しいやつ！　街道警護のわれわれでさえ知らぬことをどこで聞き込んだッ」

「そ、それはッ……」

すると、気の短い津矢が、苛立たしげに叫んだ。

「――姉さまッ。蹴散らして行こうッ」

と、その時――

「――静まれッ！　騒々しいぞ」

脇本陣から出て来たのは組頭成瀬大学だった。

「――そなた、真弓どのかッ？」

成瀬大学の言葉に、真弓達四人は、ハッと顔色を変えた。

「わしは、根来同心組頭成瀬大学だ。墨染の御前とは、中宮祠で幾度もお会いし、そなた達のことは聞いているぞッ」
「はア……」
真弓が、パッと、馬から飛び降りた。続いて、深雪、一枝、津矢の三人も降りる。
「――真弓でございます。これにおりまするは、深雪と一枝――」
「四人目は、暴れン坊の津矢どのであろう」
「恐れ入ります」
「上さま御発駕とは、まことのことか？」
「はいッ。今朝卯の上刻、江戸をお離れでございます」
「疑うわけではないが、間違いではあるまいな？」
「御供先井伊掃部頭さま、すでに幸手の宿へおつきの頃と存じます。二番手阿部備中守さま、三番手安藤対馬守さま、お行列、確かに拝見いたしました」
「わかった！」
成瀬大学は、うしろにいる配下を振返った――
「かねて申した通り、直ちに配置につけッ。くれぐれも、本多家中にさとられてはならぬぞッ……」
「承知ッ！」
配下の同心達は、バラバラッと脇本陣の中へ駈け込んで行った。
「真弓どの、墨染の御前もお待ちかねであろう。急げッ」
「行っても、よろしゅうございますかッ？」
「勿論じゃッ」
「有難うございますッ」
真弓達四人は、再び馬へ飛び乗った。
「あ――、真弓どの。御前へ、こう申上げてくれ。根来同心隊、既に行動を起しましたとな」
「はいッ、申上げます。御免ッ……」
四人の鞭がなった。――今市から日光へ……。日光から中禅寺へ！
その頃、宇都宮城の大手門へも、本多家上屋敷からの早打ちが二人転がるように飛び込んで行った。
「――な、なにッ！　将軍が江戸を出たッ!?」
熊取内膳は、愕然として、佐渡守の居間へ駈け込んで行った。
「――まことかッ!?」
夕食の膳に向い、異国の酒を楽しんでいた佐渡守は、手にしたギヤマンの盃を、パッタリ落した。
チャリーン……と、盃が、不吉な音をたてて砕け

た。
「内膳ッ！　仮御殿は間に合うかッ？」
「ご、御殿は出来まするッ。し、しかし、釣り天井は、十日過ぎの予定でございますッ」
「急がせろッ！　大工を休ませるなッ」
佐渡守は、ギリギリッと歯噛みをした。
「――馬鹿めッ！　賀来陣五郎ッ。千々輪のお浅ッ。黒太夫はなにをしているのじゃッ」
「――殿ッ……」
熊取内膳が、佐渡守の身辺に行って声を潜めた。
「釣り天井の仕掛は、急がせます。将軍がこのお城へ入るのは明後日の夜……。それまでには、間に合うように仕事をやらせます」
「しかし、昼頃には、先鋒の井伊が、検分にやって来るぞ」
「大工共は、今明日、一睡もさせません。しかし、どうしても間に合わぬ折りにとるべき手段として、二つの道があります」
「言えッ。第一は？」
「行きは見送り、帰りを狙います。当城泊りが七日の夜。八日は日光泊りで、帰りの当城入りは八日……。これなら二日延びます」
「いかん」
佐渡守は激しく頭を振った。
「士気にかかわる。飽く迄も狙うべきは明後日じゃ」
「では第二の道……釣り天井が間に合わぬ場合、仮御殿の床下に火薬を仕掛けます。幸い、天守に納めてある異国の火薬は、少量にても強力……。検分の掃部頭も、よも気付くことはありますまい」
「仮御殿もろ共、吹き飛ばすか……」
佐渡守が、じっと考えこんだ。
その頃、中禅寺湖畔の中宮祠に駒を乗りつけた真弓は、深雪、一枝、津矢の三人を表に残し、あわただしく、奥の間へ駈け込んで行った。
「――将軍家が御出発!?」
少将が驚いてたずね返した。
「はいッ！　十二日の御予定が七日繰り上がりました。宇都宮御入城は、明後日です。どうなさいます!?」
「――どうしよう……と、慌てるのは佐渡守の方じゃ。われ等の方策は決まっている。まず、根来同心の成瀬に報さねばならぬ」
「それなれば、来る途中、今市でお会いしました。

――根来同心隊は既に行動を起したと御前へお伝えするようとのことです」
「そうか！　では、わしも下山せねばならぬが、その前にせねばならぬことがある」
　少将は手を叩いて、喜平太を呼ぶと、違い棚から、紙包み二つと、風呂敷包み一つを取り出した。
「喜平太、直ちに、この品々を持って山を下り、明日、井伊家の行列へ駈け込め」
「この風呂敷包みは、いろは坂で斬られた根来同心と本多家の家来の片袖でしょう」
「そうじゃ。それから、紙包み。一つは、釣り天井を仕掛けた仮御殿の絵図、もう一つは、天守に隠してある火薬の見本じゃ。この三品こそ、佐渡守反逆の動かぬ証拠……。墨染の少将よりの密使と名乗れッ」
「わかりました。夜道をかけて急ぎます」
　喜平太が、三品を持って出て行くと、少将は真弓を見詰めて、ホッと溜め息をついた。
「――真弓、いよいよ時が来たぞ、わしも墨染の少将高平の仮面を脱ぐ。場所は、華厳の滝壺じゃ……」
　真弓は、深雪、一枝、津矢の三人を連れて、華厳の断崖を、滝壺へ降りて行った。
　滝は、まだ凍結していたが、春の走り水は、サヤサヤと氷壁を流れていた。
「ヤッ……、木野ッ……」
　津矢が叫んだ。
　滝壺の傍らに、木野、千里、三輪の三人が立っていたのである。
「おいッ、やるか……」
　津矢が、木野の前へ行って、さしている刀の柄を、トンと叩いた。
「――津矢……騒々しい……」
　真弓は、津矢を押えて、木野の前へ行った。
「木野どの、わたし達のこと、御前から何かお聞きになっておりますか？」
「いいえ……。ただ、なんとなく、わけがあることと思うていました」
「わたし達は、このようなものを、一つずつ持っております」
　そういうと、真弓はふところをさぐって紫の袱紗包みを取り出し、手の上で、パラリと拡げた。
「あッ！　御神鏡ッ」
「はい……、これは、地の御鏡です」
「わたしも持っております……」
　木野も、紫の包みを取り出した。

「これは、木の御鏡と聞いております」
「わたしも、持ってますよッ」
　そう言って、前へ出たのは、千里だった。
「わたしは金の御鏡です」
「三輪どのは？」
　真弓の言葉に、三輪が、コックリうなずき返した。
「所持しています。人の御鏡です」
「おう……、では、あなたは、大久保石見守さま奥御殿の御老女、磯路さまの……」
「はい、妹です」
「あ――よかった！」
　真弓は津矢達を振り返って、ひとりひとりを指さした。
「深雪どのと、一枝どのと、わたしの従妹の津矢です。深雪どのは水、一枝どのは土、津矢は火の御鏡を持っております。わたし達は同志……。いいえ、御鏡の誓いに結ばれた姉妹です」
「ヘエ――そうかア……」
　津矢が、木野を見て、ニコニコと、人なつこく笑った。
「変だと思った。木野とおれは、幾度刀を合せても勝負がつかなんだし、時には一緒に、虚無僧のあとを追わなければならなかったしな……」
　真弓が、大きくうなずいた。
「それこそ御鏡のお力……。仇敵本多佐渡守を討つため、天地人木火土金水の御鏡を分かった八人は、力を合さねばならぬのです」
「でも姉さま、天の御鏡がおらぬな」
　そのとき、スッと、氷壁の前に立った、青衣の女人があった。水色の大振袖に紺色の男袴。髪を背中でたばねている。
「あッ！　御前」
「おッ……、少将ッ……」
　木野達も、津矢達も、同時に叫んでいた。
「わたしは、おなごじゃ……」
　従三位の少将墨染の高平……、そのひとはこういうと、更に言葉を続けた。
「わたしは、天の御鏡を持っている。さきの金山奉行大久保石見守の遺児月姫じゃ」
「姫さま!?」
　深雪が叫んだ。
「では、姫さまが、御存世だったのですかッ」
「大久保家滅亡のとき、わたしは真弓の父奥家老田沢頼母に助けられて京都へ逃れ、墨染の屋敷にかくまわ

れたのじゃ」

今度は、津矢が叫んだ――。

「では、姉さまは、少将が月姫さまということを知っていたのかッ」

「伊豆下田の宿でお会いしたときから、存じていました」

「では、なぜおしえてくれなかったのだッ」

「大事の前です。もし、佐渡守一味のために、わたし達四人がたおされても、姫さま始め木野どの、千里どの、三輪どのが残っておれば、またの機会がありまする。また、不幸にして姫さま達の組がたおれても、わたし達四人で仇が討てます。それで、わざと、別々に働いて来たのです」

少将の月姫が、にこやかに微笑んだ――。

「わたしは、長い間そばにいてくれた木野にさえ、この秘密はあかしておらぬ……。わたしを女と知っていたのは、喜平太と真弓……。それから、おそらく三輪も知っていたであろう」

「存じておりました」

三輪が、いきをはずませて言った――。

「大日坂の屋敷で、鉄砲傷のお手当をしたとき、女性でおいでのことを知りました。でも、月姫さまとは、いまのいままで存じませなんだ」

「わしの身分を知っていたのは、真弓と喜平太の外には、御台さまと御愛妾お玉の方――」

「えッ！　御台さまやお中臈さまが!?」

「お二人共、京都公卿の家の姫……。わたしの幼な馴染み。なればこそ、作法指南としてわたしは江戸へ乗り込むことが出来たのじゃ」

今度は、千里が嬉しそうに叫んだ。

「では、江戸城大奥の方々は、わたし達の味方ですか!?」

「いや……、そうはゆかぬ。表使い染村のような、佐渡守の一味もいる。そのかわり、思いがけぬところに、味方がいる」

「根来同心組でしょう!?」

そう叫んだのは、一枝だった。

「そうじゃ。根来衆は、わたし達といっしょに、宇都宮城へ斬り込みをかける」

「おう！　百人のお味方！」

「が……、助勢はあてにするな。わたし達八人だけで仇敵を討つ覚悟でいねばならぬ。味方はまだいる。八丁目不動院の山伏達」

「おう！」

「更に、四谷津乃守坂香月道場の方々」

「まア！　お師匠さまもッ……」

木野がそう叫んだとき、別の声が聞えた――

「――姫、わたくし共もお供しますぞッ……」

――何者ッ！

キッと振返った一同が、あッ……と、驚きの声をあげた。

大谷川原の小石を蹴飛ばすようにして駈け寄って来た白い影が五ツ……。常に、風の如く現われ、霧の如く姿を消して行った火事装束五人組であった。

五人は、ピタリッと、川原へ両手をつき、月姫の前に平伏した。

「おう……、そなた達には、一同がひとかたならぬ世話になっている。が……、正体がわからぬ。誰じゃ？なんという名じゃ？」

「姫……。わたくしでございます」

そういうと、五人組の頭領らしい男が、サッと、火事場頭巾を脱いだ。

「やっ！　丹波ッ……」

「はい……」

ジッと、月姫を見上げたのは、佐渡金山奉行竹村丹波であった。

「そうか……。わたし達を助けてくれたのは、そなたであったのか？」

「はい。弟、伴達と力を合せ、及ばずながら姫さまをお護りいたしました」

「かたじけないぞ、丹波……。佐渡奉行のそなたが助勢してくれているとは、夢にも思わなんだぞ」

「姫……、わたくしはさきの金山奉行大久保石見守さま家来、金山手代竹村丹波でございます。申すまでもなく、姫は御主人。わたくしがお尽しするのは当然のことでございます」

「丹波……、丹波……、嬉しいぞ」

さすが強気の月姫もやはり女……。初めて月姫の眼に、キラリと涙が光った。

「さ、姫……。参りましょう。宇都宮城へ乗り込みましょう」

竹村丹波をはじめ、火事装束の五人が、スックと立ち上った。

その頃、江戸城の大奥では、寝静まった百間廊下を、表使いの染村が、キッと、唇を噛みしめて歩いていた。

その足が、スッと、立ち止まったのは、御愛妾お玉の方の部屋の前であった。

染村は、持っていた手燭の火を、ふッと吹き消すと、低い声で、部屋の中へ声を掛けた。
「――お末の衆……、お末の衆……。起きて下され。表使い染村、お玉の方さまへ、火急のお話で参りました。お取次ぎ願います」
それから小半刻……。
御台所の部屋から駆け出して来たお玉の方が、大きな声で叫んだ。
「――誰かおらぬかッ！　御台さまより上さまへの急使じゃッ。馬に乗れるものはおらぬかッ。身分の上下は言わぬ。早々に名乗り出ませいッ」
やがて、振袖姿に袴をつけ、白袴、白鉢巻も甲斐甲斐しい御殿女中が二人、竹橋御門から飛び出して行った。
一方、染村は、御台所とお玉の方の前にひれ伏していた。――こと成らず……と見て、陰謀の全てをぶちまけ、自分だけ助かろうとしたのであった。

血笑記

幸手の本陣笹屋の奥座敷で眠っていた井伊掃部頭は、家老宇都木伊予に起された。
「――なに、本多佐渡が謀叛!?」
「大奥作法指南、墨染の少将どのよりの密使です」
「信じられぬな」
「しかし、証拠の品々を持参しております」
掃部頭は、目の前に並べられた三品の中から、釣り天井の絵図面をとりあげてじっと見詰めた。
そのとき、近習がひとり、あわただしく駈け込んで来た。
「――ただいま、根来同心組頭、成瀬大学どの、今市より到着。天下の大事につき、直々殿へお話し申し上げたいと申されています」
「根来同心!?」
掃部頭は、はっと、宇都木伊予と顔を見合せた。
「よし、通せッ。それから、墨染の少将の家来という男も、ここへ案内せい……」
その頃、大奥からの急使二騎は、将軍が第一夜を送っている岩槻の城下へ駈け込んでいた。
「――とまれッ！　とまれッ！　夜中、なにものだッ！」
城下警護の岩槻藩士が、バラバラッと飛び出して、馬の前に大手を拡げた。
「――御台さまよりの急使でございますッ」

「――御中臈お玉の方さまよりの急使でございますッ……」
馬上の奥女中二人は、カン高い声で叫びつづけた。
「道中御奉行岩瀬備後さま御宿所はどちらでございます!?」
「大御目付松浦伊勢さまお宿へ御案内を願いますッ！」
それから四半刻ののち、岩槻城内に新築された御殿の奥の間では、馳せ集った老中、若年寄の前で、将軍家光が、憤りの唇をぴりぴりと震わせていた。
御台所、お玉の方連名の密書が大目付松浦伊勢守から家光へ取次がれたのである。
「企みおったな本多佐渡ッ……。忠長も許さぬ。早々に、宇都宮城をとり囲め、駿河の忠長をとり押えよッ」
家光がこう叫んだとき、幸手の宿から馬を飛ばした井伊掃部頭が駈け込んで来た。
「――しばらくしばらくッ！　上さまッ、宇都宮城は既に、根来同心組が包囲しておりますぞ」
「なんとッ！　でかしたぞ、根来衆ッ」
「また、城内へは、夜明け直前、墨染の少将主従斬り込みを掛けます」
「作法指南の少将がッ!?」
「はい、墨染の少将とは、実は大久保石見守の遺児月姫。謀叛人に天誅を加えんと、女ばかり八人で斬り込みます」
「それは危いッ。月姫主従を死なすなッ」
その頃、水色の着物、青い袴、揃いの衣裳を着た月姫達八人は粛々と宇都宮城へ近づいていた、そのあとに竹村丹波たち火事装束の五人も続いている……。
七ツ（午前四時）過ぎたというのに、宇都宮城内からは、せわしげな木槌金槌の音が、濠外の松並木まで聞えて来た。
「――与五郎達が仕事をさせられているのじゃ」
そういう月姫の言葉に、真弓が応じた。
「明日将軍家御到着の御予定。それまでに、釣り天井を仕上げさせようとしているのでしょう」
「無駄なことじゃ……。が、その無駄な仕事を続けた故に、与五郎達は斬られずに今日まで生きて来られたのじゃ」
「いずれにしても、大工十五人の命は、今日限りでしょう。釣り天井が出来ても出来なくても、佐渡守は生かしておかぬでしょう」
「その前に、佐渡守の命がなくなる」
「そうです！　わたし達の一念で、本多佐渡守、家老

熊取内膳、伊豆屋のお石、ひとッところ斬り捨てずにはおきません」

真弓の言葉に、他の女達もはっきりうなずいたとき、城内では、目を血走らせた熊取内膳と六角十字兵衛が、ビシリビシリと鞭を鳴らして、大工達の仕事をせき立てていた。

「――与五郎ッ！　朝の中に、仕上がるかッ？」

「大丈夫でございます。もうヤマが見えました。うまく行けば昼前、遅くも八ツ（二時）までには仕上ります」

「間違いないな？　万一遅れると一大事だぞッ」

そう言う内膳の袖を、十字兵衛が苛立たしげに引いた。

「御家老……、大工共は当てにならぬ。いっそ、釣天井の方はあきらめて、火薬を床下へ埋めてはどうです」

「火薬は大きな音がする。供の大名共の手兵が、どっと攻め寄せてはことが面倒だ」

「しかし、どうせ一かばちかの大博奕ですぞ。将軍を倒せば勝ちです。大工共を斬り捨てて、火薬を埋めましょう」

「待て待てッ。今日昼頃までに釣り天井が出来上ればよいのじゃ。火薬は、それからでも埋められる」

内膳と十字兵衛がこんなことを論じあっているとき、月姫達八人の女剣士と、火事装束五人組は、田川河原にある城内への抜け穴の入口へ近づいていた。

と……、明け方近い暁闇の河原に、十人余り、異様な影が、黙然とつッ立っていた。

頭巾、鈴掛……、法衣の袖をたくしあげて、金剛杖をついた山伏達である。

「墨染の少将どのの御一行か……」

低いが、さびのある声がたずねた。

「関東山伏の司、不動院天道、御助勢に駈けつけましたぞ」

「天道どのか？　御厚情嬉しく存じます。が、斬り込みは、まずわれ等だけで……」

「承知……。では、土産など進ぜましょう」

そういう天道の声といっしょに高手小手に縛りあげられた三人が突き出された。――お浅、黒太夫、それに賀来陣五郎であった。

「――あ、御前！」

ゴクッと、生つばをのむ千々輪のお浅へ、月姫は、冷やかに答えた――。

「大久保石見守の娘月姫じゃ」

「えッ！　で、では、女性！」

「お浅どの……。それから黒太夫、陣五郎ッ。墨染の少将が、いろいろとお世話になりましたな」

「お、お許し下さいませッ。わ、わたしは、御前が好きでした。それを……、それをすげなくされたので、つい、敵に回ったのですッ」

お浅は、そういってかき口説いたが、黒太夫と陣五郎は、ただぼう然と、月姫を見上げていた。

やがて、男体山の峰が、ホンノリと明るんで来た。大白金星の影も冴え冴えと、正に朝が訪れようとしている。

「――それッ！」

月姫の手があがると、真弓が先頭を切り、城内への抜け穴へ飛びこんで行った。しんがりが、月姫である。

「――姫……、この三人は？」

不動院の天道がたずねた。

「わたくしの仇敵は佐渡、内膳、お石……。あとのものは、刃向うものだけを斬ります。その三人も、処分は、いずれ幕府の手でおこなわれることでしょう……。では、参ります」

月姫は、真弓たち七人と、竹村丹波たち五人のあとを追った。

「――待て……。城内への一番乗りはわたしがする」

古井戸の底についたとき、月姫はそういって、井戸の壁をよじ登った。

と……、井げたの傍らに、白い影が立っていた。

――虚無僧姿の香月紋之助である。

「姫……、いよいよ？」

「はい……、いまこそ、十年の恨みをはらします」

「どうあっても、佐渡守を斬りますか？　捨てておいても、佐渡守は滅びますぞ」

すると、三輪と木野が前へ出た。

「先生……」

「おう、木野……」

「わたくしもいます」

「あ――、三輪か……」

「姫とともに、御主君の仇を討ちます」

そのとき、遠く一番鶏の鳴き声が聞えた。

と同時に、大手門に当って、――わーッ……と、ときの声があがった。

「おっ！　根来衆が押し寄せたぞ。丹波ッ。大手門を開いてやれッ」

「承知ッ……」

火事装束の五人が走った。

「曲者ッ！」

見回りの武士が、丹波たちに気付いて叫んだ。が……、つぎの瞬間ギャッと、断末魔の叫びをあげていた。

「姫ッ！　もはや止めても止まらぬ形勢だッ」

香月紋之助が指をあげて、さし示した。

「――佐渡守は天守、内膳は作事場、お石は奥の座敷にいますぞッ」

「――やッ！　しょ、少将ッ！」

叫んだのは、熊取内膳だった。

「糞ッ！　城内に入りこむとは、叩き斬ってやるッ」

そういって、六角十字兵衛が、歯をむき出した。

「黙れ、内膳ッ……。あの大手門の喚声が耳に入らぬかッ。根来同心百騎が押し寄せたのじゃッ。やがては、お供先井伊家の同勢もなだれこんで来ようぞッ」

「な、なんとッ！」

「佐渡守の陰謀は事あらわれたのじゃッ」

「げッ！　お、おのれッ！　さては、密告したなッ。十字兵衛ッ」

「おーッ」

十字兵衛が、ピュッと、隻腕をふるって月姫に斬りこんで来た。

「あわてるなッ！　まだ申し聞かせることがある。わたしは、大久保石見守の遺児月姫じゃッ」

叫びながら、月姫は、ピタリと刀を構えた。

「酒匂河原に、わが一族の命を奪いとった熊取内膳ッ、恨みを晴らすぞッ」

「ぬかせッ！　十字兵衛ッ、斬れ、この女を斬れッ」

と……、ズイッと、前へ出た香月紋之助が、月姫をうしろにかばった。

「姫……内膳を……」

それから、紋之助は、キッと、十字兵衛を睨んだ。

「姫が、敵とねらうは佐渡守と内膳とお石じゃ……。十字兵衛、刀を引けば、命を助けよう」

「うぬッ、何者だッ!?」

「応変夢幻流、香月紋之助」

「えッ……」

さすがの十字兵衛も、紋之助の名を聞くと、ゴックリと、生唾を呑んだ。

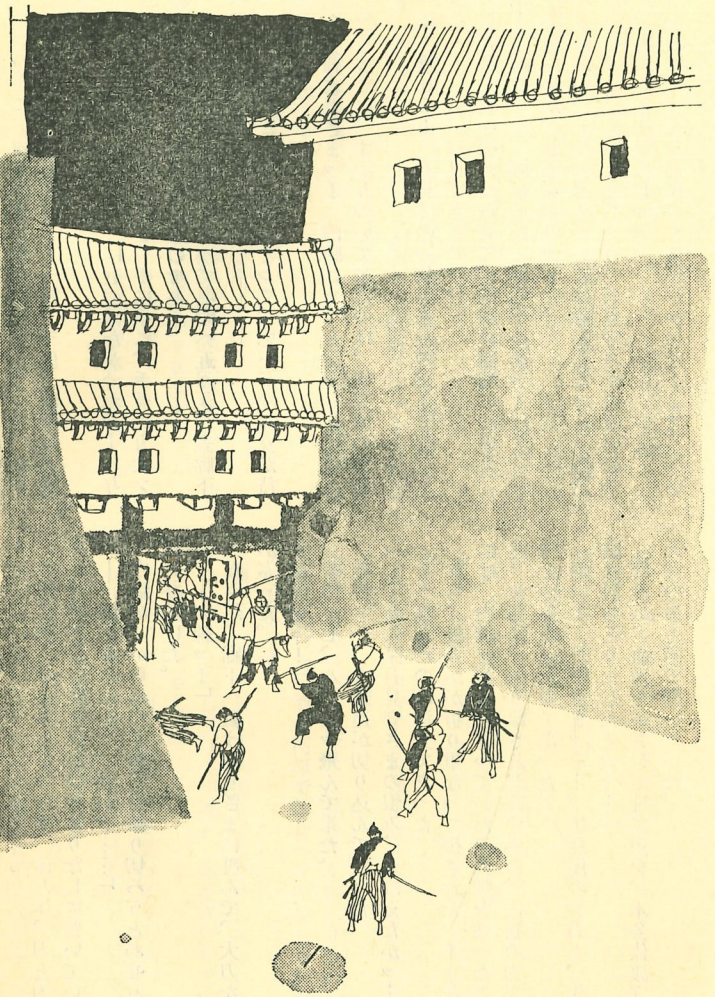
と、そのとき――

内膳が、パッと身を翻して、天守閣の方へ走り出した。

「あ、姫さまッ。天守にも火薬がッ」

真弓が叫んだ。

「追えッ！　天守へやるなッ」



月姫の声に、津矢がまっ先きに走り出した。続いて、木野と三輪が追う。——一枝、千里、深雪は月姫を護った。

が……、内膳は、天守へは近づけなかった。——与五郎を始め十五人の大工が、手に手に、手斧や丸太ン棒を振りあげて待っていたのである。

内膳は、狂気のように走って奥殿へ近づき、表廊下へ飛びあがった。

が……、ここに、内膳にとって、思いがけぬ女が待っていた。

「——御家老さまッ！　内膳さまッ……」

出し抜けに、すがりついて来たのは、伊豆屋のお石だった。

「は、離せッ！　石見守の一族が来たのだッ」

「えッ！　い、石見守さまのッ!?」

お石は、眼を引きつらせて、内膳に獅噛みついた。

「——離せッ！　離さぬか、きちがいめッ！」

熊取内膳が、お石を振り廻した。

「きちがい!?　そのきちがいには誰がしたッ？　内膳どのじゃッ。佐渡さまじゃッ。石見守さまの呪いじゃッ。奥方さまの恨みじゃッ」

お石には、もう前後の事情がわからなくなっていた。

宇都宮城内のあちらこちらで、体と体、刃と刃が激突し、凄まじい喚き声がひっきりなしに響いていた。

「——誰かおらぬかッ。誰かッ……」

内膳が、からみつくお石を振り切ろうとあせりながら叫び続けた。

「——未練ッ！」

真弓が、廊下へ駈け上りざまに叫んで、大刀を振りかぶった。

「御家老ッ！」

若侍が七、八人素ッ飛んで来た。

その中へ、木野達が切り込んで行った。

「——大久保石見守さまの恨み、おぼえたかッ……」

そう叫んだのは津矢であった。

忽ち、幾人かが折り重なって倒された。——その中には、内膳とお石も混っていた。内膳を斬ったのは真弓。お石は、振り離されたはずみに、内膳の刃先きが胸をつらぬいたのであった。

「姫ッ！　月姫さまッ……。伊豆屋のお石と、熊取内膳は討ちとりましたぞッ……」

真弓が、血刃をかざして叫ぶ声を、本多佐渡守は、天守の最上階で聞いていた。

佐渡守は、矢はずの窓から、じッと城内を見降し、既に覚悟を決めていた。

いま城内へ乱入して来た根来同心組は、或は全滅させることが出来るかもしれない。が……、将軍謀殺の計画は破れたのだ。夜が明ければ、諸大名の軍兵が押し寄せることであろう……。それに対して、勝算はなかった。

佐渡守は、案外冷静な気持で、城内の乱闘を眺めることが出来た。——天下を狙う大陰謀……。それが破れたとしても、悔いはなかった。

「——家光の方が運勢が強かった、忠長卿は御運がなかったのだ……」

それにしても——

「——見事だ？　心憎いほどだ……」

佐渡守は、月光を浴びて飛び廻る水色振袖の女達と、火事装束五人組の姿に、驚きの目を見張った。

「——姫ッ！　喜平太、参りましたぞッ！」

「——姫さまッ。根来組頭、成瀬大学参りましたぞッ……」

そんな声が聞えて来る。

「——姫!?　なにものであろう？」

ひとり言をつぶやいて、ヒョイと首を傾げた佐渡守は、ヒッソリと、うしろに立った人の気配を感じて振り返った。

「——おッ！　少将ッ……」

月姫が、静かに口を開いた。

「——大久保石見守の娘月姫……」

「やッ！　姫とは、少将のことかッ!?」

「——十年……、わたしは、きょうという日を十年待ちました」

月姫は、佐渡守から視線を離さず、静かな言葉でいった。

「父、石見守が佐渡どのに詰め腹を切らせられ、母を始め兄妹たちが酒匂河原ではりつけになってからちょうど十年です」

「興亡は武将の常だ。私怨で石見守を追い詰めたのではない。わしと石見守は主義と主張を異にしていた。つまり宿命の敵じゃ」

「それで、十年前、佐渡どのは父石見守に勝たれた」

「が……、きょうは、わしが敗けた」

「敗けたとお考えですか？」

「うム……、残念ながら……」

地上のかん声が、天守の楼上に聞えて来る。その中に、はっきりした声が一つあった。

「――静まれッ！　井伊掃部頭じゃッ。本多佐渡守はいずこにいるッ……」

その声に、佐渡守は、ふッと微笑を浮かべた。

「――井伊が、わしを捕えに来たか……」

「やがて、叛逆人として、佐渡どのの首級は江戸表へ送られるでしょう」

「ふン……、死んでしまえば、さらされようが、転がされようが痛くもかゆくもあるまい」

「自害なさるお積りですか？」

「わしは敗けた。覚悟は出来ている。姫、ついでに、介錯して頂こうかな」

そういうと佐渡守は、ごう然とした態度で坐り、胸もとをひろげて、小刀の鞘を払った。

「――姫……、一日違いであったよ。明日は、将軍家光を倒し、忠長卿を擁して天下に号令する筈であった。運がなかった。時に利あらずば、抜山蓋世の英雄たりともどうすることも出来ぬ……。さて心静かに、来世の旅へ出かけるとするか……。用意してくれ」

佐渡守の言葉に、月姫は、刀を抜いてうしろへ回った。

「――さらばじゃッ」

佐渡守は、ブスリッと、左の脇腹へ切ッ先を突き立てると、グーッと一文字に引いた。

「姫ッ！　介しゃくッ……」

とたんに……月姫は、サッと佐渡守の前へ回ると、クククッとのどを鳴らした。やがてそれが、大きな笑い声に変った。

「……ひ、姫ッ！　なにを笑うッ……。く、首を切らぬかッ。ぶ、武士の情を知らぬかッ」

「切らぬッ……」

月姫が、キッと、佐渡守をにらみつけた。

「父石見守の苦痛を味わえッ。母は、さび槍で突かれた。その苦しみを味わえッ」

「な、なんとッ」

「英雄気取りで死なせてなろうかッ。やがて、そなたの一族も捕えられて、はりつけになろうぞ。忠長卿も、首をはねられようぞ。全ては、そなたの誤算じゃッ。そなたのやりそこないじゃッ。英雄どころか、匹夫の知恵じゃ」

「ひ、匹夫？」

もはや、佐渡守の顔から、ごう慢さと、落ち付きは失われ、死にひんした老人のあがきだけが現われていた。

「――姫……」

ジッと死の中へ沈んで行く佐渡守を見詰めていた月姫は、ふッとわれに返った。

真弓達七人と、竹村丹波達五人それに喜平太と根来同心組頭成瀬大学が立っていたのである。

「――もうよろしいでしょう……姫の悲願は達せられました」

竹村丹波がそういうと、成瀬大学が言葉を続けた――

「井伊侯がお待ちになっています。上さまは姫を江戸へお迎えせよと申されたそうです」

そういう二人に、月姫は静かに微笑んだ。

「――江戸へ行って、どうなるのです」

「御家再興です」

「由緒正しい大名より婿君をお迎え遊ばすのです」

月姫は首をふった――

「わたしは少将といつわって大奥へ入り、徒党を組んで宇都宮城へ乱入した罪があります」

「それが上さまをお救いしたのです。罪は消えています」

成瀬大学が叫ぶようにいった。

「もし罪が消えているのなら、このままソッと行かせてほしいと思います」

「どこへお行きになるのですッ！」

「わからぬ。あてはない」

「お供しますッ。わたしたち七人は、御神鏡で姫さまと結ばれているのですッ」

真弓の言葉に木野、三輪、千里、深雪、津矢、一枝が一せいに前へでた。

「喜平太、どうすればよいのじゃ？」

「まず、伊豆へ御神鏡を埋めに行きましょう。あとはそれから考えればよいのです」

それから七日目、喜平太と真弓達七人に護られた月姫は、天城の頂上に鏡を埋めた。

「さて……、喜平太。これからどうすればよいのじゃ。考えたか？」

「考えました。すでにお迎えが参っています」

そういう喜平太の声といっしょに、月姫の前に立ったのは、旅姿の香月紋之助だった。

「姫、九州島原の切支丹へ御案内します」

「わたしは切支丹ではない」

「いや……わたしたちが神の御名によって築きあげた地上の楽園を見ていただきたいのです。それに、石見守どのが隠しておかれた財宝も島へ移してあります。

これは姫のものです」

月姫は、ふッと千住のからす長屋のことを思いだした。——あの病人たちの姿、産婦達の姿、これを世話する娘達のけなげな美しい姿……。

「——そう……。あの人々となればいっしょに暮らすことができるかもしれぬ……。わたしはもう、はかりごとや斬りあいはいやじゃ……。真弓、木野、みなのもの九州へ行くか？」

木野は頭を下げながら、その時ちらっと喜平太の顔を見た。まだ時々木野の肩口の傷は疼んだ。

が、傷の疼みはそのまま喜平太への恋情のうずきに結びついているようだった。もう二度と喜平太と別れ別れになることもないだろう。そう思うと、木野の心ははずんだ。

天城の頂きをわたる風はまだ寒かったが、雲ひとつない空のいろはすでに春だった。

どこかで、しきりにトビの鳴く声がきこえた——。

競艶八犬伝

昭和三九年八月二〇日　第一刷発行
昭和三九年十一月一日　第三刷発行

●著者——島田一男
●発行者——斎藤修一郎
●発行所——東都書房
東京都文京区音羽町三丁目一九番地
電話——東京（九四二）一一一一（大代表）
振替——東京　七二七三二
●印刷所——慶昌堂印刷株式会社
●製本所——株式会社若林製本工場
●定価——二九〇円
落丁本乱丁本はおとりかえいたします

●ストレスを吹きとばす夢の全集！

日本固有の大ロマン忍法小説の名作を網羅！

読みだしたらやめられない絶対の興味！

東都書房版 ●忍法小説全集

1 柴田錬三郎／赤い影法師 二六〇円
2 司馬遼太郎／梟の城 二九〇円
3 富田常雄／猿飛佐助 二九〇円
4 池波正太郎／夜の戦士 三八〇円
5 角田喜久雄／悪霊の城 二九〇円
6 村山知義／忍びの者 二九〇円
7 島田一男／競艶八犬伝 二九〇円
8 白石一郎／鷹ノ羽の城 二五〇円
9 山田風太郎／伊賀忍法帖 二六〇円
10 柴田錬三郎／南国群狼伝 二三〇円
11 司馬遼太郎／風の武士 二九〇円

●東都書房版

奇想天外のアイディア　奔放自在のイメージ　現代人の生活に夢とうるおいを与える　妖しくも美しき山田ロマンの結晶

●山田風太郎の妖異小説　全六巻

1 女人国伝奇 二五〇円
2 白波五人帖 二五〇円
3 妖異金瓶梅 二五〇円
4 秘鈔金瓶梅 二五〇円
5 妖説忠臣蔵 二五〇円
6 首 二五〇円